

# 鷺流間の本

校訂

岩崎	井上	小田	倉持	黒沼	小室	富山
雅彦	愛	幸子	長子	歩未	有利子	隆広

## 【凡例】

- 一、法政大学能楽研究所鷺流狂言水野文庫蔵『鷺流間の本』全五冊を翻刻する。
- 一、翻刻は底本に忠実であることを原則としたが、印刷の制約や通読の便宜を考慮し、左の方針に従った。
  - 1、漢字の異体字や旧字体は、原則として通行の字体や新字体に改めた。ただし、「哥」「嶋」などの若干の異体字、「龍」などの若干の旧字体は底本のままとした。
  - 2、変体仮名は通行の平仮名に改めた。片仮名・平仮名の別は、底本のままとした。「ニ」「ハ」「ミ」は片仮名にした。
  - 3、合字は平仮名に開いた。
  - 4、濁点は底本のままとした。
  - 5、句読点は底本のままとしたが、行頭に付された句点は原則として省略した。ただし、演出注記については通読の便宜を考慮し、句読点を補い、詞章の引用に「」を付すなどした。
  - 6、セリフの冒頭にある「\」は「|」とした。
  - 7、振り仮名は底本のままとした。
  - 8、明らかな誤字は右に(ママ)と記した。
  - 9、割注は「」を付し、本文と同じ大ききで一行に記した。
  - 10、曲名の下に記される割注は、本文の冒頭に「」を付し、本文と同じ大ききで一行に記した。
- 11、朱で書かれている曲名番号・句読点・濁点・セリフ冒頭の「\」は、朱であることをいちいち記さなかった。語りの冒頭にある「語」の文字は「|」に入れて示した。
- 12、「スム・ツメ」など発音に関する注記は省略した。
- 13、役名表記は、上下に一字分の空格を設け、本文と同じ大ききで記した。
- 14、節付けが記されている部分には、翻刻では始まりと終わりを「と」で区切った。
- 15、型付けが本文の右に記されている場合は、へ〜に入れ、小字で記した。
- 16、底本の文字が判読できない部分は文字の数だけ「□」に置き換えることとした。
- 17、翻刻の分担は以下の通りである。第一冊(富山隆広)。第二冊一田村〜十一朝長(岩崎雅彦)、十二巴〜二十二夕顔(井上愛)、二十三半部〜三十三胡蝶(富山隆広)、三十四朝顔〜三十九二人祇王(倉持長子)。第三冊(井上愛)。第四冊一春日龍神〜十九同(倉持長子)、二十松虫〜五十七二人静(小田幸子)。第五冊一鶴亀〜二十六唐船(黒沼歩未・井上愛・倉持長子・富山隆広)、二十七正尊〜五十三現在七面(小室有利子)。なお、伊海孝充・井上愛・富山隆広・中司由起子・深澤希望・宮本圭造・山中玲子が分担し、補正等、全体の表記の統一を図った。

(岩崎雅彦)

【翻刻】

〔二冊目〕

一 高砂  
 二 老松  
 三 弓八幡  
 四 志賀  
 五 呉服  
 六 放生川  
 七 同鱗  
 八 養老  
 九 玉井  
 十 氷室  
 十一 加茂  
 十二 白髭  
 十三 嵐山  
 十四 江嶋  
 十五 大社  
 十六 和布刈  
 十七 白楽天  
 十八 竹生島

十九 難波  
 二十 西王母  
 廿一 寢覚  
 廿二 源太夫  
 廿三 道明寺  
 廿四 九世戸  
 廿五 絵馬  
 廿六 東方朔  
 廿七 輪藏  
 廿八 右近  
 廿九 同語  
 三十 岩船  
 卅一 雨月  
 卅二 金札  
 卅三 淡路  
 卅四 松尾  
 卅五 同語  
 卅六 逆鉾  
 卅七 御裳濯川  
 卅八 伏見  
 卅九 鶉祭  
 四十 橘  
 四十一 浦島

四十二 代主  
 四十三 鼓滝  
 四十四 富士山  
 四十五 御裳濯語  
 四十六 同大蔵流  
 四十七 佐保山  
 四十八 難波 田安殿好  
 四十九 右近 宝生流

## 一 高砂

〔初同ニテ出、太鼓座二居。シテ中人過テツレワキカ、ル。一ノ松ニ立ツ。〕

〔此所の者如何様成御事にて候ぞ「ワキツレシカ〜」心得申候〔脇連ワキニ向詞アリ。其内ニ舞台へ出、ワキノ前ニ座ス。〕「当浦の者お尋ハ。いか様成御用にて御座候ぞ「ワキシカ〜」是ハ思ひも寄らぬ事お尋有物哉。我等も此所にハ住者なれど。左様の御事しかとハ存も致さず候。去ながら初たる御方の。思召よりてお尋有を。一円に存せぬと申も如何なれハ。片端聞及たる通り物語申さふする〔下掛リノワキナレハ詞アリ。少筋違ニ向語。〕【語】「先高砂の松とハ則是成木を申ス。然れば高砂住の江の松を相生と申子細は。昔上代に。高砂の松に譬へ。万葉集を撰せらる。今又延喜の御代にハ住吉の松にたとへ。古今を撰じ給ふ事。是は昔も今も相同し様に御座有ればとて。古今の序に。高砂住の江の松も相生の様に覺へと。記置れたる由承り及て候。又当社と撰州住吉の明神とハ。夫婦の御神なれば。当社住吉へ御影向の御時は。あの住の江の松にて神語を成さる。住吉大明神此所へ御出現の折節も。諸木様々多キ内に。松は一寸になれば定千年の齡を保。雨露霜雪にもおぼれず常盤なる物なれば。松に上越す木ハ有間敷と思召。我宮居も松諸共に有らふずるとて。是成神木を植給ふに。当社も出合相諸共に植置れし故。則相植の松共。但し是ハ在所の者の申事に候。然るに住吉と申ハ。垂仁天皇の御宇に。撰州津守の浦に金色の光り指を。朝に勅使を立て御覽すれハ。四本の松生出たるを。則四所明神と祝ひ御申有によ

り。住吉にてハ松を御神木共。又ハ御神体共崇御申有杯と申。或古人の詞にも。砂長して巖と成り。塵積て山と成る。浜の真砂の数は尽るとも。当社住吉の御座有らん程は。男女夫婦の栄へ和歌の道神道に於て。目出度事ハ尽すまいとの御事にて御座有よし申。相生の松の目出度キ謂數多有とハ申せど。先我等の存たるは斯の如くにて御座候「ワキシカ〜、語シマイ、ワキノ方ニ向。」言語同断奇特成事仰らる、物哉。左様の老人夫婦は。当社住吉の御神にて御座有らふずる。夫をいかにと云に。一体分身の御事なれば。当社へ御参りの御方は。必ず住吉へ御参詣なふてハ叶ぬに。唯今は是より直ニ都へ御登り有事を。神ハ能々御存成され。翁夫婦と顕れ。住吉にて待とふすると仰られたると推量致す。左有らば是より住吉へ御参り有ふずる。去ながら陸を御廻り有れば拔群の路次にて候。某此程新敷キ船を持て候が。未乗初仕らぬ。此舟に召され候へ我等楫取致し。住の江へ浦づたへに着申さふする。「ワキシカ〜」あれ御覽候へ神慮（ト云ナガラ、マクノ方ヲミテ願ニテサス）の奇特に。日本一の追手が吹來つた。（ワキ方ヲ向）頓てお船に召され候へ（ト云、太鼓座へ引居ル。後シテ出、地取ニテ入ル。）

## 二 老松

〔出入前後、高砂同断。〕

〔門前の者如何様成御事にて候ぞ「心得申候」「此安楽寺の門前者お尋ハ。いか様成御用にて御座候ぞ「ワキシカ〜」。高砂同断。〕【語】「去程に当社天満天神ハ。御幼少の御時ハ菅丞相とて都に御座

有りしが。法性坊の御弟子にて。いまだ習ハざるに道を悟り。御才  
 覚ハ世に越へ。万巻の書を讀シ給ひしかば。君の叡慮に叶わせ給  
 ひ。既に大臣の大將に成らせ給ふが。去ル子細有ツて此所へ御下り  
 有べきに定り。年久しく住馴シ紅梅殿を立出させ給へば。明方の月  
 幽なるに。折忘れさる梅か香の御袖に余りたるを。是や古郷の春の  
 簞たもとと思召。東風吹ハ匂なほを越せよ梅の花。主なしとて春な忘そと  
 打吟じ。当所へ御下向成さるゝに。東風吹風の便を得て。此梅飛來  
 るにより。則飛梅とは名付在す。又色も等けれハ。紅梅殿とも崇御  
 申ある。毎も都にて御寵愛成されたる。松の事を思召出され。何と  
 て松の難面かるらんと詠ッ給へば。草木心なしとハ申せど。取分松  
 は心の有けるぞ。跡より追々慕ひ來るを以て。老松の神と祝れ在す。  
 其後御上洛成され。何事も思召俣に亡し。今に北野の南無天満大自  
 在天神と。君も渴仰の御事なれば。上十五日ハ都に御座有り。下  
 十五日ハ此処に在由申伝つたる。先我等の存たるハ如此にて御座候  
 「言語道斷奇特成事仰らるゝ物哉。旁の常に北野を信じ歩を運び。  
 殊に是迄遙々御下向有事を。神ハ一人御納受被成。老松紅梅殿花守  
 と現じ。御雜談有たると存る間。暫く是に御逗留有り。神前に於て  
 信心私なく御祈念成され。其後都へ御登あれかしと存る」尤に候

### 三 弓八幡

〔出入前後、右同斷。〕

「山下の者如何様成る御事にて候ぞ」「心得申候」「此八幡の山下の  
 者お尋ハ。如何様成御用にて御座候ぞ」〔セリフ右同斷。但シワキ臣

下ユへ承り及たる通り、申出ふすると云。臣下ニハ皆如此丁寧に  
 云。〕【語】「去程に神功皇后異国退治の御時。我朝の神々を語らひ  
 御申成され。長門の国豊浦の郡に着せ給ひ。船木山に分入楠一本に  
 て。船を四十八艘御作り成され。九州松浦の沖に浮め給ひ。猶も計  
 略の其為に。長門の沖に檀を築き。異国退治の法を執行せ。皇后ハ  
 四王寺の峯に御上り有り。岡玉の木の枝に五十の金の鈴をむすび  
 付つ。七日七夜至誠心にして。夫より異国へ思召立たつに。一艘の舟  
 に召れたる御神は。はや余の兵船にハ御座有間敷まじ事成に。何れも  
 の船に同し神々の乗移り。神力仏力を以て。三韓を御順ま成され御  
 帰朝有り。御座の紐を解給ふ刻とき。天より八流幡の降下る。左有に  
 依て御名を八幡と名付給ふ。其後王城近く宮居をなひて。弓矢の守  
 護神と成ふすると思召。八流の幡を虚空に御飛せ有り。此幡の落着  
 たる所を。則御鎮座に成されんと有るに。忝も王城の南。本山此男  
 山の峯に。忝かたじけなくの幡落留りたるにより。当山を八幡山とハ申習す。  
 此所に御影向の御年か。卯の年の卯の日にて候に。取敢ず袖神楽を  
 参らせしを。初卯の御神楽と名付られ。年中には七十余度の御神事  
 とハ申せど。取分きぶん今月今日の御神拜を。初卯の御神事と申て。是  
 を本もとと執行申も此子細にて候。数多目出度いづ謂の有とハ申せど。  
 先我等の存たるは斯のことくにて御座候「言語道斷奇特成事御誼成  
 さるゝ物哉。左様に何国とも知らず老人の。弓を錦の袋に入れ持参  
 申されん人。爰元にてハ覺おぼず候が。小賢こけん申事なれと拙者の推量致  
 すハ。高羅かろの神かみかりに人間と見へ給ひ。桑弓そうきうを我君へ捧申された  
 ると存る間。弥神前に於て信心私なく御祈念成され。其後奏聞あれ

かしと存る「有難ふ

#### 四 志賀

「此所の者如何様成御事にて候ぞ」「心得申候」「当所の者お尋ハ。いか様成御用にて御座候ぞ〔セリフ同断。〕【語】「去程に志賀の山桜と申子細は。人皇十三代成務天皇の御宇に。此江州志賀の郡へ都を遷され。君も思（マモ）う国も豊に。国土安全の政怠りなき比。此志賀の山を大内の花園に成され。庭前のことく何れも観覧有べきとて。観山比良の近国他国の。深谷（シコウシクリ）深林の花の種をとり。長柄（ナガウラ）の峯迄植置れしを。志賀の山桜とハ申習す。毎年春も半に成りぬれバ。峯も尾上も皆花までにて。古人ハ雪か花かと疑ハレ。散積りたる谷の落花は。去年降雪や残るらんと紛ひ。帰るさを忘る、程の名所なれば。老若男女共に花見の人々多き中に。取分（キ）程近き都より。毎日毎夜貴賤群集なし申さる、又大伴の黒主を志賀の大明神と申子細は。有時帝石山詣成されしを。国の守は二寸を進め申さんとて仮屋を建。種々様々の用意あれど。主上ハ浦山の体を観覧成され。直に都へ遷幸有（ル）を。しばし留申事の及なければ。其時黒主の歌に。さ、ら波間なくも岸を洗ふめり。渚清（サキ）くハ君留（キ）れかしと。か様に読れし哥を天子聞し召。其御褒美に大伴の黒主を。志賀の大明神に祝ひ御申候。左有に依て志賀の大明神の御本地を。如何成御神ぞと尋ね奉れバ。最前も申如く大伴の黒主。又大伴の黒主の子孫は。いかなる人ぞなれバ。忝も志賀の大明神。繰返し申ても先我等の存たるハ斯の如くに御座候」「言語道断奇特成る事御誕成さる、物かな。雲の

上人此所への御（シ）下向を。神（ハ）一人御納受被成。山賤と現じ御詞を替されたと存る間。暫く是に御逗留なされ。重てハ誠の神姿を御覽じ。其後御上洛あれかしと存る「有難ふ

#### 五 呉服

「此所の者いか様成御事にて候ぞ」「心得申候」「此呉服の里の者お尋ハ。如何様成御用にて御座候ぞ〔セリフ同断。〕【語】「先人皇十六代応神天皇の御宇に。我朝の事ハ申に及ず。新羅百濟高麗までも。残らず日本に靡順ふ御代なれば。唐土よりも数の宝を舟に積。綾女（メ）糸女と申二人の織姫の女婦を添へ。大船を明州の津よりも押出（シ）。順風に任せ程なく日（ツ）本の地に着を。始ハ和泉の国吹飯の沖に浮（ミ）しに。是より都へハ程遠く候とて。其後難波の浦迄舟をよせ。則松原に機を建。色々様々の御衣を数多織。鎮に貢を捧申されければ。主上御感浅からざりし時分。織姫ハ猶珍らしき紋も哉。呉服に織付度（キ）と思ハる、所に。五色の山鳩一羽飛来るを。仏神の教ぞと思ひ頓て織付。今に山鳩色の御衣と申て。殿中の上衣成由語り伝へ候。然るに呉服綾羽取と申子細ハ。機の中に糸引木を呉服といへバ。事を営む時くれバ取る手に准へて。一（チ）人を呉服取とハ申ス。又一人を綾羽どりと申事ハ。呉服織る時機の上にて糸を取引。綾の紋を心のま、におり出すにより。則是を綾羽どりとハ申習す。去れば其織姫の居たる所成るに依て。当所を呉服の里とハ申伝ゆる。其後爰（カ）彼へ帝都を移されても。今に於て都の町の中に。綾の小路錦の小路と申て御座るも。此子細にて有由承る。惣じて我日の本にて

機織る事ハ。かの織姫が元來成る故に。後にハ二人共に神に祝ひ。呉服綾羽の明神と申て。隠なき靈神にて御座す。先我等の存たるハ斯のこたくにて御座候。「言語道断奇特成事御誕被成る、物哉。目出度、御代には此松原に於て。機の音の聞ゆると申が。弥国土豊にめでたからふずる御瑞相に。当社明神権に人間と見へ給ひ。古への機織給ふ景色を。まなふで御目に掛給ひたるかと存る間。神前におゐて信心私なく御祈念成され。其後奏聞あれかしと存る。「有難ふ

## 六 放生川

「此所の者いか様成御事にて候ぞ。「心得申候。「此所の者お尋ハ如何様成御用にて御座候ぞ。「セリフ同断。」【語】「去程に異国の戒。

日本を度々に窺うとは申せども。我朝は天地開闢より神国なれば。度々追ひ失ひ給ふ所に。中にも仲哀天皇の御宇に。蒙古來り数度の戦有りての以後。后神功皇后ハ逆鱗を出させ給ひ。九州長門の沖に壇を築。異国退治の法を御行有り。又廣原海の乾満両貨を求在て。既に御船を押出すに出さるを。住吉大明神ハ宮人と現じ來り給ひ。数千人して出さる船を。一人して押出し則供奉有りて。皇后も兵船に召され掛り給ふ所に。敵も数万艘の舟を浮へ戦ふ時分。乾珠を海に投入給へば。潮ハ干て陸地となる。敵ハおり立皇后の御船へ掛る折節。又滿珠を海に入給ひし間。俄に汐のさして來り。戎悉く波にゆられて相果る。三韓を安々と平御帰朝成されしが。併数万の敵を御亡し有に依て。其婦生の善根の為に思召立。放生会の御願を發し給ふ。当社御信仰成さる、御方ハ。俗在出家共に魚を持つて

御参り有り。放生川へ放給ふが。取分キ八幡四郷淀六郷。交野九郷牧八郷の氏子共。我先にと生たる魚を持って來り。此放生川へ放ち申御事に候。左有に依て放生会の御神事と有ルハ。生るを放ッ祭なるを。毎も年毎に怠慢なく相勤。今に我人渴仰申奉る。此放生会に付あまた子細の有りといへど。先我等の存たるハ斯のこたくにて御座候。「言語道断奇特成事仰らる、物哉。旁の遠国より始て御座候。誰有て此放生会の子細を。委しく語申べき者有間敷と思召。武内の神かりに翁と現じ。御雜談成されたるかと存る間。弥神前に於て信心私なく御祈念成され。重て奇特を御覽あれかしと存る。「尤に候

## 七 同鱗

〔中入來序直り出ル。シテ柱ノ先ニ立、太鼓留メ名乗ル。シヤベリノ内左右へ向、語分ル。シヤベリノ分、皆如此。〕

「か様に候者ハ。放生川に年久しく住鱗の精にて候。去程に此八幡に於て。今月今日の御祭を。放生会の御神事と申子細ハ。八幡大菩薩胎内にて異国退治の御時。數万人を順へ歸り給ひしにより。其機生の善根の為と申す。然ルに此大菩薩と申奉るハ。人皇十六代応神天皇の御事也。是は忝も仲哀天皇第四の王子。御母ハ神功皇后にて御座すが。天下を治め給ふ事四十一年にして。一百一十一歳の御壽命を保せ給ひ。欽明天皇の御宇に神と御成有り。九州肥後の国にあられ在すが。御託宣有て豊前ノ国宇佐の宮に跡を垂給ふ。其後數年を経て清和天皇の御時。行教和尚の三衣の袖に御宿り有り。此

男山の峯に御移り成され。国富民も豊に治り。別して目出度キ御代ミなれば。御神託に任せ今月今日を。放生会の御神事と号して。当所の儀ハ申におよはず。近郷他郷より我もく<sup>レ</sup>と生たる魚を持て来り。此放生川へ放御申有る。誠に生るを放<sup>レ</sup>祭りなれば。我等体迄も有難い事じやに。目出度ふ謡舞ふて帰ふ〔謡乍扇開、大小ノ前へ行。〕「へあらく<sup>レ</sup>目出度やく<sup>レ</sup>な。治る御代の印とて。（左ヨリ右ヘサシマハシ）浪風静に成りぬれば。（左ノ人サシ指ニテ舞ヲサス）我等が様な鱗までも。頭●れ出●て謡ひかなで。く<sup>レ</sup>て。（分サシ戻リ）元の水中に入にけり（シテ柱ノ先ニ立留）〔ワキ正面ヲ向、拍子一ツ謡納メ、扇シマイ入ル。〕

## 八 養老

「かよふに候者ハ。濃州本巢（シラカ）の郡に住者にて候。去程に珍らしからぬ御事なれど。情ツラ五常の道を。惟レに。夫我親を疎ヲワカに致さんと思ふ者ハ。寔に心なき田夫野人の類ひ迄を。人間たる者にハ有間敷と存ながら。中にも此所に親子の民の有けるが。幼少の時より二親の申事をバ。何事にもあれ氣に順ひ。父母の機嫌の能（ツモ）時は我もゑミを含ミ。腹を立（タツ）れバ身に絶て迷惑致により。妻子も自（ツツ）彼を大事と敬ひ申シ。近国他国迄も孝行の誉を取りけるが。彼男ハ不断山に上り薪を取り。父母をはく<sup>レ</sup>ミ渡世を送りしが。或時毎のこことく薪を樵り帰るさに。山路の疲を止（トメ）んが為に。此滝壺に立寄水を結びて吞めバ。尋常（ツツネ）ならず口中の甘露に覚へ。此水を結べしより心も晴やかに成り。程なく疲も助かりし間。若仙家の流にても有るらんと

存じ。我屋に取りて帰り老たる父に与ふれば。腰にハ梓の弓を張り。額にハ四海の波をたへ。髪にハ荊棘の雪を戴く老人が。腰も直になり皺も伸。鬢髭迄も程なふ黒ミテ。年盛（社）んの若き者と成る間。此事を誰がいふとハなけれど聞付ケ。我先にと是を汲寄せ吞メバ。老たる者ハ若ふ成り貧成ものハ有徳に成り。誠に寿命長遠に目出度キ水にて御座候。去れば老たるを養ふに依て。養老の滝とハ申習す。先葉の水の目出度キ子細ハ如斯。扱某もあれへ参り。彼名水を少と給べて見うと存じて罷出た。先急で参ふ。誠に天下泰平の御代なればこそ。掛る目出度キ事の出来致たと存れば。我等体迄も有難い事で御座る。〔ト云迄ニ、シテ柱ノ先ニ立チ留り、正面キザハシノアタリヲミテ。〕去れハこそ此滝壺じやよ。先一杯給て見うか。いやく<sup>レ</sup>此大事の水を只吞ふでハ如何な。めでたふ謡に作てたべて罷帰ふ〔謡ナガラ、大小ノ前へ行、扇ヒラク。〕「へ治る御代の験とてく<sup>レ</sup>。（左ヨリ右ヘサシ廻）国富民も豊なれば。目出度キき泉の出来るを。（正）面へ出、下二片ヒザ立（面ヘムスピサシ）。不老不死の薬と菊の水。滝に至りて。（正）面へ出、下二片ヒザ立（居）。是を吞めバ。（願ニテ水ラムスピノムテイ）老の姿も若水の。（願ニテ頭ヲサス）寿命長遠富貴繁昌。自付柱へサシ行、小廻りシテヒラク。福德自在に栄んと。悦ひ勇ミ私宅をさして。（テ）柱ノ先ニ立止り、ユウケン。帰る事こそ。（カ）サシモドリ。目出度キけれ。（拍子一ツ、ワキ正面ヲムキ、トムル）

## 九 玉井

〔中入来序ニテ出ル。ヲモ、蛤鮑イタラ貝榮螺ト出ル。舞台へ出、ヲモ真中、蛤大臣柱ノ方、鮑目付柱ノ方、イタラ貝脇正面、榮螺笛



座ノ上へ、立並ナリ。」

ヲモ「か様に候者ハ。海中に住鱗の精にて候。去程に我等の是へ出る事別の儀にても御座なひ。ツレ「エヘン「エヘン「ト順ニ云。蛤斗不云。」ヲモ「いや。其方ハ何の精ておりやる。女「ハらハは蛤の精にてさむらう。ヲモ「わごりよハ。虬「某ハ虬の精ておりやる。ヲモ「其方ハ。いたら貝「いたら貝の精ておりやる。ヲモ「又わごりよハ。榮螺「某ハ榮螺の精ておりやる。ヲモ「扱わごりよ達は何と思ふてお出やつたぞ。虬「何かハ知らずわごりよが出るに依。是迄付てハ来たが。子細は何共な。次皆々「中々ツレ不残「知らぬよ。ヲモ「夫ならバ子細を語て聞せう。虬「急で語らしませ。ヲモ【語】「先天神七代地神四代の御神を。彦火火出見の命と申奉る。彼御神は種々様々の御遊ひを成さる。或時御兄弟火閑降の尊の釣針を借り。海中に浮ミ釣を垂給ふ所に。鱗の中にも心のわるき魚の有りて。針の糸を食ひ切虚空に失けるを。御帰り有り此由御申あれバ。尋常ならず御不興ありし程に。御剣を針に崩し数を參らせらるれ共。夫も御同心なくして唯兔角に。元の針を取ふずると類ニ云ハレ。海中へ分入龍宮に至り給へども。隣も耀て面はゆふ思召。桂の木キの元ノに立寄セ給へば。豊玉姫玉依姫。二人玉の釣瓶ツを持。玉の井ノに向ひ水ヲを結び申されしが。頓て宮中へ御供ない有しに。流石竜の都の事なれば尊を請し奉り。種々様々に饗応申されし刻ミ。釣針の事を仰出されければ。安き事尋て參らせうずると有りて。其時鱗の中を尋給ふに。我ハ知らぬ拙者ハ存せぬ杯と申時分。汝が口元ハ只者では有まいと云ひて。押明て見たれ

バ赤目針を返し申す。然れば尊も豊玉姫も互に御心を移され。程なく懐胎し給ふ折節。釣針に汐水満乾の玉を添て參らせられ。重て日本へ送り帰し給はんとの御事じや。左様に有に於てハ今より後ハ。海中じや陸地じやといふ隔は有まいとあれば。我等のやう成者迄も目出度イ事じやに。いさ此悦に酒を呑ふて遊バふ。ツレ皆々「一段と能うおりやらふ〔ヲモ扇ヲヒラキナカラ、ウタイ出ス。〕ヲモ「斯て酒宴も甲斐がひしく。く。く。〔鮑貝ミル〕鮑貝を盃に定め。いたら貝の銚子を出し。眉目よき蛤の。〔女ヲサシテムスフ〕上臈貝ノに酌をとらせ。〔扇ヒラクモチテ、少シ上ル〕軒端の桜貝簾貝。〔大廻り左リへ。ツレ皆々大小ノ前へ下リ並〕かけならべ。〔扇ト左ノ手ニテツツマフナク尤正面ヲ向。真中ニテ〕紅梅ノに來鳴。鶯の鳥貝も有明の西に傾く月も赤貝。曇ぬ時ヲを吹く洞貝も。〔目付柱ヘサシ行〕天地人の榮螺ト成りて。〔カサシ戻ル〕く。く。治る海中ニ入にけりし。〔箱子ツ。フミ留ル〕〔皆々出順ノ通りニ入ル。〕

#### 十 氷室

〔中人來序。〕  
「か様に候者ハ。丹波国氷室の明神に仕へ奉る。神職の者にて御座候。去程に此氷室の子細と申ハ。昔御狩の御幸有りし時。頃は六月中旬の事成りしに。有ル一村の方よりも。時ならぬ寒風頻りに吹來つて。御衣の袖に宿ると思召せハ。左ながら冬野々御狩のこたく成りし故。帝是を不思議に思召され。彼一村の内を觀覽あれば。庵のうちニに雪水を多く集め置たり。主上余りに奇特に思召。如何成事ぞと宣旨有れば。其時主の翁答て曰。夫仙家にハ紫雪紅雪とて。薬の

雪の御座すを。此老人ハ其菓雪を服致すにより。か様に息才延命に御座候と申上。則菓の雪を捧げ申べしとて。君へ氷を供御に奉れば。帝叡慮浅からずして。夫より氷の物の供御といふ事初りたり。其後ハ八人皇十七代仁徳天皇の御宇に。大和の国菖下の郡に氷室を構へ。氷のものを供御に備申す。又夫より以後は山城の国松が崎。今ハ丹波の国桑田の郡に御座候。去ながら是は先氷室の目出度子細。又都より勅使御下向の由申間。急きあれへ參らばやと存る(ト云、脇ノワキへ行、下ニ居テ)。「是は当社明神に仕へ申者成るか。此所への御參詣目出度ふ存る。然れば此氷室の明神の神秘にて。我等如きの者が雪を乞申せば。か様の晴天にも。必ず時ならぬ雪が其俣降来り候が。是を少と御らふじられまひか」ワキ「左あらハ雪を乞ふて見せられ候へ」「畏て候(ト云立テ、シテ柱ノ先キへ行)。「さらバ毎の者を呼出し申そふする(ト云幕へ向イ)喃居さしますか居るかの(ツレ、幕ヨリ出ナガラ)。」ツレ「某を呼出すハ何事ぞ ヌモ「はて扱わこりよハぬかつた人じや。爰に目出度イ事の有るが。夫を知てたまつたか。但し知らぬか ツレ「いや何共知らぬよ ヌモ「夫ならバ語て聞そふ。都より勅使の御參詣成されたが。外聞かた／＼めて度事でハないか ツレ「誠に其方のいはします如く。在々より平民の貴賤群集致さへ。当社の御威光じやと思ふに。殊に雲の上人の御參詣ハ。一入明神の御威光じやと思へバ。我等体迄も大慶な事じや ヌモ「扱某は御前へ出たれば。当社の神秘を御らうじられ度と有程に。いざ雪を乞ふて稀人の御慰にせふ ツレ「一段とよからふ ヌモ「是へ寄て拵て呉さしませ ツレ「心得

た(ト云太鼓座へ行キ、ヲモノ肩ヲトリヤル。ツレハ初ヨリ取出ル) ヌモ「さあく／＼是へ出やれ ツレ「心得ておりやる(ト云、ヲモハワキ正面ノ方ニ立、ツレハ地謡ノ座ノ方ニ立) ヌモ「いざ雪を乞て降らせふ ツレ「能うおりやらふ ヌモ「雪こう乞ふこよう(ト云ナガラ、肩ヒラキ、両手ニテウヘ下ニアラダ。尤ノリ乍ツレモ同断)。「霰乞こう／＼(ト云乍、互ニ小廻リスル。尤左へ廻ル) ヌモ「雪乞／＼／＼ ツレ「あられ乞／＼／＼ ヌモ「されバこそ降て来るハ ツレ「其通じや ヌモ「唯こへ／＼。雪乞／＼／＼(ト云乍、初ノ通りマネキ乍、ツレト入違フ) ツレ「霰／＼／＼ ヌモ「雪乞／＼／＼(又入違、元ノ所へ行) ツレ「霰乞／＼／＼(先ノ所へ入替ル) ヌモ「何と夥敷う降た事でハないか ツレ「実とした、かに降ておりやる ヌモ「いざ雪こかしをせう ツレ「能うおりやらふ ヌモ「更ハ雪を一所へよせさしませ ツレ「心得た ヌモ「さあく／＼つくねひ／＼／＼ ツレ「つくねひ／＼／＼(ト云乍、両手ニテ雪ヲトリ、丸クツクネルテイヲスル。ツレモ同断) ヌモ「更ハ雪こかしをせふ ツレ「一段と能らふ(ト云、兩人雪ノソバヘヨリ、モツテイ) ヌモ「雪ころばかし(ト云乍、少ツ、先キヘコロバステイ) ツレ「雪まるこかし(如此ニ返シテ) ヌモ「ぐいり／＼／＼や ツレ「ぎつし／＼／＼や 二人「あらつめた(両手ヲ口ニアテル。ツレモ同断) ヌモ「ア、つめたひ事哉 ツレ「扱も／＼／＼つめ度事しや ヌモ「いざ此雪を氷室の谷へ納めふ ツレ「よからふ ヌモ「是へ寄らしませ ツレ「心得た(ト云、

始メノ通り兩人ソバヘヨリ、雪を持テイ。」二人「ゑいとう  
 くく。さあづしくく。どう「ト云、正面ヘコカシ出シ、雪  
 ヲオトステイ。」ヲモ「まんまと谷へ納た ツレ「誠にとつくり  
 と納メ済イた ヲモ「いざまた雪を乞て降らせう ツレ「能おり  
 やらふ ヲモ「雪こうくくく（始メノ通り、一ヘン小廻り）  
 ツレ「霰こうくくく（小廻り。同断。） ヲモ「雪こうくくく  
 「目付柱ヘサシ行ク。」 ツレ「霰こうくくく（同断。サシ行。）  
 ヲモ「雪乞くくく（カザシ戻ル。） ツレ「霰こうくくく（同  
 断。カザシ戻ル。） 二人「へ山や里の軒端に。降や留れこうく  
 く（二人拍子一ツ。）

十一 加茂

〔中入来序。〕

「か様に罷出たる者ハ。都加茂の明神に仕へ申末社の神にて候。我  
 等の是へ出る事余の義にあらず。昔此所に秦ノ氏女の在すが。正直  
 を第一にして親に孝有り。殊に慈悲心深く神を敬ひ。毎も此川辺に  
 立出流れを汲んで。神に手向られし故やらん。或時川上より白羽の  
 矢一ツ流れ来て。今の女人の水桶に止るを。何心もなく其矢を取  
 りて帰り。我屋の軒に指置給へば。彼秦氏の主シ程なく懐胎し。玉  
 を延たこく成男子を産ひ。我なからも不審に思われけれど。斜  
 らす育し所に。其子三歳斗に成りし頃。御身の父ハ如何成人ぞと尋  
 ければ。軒に差置たる矢に指をさす。其時白羽の矢は鳴雷と現じて。  
 天に登り別雷の神と成らせ給ふ。故に此御母も神に祝ひ。上加

茂下加茂中加茂とて。加茂三所の御神是なり。去ながら是は先神徳  
 の目出度キ子細。又当社と播州室の明神とハ。同一体の神にて御座  
 す故。室の明神の神職の方。唯今当宮へ参詣の由申間。先あれハ参  
 り。いか様成人々々余所ながら見申そふする。（ト云乍、右ヨリ左  
 へ廻ル）誠に同一体にてあれバ社。室より此所へ遙々登られたれ。  
 去なからどこ元にぞ。大方此隣にて有ふ。されバこそ是におりやる  
 よ。先あれハ参ふ。（ト云、ワキノ前へ行、下二居テ。）「是は当社  
 明神に仕へ申末社成るが。此所への参詣めてたふ存る。爰元に逗留  
 の中。何の慰もなふてはいかな。面白くハなく共。何ぞ一曲致ふ  
 ずるか。（ト少ノビ）やあ。（ト腰ヲツケ）あ、でおりやる。（ト少シキスル）尤。  
 「ト云立テシテ柱ノ先へ行ク」「流石室の明神の神職なるぞ。何そ  
 一曲と申たれば能ろふと思ふ心やらん。ほつくりくくとうなづかれ  
 たか何をせうぞ。いや思ひ出た。此まへ一指舞ふた事の有る間。急  
 て是を調ふずる。和哥「へ目出度かりける。（ウタイナカラ大小ノ前へ行）時  
 とかや「三段ノ舞。太鼓打上。」「あらくくめでたやくくな。掛る目  
 出度き折からなれバ。（左ヨリ右ヘカシ、直ニ扇ヲ右ノ手ヲ添へ、前ヘカヘシテ持直シ、左ヨリ右  
 へ小廻リ）末社の神も。悦ウタガハシひ勇ユウミ。是までなりとて末社の神ハ。くく。本の  
 やしろに。帰りけり（拍子一ツフミ、ワキ正面向キ、トメル）

十二 白髭

〔中入来序。〕

「か様に罷出たる者ハ。江州白髭の明神に仕へ申末社の神にて候。

去程に天地既にわかれて後。第九の滅却人壽二万歳の時。迦葉カセフツ仏西天に出世し給ふ時分。大聖世尊ハ其授記を得て。都率天に住給ひしが。八相成道の後遺經流布の地。何れの所にか有べきとて。此南勝郡州を遍く飛行して御覽するに。漫々たる大海の上にして。一切衆生悉有仏性如来。常住無有遍易と立波の音あり。釈迦仏此理を聞し召。扱ハ此浪の流れ留らんずる所一ツの国々成て。我教法弘通する靈地たるべしと思召れし故。則彼浪の流れ行に随つて。拾万里の滄海を漕き来り見給ふに。彼浪一葉の苧の浮るに流れ止り。其苧氷洙一ツの国と成る。今の比叡山の麓大宮権現の波止土濃なり。是に依て波止土濃とハ。なミと、まつてつちこまやかとハ書なり。扱又人壽百歳の後。悉達太子ハ中天竺摩端陀国。淨飯王宮に誕生し給ひて。御年十九にて衣更着上の十日の夜半に。王宮を退れいで雪山に身を捨。頓て万事の正覚を還させ給ひて。此豊芦原中津国に來り見給ふに。其頃ハ鷓鴣草葺不合の尊の御代なれバ。人いまた仏法の名字をだにも聞ず。然れども此国ハ大日遍照の本国として。仏法繁昌の靈地たるへけれハ。何れの所にか応化利生の門を開かんと。爰彼を尋給ふ折節。則比叡山のふもと志賀の浦の辺りに。老人の釣を垂て居りしを御覽じて。汝此所の主ならバ当山を我に得させよ。頓て仏法繁昌の靈地となすべしと有を。其時翁答て曰。我人壽六千歳の昔より。此湖水の七度迄桑原と変せしとも正しく見るに。此度爰に仏閣を建。仏法繁昌となすならバ。漁人する事成まじきと思召。釈尊早く去て他国に御求あれと。荒々と宣ひたるハ。忝も白髭の大明神にて御座候。是ハ先当社の目出度子細。扱又当公に仕へ

御申有臣下。唯今当社へ御參詣と申間。先あれへ參り見申そふずる。誠にか様に治る御代なれバ社。稀人の御下向なれ。此度見物仕らずハ。見る事ハおりにやるまひ。併とこ元にぞ。去バこそ是におりにやるよ。先あれへ參ふ。是は当社明神に仕へ申末社成るが。此所への參詣目出度ふ存る。爰許に逗留の内。何の慰もなふてハ如何な。面白くはなくとも。何ぞ一曲致そふずるか。やあ。あ。でおりやる。尤。流石稀人成れぞ。何ぞ一曲をと申たれバ。能ふと思わる、心やらん。ほつくりほつくりとうなづかれたが何をせふぞ。いや思ひ出た。此所一指舞ふた事の有る間。急で是を調ふずる〔和歌三段ノ舞。跡ノ謡、加茂同断。〕

### 十三 嵐山

〔中入来序。〕

「か様に候者ハ。大和芳野の明神に仕申す末社の神にて候。去程に珍らしからぬ御事なれど。先我朝ハ天地開闢より神国なれバ。靈仏靈社国々在々に地をしめ給ひ。仏法繁昌の目出度御代にて御座候。去れバ夫に付昔より此日の本に於て。花の名所多しと申せど。中ニも此三吉野の桜と云ッバ。世に隱なき名木なれバ。君聞召及せ給ひ。則叡覽有り度思召せど。都よりハ余り遠路にて。御幸なされん事もいかゞなれバ。千本の華の種を取寄られ。夫より都の西嵐山に。悉く植置給ひし故。花の盛にハ詠度思ひ。国々在々所々よりも。毎日老若男女共に。我劣じと貴賤群集致す。殊更一条の院に仕へ御申有臣下。唯今勅使に是へ御參詣の刻。子守勝手コシケの明神も老人夫婦と現

じ。様々御詞を替ハし。我ハ千本の桜の守の神と。名乗も敢ず帰り給ふが。拙者にハ何にてもあれ一曲仕り。稀人を慰め申せと有程に。取物も取敢ず罷出た。先あれへ参ふ〔此跡白髭同断。但シ謡留メノトコロ。〕<sup>ハ</sup>三吉野さしてぞ帰ける<sup>ハ</sup>〔卜謡留ル也。〕

#### 十四 江嶋

〔中入来序。〕

「か様に候者ハ。相模国江島の弁財天に仕へ申す。嶋津島の精にて我等も末社の神にて御座候。去程に当社と申奉るハ。忝も欽明天皇の御宇に。世間打覆ひ日月も明ならず。少の晴間と思敷時分。諸の神明仏陀の出現成され。とこ暗の如く有しが晴天と成り。見れば当嶋涌出仕るを。此島の江野に準て江島と申て。廻ハ三十余町高き事は数十余丈なり。是へ弁才天の影向成されし故。忝も仏法繁昌の靈地成れば。当島へ一度なり共參詣の輩ハ。三千世界に無量福の宝を与へ給んとの御誓なり。夫而已ならず天部の御利益の深き事。申も中々愚なる御事にておわします。夫を如何にといふに。武蔵と相模の間深沢といふ湖に。大蛇住んで人を取事限りなし。殊に頃日ハ龍悪盛成しを。弁才天部ハ衆生を痛敷く思召て。今より人を取止に於てハ。夫婦の語ひをなすべしと仰られければ。大蛇ハ喜悅の思ひをなし人をとり止ミ。夫より国土の民豊成る事も。偏に天部の御恵の深き故なり。是に依て彼大蛇をバ龍の口の明神と祝ひ。天部夫婦の御神にて御座すが。古への悪心を引替へ善心と成給ひ。君を守護し国家を守り給ふ。然れば当嶋へ勅使御下向の由申間。いか様成御

方ぞ来りて見申ふずる〔此跡ノ詞、和哥、三段ノ舞、切ノ謡、白髭同断。但シ替ノ謡、左ノ通り。〕<sup>ハ</sup>出いで鶉の徳語り申さん。〔<sup>ハ</sup>ラキ、左ヨリ右ハサシキ。〕地神五代の尊の産屋。〔<sup>ハ</sup>爾ニテ我鼻ヲサス。〕我等が羽にて茸も合せぬ其内に。〔<sup>ハ</sup>籍ヒサシ。〕命ハ生れおわしませば。扱こそ鶉の羽茸合せずの。〔<sup>ハ</sup>自付柱ハサシ行。〕命を申も鶉の羽の威徳。〔<sup>ハ</sup>カサシモトル。〕ふき合せずの尊と申て。〔<sup>ハ</sup>テ柱ノ先ニテ、ユウケン。〕鶉の羽の威徳ぞ。目出度けれ<sup>ハ</sup>。〔<sup>ハ</sup>ツツ拍子ニテ留ル。〕

#### 十五 大社

〔中入来序。〕

「か様に候者ハ。出雲国大社に仕へ申。末社の神にて御座候。去程に珍しからぬ御事なれど。先我朝ハ天地開闢より神国なれば。靈神国々に跡を垂給ひ。威光<sup>ハ</sup>区<sup>ハ</sup>たるにより。誠に吹風枝を鳴さず民鎖をさす。別面目出度御代にて御座候。然るに当社と申奉るハ。素戔嗚の尊にて御座すが。去子細有<sup>ハ</sup>て此所に宮居をなし。則三十八社を勧請あり。稲田姫と夫婦の御神と成給ふ。殊に王子五人御座す。○△此御神を始として国々の諸神。毎年初冬二日の寅の一天に。是へ御影向成さる。に。就中住吉大明神は長月三十日に来り給ひ。人の妹背を定め御座す。左右に依て当国にてハ。十月チを神在月として喜ひ勇ミ。毎日毎夜老若男女共に。袖を連ね踵を次で。歩を運ぶ衆生数限りなれば。神前の一入賑う在す御事。申も中々愚なり。又あれに上道<sup>ハ</sup>下道<sup>ハ</sup>中道<sup>ハ</sup>とて海道数多候。中にも上道をバ諸神御通り有に付。人間ハ恐れて通る事なし。扱是成は四面の芝とて。神の駒を

御放<sup>チ</sup>有るにより。十月にハ牛馬を放し申さず候。先当社の目出度<sup>キ</sup>子細ハ斯のことく。又承れバ雲の上人御參詣の由申間。先あれハ參り見申そふずる（此跡白鬚ノ通り。但シ□▽此印ノ間、神在月ノ能ニハ不云、神在月の間別ニモ有り。然し大方此間を用ユルナリ。神尽し云時は○△ノ間へ左ノ文句を入ルナリ。）第一ハ飛鳥ノ大明神山王権現是なり。第二にハ湊ノ大明神とも申シ。又九州宗像ノ大明神とも顯れ御座す。第三ハ稲佐速靈ノ神と申も。常陸鹿嶋大明神も同一体にて御座候第四には鳥屋ノ大明神が。信濃ノ諏訪ノ明神共現れ給ふ。第五番ハ出雲路ノ大明神を。伊豫ノ三嶋ノ大明神と崇め奉る（△「此神を初トして」トツバク。）

#### 十六 和布刈

〔中入来序。〕

「か様に罷出たる者ハ。長門ノ国早鞆ノ沖に。年久しく住鱗ノ精にて候。唯今爰許へ出る事別の儀にても御座なひ。去程に珍らしからぬ御事なれど。先我朝は天地開闢より神国なれバ。諸神国々に跡を垂給ひ。威光まぢく成りとハ申せとも。取分<sup>キ</sup>早友ノ明神と申奉るハ。隱なき靈神にて御座すにより。老若男女ともに渴仰致し。毎日毎夜袖を連踵を次で。歩を運ぶ衆生数限りなきに依テ。神前ノ賑しう在す御事。又と並びたる神もなけれバ。末ノ代迄も君を守護し奉り。弓箭<sup>カ</sup>ノ家を專に守り給ふ。殊に海船ノ事ハ申に及ず。和歌ノ道迄も祈を懸るに。何にても叶ぬといふ事ノなき故。一入御神徳目出度ふ候。夫に付当社において。年中に御神拝様々多しといへど。

中にも十二月<sup>チ</sup>晦日ノ祭礼を。和布刈ノ御神事と名付られ。当社と住吉と両社ノ神主。寅ノ一天に松明<sup>テ</sup>と御鎌を持。神力に任せ滄海へ分<sup>ケ</sup>入給ふに。龍神潮を守護し申されて。寄せ来る波も左右へたち別れ。行先か干渴に成りし程に。半町斗も海ノ底に下り。海底の若和布を三鎌刈り。元日に当社ノ神前へ備へ給ふが。則其御神事が今夜に相当り。殊に当年<sup>シ</sup>ハ目出度<sup>キ</sup>告ノ有りて。早神主殿ノ御出と有が。毎年相替らず目出度<sup>イ</sup>事なれバ。一指舞ふて罷帰らふ（謡放生川同断。但し留の所「元ノ水中」といふ所左ノ如ク。）元ノ海中に入にけり（ト謡ひ留ル也。）

#### 十七 白楽天

〔中入来序。〕

「か様に候者ハ。住吉大明神に仕へ奉る末社ノ神にて候。去程に我朝に靈神数多あれと。中にも当社住吉大明神ハ。君を守護し国家を守り給ふ。夫をいかにといふに。唐ノ太子ノ賓客白楽天ハ。大唐にてさへ利根者と云れしに。増てや日本ハ粟散<sup>ソウサン</sup>遍<sup>ヘン</sup>地ノ小国なれバ。定て智慧愚に有べし。然らバ日域ノ人ノ心を斗り見て。順<sup>シ</sup>んと匠ミ此度渡すを。住吉大明神ハ神通なれバ御存じ成され。彼者を陸へ上<sup>ケ</sup>てハ悪かりなんと思召。賤しき釣ノ翁と御身を現じ。今ノ唐船ノ辺ノ海上に浮ミ給ふを。唐人ハ是を見付。あれハ日<sup>ニッ</sup>本ノ者かといふを聞給ひ。扱ハ心易しさせる智慧にてはなし。此国ノ人を見ながら日本ノ者かと問ふ程鈍<sup>ニ</sup>でハ。差たる事ハ有間敷<sup>キ</sup>と思召。是は我朝ノ漁翁<sup>ニ</sup>て候が。御身ハ唐ノ白楽天にて在すかと御申あれば。漢

朝人ハ大に驚き。我此國へ初て渡りたるに。早名を知らるハ不審なりと思われ。扱此頃日ッ本にハ何を翫ぶぞと問れしを。扱又唐土にハ何事を翫び給ふぞとあれハ。唐土にハ詩を作て遊ぶといし程に。日ッ本にハ歌を詠て。人の心を慰候と御申あれば。そも歌とハいかに。天然の靈文を唐土の詩賦とし。唐土の詩賦を我朝の哥とす。三国を和らげたるを以て。大に和らぐ哥と書て大和歌と読り。しるし召されて候へ共。翁が心を御覽せん為候など有ければ。いや夫にてハなし。出目前の景色を詩に作て聞せふとて。青苔衣を佩て巖の肩に掛り。白雲帯に似て山の腰を廻る。心得たるか漁翁といへるを。又明神ハ此心を哥に。苔衣着たる巖は左もなくて。衣着ぬ山の帯をするかなと。斯詠じ給ふを樂天聞。姿は賤しき釣人成るが。哥を読む事不審なりといわれしを。和国に於て歌を詠ずる事。人間ハ申に及ばず。鳥類畜類迄も讀申其子細ハ。孝謙天皇の御宇に。大和の国高天の寺の鸞は。初陽毎朝來不遭還本栖と鳴を。文字に写して和らげ見れば。初陽の朝毎にハ來れども。何にてぞ還る本の栖にと。斯御物語有を唐土人は聞。大唐にて鳥類畜類杯の詩を作りたる例ハなし。唯是より押戻らんと思ふ心を御存成され樂天ハ暫く御待あれ。海上に立舞樂をなして見せ申そふずるとて。其儘御帰り被成たると申聞。先あれへ參り唐船の模様を見物致そふ。(右ヨリ左へ廻じ) いかにも大唐の樂天成りといふとも。日本を妨ん事ハ中々思ひも寄らぬ事じや。(シテ柱先へ廻り止ル) さて唐船ハとこ元に有るぞ。扱もく夥敷イ事哉。あそこへ某も行ふか。いやく卒爾に行てハいかゞな。是にて一指かなて罷帰ふ(和哥、三段ノ舞、跡ノ

謡、加茂間斷。但留ノ和哥左ノ如く。盛久ノ和哥も謡。) 納りなびく。時なれや

### 十八 竹生嶋

〔中入來序。狂言ヨリ、後見一人出ス。腰桶ノ蓋ニ、鍵ニ股竹、玉角、珠數入、持出ル。〕

〔箇様に候者ハ。江州竹生嶋の弁財天に仕へ申社僧にて候。去程に我朝に福殿數多おわしますとハ云へと。中にも当社の御事ハ。福德自立を叶へ給へバ。国々在々所々迄も。朝夕袖をつらね踵を次で。老若共に知るも知らぬもおしなへて。參詣の人々多き中に。取分程近き都より毎日貴賤群集なし申さる。夫に付当島の天女の靈神成る御事。大内迄も其隱なくして。勅使御下向のよし申す程に。先あれへ參り御礼を申。又御用有に於てハ走り巡らふと存る。誠に目出度御代成に依て。希人の此所へ御下向被成た。去なからとこ元に御座るぞ。去ればこそ是に御座るよ。先あれへ參ふ(ト云ワキノ前へ行、下二居テ。) 是は当島の天女に仕へ申者成が。止事なき御方の御參詣と承り。取物も取あへず伺公致て御座る。爰許に於て御用の御座らバ。何事成り共我等に仰付られひ。又此嶋へ御參りの旁にハ。弁財天の御宝物を拜せらる、が。是は何と御座らふぞ(左あらバ、其御宝物を拜せて給り候へ。) 畏て候(ト云後見座へ行、鍵ヲ右手ニ持出、ワキノ前へ行キ、下二居テ。) 是は当社御座る御座る。急て御戸を開き申さふ(ト云作物ノ前へ行、鍵ヲ両ノ手ニ持。) ごとくくく。〔ト云乍、鍵ニテアクルテイヲシテ、

カギヲ腰ニサシ立チテ。」ぎい。「引。」(ト云乍、扉ヲ右ヒラク所作アリ。)ぎりくくくく。(ト云乍、左へ開ク。後見座へ行、鍵ヲ置キ、扇ヒラキ左リニ持、右ニ竹ヲ持、扇ノ上へノセ、ワキノ前へ出ル。)  
 「是は此嶋現れ出た時生じた竹で御座る。是に依て当社を竹生嶋とハ申習す(ト云立テ、後見座へ行、竹ヲ置キ、珠数ヲ持出る。尤持様始メノ通り。)  
 「是ハ天女のお珠数で御座る。少と各に戴せませう(ト云、ワキノ側へ行、戴スル。)  
 「此方もいた、かせられい(ト云、ワキツレニモイタ、カスル。後見座へ行珠数ヲ置テ、玉ヲ持出る。尤始ノ通り。)  
 「是は牛の玉で御座る。珍らしい物じや程によふ御らふじられい(ト云立テ、玉を置、角持出ル。初メノ通り。)  
 「是は駒の角で御座る。夫へ持て参り御目に懸ふ。  
 (ト云乍、側へ持ヨリテミスル)よふ御らふじられい。(ツレワキヘモミスル)此方も御らふじられい(ト云立テ、玉ヲ置キテ、扇スポメ持、ワキノ前行下二居。)  
 「先御宝物ハ斯の如く。又是に岩飛の有を御らうじられまいか(ワキ「左あらハ岩飛とんで見せられ候へ」)  
 「畏て候(ト云立テ、後見座へ行、扇を上る。後見肩取り、作り物持入ルナリ。扱扇ハサシテ、大小ノ前へ出ナカラ謡イダス。)  
 「出いで岩飛を始めんとして。  
 (上ヲミル)高き所に。走り上り。(正面へ走り出、少飛上り)東を見れば。日神月神照暉て。(大石柱ノ方ヲミル)(下ヲミル)水に移れる影を見れば。(目付柱へ袖ニテサシ行)怖しそふなる岩巖石を。  
 (サシ戻り)飛越へ。水底に。(面へ走り出テ飛下二居ル)づぶと入つてぞ。帰りける。(ト云乍、両耳ヲ手ニテタ、キ立テ、鼻ニ手ヲアテ、)「はあくつさめ。く(ト云テ入ルナリ。古来ハ宝物ノ内七

難ガ毛アリ近代ヌキテ不用。』

### 十九 難波

〔中入来序。太鼓作物持出、太鼓座ニ置キ、扇ヌキ持、シテ柱ノ先ニ立テ、名乗ル。〕

「か様に候者ハ。津の国難波の梅の青葉の精にて候。去程に此名木の名高き子細は。昔応神天皇の御宇に。難波の王子宇治の尊子と申て。二人の御連枝のおわしますが。帝の御位を難波の皇子へ御譲あれバ。主上ハ皇になしとて御取なかりし間。左あらバと思召宇治の宮へ参せらるゝに。現在の嫡々だに春宮に立せ給ぬを。我皇子なれ共庶人の身として。帝位を継がん事申中々思ひもよらぬと仰られ。彼方此方と御辞退有り。三年か間天子の位定らざる折節。百濟国より王仁といふ相人此土へ始めて渡るに。天下の事を奏しさせ給へバ。勅定を蒙り懇に考て申上る様。難波の皇子の御位に即せ給ひて。天下目出たからふずると。相人の判したるに任せ。重て難波の宮へ勅使立てバ。其時何と思召候やらん。御位を受取御申成られ。大鷄鶴の帝と崇め奉り。唐土の堯舜にも弥増んとの御事に候。其頃王仁の哥に。難波津に咲や此花冬籠り。今ハ春べと咲や此花と。斯目出度君を添歌なれば。此梅は我朝に隠なき名木にて候。夫に付我等の是へ出る事余の儀二あらず。当今に仕へ御申成さるゝ臣下。唯今此所へ御参詣なれば。古への王仁ハ花守と現じ詞を替され給ふが。今度ハ舞樂をなして慰んと有により。某は太鼓を成とも置申さふと存て罷出た。(ト云、後見座へ行、太鼓持出、シテ柱ノ先ニ立チ。)どこ



元に置いて氣に合ふ知らぬ事じや。去ながら爰元がよからふか。(ト云乍、ワキ正面へ置、立退テ見テ。)いや／＼は片脇で悪そふな。(ト云乍正面へ持行置ク。)大方爰かよからふ。(立退キ見て。)見た所が一段とよい。扱又止事なき御方の御出と申間。先あれへ参り見申そふず。か様に治る御代なれば社。稀人の御下向成された。此度見物仕らずハ見ん事ハおりやるまい。併とこ元にぞ。去ればこそ是に御座るよ。我等の風情でお前へ出るハいか／＼なが何と致さふぞ。いや／＼苦しからぬ事たゞ参ふ。(ト云、ワキノ前へ行、下二居テ。)爰許へ罷出たるを。興有た者と思召れうず。是ハ難波の梅の青葉の精成が。雲の上人此所へ御来臨と承り。取物も取敢ず罷出た。此辺に御逗留の内。何のお慰もなふてハいか／＼。面白くはな／＼。何ぞ一曲致そふずるか。やあ。あ、で御座る。畏つた。(ト云立テ、ワキ正面へ行。)流石稀人で御座るぞ。何ぞ一曲をと申たれば。能らふと思召心やらん。ほつくりほつくりとうなづかれたが何をせふぞ。いや思出いた。此前一指舞ふた事の有る間。急で是をかなでうずる(和哥、三段ノ舞。加茂同断。)[あら／＼目出度や／＼な。かゝるめでたき折柄なれば。青葉の精も。喜び勇み。是迄なりとて青葉の精ハ。／＼。元の梢に帰りけり。][所作、加茂末社ノ通り也。]

## 二十 西王母

〔初作り物出。後見引と口明、シテ柱ノ先キ二立。〕  
口明「抑是ハ周の穆王に仕へ奉る官人にて候。扱も我君八疋の駒と

て。一日に千里をかくる程の名馬に召され。靈鷲山の麓に至り。普門品の二句の偈を。仏より直身に授り。御悦ひは斜ならず候。今日ハ此殿に御幸成され。四方の気色を観覧有へきとの御事なれば。百官卿相に至るまで。其分心得候へし(ト云ナガラ、左ヨリ右へ少シ廻リナガラ、ワキ正面ヲ向留ル。太鼓座へ引居ル。中入過テ、シテ柱ノ先ニ立シヤベリ。)[去程に頼奉周の穆王の御事は。昔の三皇五帝より以来。並なき賢王にておわしまし。先帝を重んじ政事慢怠り給わず。民を憐豊に広き御心を。天も納受し地神も感応なし給ふか。此御代にハ不思議の事而已数多御座候。夫をいかにといふに。唯今も容顔美麗成女人の独り。禁中に参内し奏聞申を。如何成者ぞと問せ給へば。三千年に花咲実なる桃花成るが。今時に至て目出度キ御代成る故に。仰て捧参らすると申されければ。彼仁をはや仙女と御存成され。名に聞し西王母の園の桃花を。初て観覧成さる、事。偏に治る御代の印と思召。主上御手にふれさせ給ひ御感浅からず候。夫に付此西王母の園の桃と申ハ。三千年に一度片枝に花咲き。片枝に実る桃成るが。此桃を一ツ服すれば。則三千年の齢を保桃成ルを。東方朔といへる仙人ハ三ツ迄服せらる、故に。九千歳を経といへり。掛ル名高き桃の花を持て。王母唯今参内されしが。重てハ誠の桃実を捧申さふずると。天上有る。然らバか程寿命長遠成る桃実を。仙女の捧るは例。鮮き事なるに。只納め置れんもいか／＼と思召。管絃講を以て請取御申あらんとの御事なれば。糸竹の役にハ一人も残らず早々御参りあれ。相構て其分心得候へ／＼

## 二二一 寢覚

〔中入来序。ツレ仙人二人、或ハ五人出ル。立方玉井同断。〕

「か様に罷出たるを。興有た者と思召れふずる。是ハ木曾の高山に年久敷く住んで。命量も無き世捨仙人にて候。其仙人が何とて爰へ顕れ出たるぞなれば（ト云ツレ皆「エヘンエヘン」ト云。）ヲモ「いやわこよ達ハ。何と思ふてお出やつたぞ。ツレ「何かハ知らずわこりよが出るに依て。是迄附てハ出たが。様子ハ何共なツレ皆々「中々。ヲモツレ共不残「知らぬよ。ヲモ「夫ならバ子細を語て聞せふ。ツレ「急て語らしませ【語】「先我朝に神武天皇より名君数多有りといへど。中にも此君賢王に御座す故。天の加護あり地神敬ひ。仙人ハ山より出聖人賢人も参内し。不思議の奇瑞様々有る中に。又此程も新成ル靈夢の在して。信濃国木曾の郷寢覚の里に。三婦りの翁と申者有りて。寿命長遠の葉を与ふる由。忝も帝聞シ召及はせ給ひ。急き御説有ッて奏聞あれとの勅により。延喜の聖主に仕へ御申成さるゝ、臣下。当所へ初て御下向成さるゝ、夫に付寢覚の里におゐて。寢覚の床と申ハ。役の行者此床に暫く座して。観念の眠を覚し給ふ所なり。彼行者ハ仙通を得られたる故に。三婦の翁ハ生所も知らず出所もなく。唯忽然と顕れ出。毎も寢覚の床を栖として。老せず死せぬ葉を服し。一度ならず二度ならず三度迄若やく故に。則三婦の翁とハ申習す。是と有も諸仏の天子へ齡を授シ為に。千年<sup>セ</sup>を経る老人と現じ。不老不死の御葉を。唯今君へ捧んと有るが。南方目出度<sup>イ</sup>事<sup>セ</sup>でハなひか。ツレ「おしやる通り日出度事<sup>セ</sup>ておりやる。ヲモ「いさ此様子を語ふて帰らふ。ツレ

「一段とよふおりやらふ。ヲモ「あらく目出度やくな。（扇ヒラク）掛るめて度仙人どもハ。此処に。あらわれ出て。（左ヨリ右ヘサッ切）寢覚の床の。目出度き子細を語り申し。（ツレノ方ヲミル）（アトヘカヘル）帰らんとせしが。（立モドリ）猶も所を富貴に守り。（扇ト手ニテアラク）七百歳を国土に授け。（正面ヘムスヒサス）是までなりとて仙人どもハ。（目付柱ヘサシ行）（カサシ戻ル）元の仙境に。（ユウケンブタイ真中ニテ）降りけり。（帽子ツツミ留ル）〔語り申ト、ツレヲミルト。ツレ皆々跡へ下り、並ビ立ツ。〕

## 二二二 源太夫

〔中入来序。太鼓持出ル。難波同断。〕

「か様に候者ハ。尾張国熱田の宮。源太夫の神に仕へ申末社の神にて候。去程に当社と申奉ハ。神代の時ハ素戔嗚の尊と現し。出雲ノ国鏡の川上に御座候が。有時河上に啼哭する声を聞し召。命ハ不審に思ひ立寄御覽あれバ。老人夫婦が中に美き姫を一人懐き。泣ナク叫コウ体をつくくゝと見給ひ。いかなる者ぞ子細を申せと有ければ。其時老人答て曰。是ハ手摩乳足摩乳と申て。夫婦の者にて候。又是成ハ稲田姫とて我等の娘成が。大蛇に生贄を備へ申に付。唯今此姫が番に当り候故。か様に嘆き申由語りければ。尊聞シ召近頃不便の次第なり。其儀に於てハ此姫を我に得させよ。其難を遁すべしと宣ふ程に。彼夫婦の者ハ悦ひ易き間の御事。此難を通して度給へと申を。扱其大蛇の容体を委しく語れと有ければ。さん候胴一にて頭ハ八ッ御座候と申を。左あらバと有ッて酒舟を八ッ作らせ。国々の名酒

を集め。ハツの船に一杯宛たゞへ。扱又真中に高く床をかき。彼姫を棚に上置給へば。ハツの舟に姫の顔の移るを。大蛇ハ人影と見て酒を呑程に。前後も知らず酔臥たるを。尊は御覧じ十束の劔を持ってハツの頭を皆打落し給ふ程に。夫より牲イノチといふ事を止め。宮作して稲田姫と一所に住せ給ふ。先神代の時ハ斯の如く。又人代に成りてハ東夷をたひらげ。悪魔をしづめ。終にハ爰に地をしめて熱田大明神と申す。其時の手摩乳足摩乳ハ。則源太夫の神と祝われ給ふ。扱又勅使此所へ御下向に付。舞葉をなして慰め給ふべきとて。太鼓の役は源太夫の神にて御座候故。某は太鼓を成とも置申さふと存て罷出た。「難波の如太鼓ヲ持出ル。」とこ元に置いて能からふぞ。先是に置ふ。（難波のゴトク） いや／＼是は片脇でわるそふな。爰かよからふ（難波の如く）。見た所か一段とよい。扱稀人ハとこ元に御座るぞ。参りて見申さふずる〔是より跡、白髭同断。〕

## 二十三 道明寺

〔中人来序。〕

「か様に罷出たる者ハ。河州道明寺の天神に仕へ申末社の神にて候。去程に我朝に天神を勧請申。国々在々に数多御座とハイへど。其中ニも当寺の天神の新成る御事ハ。天下に其隱御座なく候夫をいかにといふに。相模ノ国田代の尊浄とて。仏法に志深く有難聖の候が。此程ハ信濃の国善光寺に参り。後生一大事の祈念を申されければ。有ル夜の夢の告に。汝誠の志切マコトなり。併河内の国土師寺ハツヂテラへ御参りあり。是ハ忝も天神の御ミコ在所なり。彼寺の乾の角にして。天神の御

自筆にて。五部の大乘経を遊し。彼所に埋給ふが。其経の軸より木一本シノ生上す。則是を木榎樹と名付ナヅケ。其葉を取り数珠とし。念仏一万遍申に於てハ。現当二世の望も叶ふべしと有間。其告に任せ沙門ハ当寺に参り。いかなる人も来れかしと思わる、所へ。止事なき老人と御身を現じ。彼尊浄へ行合たまひ。当寺の事を委しく語り搔消様に失給ふ。先某はあれハ参り。彼尊浄とやらんを見申そふずる。誠に我朝に貴僧高僧多しといへど。（下云乍左へ廻り） 中にも彼御方の様な。殊勝な人ハ御座有るまひかと存る。併とこ元にぞ。去れば社是におりやるよ。誠に一段貴さふな。此体であそこへ出るはいかゞなが。いや／＼苦しからぬ事唯参ふ。是へ罷出たるハ。当寺の天神に仕へ申末社成るが。旁の是へ御越の由承り。取物も取敢ず罷出た。爰許に逗留の内。何の慰もなふてはいかゞな。面白ハなく共。何ぞ一曲致そふずるか。やあ。あゝ。でおりやる。尤。流石貴尊浄成ルぞ。何ぞ一曲をと申たれば。能ふと思わる、心やらん。左りのほど。につこりににつこりと笑われたが何をせふぞ。いや思ひ出た。此前一指舞ふた事の有る間。急て是を調テふずる〔和哥、三段舞、跡ノ謡、白髭同断。〕

## 二十四 九世戸

〔中人来序。〕

「か様に罷出たる者ハ。北国浦の海中に住鱗の精にて候。去程に我等の是へ出る事余の儀にあらず。先丹後ノ国九世戸の文殊は。神代の古跡にて御座す故。当今イマに仕へ御申成さる、臣下。唯今はへ御参

詣と聞く。夫に付北国浦の中に取りても。丹州此浦といふにハ。朝夕北風烈しく吹いて。荒波の鎮に立來たるを。伊弉諾伊弉冉の尊是をつくごとくとご覧じ。何共して龍神の心を取りて。風波を鎮と思召れ。天竺の五大山の大神文殊にハ。いかなる龍神の猛き心も和らき。海底も鎮らんと思召。五台山の文殊を始めて移し奉り。則御説法宣給ふ刻。竜神の事ハ申に及ばず。或は山野郷河のうろくず迄も。残らず浮ミ出て聴聞致し。其外有る海の大神に至まで。皆悉く法果を得たる故に。か様に納る御代とハ罷成た。其後文殊当浦を立ッて海に入り。あそこや爰と居所を尋給ふ時。伊弉諾伊弉冉の命天降り給ひ。種々様々の計略を成され。是に寄り色々子細有に付。此所を天の橋立とハ名付給ふ。掛る目出度此島に。守護神なくてハ叶ふまじと。其時の龍神を彼嶋に祝ひ置き。今の橋立の明神是なり。故に其文殊は。天神七代地神二代の尊迄。当島を守り給ふにより。爰を九世の戸とハ申伝る。か様に妙なる靈仏靈社成に依て。今に於て御神木の松にハ。天燈竜燈を備へ給ふ。掛る目出度治代なれば。我等如きの者までも目出度事じやに。いさ諷ひ舞ふて帰らふ。「あら〜目出度やめでたやな。掛る目出度折からにて。四海ハ波も納まれバ我等が様な鱗までも頭れ出て謡ひかなで〜て。もとの海中に。入にけり〜」〔立廻リハ、放生川ウロクツノ舞同断。〕

## 二十五 絵馬

〔中入來序。直ク下り端ニテ、鬼五人ヨリ七八人迄、槌ヲカタゲ出ル。一ノ松ニ立留ル。太鼓打上謡出ス。〕

ヲモ「有難や。〜。治る御代の験とて。蓬萊の島よりも。鬼社君の御威光に。数々の宝物を。いざや君に捧んいざ〜君に捧ん〜」〔ヲモ真中ニ立ツ。ツレ鬼左右ニ立並。〕ヲモ詞「此目出度様子を。皆ハ知つたか知らぬか ツレ「いや何共な（跡ノツレ不殘）」中々 皆々「知らぬよ ヲモ「更ハ語て聞さふ ツレ「急て語らしませ ヲモ【語】「先我朝は天地開闢より小国ながら神國にて。仏法繁昌の目出度御代なり。殊更此君の御威光忠りましますゆへ。別而伊勢大神宮を信じ給ひ。数の御宝物を捧給ふにより。其勅使是へ御參宮成され。折しも今夜は節分なれば。当宮に絵馬を掛くると聞し召され。御見物の為是に御座成さるゝ所に。夜半過と思敷時分人音のするを。いかなる者ぞとお尋あれば。案のことく絵馬をかくと答られ。扱來年よりハ猶以て国土豊に治り。雨露の恵も一入にて。耕作の道も成長致し。民の有難く存る御代の例に。黒と白との絵馬を二ツ掛申す。毎年一ツ掛たる例なれども。当年より始て二ツに致す事ハ。時分の能き頃には雨を降ッし。又水増らん時にハ日の照りて。干損水損なく五穀成就仕り。人民の粟ミ尽せぬ様に。斯のことく祝奉と有る。扱是をいか成人々ぞ。具に聞度とわこりよ達の思ふが。忝も伊勢の二柱の御神。夫婦と現じ來り給ひ。雲の上人に念頃に御雜談成され。搔消様に夜の内に御帰り有りたるが。南方目出度事でハないか ツレ「其子細を今こそ聞たれ。左様に神の夫婦と現じ出給ひ。弥天下安全にて。世の中のみひやうにと思召ハ。人間の事ハ申に及ばず。我等如きの者迄も別て有難事てハ有ぞ ヲモ「其事じや。か様に目出度御代なればこそ。此者共迄

も出現したる事じやに。弥天下泰平に御繁昌成さる、様に。御宝物を爰へ打出て帰ふ ツレ 「一段とよからふ ヲモ」蓬萊の嶋なる。

く。〔右ヨリ左へ廻ル〕 おれか持つ宝ハ。隠裏にかくれ笠打出の小槌。

〔御ヲ見ル〕 諸行無常じやう。〔ト云、ツチヲ両手に持廻ス。尤三本廻ス〕 く。く。

くわつしも、にくハつたりく。〔下へ打出ステイ。拍子ヲミナガラ〕 ツレ皆打

出ス 「いやくわつたりく ヲモ のふく。様々の宝物を打出

て目出度事でハなひか ツレ 「わこりよのいふ通り。めて度事で

ハ有るぞ ヲモ 「いざ蓬萊の嶋へ帰らふ ツレ 「能らふ ヲモ

「こちへおりやれく ツレ皆々 「心得たく ヲモ 「こちへお

りやれく ツレ皆々 「心得たく

## 二十六 東方朔

〔口明。西王母同断。〕

「抑是は漢の武帝に仕へ奉る官人にて候。扱も此君賢王におわしま

すにより。誠に吹風枝をならさず。民鎖をさ、ぬ御代にて候。然れ

バ此程青き鳥の足の三ツ候が。禁中を飛廻るを。いかなる怪鳥ぞと

君御不審成され。博士に占わせられ候へバ。君の御為けしからず目

出度<sup>キ</sup>御瑞相と占ひ申す。又今日は七月七日七ツの節会なれば。

我君ハ承<sup>シ</sup>華殿に御幸成され。御遊<sup>フ</sup>の有へきとの御事なれば。百官

郷相に至る迄。其分心得候へく。〔ト云、太鼓座へ引居ル。シテ

出、一セイ、サシ、小謡過テ、案内を乞ウ。シテ「いかに奏聞申べ

き事の候」官人立向フ。」「奏聞とハいかなる人ぞ〔シテシカく〕

「夫に御待候へ。其由申そふする〔ト云、ツレヲキノ前へ行、下二

居テ。〕「いかに申上候。此国の傍に住者成るが。君の御為けしか

らず目出度御瑞相在す間。此事を申上ん為。唯今参内仕りたる由申

候〔ワキシカく〕「畏て候〔シテノ方へ行向。〕「其由申上候へ

バ。則庭上へ参内申せとの御事にて候間。号御参り候へ〔ト云、直

ニ幕へ入ル也。申入来序。仙三人或ハ五人出ル。寢覚同断。〕仙人

「是へ罷出たる者ハ。隣近き山に住仙人にて候。唯今爰許へ出る事

余の義にあらざ〔ツレ、エヘんくト云、諷等寢覚同断。〕〔語〕

「先此君の御繁昌成さる、に付。東方朔の奏聞申さる、様は。此程

青き鳥の足の三ツ候が。禁中を飛廻るハ。一段目出度<sup>キ</sup>事なり其子

細は。崑崙山の仙人西王母の寵愛の鳥也。此仁は三千年<sup>ニ</sup>に一度

度花咲実なる。桃実<sup>モモジ</sup>を持申されたるが。是を一ッ服すれば。三千年

年の齢を保つといふに。東方朔は三ッ迄服致すにより。九千歳を経

といへり。其寿命目出度桃実を。王母我君へ捧申さりやうずるとの

御事にて。三足の青鳥先立たる由を申せば。君の御感浅からず。彼

仁は搔消様に失給ふ。扱又我等如きの仙人も。形の如く寿命目出度

けれバ。いさ皆々是に休らひ。弥めで度様子を見まひか ツレ

「一段とな 皆々 「中く 不残 「能うおりやらふ ヲモ 「先爰

に居よふ ツレ 「能うおりやう〔ト云、笛座ノ上ヨリ段々ニ大小

前へ並居ル。偕一セイニテ、桃仁ノ精出ル。一ノ松ニテ謡フ。尤扇

持。〕桃仁 【謡】「抑是ハ。三千年に一度花咲き。三千年に一度

実の成る。西王母の園の桃の。桃仁の精なり。〕【詞】「是は崑崙山

の仙人。西王母の桃仁の精成るが。目出度御代に付仙人も山より出

ると申せば。此君賢王に御座すにより。桃仁の精罷出て候〔右ノ詞

ノ内ニ皆々立ツ。」仙人ヲモ「是へ興有た者が参た。詞を掛ふツレ皆々「能うおりやらう〔ト云桃仁二向イ。〕仙人ヲモ「のふく夫へお出やつたハいか様成人ぞ。桃仁「是は崑崙山の仙人。西王母の桃仁の精成るが。目出度御代にひかれ是迄頭れ出候。仙人ヲモ「左有バ某なとも寿命をあやかる様に。祇度ふおりやるが何とおりやらふぞ。桃仁「如何様に成とも御祇候へ。仙人ヲモ「皆々是へ寄つてねぶらしませ。皆々「心得ておりやる〔ト云、諷ナガラ仙人左右へ立ワカル。桃仁舞台真中へ出ル。〕仙人ヲモ「へ出いて更バ祇らんとて。く大勢中に取籠て。先我さきにと進ミけり。桃仁「其時桃仁跪て。（ト云下少先へ出。下ニヒザ立居ル。）頭を差出し待けれバ。仙人皆「寄りてハ祇り。（左右ヨリ皆々側へヨリ、桃仁ノ頭ナメルテイ。）帰りてハねぶり（跡へ少シ掃リ、又ツバへヨリ、桃仁ノ頭中ヲ一ツトリ、フトコロへ入ル。）余りに強く祇られて（皆々大小ノ前へ下リ立並ブ。）頭ハちいさく成ぬれど。（桃仁扇ニテ頭ヲサス。）桃仁「命は長き桃仁の。（扇ヒラキ目付柱へサン行へカサシ戻ル。）く精ハ。（エウケン。）王母の御元へ。帰りけり。く（●拍子一ツ。フミトメル。扇スポメ桃仁ヨリ入ル。ツ、イテ仙人皆々入ル也。）

二十七 輪藏

〔中入来序。〕

「か様に候者ハ。忝も王城の鎮守。北野の社内に住末社の神にて候。某此所へ出る事余の儀にあらず。先筑前の宰府に居住の僧の有しが。稚き時より五戒を保オ。仏道修行怠慢なく。其隠なき貴僧にて有けるが。宰府と当社とハ同一体の事なれバ。唯今是へ参詣申され。輪

藏を拜して信心をなし申さるゝ刻。釈迦一代の雑経の守護神の内。火天出られし程に。火天にて在さば一代の妙経を。今夜に読誦申度と上人望あれバ。拜せ申べきとの御事に候。夫二付此輪藏と申ハ。傳フタ太士の作り初られし事也。此伝太士は去子細有ツて。普建フタ普成の子を儲ケ。則伝太士普建普成とて。輪藏の本尊として。尊敬なすは此故なり。去れバ一代の雑経を此北野に納ウり有るを。念願深く爰に來れる志殊勝なれバ。火天頭れ出今夜の内に。神通方便にて。妙経を悉く伝経させ申へきと有により。取物も取敢ず罷出た。先あれへ参り。彼貴僧の様体を見はやと存る。誠に仏道修行の人なれば社。（ト云右ヨリ左へ廻リ。）宰府よりはるく登られたれ。左様の念願ふかき仁ニを見て置ねバ。我ら如きの者迄も残り多イ事しや。併どこ許に居らるゝぞ。（キ正面ヨリ見廻ス。）さればこそ是におりやるよ。思ひの外殊勝なお方じや。儲ケ様の例し鮮ニき事を。諸人に申聞せよとの儀なれバ。急で相触申さふずる。（キ正面ヲ向。）やあく皆々承り候へ。釈迦一代の雑経を今夜のうちに。悉く伝経有べきとなれバ。老若共に早々罷出拜し申べし。御経の功力にて現世は無非の樂。来世ハ仏果に至らん事。疑ひ有間敷き間。構へて其分心得候へく

二十八 右近

〔雷序出端同事。〕

「か様に候者は。忝も北野の社内に仕へ申。末社の神にて御座候。去程に珍らしからぬ御事なれど。先王城の鎮守数多ありとハ申乍。取分キ当社天満天神ハ。風ツ月ツの本ン主文道の大祖たり。天に在し

て八日月の光りを顕し給ふが。本地ハ救世觀音にて在す故。和光利物の御結縁に。菅原の家に天降り。塩梅の臣と成つて君政感理し玉ひ。か様に北野の南無天満大自在天神と。君も渴仰の御事なれば。増て数ならぬ衆生毎日毎夜歩を運びて。神前の賑う在御事。又と並たる神も御座なく候。されバ当社に於て。神拝様々なりとハ申せど。中にも阜月上旬に執行フ。右近左近の真手番を。葵折の日と申其子細は。近衛の舎人の着たる歩行の後を引折故に。則是を葵折の日とハ名付給ふ。去乍是ハ先当社の子細。又承れバ。鹿島の神職何某此春都に上り。洛陽の名所残りなく一見有たるが。今日は右近の馬場の花を詠め給ふに。流石都の事なれば。花見の人々女車を数多立ならへ。輿をつづけ置たるを見て。古へ在原の業平も。右近の馬場の葵折の神拝を見物有し時。是も向と立たる女車を御覽じ。見ずもあらず見もせぬ人の恋敷に。あやなく今日や詠暮さんと。よめる哥を。今の鹿嶋の何某ハ折節思ひ出し。所から面白く思われ。唯何となく口ずさひ給ふを。隣りに有つる花見車の女房是を聞。夫より詞を掛様々語られしが。後には桜場の明神と名乗もあへず。其俣暮に失給ふ。是は如何成神体ぞなれば。伊勢にてハ桜の明神。当社に於てハ桜場の明神と申て。君を守護し国家を守り。当社に於て第一の末社にて候。然れハ今の宮人は。常陸の国より遙々登り給へば。我等ハ先あれへ参り。彼宮人の様子を見申そふずる〔是ヨリ跡、白髭の如し。〕

## 廿九 同語

〔初ワキツレ呼出シ有。詞放生川ノ如し。〕

【語出】「去程に珍らしからぬ御事なれど〔●此印ノ間前同事▲〕則是を葵折の日とハ申習す。然れバ古へ在原の業平も。右近の馬場の葵折の神拝を御見物成されし時。有繁都の事なれば。花見の人々女車を数多立並べ。輿をつづけ置給へバ。誠に異香四方に薫じ。吹来る風も郁内に。然へき所に女車を立たるを御覽じ。見ずもあらず見もせぬ人の恋しきに。あやなくけふや詠め暮さんと。か様に詠じ給ひたると承る。又当社にて桜場の明神と申スハ。右近の馬場左近の馬場に桜の木数多候により。伊勢にては桜の明神。此所にてハ桜場の明神と申て。君を守護し国家を守り。当社に於て第一の末社にて候。是に付謂の数多有りとハ申せど。神秘なれば白地には申されず。先我等の承りたるハ斯のことくにて御座候。〔言語同断奇特成事仰らる、物哉。旁の常陸の国より遙々御登り有り。洛陽の名花残なく見物成され。殊ニ当所の花盛まで一入に詠給ふにより。桜場の明神御納受被成。権に人間と見へ給ひ。委く御物語有たると存る間。暫く是に御逗留あり。重て奇特を御覽し。其後御帰国あれかしと存る。〕尤に候

## 三十 岩船

〔雷序出端同事。〕

「か様に罷出たるを。興有った者と思召されうずる。是ハ此海中に住鱗の精にて候。某唯今出るを別の儀にあらず。去程に珍らしから

ぬ御事なれど。此君賢王におわしますにより。国土豊に治る験にハ。吹風枝を鳴らすず民鎖を差す。千代万歳と栄ふる御代なる故。仙人も山より出聖人も出世し。余りに目出度折柄成るに付。摂州津守の浦に浜の市を立。高麗唐土の宝物をば。残らず買取れとの宣旨を蒙り。勅使此所へ御下向成さるゝに。我朝の名物は申に及ず。老若共に貴賤群集の中に。姿は唐人にあれとも声ハ倭言にて。銀盤に玉を居て持たるを。稀人はつくゞ御覧じ。如何成者ぞと御尋あれバ。我は天の昨女にて候が。是に持たるハ宝珠にて在。合浦の玉を君へ捧くると有るを。雲の上人ハ御喜び斜ならずして。猶も目出度キ子細を語れとあれバ。我君長久にて御座す事を。天も納受垂給ふ程に。即天の岩船を作り。金銀珠玉如意宝珠。其外千貨万類の宝物を。何も残らず舟に積ミ。其岩船を此昨女が漕て。当浦へ無事に着んと申上ゲ。其佞搔消様に失申ス。扱又止事なき御方御下向なれば。拙者杯も見物致度いと存る間。先あれへ参り見申さふずる〔是ヨリ跡、詞難波同断。三段ノ舞有り。但シ一段略ス。難波の如し。跡謡、和布刈同事。〕

下ケ札 岩船

誠に目出度御代なれハこそ稀人の此所へ御下向なされたに此度見物仕らずハ見る事ハおりにやるまい併どこ元にぞされハこそ是におりやるよあそこへ某も行ふかいやく卒尔二行てハいか、な是にて一さしかなて、罷帰ふ〔謡ハ和布刈。〕

三十一 雨月

〔乱序出端同事〕

「か様に罷出たる者ハ。摂州津守の浦。住吉大明神に仕へ申末社の神にて候。去程に珍らしからぬ御事なれど。先我朝ハ天地開闢より神国なれば。靈神数多おわしますとハ云乍。中にも此住吉大明神と申奉るは。昔神功皇后当社諸共に。異国の戒を平け給ひ。鬼界高麗契丹国迄も。悉く日本に靡順ひ。今に国土豊に御座す事も。偏に当社の御神徳成るに依。則四所明神と顕れ給ひ。我朝安全の守護神にて。就中哥道を専に守り給ふ故。和哥の道は古へ今に至る迄。猶弥増に榮行とハ云へど。三十一字の言の葉を連る程の人は。別して住吉玉津島に歩を運び給ふ。夫二付仁皇七拾四代の帝鳥羽の院の北面の侍。佐藤兵衛則清と云ツし人。浮世を厭ん為に元結切り。名を西行といへる哥人。年月当社へ信心深きにより参詣申さるれば。明神の御納受斜ならずして。釣殿の辺りの御神木の松の下に柴の庵を結び老人夫婦と現し給ふを。西行ハ立寄一夜の宿を乞われバ。内よりもお宿ハ安問の御事去ながら。爰に兩人の者の諍の有りに。此庵りの家根成就致さぬ其子細は。祖母は月を見うする程に茸じと云。又祖父は雨の音を聞く為にふこうと申ス。此論に付歌の下の句を思ひ出したり。則其歌は。賤か軒端を茸ぞ煩ふと有る。此上の句を旅人の御継有に於てハ。お宿は惜、中間敷き由仰せらるれば。其時修行者心に思るゝ様。是は雨月の二ツを争ふ心なりと思ひ折しも頃は秋の半の事なれば。月は洩れ雨は留れと兎に角にと。ケ様に申さるゝを明神ハ聞し召。荒面白の深き言の葉や。左様に月を



思ひ雨を厭ぬ人ならバ。御留りあれとて内へ請じ入レ。賤の嘗む業なれハ登ト夜もすから月を詠め。衣うつ体をまなび給ひ。早夜も深更になり鳥の声納れバ。御ン休ミあれ我も共に真眠と。云捨て其俣御帰り被成る、扱彼旅人への御馳走には。舞楽をなして慰め給んとの御事により。取物も取敢ず罷出た。急て相触申そふする。(ワキ正面ヲ向) やあく、皆々承り候へ。当社住吉大明神ハ。今度ハ宜祢が頭に移在て。旅人を慰給わんとの御事なれバ。構て其分心得候へく(地謡座ノ方ヨリ見廻シ、ワキ正面ニテ留ル)。

## 三十二 金札

〔雷序出端同事。〕

「か様に候者ハ。山城の国愛宕の郡。伏見の里に住者にて候。去程に此伏見のさとに於て。大宮作有べきとの御事により。勅使唯今御下向成さる、所に。何国とも知らず化したる宜祢一人。御前近く進ミけるを。如何成者ぞと御尋あれバ。我ハ伊勢の国阿子根の浦の者成るが。此所に大宮作り有べき事。近頃目出度御瑞相なり。此事成就致に於て。君の御事ハ申に不及。天下万民息才延命にて。弥御繁昌有べきと申程に。扱木取りの事を御相談あれバ。車の為ならバ椎の木か左なくば桐の木か。針の木か榊は神の宿り木扱とて。種々様々に宣ふ刻ミ。空より金の御札降り下ル。表には目出度文字すわり。裏ミは大宮作りの指図の御座候を。則御覽成るれバ。伏見に御ン住有んとの御ン誓なり。偕伏見とハ何と心得候ぞとあれバ。勅使宣ふ様ハ。いや御社の事よと仰らる、伏見とハ日本の総名也。

伊弉諾伊弉冉の尊。天の岩倉の苔庭にて。伏て見出し給ひし国なれバ。此秋津島の名なりとて。其俣金の御札を追求つて。虚空に失給ひて候。是を如何成御方ぞと存ずれハ。伊勢の国阿児根の浦に於て。天津太玉の神にて御座すが。我を崇と思召サバ。大宮作と押並べて御札の社を建玉へ。其儀に於ては御影向被成。天下安全に御守り有べきとの御神託なり。皆々其分心得候へく

## 三十三 淡路

〔初、放生川同様呼出し有り。詞等皆同事。〕

「去程に当社二の宮と申奉ルハ。則伊弉諾伊弉冉の尊。二神此嶋に天降宮居し給ひ。今に至る迄斯の如く靈験新成御神にて在す。就夫此国の目出度子細は。伊弉諾伊弉冉の陽神陰神の二柱。天の浮橋の上にして。天のぬ鉢を差下し。大海を搔探り給ひて引上玉ふ其鉢滴り。氷誅島と成る。今の磯敷慮嶋是レ也。次に一ツの国を産給し所に。此国余りに少キ故に淡路の国と名付く。左有るに依御国の始とハ。則此淡路の国なる由申習す。其後陰陽和合の道相伝り。今の世迄国土豊に治り。忝も淡路の国一チの宮とハ申せど。二柱の御神なれバ。社頭は二社の大明神にて御座候。又あれ成ルハ当社の御供田にて在す。毎年の事とハ申せど。田水穩に候へ共。政と号して水口に五重の御幣を建。神主御神拜を相勸。夫より苗代をならし一粒万倍の種を下し。万民とりくくに祝ひ申ス御事に候。当社に於て目出度子細数多有り実候へども。神秘なれバ白地にハ申されず。先我等の存たるハ斯のことくにて御座候「言

語道断奇特成事仰らる、物哉。雲の上人此所への御下向を。一入御納受被成。二ノ宮権に人間と見へ給ひ。御詞を替されたと存る間。神前に於て信心私なく御祈念被成。其後都へ御登あれかしと存る尤に候

三十四 松尾

〔乱序出端同事。〕

「か様に候者ハ。忝も王城の鎮守。松の尾の大明神に仕へ申末社の神にて候。去程に珍らしからぬ御事なれと。先我朝ハ天地開闢より神国なれば。○靈神数多御座とハいへど。中にも当社と申奉ルハ。昔神代の御時丹塗の矢に化して。石川の瀬見の小川に流れ来り。加茂建角の尊の御娘の玉奇姫の水桶にやどり。上鴨の明神出生ありて其後。別雷の神と成つて天上有るが。猶も王城近宮居をなひて。君を守護し国家を守んが為に。此松の尾の大明神と威光を顕し。殊に本地は大通智勝仏成るが。和光同塵の御結縁に。か様に当社と現し給ふと承る。現世安穩後生善所の其為に。知るも知らぬも押なめで。老若男女共に袖を連ね踵を次いで。歩を運ぶ衆生数限なければ。神前の一入賑ハしう在す御事。△又と並たる神も御座なく候。先是は当社の目出度キ子細。又承れば天の上人此所へ御参詣の由申聞。先あれへ参らふと存する〔是ヨリ跡同断ニテ略之。〕

三十五 同語

〔初セリフ呼出シ有リ。志賀同断。〕

「去程に珍らしからぬ御事なれど。先我朝は天地開闢より神国なれば〔○此印ノ間右同様△〕又と並たる神と御座なく候。当社の目出度キ子細数多有とハ云へど。先我等の存たるハ如此にて御座候〔言語道断奇特なる事御誕成さる、物哉。左様に何国共なく老人の来るべき者。此隣ニテハ不覚候か。小賢キ申事なれど拙者の推量にハ。雲の上人此所への御参詣を御納受被成。当社明神権に老人と現し給ひ。御詞を替されたるかと存る間。暫く是に御逗留あり。重てハ誠の神姿を御覽じ。其後都へ御帰りあれかしと存する。〕有難とふ

三十六 逆鋒

〔初呼出シ、セリフ有リ。志賀同事。〕

「先当社と申奉るハ。瀧祭の御神にて御座候。其子細ハ。爰に天神七代に當つて出世し給ふを。伊弉諾伊弉冉の尊と号す。時に国常立の尊託して宜ひけるハ。豊芦原に一千五百種の国あり。汝よく知べしとて。天の御鉾を授け給ふ。夫婦の御神ハ天祖の御教の如く改めんと。天の浮橋に二神イ給ひて。彼御鉾を以て下界を捜給へば。淡路嶋鉾の先に当りしを。あわ国かとして鉾を引上げ給ふに。其滴りこりかたまつて一ツの島となる。されハ其時御鉾を青海原に差おろし給ふ故に。天の逆鋒とハ申実候。其後一ツの芦原生ひ出し故。豊芦原中津国とハ申ス。然る所にこの伊弉諾伊弉冉の尊の御本地は。大日覚王如来にて在が。我朝を顕さんか為に。辱も伊弉諾夫婦の御神と。和光の姿を権に現じ玉へバ。か程の宝の御鉾を当山

に納御座すにより。此お山を宝山とハ申習す。其銚の守護神滝祭の御神と崇奉も。則当社の御事成る由語伝候。故に此山の紅葉ハ常のと替りて。銚の刃先の刃のこたく八葉有る故に。一枝一葉も折る事もなくして。唯自らか様に渴仰致し。別して目出度御山にて御座候。当山におひて謂の多くありとハいへど。神秘なれば白地にハ申されず。先我等の聞及たるハ斯のこたくにて御座候。「言語道断奇特成事御説被成る、物哉。稀人此所へ御參詣成されたるを一入御納受有り。当社明神権に宮人と現じ玉ひ。当山の謂委敷御、教成されたるかと存る間。暫是に御祈念成され。其後都へ御登りあれかしと存る」「有難ふ

## 三十七 御裳濯川

〔乱序出端同事。〕

「か様に候者は忝も日本の守護神。皇大神に仕へ申末社の神にて御座候。去程に御裳濯川の由来といつハ。人王十一代の帝垂仁天皇の御宇に。天照大神の御鎮座有べしとて。皇女倭姫の尊御神体を戴き。大和の国より近江の国へ御出あり。夫より美濃尾張を尋廻りて。此伊勢の国二見の浦より。河路に付きて御上り有るに。其折節沖玉の神ハ田作の翁と現じ。倭姫に見へ委しく語つて曰ク。我此山に住事三十八万歳を経たり。誠に止事なき神の靈地なれば。此所に御座を御トあれと申されたるに。殊に天照太神の御託宣在して。神代の昔より此伊勢の国狭長田の。五十鈴の川上に宮柱大敷立て。御座被レ成。君を守護し国家を守給ふ。然れば此沖玉の神ハ。背高

く背中の長サ七尋ありて。面の色ハ丹塗の如にて鼻が七寸あり。目ハ丸く光り酸漿の様に赤く御座ス。併忝も是は天照太神の化権成る由申習ス。又其折節倭姫ハ老翁の教のこたくに。五十鈴の川を渡り尋入給へたるに依。其時川を越玉ひたる所を今に神が瀬と云。御上り有たる山路を神路山と申ス。されバ夫に付神路山に降る雨の音ハ神秘にて。田の長の粃を蒔如く成るに。諸歌に千誓破神路の山の村雨は。種をまく成る音ぞ聞ゆると。か様に説給ひたると申ス。又此川上に五十鈴の有故に五十鈴川と申を。古へ倭姫の裳を濯給ふに依て。夫より御裳濯川とハ申習す。忝も此伊勢天照皇太神宮ハ古今に。我朝の宗廟と仰れさせ給ひて。四海を擁護成さる。目出度御神にて御座候。又当公に仕へ御申有ル臣下。唯今是へ御參詣の由申問。先あれへ参り見申そふずる〔跡、白髭同断。〕

## 三十八 伏見

〔初呼出セリフ有。志賀同事。〕

「去程に此伏見の御社と申は。忝も昔伊弉諾伊弉冉の尊。天の岩倉の苔蔭の上にして。伏て見出し給ひし国なれば。日本の惣名を伏見とやらん申由承る。夫に付人皇五十代桓武天皇の御宇に。当国伏見の里に大宮作成せれんと思召。則此所へ御幸成され。大宮作の神地を定め給ふ処に。榊を持たる宜祢か先に進み出たるを御覧じ。如何成ル者ぞとお尋あれバ。我ハ伊勢の国阿児根の浦に住者成るが。王法を貴ミ参りたる由申。天津空より降下る金の札を捧しに。表にハ君の御し為目出度文字すわり。裏には大宮作りの差図の有由

申シ。夫より天子弥此平の京に皇居定<sup>クワイラ</sup>と思召刻。則何国共なく老人来り一首の哥に。いざ爰に我代は経なん菅原や。伏見の里のあれまくもおしと。斯詠せしより伏見の翁と成されしが。其後誠の伏見の翁顕れけるにより。重て宮作改<sup>ミヤサカ</sup>在す由申<sup>ツツ</sup>伝る。又白菊の総名を翁草と申子細ハ。彼翁が住<sup>スミ</sup>し此伏見の国に出生したる故に。自<sup>ヨリ</sup>から白菊の総名を翁草とは申習す。是に付数多子細の有とハいへど。先我等の存たるハ斯のことくにて御座候。「言語道断奇特成事御説被成る、物哉。旁の此所への御参詣を御納受成され当社<sup>ウチ</sup>の御<sup>ミコト</sup>神老人と現れ給ひ。御言葉を替されたと存る間。暫く是に御逗留被成。神前に於て信心私なく。御祈誓<sup>ゴキセ</sup>あり。重て奇特を御覽じ。其後都へ御<sup>ミコト</sup>登りあれかしと存する。「有難とふ。

### 三十九 鵜祭

〔雷序出端同事。〕  
か様に候者ハ。能州氣多<sup>ケタ</sup>の明神に仕へ申末社の神にて候。去程に当社<sup>ウチ</sup>の御神事を御覽有つて。奏聞あれとの宣旨により。勅使唯今此所へ御下向ある。総じて我朝は小国なれど神国にて。国々在々所々迄も。靈神数多地を卜て御座すとハ云へど。中にも当社<sup>ウチ</sup>一宮と申奉るハ。天下に隱なき靈験<sup>レイケン</sup>新成御<sup>ミコト</sup>神にて。然れば今月<sup>コノツキ</sup>〔ツメル。〕今日<sup>コノヒ</sup>の御神事を。鵜の祭と申子細ハ。此あなた湯の江<sup>ユ</sup>と申所より鵜の鳥をとり。神前に於て神主性に伝へ申せば。彼鳥神前にて羽を垂れ申<sup>ス</sup>。是第一神慮の奇特なり。左有に依て当公の臣下此所へ参詣遊すを。当社夫婦の御悦び被成。我等如きの者迄罷出。一曲仕り慰

申せとの御事なれば。先あれへ参らふ〔是ヨリ跡、白髭詞同断、略之。〕

### 四十 橋

〔雷序出端同事。ツレ仙人二人付出ル。寢覚同様。〕  
か様に候者ハ唐土巴邛<sup>カク</sup>の深山に。年久しく住世捨仙人にて候。我等の是へ出る事余の儀に非ず。〔「ヘン／＼」セリフ寢覚同様。〕  
「先時に至つて此君聖王に在故。麒麟<sup>キリン</sup>も出世し鳳凰<sup>フウオウ</sup>ハ翅を延。龍神ハ早く出世を遂げ。僊人も山より出都に栖居<sup>セイキョ</sup>を構へ。君万歳と仰き奉る折柄。別して爰に目出度事の有るぞ。此巴邛の里に於て。大なる橋登りたり。万民是を見るより早く喜悅淺からず。如何なればケ様の珍物の出来致事。聞及し仙橋にも異らずと。色々不思議をなす所に。此義を漢の文帝聞召。急き見て参れとの宣旨あれば。則勅使此所へ御<sup>ミコト</sup>下向成され觀覽有刻。何国共なく老人の見へたるに詞を替し。橋の様子を尋給へば。其時彼翁答<sup>コタ</sup>テ曰。我当所<sup>マコト</sup>覺共左様事ハ存ぜず候。併稀人ハ先此所に暫く御逗留候へ。橋のありかを尋出し。又当所の目出度子細を語り申べし。夫蓬萊山の仙朧に花咲実成橋は。一葉千歳の齡を保ち。十葉ハ則一萬歳を延ると申上<sup>ケ</sup>。費長坊の壺中に入たる謂杯を念頃に語り。是成橋も君仙橋<sup>ミコト</sup>にてもや有らんと疑ひ。其後夕霧に紛れ園生の方に行と見て失ぬ。誠に是と申も国土豊に治る御代と云。君の恵深き験なれば。我等如きも此国の深山に住と云乍。か様の例<sup>タマシ</sup>なひ瑞相は余所<sup>ソノトコロ</sup>ならず目出度<sup>イデ</sup>事<sup>コト</sup>でハ無<sup>ク</sup>か。ツレ「是はわこりよの云ことく例なひ事じや

ヲモ「殊に稀人のお下向なれば。先あれへ行お目に掛るまいかツレ」「一段とよからふ ヲモ「いざこちへおりやれ(ト云々、ツレト入道ヲモモワキ正面ヲ行、ワキヲ見)されバこそ是におりやるハ。流石名君の臣下成ぞ。先唯人とハ見へぬよ ツレ「実に豊かな事じや ヲモ「更ハ御覽成さるゝ様に。謡舞ふて帰ふ ツレ二人「一段と能ふおりやらふ ヲモ「わこりよ達も謡しませ ツレ二人「心得た【謡】「荒々目出度や／＼な。治る御代の始とて。仙人共は此所に顕れ出て。勅使を慰め舞遊び。千歳万歳の寿命を君に授け奉り。是迄なりとて仙人ともハ。／＼僊境さしてぞ。帰りける」

## 四十一 浦島

〔雷序出端同断。〕

「か様に候者は。此丹後の国浦嶋の明神に仕へ申。末社の神にて御座候。去程に当社の御神と申ハ。昔当国の住人に浦嶋太郎と申人の有しが。毎日あの島崎にて釣を垂れ渡世を送り給ふが。或時大キ成る龜を釣上げ。我屋に持て帰り思わるゝ様は。龜ハ万年の齡を保つと聞程に。我も寿命をあやかる様にと。色々様々宣命を含め。又本の所へ放チ給へば。何国共なく女人一人人来り太郎を伴ひ。我が先に立連て行程に竜宮に至り。様々の饗応にて。日夜の遊覧心言バにも及ず。一七日緩々と逗留有り帰らんとし給ふ折節。彼女人玉手箱を与へし時。構へて此箱の蓋をあけ給ふなど堅く契約申さるゝ。扱浦嶋当所に帰り見給へば。人の様家居ノの体。殊外替りたると思ひ。隣りに有つる翁にとへば。其比は最早七百年以前の事と申ス。扱ハ

龍宮の七日と云ハ我朝の七百年ぞと思ひ。昔の浦嶋太郎よと名乗玉へバ。其時子孫の者共寄合もてなし申スに依て。七世の孫に逢ふとハ此事に候。其後彼玉手箱の内に。如何成事の有やらんと明て見れば。七百年の皺をたてたるに巻込入置たるにより。俄に白髪たる老人と成に依て。浦嶋の玉手箱あけて悔敷キとハ此事に候。左有に依て当社にてハ扉ヒラもあけず。神楽も庭火ニヒも宵迄にて。明くるを忌御事に候。先是は当社の物語。扱龜山の院に仕へ御申有臣下。唯今はへ御下向有に付。取物も取敢ず罷出た。先あれへ参らふ(是ヨリ跡、白髭同様。但一通りの和哥、目出度かりける時とかや謡ふ。替ノ和哥如此。)浦嶋の齡を誰かうらやまん【所作、白髭同様。三段舞跡。】(謡太鼓打上)荒々目出度や／＼な(ヒラキタル扇ニテ、左ヨリ右ヘサシ廻シ)掛る目出度折からなれば(左ノ人指ユビニテ、我鼻ヲサシ)我等が様成る末社の神も顕出テて(指サシテ)ヒラキタル扇ニテ、始サス心正面へハ齡を民に授つ、(目付柱ヘサシ行)是迄なりとて末社のの神ハ／＼(トサシ戻リ、シテ柱ノ先ヘ行キ、ユウケンニテ留ル。白髭同様)本のやしるに帰りけり

## 四十二 代主

〔初呼出シセリフ有。放生川同事。〕

「去程に天地開ケ初りしより此方。此豊秋津洲に靈神国々に地をしめ給ふに由り。吹風枝を鳴らさず民鎖をさず。国土安全に納る御代なれば。諸人喜ヨシの笑を含ミ。千代万ン歳と仰奉り。国々在々所々に於て民百姓に至る迄。老若ともに袖を連ね踵を次で。歩を運ぶ衆生数限り御座なく候。夫に付此葛城の加茂の宮居と申ハ。則都

賀茂の大明神と。同一体にて御座有由承る。惣じて神ハ正直の首に宿り玉ふ故。和光同塵は結縁の始。八相成道は利物の終りを見せ給ふにより。御朝新成ル御事申も中々愚にて候。誠に神と申も仏と有も。皆是水波の隔とあれハ。本地垂迹を顕し。三世了達の智慧を以て。現当二世を明に照し給ふ。然るに此御山ハ胎金両部の其一方を片取り。金剛山と申て三国無双の御事なれば。御代の宝の山とハ申ス実候。併葛城の加茂と申事。神代より伝来甚深成る御事に付。謂の数多有とハ申せど。我等式の存る儀にてハ御座なく候へども。御意に任せ聞及たる通は先申上候が。扨何と思召寄て。お尋有たるぞ不審に御座候。「言語道断奇特成事仰らる、物哉。左様に老人と見へ給ひたるハ。旁の都より遙々御參詣を御納受成され。当社事代主の御神にて御座有ふずると存る間。弥神所に於て信心私なく御祈念被成。重て奇特を御覽あれかしと存る」尤に候

#### 四十三 鼓瀧

〔初呼出シ、セリフ有り。志賀同事。〕  
 「去程に天地已別してより以来。神代を過ぎ人代に及んで。此豊秋津洲の万民四季折々の時に至り。思ひくの翫をなし。其一年を越送り。夏たけ秋すぎ冬ごもりにハ。春を待得友ごち打連。爰や彼と山々の花を愛し詠尽せず。目も夕陽に傾くは。又と頼んで帰さ  
 にハ名残を惜む事限御座なく候。夫に付此桜州に於て。名所旧跡数多有とハ申せど。去乍大方諸人の申習すハ。先須磨明石生田毘野の勝尾金龍副駒松或ハ若木の桜。其外箕面布曳の滝とハ申せど。中に

も当初ハ鼓山と申て。御覽せらる、如く谷峯迄も。巖窟魏二迄聳。誠に尋常ならぬ景色にて候。又是成を鼓の滝と申事ハ。分きて謂レ御座なく候へ共。鼓山よりの流水なるに依て即鼓の瀧とハ申ス。又一ツ説にハ岩の窟より落来水音鼓の音に異らねば。誰表するとハなけれど自ら鼓の瀧とハ申実候。此瀧に付忠敷子細の有べく候へども。我等こときの者なれば委敷事ハ存も致さず。先我等の聞及たる通り申上候が。扨唯今ハ何と思召寄てお尋成されたるぞ不審に御座候。「言語道断奇特成事御誕被成る、物哉。雲の上人此所への御下向を御納受成され。瀧祭の御神山賊と現し。御言葉を替されたると存る間。暫く是に御逗留被成。重て奇特を御覽あれかしと存る

#### 四十四 富士山

〔来序出端同事。〕  
 「か様に候者ハ。富士浅間に仕へ申末社の神にて候。去程に此名山の由来といつば。人皇七代孝靈天皇の御宇に。七日七夜世間殊外震動し。黒雲引覆上下万民に至迄。昼夜不思議の思ひをなす所に。良有ッて空晴天に打晴れ。諸人喜の笑ミを含たる頃。凡孝靈四十余年戊申。同日同刻に当山湧出し。其後天より大盤石降り。弥当山とハ罷成つた。夫ニ付昔唐土に方士と申者我朝に渡り。不老不死の薬を求んとて来。今又聖明王に仕へ申者此土に渡り。薬を求んと此富士山へ尋入所に。大菩薩出合給ひ。則薬を教御し申有る。惣して此薬を服する輩ハ。諸病を去つて安穩に成事明也。殊に赫夜姫は顕れ出不老不死の薬を。唐土の勅使に与給ふべきとの御事なり。当山

の御本地は阿弥陀如来にて在す。又赫夜姫は浅間大菩薩と渴仰致し。怠慢なく祈りを掛る輩ハ。諸願成就疑有間敷との御事にて候。扱又唐土の勅使御下向の由申間。先あれへ参り余所なから見申そふずる。(ト云々、右ヨリ左へ廻リ、シテ柱ノ先へ行) 誠に天下泰平に治る御代なればこそ。大国より波濤を凌ぎ渡らるゝ事。さりとてハ大慶千万目出度事じや併どこ元にてぞ。(ト云々見付ケ) 去れハこそ是におりやるよ〔是ヨリ跡、白髭同断。〕

## 四十五 御裳濯語間

〔初呼出シ、セリフ。志賀同様語、初ノ通り同事、但合印所ヨリ。語出シ、又合印迄同様。〕

●▲先我等の聞及たるハ斯のことくにて御座候 「言語道断奇特成事御説被成るゝ物哉。雲の上人此所への御下向を御納受成され。冲玉の神権に田作の翁と現じ委敷御雑談被成たると存ずる間。重てハ誠の神姿を御覧じ。其後御上洛あれかしと存る 有難ふ

## 四十六 同 大藏大夫流儀

言語道断奇特成事御説被成るゝ物哉。誰有て此所へ左様の老人と若き人の来り。当所の子細念頃に語可申者爰元にてハ覚ず候か。我等の推量には。冲玉の神権に人間と見へ給ひ。御言葉替されたと存る間。弥此所にて神心私なく御祈念有りて誠の神姿を御覧あれかしと存る 有難ふ

## 四十七 佐保山

〔初呼出シ、セリフ有。放生川同事。〕

「先此南都に於名所数多有とハ申せど。中にも此所を棹山と申子細は。昔より泰平の御代にハ当山に御衣を晒され候。此白衣ハ裁目も縫目もなくして。異香四方に薫じ銀色に輝き誠に妙成る御衣にて御座候。此山に掛てさらされしより。則棹山とハ申習す。夫に付当山の奥に仙境の有しが。夫より仙人の出で晒給ふ共云。又国土豊に治り。万民悦をなす折節ハ。此山の御神佐保姫の御、出有りて。今の布を御晒し成さるゝと申が誠に尋常ならぬ衣キヌなれば。若天乙女の羽衣にても有ふずるとの御事に候。去バ有ル哥カに。裁縫タヌハぬ衣着し人もなき物を。何山姫のぬのさらすらんと。詠し給ひたると承る。惣じて佐保姫の御威光ハ。千秋万徳の春を得て。草木森羅万像までも緑り満々枝葉榮へて。万物悉く成長仕候程に。取分キ佐保姫の御神徳ハ猶弥増に有難との御事に候。去乍キ当所の子細杯をバ俊家トシユキの能く御存成されうずるに。拙者にお尋有るは何とやらん不審に存候 言語道断奇特成事御申有物かな。旁の常に神慮を渴仰被成。殊に是まで遙々御参詣を。神ハ一入御納受在す故。此山の御神狹穂サホ穂ホ姫ヒメ権ケンに人間と現れ。布を御、晒し成されたるかと推量仕る。余りに新た成御事なれば。今宵ハ是に御逗留有り。信心私なく御祈誓あらば。佐保姫の誠の御姿を御覧じ。其後御上洛あれかしと存る 尤に候

## 四十八 難波

〔此語間ハ、宝曆年中從田安右衛門督殿被仰付相始ル。〕

此処の者如何様成御事にて候ぞ心得申候。此難波の里の者お尋ハ如何様成御用にて御座候ぞ〔セリフ志賀同様。〕惣して梅の名所国々に有とハイへども。此難波の梅を殊に目出度例しに申子細は。昔応神天皇の皇子に大さゝきの皇子宇治の皇子とておわしましけるが。御互に帝位を御譲有りて。三ノ年が間御位定らざりしに。百済国より来りし王仁と云相人。大さゝきの皇子御位に即せ給ハ。天下太平なるべしと申せし間。大さゝきの皇子御位につかせられ候。かくて高き屋に登らせ給ひて。国の有様はるくゝと観覧有りけるに。民戸に烟の乏しかりければ。其後又高き屋にて観覧有に。万民の家々に貢物を停めさせ給ひて候。其後又高き屋にて観覧有に。万民の家々に煙のにぎはしく立ければ。高屋に上りて見れば煙立。民のかまどハにぎわひにけりと説せられたるげ候。かの三年セカ間貢を御ゆるし有ける故にや。召さるるに万民我もくゝと貢物をさゝげて宝の山をなし。目出度御代にて御座有けると申候。扱此梅の花ハ。其大さゝきの皇子の御位につかせ給ふ折節。咲出たりけるを王仁か歌に。難波津に咲やこの花冬ごもり。今ハ春へと咲や此花とよみて。かゝる目出度御門の御事をそへ奉りたれば。此梅を天下にめて度ためしに申伝候。先我等の聞及ひたるハ如此にて御座候。言語道断奇特成事御説被成る、物哉。雲の上人此所へ御下向なされ。此難波の梅を尋給ふにより。古の王仁は花守と現じ。御物語有たると推量致す余りに不思議の御事なれハ。今宵ハ木影に御逗留有り。重て奇特を御覧あれかしと存る。有難ふ。

## 四十九 右近

〔宝生流間也。宝曆中二改、雷序出端同事。〕  
 か様に候者ハ。北野の桜葉の明神に仕へ申。神職の者にて御座候。我等の是へ出る事余の儀にあらず。唯今承れバ。鹿嶋の神主筑波の何某と申御方。右近の馬場の花の様子を聞召。此所へ御参詣のよし申間。先あれへ参り御礼を申。又如何成御方ぞ様子を見申そふずる〔直ニ脇ノ前へ行、下ニ居テ。〕是ハ桜葉の明神に仕へ申神職の者成るが。希人の御参詣のよし承り。取物も取敢ず出て御座る。爰元にて御用あらバ我等に仰付られふずる〔ワキ語、所望セリフアリテ。〕是は思ひも寄らぬ事お尋有物かな。去乍珍敷御所望にて候間物語申そふずる【語】先我朝ハ天地開闢より。霊神国々在々に跡を垂給ひ。威光まぢく成とハ申せども。当社桜葉の明神と申ハ。忝も日向の国にハ桜木の御神トモ申。伊勢にてハ桜の宮と崇奉る。何れも一体分シ神の御事にて。就中王城の鎮守なれバ。毎日毎夜老若男女共に。袖を連ね踵を次で。歩を運ぶ衆生数限なれば。又と並たる神も御座なく候。去れバ当社に於て。皐月上旬に執行。右近左近の真手つがへを日折の日と申子細ハ近衛の社人の着たる歩行の後を引折ル故に。日折の神事と申実候さ様の御事を何れも見物に御出候。昔人皇五十四代仁明天皇の御宇に。在原の業平も是を御見物被成。女車の立たるを御覧じて。車の内へ御哥を参らせられ候其歌に。見すもあらず見もせぬ人の恋しきに。あやなくけふや詠暮らさんとか様に遊し玉へば御返歌に。知る知らぬ何かあやなくわきていわん。思ひのミこそしるへなりけりと。詠じ給ひたると申習



す。先我等の存たるハ斯のことくにて御座候。「言語道断奇特成事  
仰らる、物哉。其車に召されたる女性は。疑ふ所もなき桜葉の明神  
にて御座有ふずると推量致す。夫を如何にと申に。遠国より遙々御  
上洛成されたる事を嬉しく思ひ御詞を御替し被成たると存る間弥信  
心私なく御祈念有り。再誠の神姿を御拝ミあれかしと存ずる。

## 【翻刻】

## 【二冊目】

一	田村	二十九	井筒
二	八嶋	二十四	空蟬
三	忠度	二十五	野々宮
四	兼平	二十六	檜垣
五	通盛	二十七	伯母捨
六	敦盛	二十八	仏原
七	頼政	二十九	藤
八	知章	三十	誓願寺
九	兼	三十一	六浦
十	実盛	三十二	陀羅尼落葉
十一	朝長	三十三	胡蝶
十二	巴	三十四	朝顔
十三	碓被	三十五	松風
十四	経政	三十六	同 短キ方
十五	俊成忠度	三十七	楊貴妃
十六	軒端梅	三十八	祇王
十七	芭蕉	三十九	二人祇王
十八	菜女		

## 一 田村

〔間初同ニテ出、太鼓座ニ居ス。中人過キテ後見引、シテ柱ノ先ニ立テ名乗。語間ノ分、先出所等右ノ通りト心得ベシ。三番目雜間ニテモ略シテ印サズ。出入ノ節、シテ柱ノキワニテ礼アリテ座ニ付ベシ。〕

〔是は清水の門前に住者にて候。某此中当寺へ日参いたすが。今日ハ遅リ申間。急ぎ参詣仕ふする。此間ハ一段と世間も長閑にて。地主の花も今を盛なれば。立越心を慰はよと存する、(ト云乍正面へ出、ワキヲ見付。〕いや是成お僧は何国より御參詣成されたるぞ〔中く此隣の者にて候。〕心得申候(ト云真中へ行、ワキノ前へ行座ス。〕「扱お尋有度キとハ如何様成御事にて候ぞ。〔是ハ思ひも寄らぬことお尋有物哉。我等も此隣にハ住者なれとも。さ様の御事聡とハ存も致さず候。去乍初たるお僧の。思ひ寄てお尋有を。一円に存ぬと申も余りなれば、片端聞及たる通り物語申そふする(ト云正面へ真向ニムキ語ル。右向様語間ノ分、皆如是故略之印サズ。〕

【語】去程に当寺清水寺と申ハ。大同二年に坂の上の田村丸の御願に。御草創有たる由承る。其子細ハ。昔大和の国小島寺と云所に。玄信といへる僧の在すが。一段尊く慈悲心深き人なる故。正真の観世音の拜度キと思わる、所に。或時不思議の夢の告ありて。木津川の河上に金色の光り差を。御出ありて。御覽すれば老翁老人。忽然として御入有るを尋給へバ。我名ハ行叡居士と答ましまして。汝沙門ハ暫く此地に住。一人ノ檀那を待ち。大伽藍の建立あれとて。東を指て行かと思へて失せ給ふ。去バ其時の行惠居士と有は観音

の御事。又一人の旦那とハ。田村丸をさして御申有る。夫を如何にといふに。其已後伊勢の鈴鹿山に鬼神籠り。往來の者を取り国土の悩と成るに依。頓て此由奏聞申せば。忝も帝ハ聞し召れて。田村丸に退治あれとの勅使立を。此事安からず思召。其時観音への御立願に。今度鈴鹿の鬼神を順へたるに於てハ。当寺に伽藍の建立なすべしと有に。新成<sup>ル</sup>御告杯のましまして。軍兵を催し掛り給ふに。神力仏力にて鈴鹿の鬼神を順へ給ひ。此寺の大伽藍を大同二年に建て終り。則寺号を巴清水寺と名付られ。我朝に隱なき靈地にて在す。又あれに見へたるハ田村堂とて。田邑麻呂の御影を居へ置れたる御堂にて候。是ニ付数多子細の有とハ云へど。先我等の存たるは如此にて候(ト云ワキノ方ヲ向。)[是ハ奇特成事仰らる、物哉。左様に何国とも知らず童子の来り。当寺の御來曆又田村丸のいはれなとを。委しく語申べき者。爰元にてハ覺ず候が。偕ハお僧の御心中貴により。古の田村丸かりに花守と現じ。御言葉を替されたと存る間。今宵ハ木影に御逗留有り。夜と共に花を御覽じ御経をも御誦誦被成。重て奇特を見給ひ。其后何国へもお通りあれかしと存ずる「何にても御用の事あらバ承ふずる」「心得申候(ト云太鼓座へ行居ス。シテ出、地取済て引也。尤前後片幕ニテ出ル。前後出てシテ柱ノアタリニテジキ。礼アリテ座ニツク。引込時も礼アリテ引也。)

## 二 八嶋

〔此印ノ所ニテ、ワキ「いや〜忘語申さす候、夫ニ付少尋たき事の候」ト云ハ、「心得申候」ト云座シテ「実々御出家の身ニて偽

ハ仰られまい、扱お尋有度とハ如何様成御事ニて候ぞ」ト云ベシ。〕  
 「是ハ八島の浦に住者にて候。今日た天氣能候間。浜へ出て塩を焼うと存る。あら不思議や塩屋の戸が明たよ。見れば(下ヲミル)人の足跡も有よ。(少し先へ出、ワキヲミテ) いや是成お僧達は。何とて此塩屋へハ押入て御座るぞ」「主ハ某なるに。扱ハ旁ハ妄語仰せらる、か△「実々御出家の身にて偽りハ仰せられまい。夫ハ如何様成者か借申たるぞ」「心得申候(此所同事。)[語]去程に讃岐へ落る平家追討の為に。範頼義経ハ渡辺福嶋に陣の取り。数千艘の船を集メ置れし時分。判官殿と梶原ハ逆櫓の遺恨有つて。義経ハ御、船五艘押出され。阿波の国へ御上り有りお尋あれバ。勝浦と云所と申上るを。義経聞し召軍の門出に。勝浦に着たる事の出たさよと。其儘桜馬の城を攻落し。夫より此所へ押寄せられし程に。平家の軍兵ハ驚騒き。我先にと船に乗沖へ出給ふ。左有に依て平家は船。源氏は陸の戦成るに。或日の合戦に兵船一艘磯へ着。武者一騎上り大音声に名乗様。是は平家の侍悪七兵衛景清と。高らかに呼わる声を聞きより。東国の兵ハ我も〜と討て出る。中にも三保谷の四郎と名乗つて。真先キ掛て馳向ひ。鏑を削り鐔を削り、戦ふ中ニ。四郎の帯刀の鉄かさへたるか。但又悪目刃切しも有たるか。鏑元二三寸置て二ツに折れし程に。討物取に帰る所を景清は美穂谷の甲の鞆を無手と捕へ。後口へゑいやと引とむれば。四郎ハ一命大事と前へ引ク。互にゑいや〜と引勢にて。檀の浦ハ地震のごとくゆらめいたると申ス。去れ共左右方の力が牛。檀成るか。鉢着の板を曳ちきつて。前後へ動ど転れた所て。美穂矢はうつむきにすべつて倒し程に。折し

も比ハ春なれば鼻の先が落花致ス。悪七兵衛は後へ引とて。あをのけに転てぼんのくほに踏貫を致されたと申ス。源平の戦数度に有りとハ申せど。元暦元年三月十八日の此合戦が。一声花に有たと承る。扱唯今ハ何と思召寄てお尋有たるぞ不審に存候。「是ハ奇特成事仰候らる、物哉。義経は高館にて果給ひたとハ申せど。当浦にての合戦を一入に思召。御心を残し給ふにより。義経の御亡心見へ給ひ。念比に御雑談有たと存る間。暫く是に御逗留あり。重て奇特を御覽あれかしと存る。「重てハ某の宿に留申そふずる「心得申候

### 三 忠度

「是ハ津の国須磨の浦に住者にて候。今日ハ物淋敷折柄なれば。若木の桜の隣へ立越。花の盛ならバ詠めて遊び。又浦山の躰をも見て慰ばやと存る。いや是成お僧ハ。何国より御越被成たるぞ〔セリフ前回事。〕【語】「先和哥の道ハ古へ今に至る迄。弥増に榮行とハ申乍。取分後白川の院の御宇に。五条の三位俊成の卿の。千載集を撰給ふ由を聞。載集に入れバ時の面目を設と云。又末の代迄も哥の家に生れ。名を後代に上ん事を安からずと思ひ給ひ。三十一字の言の葉を連る程の人は。住吉玉津嶋に歩を運。明暮此事を而已嘆きおわします。然れば其比平家の公達の内に。我劣じと思ひ給ふ哥人多しといへど。中にも薩摩の守忠度は。文武二道の侍なれば。此集哥に入度思召せども。其時分勅勤の御身なる故。望の叶ぬを無念に思給ひ。南方敷嶋の道に執心深き事成そ。又平家の一門ハ寿永二年

の初秋に。都を落西国さして下り給ふが。忠度ハ其刻、俊成の卿へ御出有り。哥の読たを書付俊成へ渡され。夫より主上へ参らんと急れし程に。桂川の辺りにて追付奉り。安徳天皇の供奉成されたる由承る。去れ共三位殿ハ連の哥を千載集に入し。勅勤の身なれば読人知らずと書れたると申ス。去程に平家は一の谷を城郭に構へ。四国西国の能き兵を。勝て十万斗籠置し。西の木戸口ハ薩摩の守の堅メ給ふを。源氏ハわずか六万余騎にて取掛。山より義経の押入玉ふに。平家の軍兵ハ驚騒。我先へ舟に乗んと落行程に。忠度の心ハ剛に在せど。一人にて防事のならざれば。此辺迄静くと引退給ふを。東国の兵ハ能き大将と目掛。遁さじと追欠奉るを取て返し。爰にて討死召たと承る。されバ名将の果給ひし所なればとて。跡の印に植置れし木なれば。今に若木の桜とハ申習。先我等の存たるハ斯のことくにて候。「是は奇特成事仰らる、物哉。旁の是迄御出有事を。一入懐敷思給ひ。忠度の亡魂顕れ出。御詞を替されたと存間。今宵ハ是に御逗留あり。重て奇特を見給ひ。其後都へ御登あれかしと存る。

### 四 兼平

〔此間武者揃也。常ノ間ニ云時ハ印の間取申候。〕  
「是ハ江州粟津か原に住者にて候。今日ハ浦へ出て船を渡そふと存る。喃くお僧向へ御座らバ舟に召され候へ。「今日ハ某の渡し番にて。余人の越事ハならず候が。旁ハ人の舟に乗りて船遊びを召されたるか「実々御出家の身にて偽ハ仰られまいが。夫ハ如何様成

者が越申たるぞ【語】「去程に木曾義仲ハ都に討て登り。禁中をも思はず悪逆有るを。前の兵衛の佐ハ聞召。急き木曾が狼藉を静めんとて。舍弟範頼義経を大将と号し。六万余騎を相添へて遣され。尾張の国より二手に分つて登ると聞。義仲大キに驚き宇治勢田の橋を引放し。軍兵を分て差遣さる。備東国より攻登る大手の大将軍ハ。蒲の御曹子範頼に相伴ふ人々ハ。武田太郎か、みの次郎。一条の次郎板垣の三郎。稲毛の三郎端見谷の四郎。榛谷の四郎熊谷の次郎。猪股の小平六。を始として。都合其勢三万五千余騎。近江の国野路篠原に陣を取る。又搦手の大将軍ハ。九郎御曹子義経に。同く相伴ふ侍は。保田の三郎大内の太郎。梶原源太佐々木の四郎。▲畠山の庄司次郎糟屋の藤太。洪の谷の右馬之允。平山の武者所を先として。以上二万五千余騎付添。宇治橋の詰に押寄せ給ふ所に。数万騎の中より佐々木の四郎高綱。梶原源太景季を始として。宇治川を我もくくと渡されし故。木曾殿の都を持事叶ずして。兼平と一所に死んと思召か。勢田を指て御下り有所に。勢田をハ稲毛の三郎重成か計にて。田上供御の瀬を越れし程に。勢田を防事もならされバ。今井の四郎ハ主君を寛老なく思われ。都を差して登る折節。義仲に大津の打出の浜にて行合。兼平が巻たる旗を揚げれば。落武者が三百余騎程参り。最期の合戦声花に成され。主君ハ粟津の松原にて果給ひ。今井の四郎ハ敵の中に切つて入り。馬の上より自害致されたと申す。是に付数多子細の有とハ云へど。先我等の存たるハ斯のことくにて候。「是ハ奇特成事仰らる、物哉。左様の老人は疑ふ所もなき。今井の四郎兼平の亡魂にて御座有ふする。夫を如何にと云に。お僧は

木曾の山家より御し出と有レバ。一人懐う思ひ給ひ。兼平の亡魂權に渡守と見へ。舟を越給ひたると推量致す。余りに不思議成御事なれば。暫く是に御逗留あり。木曾殿兼平の御菩提を慇に御弔あれかしと存ずる。

〔跡のセリフ如前。印付候所ハ武者揃也。常云時ハ印より印ノ間脱ナリ。〕

## 五 通盛

「是ハ阿波の鳴戸に住者にて候。爰に貴きお僧の在が。毎日毎夜御經念らず読誦成る、間。急キ参り聴聞申さばやと存る〔ト云テワキノ前へ行、座シテ。〕「唯今参して候。『我等も疾に参可申を。彼方此方隙を得ず延引迷惑仕候〔此間ノセリフ前ノ如シ。〕」去程に平家の一門多しといへど。入道相国の一人在ナバ。何れの公達も我先にと都を落て。讃岐の八嶋に内裏を建られ。安徳天皇を御幸成奉り。猶も東国の勢を防がん為に。次男宗盛を大将と号して。其外一類ハ寿永二年の冬の頃。津の国難波潟に押渡り。一の谷を城郭に構へ。東へ幾田の森を大手の城戸口として。四国西国の能キ軍兵を。勝つて十万斗籠置れしが。其中にも越前の三位通盛と。舍弟能登の守教経兄弟ハ。一の谷鴨越の麓なる。山の手を兩人して堅メ給ふを。源氏の方にハ此由聞し召れて。平家追討の為に。範頼義経を大将と号して。都より六万余騎を二手に分て。一の谷へ押寄給ふ刻。西国の軍兵は心愚成故。東西を専と斗持れしを。九郎判官ハ鉄拐が嶺に上り。騎馬を汰て巖石を落し。一同に鯨と上給へば。平

家の公達ハ驚騒き。何レ茂舟に乗沖へ出給ふ。其時通盛少しハ防給へ共。終にハ叶すして磯間近く退れしが。重手を負敵七騎に取込られ。湊川の下にて討死有し程に。小宰相の局ハ此辺まで御落成されけれど。三位殿の最後の由を聞給ひ。命長らへ再び古郷に歸りても。生キ甲斐有間敷と思召。此鳴戸の沖に身を投空しく成給ふ。通盛小宰相の御事に付。数多子細の有とハいへど。先我等の存たるは如斯にて候。「是ハ奇特成事仰らる、物哉。毎日毎夜此磯辺に於て。御経怠らず誦誦成る、事有難思ひ給ひ。通盛夫婦の御亡魂現出。御詞を替されたるかと存間。尚々御経誦誦あれかしと存る〔跡のセリフ前ノゴトク。〕

## 六 敦盛

「是ハ津の国須磨の浦に住者にて候。今日ハ上野の隣へ立越心を慰はやと存る。いや是成お僧ハ。何国より御越成されたるぞ【語】」  
 「去程に平家ハ寿永の比都を落て。則一の谷を城郭に構へて御入有るを。源氏の方にハ範頼義経を大将として。六万余騎を二手に分て押寄給ふ処に。九郎判官ハ搦手ノ山より攻入。夜明に鯨を咄と上給へば。平家にハ思わぬ方より責入られ。驚きさわぎ。我先にと船に乗沖へ出給ふ。其折節門脇の修理太夫経盛の御子に。無官の大夫敦盛も御落有るが。御秘蔵の笛を忘れて置給ふを。敦盛は取乱し。名管を敵カキへとられたる杯と。死しての後に沙汰の有りてハ。御一門の名折と思召。本陣に取ッて返し笛をとり。又此磯近く御出有る内に。御座船を初て兵船ども皆沖へ出けれバ。波打際に兎やせんかく

やあらんと思召処に。武蔵の国の住人シの党の旗頭に。熊谷の次郎直実と名乗て。御返しあれと申す程に取て返し。馬の上にて無手と組ミ。両馬カマか間に動ど落る所を。熊谷ハ流石の剛の者なれば。敦盛を取ッて下に組伏セ。甲を押退け御首を掻んとせしが。生年十六歳なれば。薄仮粧に齒黒シ付て。容顏美麗成御姿成し間。助け申そふずるとて駒に取ッて乗セ。我も馬にのり西をさして行処に。跡より兎玉党追欠来り。熊谷社心替りあれ。直実共に打取れと声々に申程に。力及ず敦盛を馬より引おろし。終には御首を給りし事。熊谷は骨髓に染シて痛敷存せられ。元結切りて黒谷へ行き。法然上人の御弟子となり。名を蓮性法師とや覽申て諸国を巡らる、と聞く。我等を始メて此所の若イ者共の申事に。哀れ其蓮性法師か爰許へも来れかし。捕へて鼻を弾シ竹篋シを当。種々に鬪て遊ひ度いと申事に候。先敦盛の御最期の様体。大方ヶ様に聞及て候。「左様の御方とも存せずして。只今は疎忽成事を申迷惑仕候。当所の面々申され事に。哀れ其蓮性法師の爰許へ御座れかし。一夜のお宿をも致度キとの念願にて候。偕イ只今ハ何と思寄て。敦盛の事をお尋有たるぞ不審キに存候。「是ハ奇特成事仰らる、物哉。必悪に強き人は善にも強きとハ此事に候。惣して弔ハ僧々に非らず俗々によらずと申せば。暫く是に御逗留あり。敦盛の御菩提を念比に御弔あれかしと存する〔跡ノセリフ前ノ如シ。〕

## 七 頼政

「是ハ宇治の里に住者にて候。今日ハ志す日なれば。平等院へ参ら

ばやと存る。辞是成お僧ハ。何国より御參被成たるぞ。【語】「先宮軍の発りと申ハ。源三位入道頼政の嫡子仲綱の。木の下鹿毛と云名馬を持れしを。頓て宗盛の卿の聞し召れて。折々御所望被成けれど。彼方此方と有りて參らせられぬにより。此事を父の入道ハ聞付給ひ。種々様々に異見在故。力及ず同心致され。其時仲綱は取敢ず。恋しくハ来ても見よかし身に添る。鹿毛をば争で放ちやるべきと。か様に歌を讀て參らせらるれば。又大臣殿よりハ南鎌と云馬を遣さる。されども此已前に馬を惜ミ申されたるを。心中の程を余に悪キと思給ひ。彼馬に仲綱と金焼をあて。何時も人の有折節ハ。其仲綱に鞍置け曳出して責よ抔と宣ふを。頼政父子ハ伝聞。此義を無念に存ぜられ。治承の頃高倉の二の宮へ。由なき御謀叛を進められし事。悪事千里と其隠なれば。宮ハ京都に御叶なくして。其儘三井寺へ入御成されしかば。頓て六波羅よりは是へ攻来る由。此事類に風聞有し故。南都の衆徒を頼んと思召か。宮ハ夜中に此所江御座被成。宇治橋の板を曳放し。頼政の一類は是にあり。其間に宮をハ大和へ退け奉る。然りとハ雖も敵の軍兵ハ遁さじと。我もくくと追来り。橋を隔て是にて戦に及といへど。軍半迄ハ左右方牛角に有つるが。敵の方より川を渡して攻たりし間。仲綱兄弟は郎等。何しも悉く討れし故。頼政ハ此平等院に有しが。流石文武二道の人なれば。其刻辞世を讀置れ。即此芝の上に扇を敷キ自害致されたと申ス。更ハ名將の果給ひし所なれハとて。扇のことに芝を取残し。今に是成を扇の芝とハ申習す。先我等の存たるハ斯の如くにて候。「是ハ奇特成事仰らるゝ物哉。左様に何国共知らず老人の来り。官軍の子細又

扇の芝の謂抔を。委しく語可申者。此辺にてハ覺ず候が。去乍某の推量にハ。古への頼政の亡魂顕出。詞を替されたと存間。暫く是に御逗留あり。彼の跡を御弔あれかしと存る〔跡ノセリフ如前。〕

### 八 知章

「是ハ津の国須磨の浦に住者にて候。今日ハ物淋しき折からなれば。関の隣へ立出心を慰はやと存る。いや是成お僧は。何国より御越被成たるぞ。「去程に平家ハ一の谷を城郭に構へ。四国西国の軍兵を勝て拾萬斗り込め置れしが。中にも大手生田の森をバ。知盛の大將軍にて堅メ給ふを。源氏の方にハ範頼義経を大將として。六万余騎を二手に分けて押寄せ給ふ所に。九郎判官ハ。鉄拐が峯に上り。騎馬を揃へて巖石を落し。敵の城に攻入一同に鯨波を咄と上給へば。平家の軍兵は我もくくとお舟に召れし故。知盛ハ数万騎の兵も討たせつ。逃て御子息知章と。郎等に監物太郎頼方と。主従唯三騎に成て御座舟に乗らんと落給ふ所に。跡より敵ハ追ッ欠来。知盛を討んとするを。御子知章ハ父の討れ給ッんことを悲。駒掛ヶよせて。敵と引ッ組んで落ッ。敵の細頸揺落し。其儘立上らんと成されしを。頓て敵の侍渡合。知章を敢なく討奉し刻。又監物太郎ハ主君の敵を矢場に取り。是にて主従三騎討死有る内に。知章は井の上黒と云名馬に召され。海へ颯と打入れて游ッ。沖成ル船に難なく召れし故。御秘蔵の馬なれば舟に乗せ度思召ッ共。立所なけれハ力及ず礮へ曳ッ向ッ乗放ッ給へバ。馬ハ主に名残を惜ッけるが。お船を慕ひ游行ッども。次第に遠ざかれは空敷陸に打上り。跡を見送り足

搔致し。高いな、きしたる杯と承る。然るに此馬を井上黒と申子細ハ。信濃ノ国井ノ上立なるに依て。則井ノ上黒とハ名付給ふ。先我等の存たるハ如是にて候。「是は奇特成事仰らる、物哉。旁の遙々是迄御下向と申。殊に御心中貴により。知章の御亡魂顯れ給ひ。御詞を替されたと存る間。暫是に御逗留有り。彼御菩提を御弔あれかしと存る〔跡のセリフ前ノごとし。〕」

## 九 簾

「是ハ津の国須磨の浦に住者にて候。今日た生田の八幡へ参ばやと存ずる。いや是成お僧は何国より御越被成たるぞ。【語】「平家は津の国福原の都に居住して。則一の谷を城郭に構へ。東ノ幾田の森を大手の城戸口と定給ふを。範頼義経は二手に分れて押寄せられ。其時大手の侍大将にハ。梶原平三景時にて有つるが。五百余騎にて一同に鱒波を作る。頃ハ衣更着七日の事成しに。是成梅花の盛成を景季ハ是を見て。惣して楳は諸花の先をかくる物なれば。今日先掛をセふずるといふ心にて。此花を一枝折りて腰に差し。父の平蔵兄の源太。次男平次同三郎。五拾騎斗に討なされ。颯と引いて出る所に。其中に景季ハ見へざりし間。梶原取つて返し大音声にて名乗様。是ハ鎌倉の権五郎景政が末葉。梶原平三景時とて。一人当千の兵ぞや。我と思ん人々は是へ出て。景時を討つて見参に入れよと呼ぶを。其折節知盛仰られける様は。梶原ハ東国に聞へたる兵なり。夫を余な洩な打やとて。大勢の中に取込給へ共。数万騎の中を豎様横様。蜘蛛拾文字に欠廻り尋ければ。源太は退ッ胃に成つて戦ひ。

二丈斗り有る岸を後□にあて。敵五人か中に取込られ。郎等二人左右に立つて。面も振らず戦ふを景時ハ是を見て。急き馬より飛んでおり。親子して五人の敵を三人討取。残り二人の武者に手を負ふ。弓取ハかくるも引も折によれとて。父子共一所に成つて引きたるを。梶原が二度の掛とハ是を申ス。其時景季是成梅花を腰にさし。隠れなき名を上たるに依。夫より此木を簾の梅とハ申習す。先我等の存たるハ如斯にて候。「是は奇特成事仰せらる、物哉。扱はお僧の御心中貴くより。殊ニ此花に心を付られたるにより。梶原源太の亡魂顯れ出、言葉を替されたるかと存る。暫く是に御逗留有り。景季の菩提を御弔あれかしと存ずる〔跡のセリフ前の如く。〕」

## 十 実盛

「ワキ出シテ柱ヲ越スト、間片幕ニテ出。時宜アリテ座ニ付ク。ワキ状机ニカ、リ、ツレワキ座スト、間立チテ、シテ柱ノ先キニテ名乗ル。」

「是ハ加賀の国篠原の里に住者にて候。唯今此所へ遊行十六代陀阿弥上人御着あれバ。志の輩ハ皆々御参候へや〔ト云太鼓座ニ居ス。シテ中入有リテ、又シテ柱ノ先ニ立、詞云。〕「去程に当所の面々申され事に。此中上人ハ日中の時分。物を仰らる、を皆々聞くに。座中に人の有かと存れば隣にハ誰も見へざる折柄。問ッ答ッ請つ流イッ語り給ふを。老若ともに奇特に思われ。拙者に不審仕れと有程に。急き参り此由申ばやと存る〔ト云ワキ前ニ座シテ。〕「只今参して候。我も疾に参り申へきを。彼方此方隙を得ず延引迷



惑仕候。又唯今參る事ハ余の儀にあらざ。誠やらん上人様ハ日中の以後。独事を御意成る、由申ス。余りに不思議成る御事なれば。拙者にちと尊意を得よかしと有に付。卒爾なからは迄何公致たるが。何とも思召合せらる、儀は御座なく候か〔セリフ如前。〕「先実盛は北国の住人なるが。初の程は源氏の侍にて。武蔵ノ国永井の庄を御領に給り。夫より永井の斎藤別当実盛とハ申ス。然れ共代に順ふ習にて。治承の比より平家の味方と成り。斎藤五斎藤六とて兄弟の男子を。毎も主君の御前に付置て。別義なく御奉公申されしが。有時東国へ出陣の時分。此度永々の在陣ならバ。隠なき名を上ふずと思ひ給へど。平家の軍兵には如何成天魔も附添ひたるか。未敵も見へぬ其先に。水鳥の立羽音を聞て驚き。跡をも見ずに空敷凱陣せられ。其後此篠原合戦の時。実盛は都鄙に名を得し兵成るに依。大臣殿より錦の直垂を赦され。弓取つての面目是に過じと喜び。如何様今度ハ討死を心掛給ひたるか。武器を声花に軽々と拵へ。都を打立テ当国に下着の刻。義仲は五万余騎にて打て登り。是にて戦に及ツといへど。軍半迄は左右方牛角に有つるが。木曾殿の方にハ勢強くて味方少し馬手に見へしを。掛れや〜と声を計に勇れ共。前方に殿れを取たる武者なれば。下知をも聞す我先にと敗軍するを。斎藤別当ハ独り無念に存せられ。何共して大将と組んと匠。敵きの中に破ッて入り左右へ切廻りしが。光盛りに渡り合打死有たると承る。先我等の存たるハ斯のことくにて候。「是は奇特成事仰せらる、物哉。実盛は此篠原の合戦に討れ給ひし故。亡魂頭れ出言葉を替されたと存する間。篠原の地の辺りへ御出有り。彼

跡を御弔あれかしと存る。「左右バ其由お申そふずる〔ト云立てワキ正面へ行。同キ方ヲ見テ。〕「やア〜篠の原の面〜承り候へトモ。」詞「やあ〜皆〜承り候へ。此中上人ハ夢現ともなき折節。実盛の亡魂頭れ給へば。篠原の池の辺りにおひて。臨時の踊り念仏を以つて。彼菩提を御弔有るへきとの御事なれば。構へて其分心得候へ〜〔ト云見廻し触レテ、太鼓座へ行居ス。中入後、入所如前。〕

#### 十一 朝長

「誰にて渡り候ぞ〔太鼓座ヨリ立、橋掛リ一ノ松ニ立。但ワキ橋掛リヨリ案ヲ乞バ、シテ柱ノ方ニ立。〕」  
 「参候朝長の御旧跡ハ。あれに見へたる藪の内に塔婆の数多候。中にも新敷が朝長の御印にて候間。初たる御方ならバ御出ありて御覧候へ。尤に候。〔ト云テ太鼓座へ行居シ、シテ中入前ニツレ女ニ云付アリテ中入スル。ツレ女間ヲ呼出ス。〕「御前に候。〔ト云乍、女ノ前へ行キ居シテ。〕「心得申候。〔ト云立テ。〕」  
 「是は思ひの外な儀を仰付られた。毎もお客の有折節ハ。我等杯にハお座敷の掃除の事を仰付らるゝに。罷出お宮仕致せと有ハ合点の行ぬ事で御座る。併先あれへ参り様子を見申そふずる。いや是は最前お目に懸りたるお僧にて候よ。〔中〜我等ハ此屋の内の者にて候が。旁の是へ御出被成るゝに付。罷出御宮仕ニ致せと申付られ候間。取物も取取ず参りて候。〔セリフ常如シ。〕」  
 【語】「先保元の年号の後平治の比都大内を開キ東国差て御下り有るが。落口の事なれば三男兵衛の佐殿

を。夜中に路次にて取落し給ひ。無慙やな平家の方へ生捕にせられ。義朝御父子鎌田金丸斗り。去年極月八日に日暮て是へ御出あり。忍びてお宿を召されし所に。義朝御意被成ける様ハ。嫡子惠源太ハ北国へ御越ありて。加賀越前の人數を催し討つて御登りあれ。又次男朝長ハ木曾路に掛り。甲斐信濃を繕ひ仲仙道を登り給へ。我ハ関東に軍兵を残らず引連。猛勢を以て東海道を切つて登り。敵を平け会稽の恥を雪んと仰られ。当国より川船に召され。尾州野間の内海へ御出被成る。然れ共朝長ハ都大崩に重手を負ひ。寒天に摺針伊吹の雪を凌いで御越有るが。深手なれば御身もすくミ行歩も叶わで。早く落行事も成難思召か。夜半過と思しき時分御自害被成候。△先朝長の御最期の容体大方か様に聞及て候か。扱只今ハ何と思召寄て。お尋有たるぞ不審に存じ候。「扱ハ旁ハ朝長の所縁の御方にて候か。左様の御心中社御頼母しう存候。殊に怨敵の中を忍びて是迄御出有るハ。尋常ならぬ御志と存間。今宵ハ是に御逗留有り。」「朝長の御菩提を御弔あれかしと存る。」「是ハ近頃有難き御事にて候。殊に観音懺法にて御弔有へき事。一人に存候間。長にも其通りを申。憚乍拙者も是にて聴聞仕ふする。「中入ニシテツレ呼出し無之時ハ、「唯今承れば長ハ墓所ヨリ旅人ヲ御同道被成たると申間。先あれへ参り見申そふする。いやハ最前お目に懸りたるお僧にて候よ」是より同断。」「又脇へ語所望の時のセリフ左の如く、但し遠キ事故云合タルベシ。」「初前ノ如く。」「中く我等ハ此家の内の者にて候が旁の是へ御出被成る、に付罷出御宮仕致せと申付られ候間取物も取致す伺公致した拙者杯も自分の用所ありて行か又は頼申

人の使に参るか毎年爰彼こをありき申が何程心易い旅じやとあつても旅宿は万不自由成物なれば何にても似合の御用有るに於てハ御心おかれず仰付られい成程の事ハ随分御地走申そふする。「爰ニテワキヨリ語所望スル。セリフ常ノ如ク云テ語有り。尤語如前。」「△先朝長の御最後の様体我等の存たるハ如此にて候又源平両家の御中和に成りて平治の乱と成たる由来を此田舎の者ハ一円に不存候間逆縁なから語つて御聞七候へ【ワキ語】懇に御し物語始て承り別して祝致候左様に深く御包有ハ今ハ平家の国土を守護し給ふにより清盛を憚つて仰せらるゝと存る。△夫を如何にと申にか程の怨敵の中を忍びて御出有るハ余りの常ならぬ深き御志と存る間今宵ハ是に御逗留有り夜と共に観音懺法を以て朝長の御菩提を御弔被成其後何国へもお通りあれかしと存る。△又只今亭主の墓所へ参られたるハ源家の大将源の義朝の次男太夫の臣朝長の御自害被成たるを長者は御痛敷う存ぜられ空しく野辺の塵となし申されたるに誰有つて御跡を弔人も御座無故長ハ七日く墓所へ参り花水を手向け申さるゝが今日は御名日に相当り参申されたるにあれより旁を御同道有りたるは定めて義朝の御一門衆か然らずハ御家老の歴々か又朝長の御所縁の御方か如何様唯人へ御座るまいかと存る殊に御法体の御方なれば我等ハ苦からぬ者にて候間唯包す御名字を御明し被成候へ「楮ハ旁ハ朝長の所縁の御方にて候か左様の御心中社御頼も敷存候殊に怨敵の中を忍びて是迄御出有るハ尋常ならぬ御志と存る間今宵ハ爰に御逗留有り朝長の御菩提を御弔あれかしと存る。」「ト云引也。）」

## 十二 巴

「是ハ江州粟津か原に住者にて候。今日た當所の御神拜なれば。急て参らはやと存る。いや是成お僧は。何国より御参り成されたぞ【語】「先其巴ハ壽永二年癸の酉の夏に至つて。木曾義仲ハ五万余騎を率し。信濃の国を立給ふ。其折節巴醜醜とて。二人の女房を連て登り給ふ。山吹ハ去ル子細有つて都に残し置れ。巴一人を召連らるゝ。此巴と申ハ髪長く色白くして。眉目像々並びなかりしが。武士に忠して槻弓勢兵例なく。討物取つてハ鬼神なりとも事共せず。誠に一騎当千の兵共の。手答へしたる荒馬をも清く乗り。戰場といへば大鎧を着し。大太刀をはき弓韋を持せ。何時も一方の大將と承る。度々の高名肩を並らぶる人もなく。夫ニ付今度数多の兵討れ。又ハ落行者有りとはいへど。巴ハ難も蒙らず数度の合戦に打洩され。主従五騎に成給ふ。其時義仲宣ふ様ハ。其方ハ女なれば急ぎ何方へも落行候へ。我ハ討死せんと思ふなり。最期迄女を連たりと。人に云れん事後難と如何なりとあれバ。巴心に思ふ様。哀れ能らん敵も哉。最後の軍をし木曾殿に見せ奉らんと扣へたる所へ。武蔵の国の住人新田の八郎師重。大力と名乗つて。三十騎斗にて馳來る。巴ハ思ひ儲たる事なれば。敵の中に入つて入り師重と無手と組。取つて引寄我乗つたる馬の鞍の前輪に押付。ちつとも騒かず首捻切つて差上。木曾殿の御目に懸。其儘鎧脱捨行方知らず成たると申。偕々様様の甲斐く敷女人は。類すくなき事なりと今に申伝候。先我等の存たるハ如斯にて候。「是は奇特成事仰らるゝ物哉。扱ハお僧の此所へ御出有たるを一入懐しう思われ。巴の亡魂現

れ出。詞を替されたと推量致す。余りに痛敷事なれば。今宵ハ是に御逗留有り。彼跡を懇に御申なされ。其後何国えも御通りあれかしと存る

## 十三 碓被

「是は長門の国早友の浦に住者にて候。此程ハ打統沖の波荒くして。我等如キの漁捕一円成らざれば。今日ハ罷出浦の様子を見合申そふず。されバこそ此中とハ替りて。海上の静なる事哉。昨日ハ早々より船を出そふと存ればケ様の大慶な儀ハ御座らぬいや是ハ見馴申さぬお僧達の海辺と申。殊に暮に掛りたるに宿をも御取なく。是にハ休らふて御座候ぞ「中く此浦の者にて候「心得申候「ワキノ前二座シテ」「偕御尋有度とハ如何様成御事にて候ぞ是ハ思ひもやらぬ事仰らるゝもの哉我等も此浦にハ住者なれど。左様の御事委うハ存せず候併当浦の者と思召お尋有るを。少も存せぬと申も如何なれば。古キ者共の語り伝たるを承置候間。跡先の差別なく語り申そふず。「去程に平家は木曾義仲に都を落され。津の国一の谷に御座候処に。源の頼朝ハ院宣に任せ。舍弟蒲の御曹子九郎義経を大將として。六万余騎を差登せられ。驕る木曾殿を打果し。夫より津の国一ノ谷へ押寄。又平家を讃岐の八嶋へ追落し跡より追々様々戦ひ候へバ。平家打負此所迄逃給ふを。義経ハ尋常ならぬ名大將にて在せば。何国迄かは遁へきと是迄追欠給ふ。平家の一門ハ是より落給ふべき所なれば兎角勝負を決せんとして。我もくと進出舟軍に戦ひ給へど。終に平家負軍に成りし処に。其時知盛并二位

殿思召様。早御運も究りたり御痛しなから安徳天皇を。海底へ供奉し申さんと。泪を流し仰られしが。二位殿泣々尤通れぬ御身なれば御供申さんと。神璽を脇に挿ミ宝剑を腰にさし。内侍所を局に懷せ。主上に向奏し申されけるハ。比浪の下に極樂世界と申て。目出度キ所の御座候間。急キ御幸成シ奉んと宣へば両眼に御涙を浮へ給ひ。

東西に向勸念を成さるゝ所に。二位殿走り寄り玉体を懷キ千尋の底に入給ひたると申。其時門脇の教盛の次男教経ハ。義経の召れたる船に乘移り戦ふ処に。判官殿ハ叶じとや思召けん。二丈斗隔たる味方の舟に飛乗給ふを。教経飽果て御座候処に。安芸の太郎同次郎ハ教経を打取んと押よするを。兄弟の者共を近付。汝等を冥途の伴に連んとて。引願て両の脇に挿海へ入水有る又平家の大将宗盛親子ハ水心をよく御存有ッて游上り逃んとし給ふを。源氏の兵共何かハ通へきと船を押寄。櫓權を以ッて打流し。生捕にして鎌倉へ引れたると申が。是も海に沈ミ申されたるか共取沙汰にて御座候。先我等の存たるハ如是御座候。「言語道断奇特成事仰らるゝ物哉惣じて此隣りに左様の人は御座なく候。小賢キ申事なれど拙者の推量には。平の知盛の御亡魂にて御座有らふずると存間。暫く是に御逗留成され。有難き御経をも御誦誦あり。重て奇特を御覽あれかしと存る。

#### 十四 経政

「御前に候「畏て候「ト云立、シテ柱ノ先ニテ。」「去程に皇后宮の亮経政は。幼少より仁和寺御室に同行にて。八歳の時御所へ参初十三にて元服仕給ふ迄。片時も君辺を立去事候わず。掛る御馴染成

に依て平家都落の時分も。御前に参り前に下し給ハリし。青山と云琵琶を上げ。一の谷にて打死有るを不便に思召。彼青山を手向管絃講を以て。経政の菩提を御弔ひ有べきとの御事なれば。管絃の役者ハ其分心得候へく

#### 十五 俊成忠度

「誰にて渡候ぞ」「左有らハ其由申そふする間。夫に暫く御待候へ「如何申上候。薩摩守忠度の御参りにて候。「畏て候。御出の由申て候へバ。御对面あらふずるとの御事に候間。号御通り成され候へ

#### 十六 軒端梅

「脇次第ノ内ニモ片幕ニテ出、太鼓座ニ居ス。ワキ道行過キ詞有テカ、ル。一ノ松ニ立ツ。」

「誰にて渡候ぞ」「ワキシカくく」「お尋尤に候此梅ハ和泉式部と申て。天下に隠なき名木なれば。心静に御詠有ふずる。「ワキシカくく」「尤に候「ト云太鼓座へ引居。シテ中入過て、シテ柱ノ先ニ立ツ。」「最前都初たるお僧とて。東北院の梅花をお尋有し程に。則教やり申たるが。いまたあれに御座るか。但し何方へもお通有りたるか。参りて見申さふずる。いやいまだ是に御座候よ「ワキシカくく」「中くく最前の者にて候「ワキシカくく」「心得申候「ト云ワキノ前へ行キ座ス。」「扱お尋有度とはいか様成御事にて候ぞ「ワキシカくく。セリフニ番目ノ通り。」「是ハ思ひも寄らぬ事お尋有物哉。我等も此隣にハ住者なれど。左様の御事しかとは存も

致さず候。去ながら初たるお僧の。思寄てお尋有を。一円に存せぬと申もいかゞなれば。承り及たる通り物語申さふする【語】「去程に此東北院と申ハ。昔上東門院の御所成りし時。御内に名高き哥人数多あれど。中にも和泉式部と申御方は。本国ハ因幡の国うぶミの里の人なりしが。和泉守の妻たる故に。則名を和泉式部と申て。上東門院に宮付給し所に。幼少の時より數鶯の道に執心深く。明暮言の心色香に染バ。おのづから其風を得られて。何方にて御歌合のある時も。人に先立名歌を誦給ふにより。和歌の達者と譽を取られたると申す。又あの方丈の西の妻ハ。式部の御休所にて有しを。後にケ様に御寺と成りても。名匠の住給ひし所なれハとて。作りも替へず方丈の内に込置。今に式部の臥戸成る由語伝へ候。然るに比梅を和泉式部と申子細ハ。式部手づからうへ給ひたるにより。則和泉式部とハ申習す。又方丈の軒端の梅共申実候。最前も話しごとく。式部此木を植置れ。春の花の盛りは申に及ばず。夏の梢茂るうちに。若炎天の梅推も出るかと疑ひ。秋ハ梅の紅葉を一入愛し。冬ハ寒苦を経るが面白き杯とて。四季ともに目かれせず詠給ひしを。帝聞し召勅定として召されけれど。式部ハ梅を惜み御玉章を参らせらるゝ。されバ其哥に。勅なれば最も賢し鶯の宿ハととわばいか、答んと。忝も天子此哥を觀覽成され。扱ハ鶯の宿の梅にて有るならば。定て名ハ鶯宿梅にてあらふずると。重て繪旨を成され。先より此梅を鶯宿梅とも申。又論旨を蒙りたる梅なれば。繪旨梅にても有ふずるとの御事に候。是ニ付數多子細の有とハいへど。先我等の存たるハ斯のことくにて候〔ワキシカく〕「是ハ奇特成事仰

らるゝ物哉。偕ハ都初て一見のお僧なれば。誰有て此名木の子細を。語り申べき者有間敷と思召。和泉式部の亡魂現れ給ひ。委敷御物語有たると存る間。今宵ハ木影に御逗留有り。重て奇特を御覽あれかしと存る。「何ニ而も御用の事あらバ承ふずる〔ワキシカく〕「心得申候〔ト云太鼓座へ引居。後シテ出、地トリテ、片幕ニテ入ルナリ。〕

## 十七 芭蕉

〔初同ニテ出、太鼓座二居。中入過テ、シテ柱ノ先ニ立ツ。〕  
「是ハ唐土楚国の片原に住者にて候。爰に小水の辺りに貴お僧の在すが。毎日毎夜御経懈怠ず誦誦成さるゝ間。急き参り聴聞申はやと存る〔ワキノ前へ行、下ニ居テ。〕「唯今参じて候〔ワキシカく〕「我等も疾に参り申べきを。彼方此方隙を得ず延引迷惑仕候〔ワキシカく〕有リ。セリフ東北同断。〕【語】「去程に芭蕉と申物ハ。其精凡の物にてハなきかとの御事に候。夫を如何と申に。先春の時分よりほのくくと萌出けるが。生立次第に捲葉も綻るとハ云ながら。大方雷の声を聞てならでハ。葉をハ思ひの俣にハひらかぬ物にて有由申す。△然れば漢の李夫人ハ此代の縁も尽けるか程なく空しく成給ふを。野辺の土中に込置れしに。其塚の上にハ芭蕉の生茂りたるが。世を渡る狩人山より鹿を追出し。通じと彼塚迄追欠来るを。李夫人ハ痛しくや思召けん。芭蕉の影に鹿を隠し置給ふ程に。獵師は行衛を見失ひ帰る折節。畜類の悲しさハ一声二声鳴を聞。狩人立帰り一矢射留申を。其時李夫人の御哥に。隠しつ、甲

斐なき鹿の声立て。思ひいるさの山ぞ面難きと。ケ様に遊されたる  
と承る。又雪のうちの芭蕉の偽れるとハ。昔唐土に有絵書の居たる  
を召されて。帝より四季の芭蕉を書せ給ふに。春夏秋冬までは残らず  
写しけるが。冬の牀にても候か芭蕉をよし書。夫に雪を持せたる有  
様は。言語道断珍敷見事なれ共。併雪中にハなき物なるに依て。雪  
のうちの芭蕉の偽れる姿とは。此子細にて有由申す。又芭蕉は佛法  
にも用ひ申さるゝか。或貴き僧の有しが。庭前に彼名草を植置れ。  
則其院主の哥に。古寺の庭の芭蕉は一ト本の。数多に咲と秋風が吹  
と斯詠じ給ひたる実候。是に付数多子細の有りとハいへど。先我等  
の存たるハ斯のことくにて候。「是ハ奇特成る事仰らるゝ物哉。左  
様に夜なくゝ女人の来るべき者。爰元にてハ覚ず候が。扱ハお僧の  
御心中貴により。芭蕉の情魂あらわれ出。有難き御法をも聴聞申た  
るかと存る間。猶々御経御読誦あれかしと存る〔ワキシカく〕。  
此跡セリフ、東北同断。】

十八 采女

〔出入、芭蕉同断。〕

「是は和州南都に住者にて候。今日ハ物淋しき折柄なれハ。猿沢の  
池の辺へ立出心を慰はやと存る。いや是成お僧ハ。何国より御越  
なされたるぞ〔セリフ、東北同断。〕【語】「去程に春日大明神と  
申ハ。神護景雲二年に河内国平岡より。此三笠山本宮の峰に飛移  
らせ給ひたる由承る。初ハ此お山に神木とてハ。殊に木影一ツも御  
座なかりしを。当社の宮奴申され事に。春日山に木を植給ハハ神慮

に叶ひ。諸願成就致すべき由宣ふ程に。藤原氏各木を植參らせて。  
程なく諸木生ひ茂り申所に。されハ明神の御誓にハ。人の歩を運  
ハ嬉しけれど。衆生ハ恵を受んと植へし木成るに。落葉も裳につき  
てや行らんと。か程迄深く惜ませ給ふと聞く。当社ハ慈悲万行の御  
事なれば。現世安穩後生善所の其為に。知るも知らぬもおしなべ  
て。我先にと進んでうへ。か様に夥しき深山とハ成り申す。又承  
り候采女の御事ハ。昔ハ内裏へ国々よりも。像よき女を撰、上げる  
に。其上童名にて有由申す。然れば古へ天の帝の御時。恣心も優  
に誂しき采女の有しが。初メハ人に抽で観慮に叶ひ。片時も君辺を  
立去る事の無りしが。高きも賤きも人の妹背の習ひとて。程なくす  
さの參らせしを。情の道とて女心の慕なさハ。及ばずながら君をう  
らみ奉り。大内を夜半に紛れて忍ひ出。此猿沢に身を投空しく成り  
給ふを。初メの程ハ人の知らざりけれど。後にハ其隠れなかりし間。  
此儀を事の序に奏し給へば。主上も痛しく思召され。南方忝き御事  
なるぞ。猿沢の池の辺りへ御幸あり。采女の死骸を観覽成され。則  
御哥に。わきもこがねくたれ髪を猿沢の。池の玉藻と見え悲しきと。  
但し是は去ル人の哥なれど。余りにかひたるにより君の御哥とハ申  
習す。先我等の存たるハ如斯にて候。「是ハ奇特成る事仰らるゝ物哉。  
左様に何国とも知らず女性の来り。当社の御謂又采女の子細扱を。  
委しく語り申べき者。爰元にてハ覚ず候が。扱ハお僧の御心中貴  
により。古への采女の亡魂顕れ出。詞を替されたと存る間。しバ  
らくこれに御逗留あり。彼跡を御弔ひあれかしと存る〔跡セリフ、  
東北同断。〕

## 十九 井筒

〔出入、芭蕉同断。〕

「是ハ和州石上に住者にて候。今日ハ志<sup>ズ</sup>日なれば。在原寺へ参らばやと存る。いや是成お僧ハ。何国より御参詣成されたるぞ。〔セリフ、芭蕉同断。〕【語】「去程に此在原寺と申ハ。昔在原の業平紀の有常の息女。夫婦住せ給ひたる所にて候。然れハ業平も有常の息女も。いまだ幼<sup>イトナク</sup>き時ハ友達語<sup>カクシ</sup>ひし。倡<sup>イザナ</sup>ひ寄りて御遊び候時分。

是成井筒に立寄水鏡を見給ふに。何れも御像美しくおわしませバ。我影を人の影と御争ひあり。互に手に手を取替し。朝な夕な御狂ひ有りしが。程なく生立給ひて後。息女ハ美女の誉を取給ん杯と沙汰の有比。在中将ハ彼御方を床しく思召。御玉章を参らせらるゝ。されバ其哥に。つゝ、井筒いつゝ、に懸しまるがたけ。老にけらしな妹見ざる間にと。か様に遊バし遣わさるれば。頓て返歌の有ける。くらべこし振分髪も肩過ぬ。君ならずして誰か上<sup>ウ</sup>べきと。互に心とけて詠替されし処。終にハ靡<sup>ナヒ</sup>かせ給ふ程に。御契り浅からぬ事にて有りたると申す。去れ共河内国高安と申里に。有る女の有りて折々通ひ給へバ。定て息女厭<sup>イヤ</sup>ひ申されうづるところに。左様に御座なきを不審に思ひ給ひ。毎のことく高安通ひと号して御内を御出あり。庭の一村薄の陰に立寄御覽ずれば。紀<sup>キ</sup>、有常の息女夫をハ夢にも御存じなくして。夜半過と思敷<sup>キ</sup>時分妻戸を明<sup>ケ</sup>て出。物案じ姿にて暫く休らひ給ひ。君が河内通ひの道の程の心元なきと。有哥を詠じ給ふを業平聞し召。か様に心替りのなき人を嫉<sup>ミ</sup>つる事よと。却而我身の心中を恥しく思召。夫より高安通ひをふつに思ひ切り。夫婦の

御中猶睦敷有たると申す。業平紀の有常の息女の御事に付。数多子細の有とハいへど。先我等の存たるハ斯のことくにて候。「是は奇特成事仰らるゝ、物哉。扱ハお僧の御心中貴により。古への紀の有常の息女の亡魂顯れ給ひ。御詞を替されたと存る間。暫く是に御逗留有。彼跡を懇に御弔ひあれかしと存る。

## 二十 江口

〔出入、東北同断。ワキカ、ル。〕

「誰にて渡り候ぞ。〔ワキシカく〕」「さん候江口の君の御旧跡ハ。あれに見へたる敷のうちにて候間。初たる御方ならば。御出有りて御覽候へ。〔ワキシカく〕」「尤に候。〔ト云太鼓座へ行居。中入過テ、シテ柱ノ先へ立ツ。〕」「最前旅のお僧とて。江口の長の旧跡をお尋有し程に。則教へやり申たるが。未あれに御座るか。但し何方へもお通り有たるか。参りて見申さふずる。いや未た是に御座るよ〔此所セリフ、東北同断。〕【語】「去程に江口の君の本国ハ。周防の国室障の郷のうち。中の御手洗<sup>ミテラ</sup>の御方成りしが。衆生済度の為に流を立つる身となりて。諸国を廻り給ふ所に。王城近く住んと思召か。此江口の里へ御出有りて御座候時分。西行ハ立寄一夜の宿と乞るれば。内よりもお宿は叶ふ間敷<sup>キ</sup>由宣ふを。憲清ハ何となく。世の中をいとふ迄こそかたからめ。飯のやとりを惜む君かなと読給へバ。長ハ惜ぬよしの御返歌有たると承る。誠に江口の君ハ普賢菩薩の化身成る由申す。夫をいかにといふに。播摩国書写の開山性空上人ハ。正身の普賢を拜<sup>ミ</sup>申度と。一七日文殊に御祈誓あれバ。満ず

る夜の夢の告に。津の国江口の長を御覽ぜよと有し故。御靈夢にまかせ是へ御出あれバ。長八十人の遊女を集め。酒宴をなして御入有しを。上人ハ閉目即見と勸念をなし是をよく御覽有るに。疑もなき普賢菩薩にて御座候。又其十人の女房達は。十羅刹女と見させ給ふと申が。亦開目即悉と兩眼を開き御覽すれば。本の江口の君にて有たると申が。其後ハ誠の普賢菩薩と現れ。光明を放ち紫雲に乗じ。西方さして去給ひたるとやらん承る。去ながら今も月の明々と面白き折節ハ。此川辺をお舟に召れけるが。川道遙の遊ひ謡の音の聞ゆると申す。是に付数多子細の有とはいへど。先我等の存たるハ斯の如にて候。「是ハ奇特成事仰らるゝ物哉。女人の古哥の理を申されん人。爰許にてハ覺す候が。扱ハお僧の御心中貴により。古への江口の君の亡魂顯れ出。詞を替されたと存る間。暫々是に御逗留あり。彼跡を御弔あれかすと存る。

二十一 定家

〔出入、芭蕉同断。〕

「是ハ洛中に住者にて候。今日ハ物淋しき折柄なれば。千ッ本の隣へ立出心を慰はやと存る。いや是成るお僧ハ。何国より御越成されたるぞ。〔セリフ、芭蕉同断。〕【語】「先都のうちの名所旧跡ハ申に及ばず。辺土の山野深谷の致景迄も。我か日の本には類ひ少ナキ事成るに。増てや洛外のうちに面白く思われ。古人の住れたる所多といへど。中にも藤原の定家の卿ハ。此辺を心すごく物哀に思召。あれ成宿りを立置れ。折々ハ御出ありて哥を詠じ。御心を慰ミ給ひ

たると承る。然れハ比ハ陽月の事なりしに。時雨の音を聞いて。世の中ハ定なき事のミ成るに。四節は折を違へぬといふ下心を以つて。時雨時を知るといふ題にて。偽りのなき代なりけり神無月。誰誠より時雨染けんと斯遊して。先より此額を時雨の亭と打れたると申習す。又其比は後鳥羽の院の御宇成るに。式子内親王と申御方。初ハ加茂の齊に備り給ふが。後に大内に住せ給ひし刻。和歌の友なれば定家の卿と陸間敷キ時分。御歌合に恋の歌を讀給ふを。君聞し召れ思ひ内にあれバこそ。掛る言の葉を詠し給ひけれと有れば。内親王ハ科陳法にあらず。哥人は見ぬ名所を知ると宣ふ。され共其故哉覽程なく下りて。勸喜寺に居させられしかども。天上の交りなくてハ有甲斐なく思召か。頓て薨御成らせ給ひし間。跡の印を立置れし所に。程なく蕩かつら生ひ茂りたるを。或僧の取退て置れけるに。又一夜の間に前の如く纏しを。各御覽して草木心なしといへど。此蕩ハ尋常ならぬと御不審成さるゝ折節。有小賢人の申され事に。是ハ定家の執心葛と成つて。か様に御墓に這掛るよし宣ふを。皆人の聞て先より蕩葛をば定家がつらとハ申習す。先我等の存たるハ斯のことくにて候。「是ハ奇特成事仰らるゝ物哉。お僧初て都へ御登有たるに。誰有つて此あたりの名所を。語り申べき者あるまじきと思召。式子内親王の御亡心かりに見給ひ。委しく御教へ成されたと存る間。暫々是に御逗留あり。彼御菩提を御弔ひあれかすと存る。



## 二十二 夕顔

〔出入、芭蕉同断。〕

「是ハ都五条隣に住者にて候。今日ハ物淋敷折柄なれバ。何某の院へ立出心を慰はやと存る。いや是成お僧ハ。何国より御越成されたるぞ〔セリフ同断。〕」【語】「去程に夕顔の上と申ハ。頭の中將の御思ひ人にて候ひしが。去子細有て五条にかくれておわします頃。光源氏ハ六条の御息所へ通ひ給ふ折節。此五条隣を御通り有しが。御車の内より差廻き給へば。頃ハ秋の夕方の事成るに。白き花の心地よきに這掛りたるを御覽し。御隨身に何の花ぞととわせ給へバ。夕顔と申花成由答へけるを。一房折て参れとありし処に。△内よりも女の白き扇の爪灼したるをもて出。是にすへて参らせられよ。枝も情なげなんめるをと申さるゝを。其時惟光して上げるに。源氏の君今の扇を見給へバ。心あてに夫かとそ見る白露の。光添たるゆふ顔の花と有る。哥を書付たるを御覽せられ。夫より何角方便て源氏を通せ申されたるに。此五条隣の事なれバ。隣にハ物語とて。夜深より御嶽精進の御声。鳥のから声松の響。其外世を渡る賤の営申す。万物騒しき事を六々敷思召。何某の院へ伴ひ御申有るに。路次ずがらの哥ども数多有り実候へ共。夫迄ハ間も及ず候。扱河原の院に御座候時分。六条の御息所生壺となり。夕顔の上を取申されたる由承る。是ニ付数多子細の有とハ申せど。先我等の存たるハ如此にて候。「是ハ奇特成事仰らるゝ物かな。最前お僧ハ豊後の国より御登り有たると御申。あれば玉かつらの所縁をなつかしく思召。ゆふかほの上の亡魂あらわれ出。御詞を替されたと存る間。しばらくは

に御逗留あり。彼御菩提を御弔ひあれかしと存る

## 二十三 半菰

〔出入、芭蕉同断。〕

「是ハ此隣に住者にて候。爰に花の供養の御座候間。急き参らばやと存る〔ワキノ前へ行、下二居テ。〕」【唯今参して候。〔ワキシカノ所。〕△内よりも女の半菰を上げて。白き扇の。〔此ノ如ク語スミ。〕是ハ奇特成事仰らるゝ物かな。左あらハ是より五条へ御出ありて。夕顔の跡を御弔ひあれかしと存る

## 同 立花供養之時ハ如左

「御前に候。畏て候。皆く承り候へ。花の供養を被成るゝ間。色能き花を参らせよとの御事なり。又志の輩ハ皆御参あれ。其分心得候へく。〔中入過テ。〕いかに申。唯今の様子ハ何と思召され候ぞ

## 二十四 空蟬

〔出入、芭蕉同断。〕

「是ハ都下京辺に住者にて候。此程ハ打続徒然なれハ。罷出心を慰ばやと存る。いや是成お僧ハ。此隣にてハ見馴申さぬ御方成が。何とて此所にハ休らひ給ひたるぞ〔セリフ、芭蕉同断。〕」【語】「去程に古への空蟬と申ハ。光源氏と申せし時。いか、有けん中川の宿

へ御出の折節。止事なき上臆の一人在ずを御覧じ。頓て御心をうつしあこかれ給ひ。重て又御越被成。今に初ず御出ありつれども。終に難面なく御帰りあれど。弥胸の煙りも晴やらで。坐に思ふ暮方の。衛士の焚火も消方に成り。扱彼寝夜のうちへ忍入給へば。兼而より源氏の体をしろしめされたるか。其夜ハすごくと寝やを替させ給ひ。跡に衣ばかり脱捨置れしを。中将は是を御存なく。衣にたより給ふ事の墓なさよと思召。此衣を脱置れたるに付て。源氏の一首口号給ひたると申す。其時の御歌は。空蟬の身を替へてげる木の本に。なを人からのなつかしき哉と。か様に読こまくと参らせられたるを。彼御方ハ委敷御覧じけるか則返哥の有ける。うつせみの羽に置露の木隠れに。忍ひくぬる、袖哉と。斯のことくよみ替し給ふ故。則空蟬とハ名付られたると申す。夫より度々御文を通ハされ。歌の御返哥杯も有つれども。兎角うつ蟬は色深き御方にて。終に打解給ハさる由承り及びて候。是に付あまた謂の有とハいへど。最前も申如く。委しき事ハ存も致さず。先我等の存たるハ斯の如くにて候が。扱只今ハいか様の子細にて。御尋有たるぞ不審に存候。「是ハ奇特成事仰らる、物哉。左様にいづく共知らず女性の来り。初たる御方に言葉を掛け。殊に古き事共を物語致べき者。爰許にてハ覚ず候が。小賢き申事なれど我等の存るハ。お僧の御心中貴により。古への空蟬の亡魂あらハれ出。旁に逢申されたと推量致す。余りに不思議の御事なれば。今夜ハ此所に御泊有り。終夜御経をも御読誦遊し。御跡を御弔あり。其後何国へもお通りあれかしと存る

## 二十五 野々宮

〔出入、芭蕉同断。〕

「是ハ此隣に住者にて候。今日ハ野々宮の御神拝なれば。急で参らばやと存る。いや是成お僧ハ。何国より御参り成されたるぞ。〔セリフ同断。〕」【語】「去程に此野々宮と申ハ。伊勢斎宮に御立有人の仮に移りおわします。御精進屋の為に建置れたる所と申す。是にて御身を清められ。夫より桂のはらひに逢ひ。竹の都に御座候由承る。然れば古への御息所の御息女。斎宮に立給はんとて此野々宮に移られ給ふ。御母御息所は源氏と御契深かりしが。葵の上に付て空しく成給ふ故。夫より御心能く思召ざる間。息女の斎宮に離れ難きと号して。伊勢へ御下り有べきとて是へ御出有る。光源氏ハ御息所の御心。つらき物とハ思召せども。流石。又。別れ給わん事もいとおしく思ひ給ひ。此野々宮へ訪らひ参らせらるゝに。其折節殊更成物の音など聞へけれど。源氏渡り御座す由聞し召されて御遊ひをも止られたると申す。其時源氏の君ハ榊の枝を折りて。翠簾のうちへ差入給へば。御息所の御哥に。神垣はしるしの杉もなきものを。いかに紛へて折れる榊ぞと。か様に遊し給へハ源氏の御返哥に。乙女子か隣と思へば榊葉の。かほなつかしミ留てこそおれと。互に読替し御申あり。夫より色々様々の御恨どもにて。月も傾。バ光源氏ハ御帰有り。御息所は都の方名残惜く思召せ共。ちから及ばず伊勢へ御参成されたる実候。先我等の存たるハ斯の如くにて候。「是ハ奇特成事仰らる、物哉。左様に女人の忽然と来り。此所の子細を語るべき者爰元にてハ覚へず候か。扱ハお僧の御心中

貴により。古への御息所の御亡心見へ給ひ。御雑談成されたと存る間。末は急きの旅なり共。今宵は木影に御逗留有り。彼御菩提を御弔ひあれかしと存る

## 二十六 檜垣

〔出入、芭蕉同断。〕

「是は肥後の国に住者にて候。然ハ当国岩戸の觀世音に貴きお僧の在すが。毎日毎夜御経懈怠らず誦誦成さる、間。参りて聴聞申ばやと存る。〔ワキノ前へ行下二居テ。〕「唯今参して候。〔ワキシカくく。〕「我等も疾に参り申べきを彼方此方隙を得ず延引迷惑仕候。〔ワキシカく有り。セリフ、芭蕉同断。〕」【語】「去程に珍らしからぬ御事なれど。国々在々所々に於て。像よき女房数多ありとハいへど。中にも九州太宰府に。檜垣の女とて隠なき白拍子の有しが。若く盛なりし時は人に越。容顔美麗にして心殊に。増して立舞舞の袂も尋常ならねば。見る人毎に耳目を驚し。彼方此方へ召て御寵愛淺からず。誠に近国他国迄も美女の誉を取し身なれども。年闌て有し姿もなき時分は。誰も御酌として召人なけれバ。同じき国の白川辺に。庵を結びて住けるが。有とき藤原の興範御通りあり。水や有ると乞せ給へば。彼女内よりも水を持っていて哥に。年経れハ我黒髪も白川の。ミつハくむまで老にける哉と。ケ様に取あへず詠しけれども。掛る面白き名哥成に依て。後撰集とやらんにも入たる

と承る。檜垣の老女に付数多子細の有とハいへど。先我等の存たるハ斯のことくにて候か。扱只今ハ何と思ひよりて。お尋有たるぞ不

審に存候。「是ハ奇特成事仰らる、物哉。左様に何国共知らず老女の。毎日櫛鬘伽の水を汲是へ参申べき者。此あたりにてハ覺へず候が。扱ハお僧の御心中貴により。古への檜垣の老女の亡魂あらハれ出。詞を替したると存る間。是より白川へ御出ありて。彼跡を御弔あれかしと存る

## 二十七 伯母捨

〔出入、芭蕉同断。〕

「是ハ此隣に住者にて候。今日ハ名月なれば伯母捨山に上り。田毎の月を見て心を慰ばやと存る。いや是に御座候御方ハ。夕間暮にしてしかとハ見へ分ず候が。何国より御越被成たるぞ。〔セリフ同断。〕」

【語】「先信濃国更級郡に於。伯母捨山と申子細ハ。昔更科の里に若き男の有しが。幼少の時より父母に殿れし間。親の妹の有りて一入痛り。誠に我子のことく養育して。後にハ妻を向へ置れし所に。其女の心中萬物憂事多くて。伯母の老か、まりて久敷く居たるを。彼女いまた死せざる事よと思ひて憎。男にも此伯母の御心情なき

杯と。常に悪事を而已語り聞せし故。古へのことくになく疎成る折節。老女を深き山に棄給へと進れバ。夫ハ責られて月の隈なき夜。伯母御倡給へ寺にたうとき事の有を。見せ奉らんと偶に云れて。誠と心得悦び負れし間。山に遙々入りて峯をるへき道もあらざる。是成る木高き桂の木の元に置いて戻を。何とて我をバ此山中に捨給ふぞと。声をはかりに呼れどもいらへもせで。逃て宿に帰りつくづく思ふ様。女の悪しき様にいふ時ハ。腹立斯ハ致せども。年、来親の

如く養ひ相添ければ。流石心の内にイト最おしく存る刻。此山上より月も最赤く差出たるを詠て。其夜イも寝られず悲しく覺へ。斯詠し給ひたると承る。我心慰め兼つ更科や。姨棄山に照る月を見てと読て。急き迎ひ来るとハいへど。夫より世間に伯母捨山とハ申習す。又田毎の月と申。或ハ棚田とも申其子細ハ。御覽せらるゝことく嶺より麓へ。次第く山田を作り申に。月のさやけき時分山の上より見渡せば。何れの田にも残らず月影の移るに依。おのづから田毎の月と申て。隠なき名所にて候。先我等の存たるハ斯のことくにて候。「是ハ奇特成る事仰らるゝ物哉。扱ハ旁の此山に始めて御登りあり。殊更明月を御詠成さるれば。古へ捨られし老女は。妄執の雲も晴かたきゆへ頭れ出。言葉を替されたと存る間。暫く此所に休らひ給ひ。心静に月を御詠あれかしと存る。

二十八 仏原

〔出入、芭蕉同断。〕

「是ハ此隣に住者にて候。今日ハ物淋敷折柄なれば。草堂の隣へ立越心を慰ばやと存る。いや是成お僧ハ。何国より御参り成されたるぞ〔セリフ、同断。〕【語】「去程に大政の入道清盛ハ。日本を思ひの俣に治め給ふにより。不思議の事而已色々仕給ふ。其頃都に遊女数多有中に。刀自と申白拍子の娘に。祇王祇女とて兄弟有りしが。姉の祇王をバ平相国の召置れ。朝暮御寵愛限りなき折節。三年に成りて此加賀の国の白拍子に。名をハ仏と申人の有りて。美女の誉を取り舞も上手なりしが。有時西八條へ参り申されけるを。大政の入

道ハ聞し召れて。いかに遊女なりとも祇王があらん所へハ。神ともいへ仏ともいへ叶ふまじきぞ。とうく出よと宣ふ折節。祇王清盛に申されける様ハ。譬舞を御覽なく哥を聞き召さずとも。御対面ばかり成共あれかしと申に付。召歸されて今様を謡ひ。并に舞をまわせ御覽あれバ。見聞ミの人々ハ耳目を驚し給ふ。殊に眉目メジロ像声よく舞も上手なれば。相国仏御前に御心を移されけれど。祇王の思われん所も恥しく思召。此度ハ御暇給べと申を。左様にあれか有を憚に於てハ。祇王に出よと御使有りし程に。なからん跡の忘れ篋と思われけん一首の哥に。萌出モエるもかるゝも同じ野辺の草。何れか秋にあわで果べきと。此哥を年月住なれし障子に書付。すくくスと出世の中を恨ミ。二十一にて髪をおろされければ。妹の祇女も母の閉も尼に成。嵯峨の奥に柴の庵を結び。一心不乱に念仏申所に。仏御前ハ次の年の初秋の時分。祇王の一間所に書たる哥を見て。いづれか秋にあわで果へきとは実もと思ひ。浮世をいとわん為に忍出様をかへ。嵯峨野の方へ尋行祇王に逢イて。我身の科なきよしを語り。四人一所に居て浄土を願われしが。仏御前ハ此国の人成ゆへ。後には古郷に歸り是にて果られたると申す。さあるに依て此草堂クサドウの主ハ。仏にて有由承る。先我等の存たるハ斯のことくにて候。「是はきどく成事仰らるゝ物哉。此草堂のあるじハ仏にて有と申せば。貴きお僧の此原中へ御出有り。殊に是へ立寄給ふにより。仏御前ミツメに見へ給ひたると存る間。末は急きの旅なり共。今宵ハ是に御逗留あり。終夜有難き御法を遊アし。其後何国へもお通りあれかしと存る。

## 二十九 藤

〔出入、芭蕉同断。〕

「是ハ越中国多胡の浦に住者にて候。今日ハ能き天気にて候間。多胡の浦へ立出藤を詠め心を慰ばやと存る。いや是成お僧は。此辺にてハ見馴申さぬ御方成るが。何とて此所にハ休らひ給ひたるぞ〔セリフ同断。〕」先此海を布勢の海と申。此隣を多胡の浦とも申。又是成松に掛りたる藤を。多胡の浦藤と申名花にて候。昔奈良の帝の御宇に。大伴の家持の卿。越中の守にて御座有し時。此所へ御出有りて様々御遊覧の刻。折柄此藤今を盛りに咲乱れ。是成汀に影移り。水底清く候しがバ。春の名残りを一入面白く御賞翫に思召。御酒宴を成され一首の御詠歌に。藤浪の影なる海の底清ミ。しつく石をも玉と我見ると遊されたる実候。其時御伴ひ候し綱丸と申御方ハ。越中の亮にておわしましけるが。取敢ず。多胡の浦底さえ匂ふ藤浪を。かざして行ん見ぬ人の為と説給ひしより。此所を田子の浦とも。又多胡の浦藤共申由承り及候。誠に何国の藤よりも。しなひ長く別而色深く。世々の集の哥人も数多説置れたると申習す。併遠国の事なれば。誰有ッて打続き詠ずる人もなく。毎年我等如きの見申迄にて。委細の事ハ存ぜず候が。古き者共の申伝る通りを。先物語仕りたるが。何と思召てお尋有たるぞ不審に存候。「是ハ奇特成事仰らる、物哉。当浦ハ世に隠なき藤の名所なるに。貴きお僧此辺御越被成。浦の景色を詠め給ひ。殊に此藤に心を付られたるにより。非情とハ申ながら此藤に限り。古へより様々哥にも説置れたる程の。名高き今に絶せぬ葛なれば。仏果の縁を成し度存。かりに女と現じ

詞を替したると存間。暫く是に御逗留あり。草木国土悉皆成仏の御法を遊バシ。重て奇特を御覧あれかしと存る

## 三十 誓願寺

〔ワキ次第ノ内二出、太鼓座二居。道行過キ、詞アリテワキ座へ行、腰掛ルト、シテ柱ノ先二立ツ。〕

「是ハ都小川表に住者にて候。此所へ一遍上人御着あり。六十万人決定往生の御札を。国土に御弘成され候間。志の輩ハ皆々御参り候へや〔ト云触テ太鼓座二居ル。シテ中人過テ、シテ柱ノ先二立。〕」扱も小川表の面々。今夜不思議の夢を見申さるゝに付。上人へ参り拙者に不審仕れと有る程に。急き此由申さふする〔ワキノ前へ行、下二居テ。〕「是ハ小川表に住者成るが。当寺への御参詣目出度存候。又我等の参り申事余の儀にあらず。今夜小川表の老若其の夢に。昔より誓願寺と打たる額を退られ。唯今上人様の御手跡にて。六字の名号に御成し有ると。何れも同じことに見申により。余りに希代成る御事なれば。拙者に少尊意を得よかしと有に付。卒尔ながら是まで何公致たるが。何共思召合せらるゝ儀は御座なく候か〔セリフ同断。〕」【語】「去程に和泉式部と申ハ。因幡の国政廣の息女。和泉守道貞の妻にて御座候しが。夫におくれさせ給ひてより上東門院の上童に宮付。女人の身とハ申せども。世に勝れ和哥の達者にておわしませば。正身の歌舞の菩薩の化権とハ申習す。惣じて哥道ハ仏神の御内證にも叶ひ。鬼神を和らげ武士の心を慰むるに依。衆生済度の為に和泉式部と生れ給ひたる由承る。亦当寺は天智天皇

の御願に。立置れたる御寺にて。御本尊コホソソハ慈悲万行の御作にて御座候。即和泉式部も当寺に印を立置れ。後には往生を遂天上有たる由申伝る。是に付数多子細の有とハイヘド。先我等の存たるハ斯のことうにて候。「是ハ奇特成事仰らる、物哉。古への和泉式部ハ仏の化身とハ申せ共。権に人骸を請給ふにより。左様の罪咎も御座候べし。小賢カガシき申事なれど我等の推量には。上人の御心中貴故。式部の御亡心見へ給ひ。御詞を替されたと存る。然らバ御本尊の御告のことう。誓願寺とうちたる額を御退成され。六字の名号に遊されいかしと存候「左有バ其由相触申さうずる。「ト云立テ、シテ柱ノ先キニテ、ワキ正面ヲ向キ。」「やあく、皆々承り候へ。上人へも新成る御告の在す間。弥陀の教のことう当寺の額を。六字の名号に成し給わんとこの御事なれば。志の輩ハ参りて拜れよとの御事なり。構へて其分心得候へく」

## 三十一 六浦

〔出入、芭蕉同断。〕

「是ハ相模国六浦の里に住者にて候。今日ハ何とやらん徒然成折柄なれば。称名寺のあたりへ立出。山々の紅葉を見て慰はやと存る。いや是成お僧ハ。何国より御参詣成されたるぞ（セリフ同断。）」  
 【語】「先此寺ハ称名寺と申て。一遍上人の開山にて有由承る。此上人ハ俗体の時より。正直を第一にして親に孝あり。慈悲心専として道心深き故。浮世をいとわん為に発心を遊バシ。則一遍上人と申て。諸国を修行あり念仏を弘め給ふ事。天下に其隠なくして。殊勝第一

の智者にて有たると申す。然れば一ト年吾妻へ御修行の刻。即当寺を御建立有りて。念仏三味の道場と定め。暫く是に御逗留の内。本堂の庭に此楓の木を植置れしが。世間の楓とハ抜群に替りて。四方の山々ハイまた成に。此木に限つて如何にも色美しく。毎年よく紅葉致に依て。当寺の銚にて有と申され。何れも寺僧達は申に及ばず。近郷他郷の老若迄も。紅葉見には貴賤群集致たる実候。しかれども其以後に。昔鎌倉の為相の郷サマと申御方。是を御見物有度思召当寺へ御参詣の時分。此名木の今を盛成を御覧じ。さなから錦を晒せるといふ共。是にハイかで勝べきと思ひ給ひ。其時為相の卿の御歌に。如何にして此一ト本に時雨けん。山に先だつ庭の紅葉ばと。か様に遊し給へば。草木心なしとハ申せど。此御詠哥を理りとや思ひけん。其次の年より一葉も紅葉致さず。御覧せらる、ことう今に青葉にて候。先我等の存たるは斯のことうにて候。「是ハ奇特成事仰らる、物哉。左様に何国共なく女性の来り。古き事語申べき者爰許にてハ覚ず候が。扱ハお僧の御心中貴により。此名木の精女人と現じ。言葉を替したるかと存る間。未は急きの旅なりとも。今宵ハ是に御逗留被成。終夜御法を遊し。其後何国へもお通りあれかしと存る

## 三十二 陀羅尼落葉

〔出入、芭蕉同断。〕

「是ハ都小野の隣に住者にて候。今日ハ物淋しき折からなれば。罷出て心を慰はやと存る。いや是成るお僧ハ。何国より御越成された

るそ（「セリフ同断。」）【語】「去程に落葉の宮と申ハ。一條の御息所の御息女にて有たと申す。又其比柏木の右衛門督と申人。折しも比ハ春の暮つ方の事なるに。霞める空を面白思ひ給ひ。六条の院にて御鞠遊びの有し時。日比女三の宮の手馴させ給ふ。虎毛の猫翠簾の外へ出し故。總綱にて翠簾をあければ。女三の宮の立姿を右衛門一目見奉り。夫よりしづ心なく惱み給ひ。宮の御乳母侍徒を頼み。玉章を書送らせ給ふ其時の哥に。諸かづら落葉を何に拾ひけん。名ハむつまじきかさしなれ共と。か様に読給ひしより以来。女三の宮を落葉の宮とハ申習す。其後女三の宮に逢參らせられ。互に色々の私語など有りつれ共。併忍ひ思ひの事なれば。如何斗絶難く思われけん。終に身を徒に成し給ふと承る。然れば御母御息所ハ。物の化にて此山里におわしますにより。終にハ女三の宮も当所へ御出有り。則母儀と一所に住せ給ふ。惣して女人ハ五障三従の罪浅からざれば。貴僧高僧の声をあげ。陀羅尼品を一千卷。他念なく読誦し給へども。御息所ハ快気なかりたと申す。亦落葉の宮ハ夕霧の大將と伴ひ。程なく都へ登り給ふにより。扱々執着の罪いか、あらんと。專取沙汰致たる実候。先落葉の宮の子細。大方か様に聞及び候が。何と思ひよりて尋給ふぞ。殊に御出家の身なれば不審に存候。「是は奇特成事仰らる、物哉。扱は古への落葉の宮の亡魂顕出。詞を替されたと存る間。是より都へハ程近く候間。先々当所に御逗留あり。女人成仏の御経を御読誦成され。彼跡を懇に御弔ひあれかしと存る。

## 三十三 胡蝶

〔出入、芭蕉。〕

「是ハ洛中に住者にて候。今日ハ物淋しき折柄なれば。古宮の隣へ立出心を慰ばやと存る。此間ハ一段と長閑なれば。漸梅花も盛にて御座有らふする。いや是成お僧ハ。爰許にてハ見馴申さぬ御方成るが。何国より御越被成たるぞ（「セリフ同断。」）【語】「先爰元は都の内にてても上京にて。一条大宮と申名所にて候。お僧は洛中初たる御方ならバ。定て一円御存有まるほどに。此宮を常の古き宮と迄思召れふが。昔より様々謂の有古跡にて。是成梅花の盛の折節ハ。洛中の事ハ申に及ばず。国々在々所々よりも。毎年我先にと進んで登り。老若男女によらず花見の人々ハ。貴賤群集致たるよし承る。其上旁の見給ふことく。大内も殊の外程近く候へバ。春の花の盛は申に及ばず。夏の木末茂るうち二も。若炎天の梅推も出るかと疑ひ。秋ハ梅の紅葉を一入愛し。冬ハ寒苦を経るが面白など、て。雲の上人ハ四季共に是へ御出成され。暮打廻し屏風を立。詩哥管絃の御遊ひにて。夜明ケ日の暮るをも弁へ給はず。詠たへせぬケ様の名所なれば。昔ハ千草萬木も生茂り。心言葉も及び難き故。千艸に集く虫の音迄も。聞人毎に立留りたる扱と申す。夫ハ付胡蝶ハ春夏秋を経て。草木の花に戯る、とハイへど。梅花に縁の疎き事を歎き。啼悲む涙の色も紅井の。此花を面白く存けるか。飛かけりて戯れ遊びたるを。花園の小蝶をさへや下草に。秋松虫はうとく見るらんと。斯のことく遊され。今に語伝たるも此故にて有ると申習す。誠に爰ハ所から名所なれば。其古への落葉の時分も。木の葉を一葉もためじ

と有りて。毎日掃除以下をも清く致し。あたりも耀く様に有たると申候。御覽せらるゝ、こゝく棟の瓦には青苔生ひ。軒も扉も皆苔むして。か様にあれたる古宮成るに。其昔の様体を今も承れば。某杯ハあきれ果て居申候が。扱只今ハ何と思召寄りて。お尋有たるぞ不審に存候。「是ハ奇特成る事仰らるゝ、物哉。此荒果たる古宮の隣へ。小賢申事なれど我等の存るハ。唯今の御物語を承るに。先にお僧の御心中貴く。其上此梅花に御心を付られたれば。別て馴々しく思ひ。小蝶の精魂あらハれ出たるかと推量致す。何も利益はおなし御事なれば。末は急の旅なり共。今宵は木影に御逗留あり。彼者を念頃に御回向遊し。重て奇特を御覧あれかしと存る。「此近所に宿を持たれば。御用の事あらバ承ふする。

#### 三十四 朝顔

〔出入、芭蕉同断。〕

「是ハ此隣に住者にて候。今日ハ佛心寺へ参らはやと存る。いやはお僧ハ。何国より御参り成されたるぞ〔セリフ同断。〕【語】「先當寺ハ佛心寺と申て。洛中に隠なき御寺にて候。昔桐壺の御門の御代に。式部卿と申御方の。住せ給ひたる御旧跡にて有由承る。此式部卿の御息女の在すが。朝顔の齋院と申て。加茂の齋の宮に備り給ふを。光る源氏の聞し召され御心を掛させ給へば。神慮もいか、と思召。折々の御返事ハ遊せども。御心底ハ御なびきなく候処に。桃園の宮過させ給ひて後。女御の宮と一所に住せ給ふを。折に

幸と思召。源氏の宮ハ御訪と号して。最繁ふ御出成されけれど。此院ハ更に討解給ねば。重々の御玉章言葉に花を咲せられ。猶以度々通わせ給へば。終に難面なびき給わず。大方の御文通し迄にて有たるにより。数々の御恨ミ尽せざる様に承る。夫三付存出たる事の候。惣じて御出家ハ何れも残らず。定て能く御存し成されうが。世間に我人萩朝顔とハ云つゝ、け共。此程と申草花を。佛前に於て手向には。終にこれなき様に取沙汰致す。ケ様の事に付色々子細有実に思へども。委しき事ハ存も致さず。先我等の聞及ひたるハ斯のこゝくにて候が。何とて朝顔の謂を。御出家のお尋有たるぞ不審に存候。「是ハ奇特成事仰らるる物哉。扱々お僧の心中貴により。朝顔の亡魂女人と現じ。有難き御法をも受度思ひ。お僧に詞を替されたと推量致す。余りに不便成事なれば。暫是に休らひ給ひ。お経を御読誦あれかしと存る。

#### 三十五 松風

〔上掛ナラバ名乗ワキ故、シテ柱ヲ越ユルト出ル。下掛リナラバ次第ノ内ニ出ル。ワキ名乗過テカ、ル。一ノ松ニ立。〕

「誰にて渡り候ぞ〔ワキシカノ〕」「さん候あれに付。謂の有るを語て聞せ申さふずる。昔行平の中納言と申御方。当浦へ始めて御下向の刻。此在所に兄弟海人の有に御心を掛られ。月の面白き折節ハ。あの松の元にて御酒宴を成さるゝ。其時分村雨杯のばらゝと致候へば。折にふれて二人の名を松風村雨と名付給ふ。其後行平ハ都へ御登り有り。御音信のなかりし事を。兄弟の海人は是を恨ミ。思ひ



と成り空しくなれば。二人の海士の旧跡とも存じ。ケ様に札を打短冊を掛られて候。お僧も逆縁ながら弔ふてお通りあれかしと存る  
〔ワキシカ〜〕 「尤に候

## 三十六 又短キ方

「誰にて渡り候ぞ」「さん候あの松ハ。松風村雨二人の海士の旧跡にて候が。去子細有つて空しく成り給ふにより。あのことく札を打短冊を掛られて候。お僧も逆縁ながら弔ふてお通りあれかしと存る

## 三十七 楊貴妃

〔ワキ次第ノ内ニ出、太鼓座ニ居ル。道行過ギテカ、ル。一ノ松ニ立ツ。〕

「誰にて渡り候ぞ」「ワキシカ〜」 「さん候此所に楊貴妃と申ハ御座なく候。去ながら唐土より仰らるゝに付て思ひ出た。爰に玉妃と申御方の。明暮もろこし恋しや腰方恋しやと仰候が。若左様の人にてばし御座候か」「ワキシカ〜」 「あれに見へたる森の中に宮作り数多候が。中にも大真殿ダイシンテンと打たる。額のうちにて玉妃と御尋候へ  
〔ワキシカ〜〕 「尤に候

## 三十七 祇王

〔ワキ名乗スギテ呼出ス。但ワキ出、シテ柱ヲ越スト片幕ニテ出、太鼓座ニ居ル。〕

〔御前に候 〔ワキシカ〜〕 「畏て候 〔ト云幕へ向フ。〕 「如何に

祇王へ申す。佛御前を伴ひ。急き御前へ御参りあれとの御事に候  
〔ト云太鼓座ニ居ル。シテ中入過テ、呼出ス。〕 「御前に候 〔ワキシカ〜〕 「畏て候 〔ト云立テ、シテ柱ノ先ニテ。〕 「是ハ一段の見物哉。夫を如何にと申に。祇王祇女佛閉とて。都四人の白拍子にて候か。彼佛と申ハ。本国は加賀の国佛の原の人成が。都へ登り白拍子と成り。舞の事ハ日本ニ隠れなく候。夫に付祇王と佛御前と。相舞に仰付らるゝ間。皆々罷出見物申されよとの御事なり。相構て其分心得候へ〜

## 三十九 二人祇王

〔此ノ如ク二人祇王トコレ有候へ共、ヤハリ右祇王同様ノ事カ。〕

〔御前に候 〔御意のことく祇王の御取成を以。佛御前を召出さるゝ、ハ忝事にて候 〔畏て候 〔シテ柱ノ先ニ立。〕 「扱も珍らしい事を仰出された。是と有も天下泰平に納り万目出度折柄なれば。か様の儀を仰付られ。下々迄も見物仕る様にと有るは。誠に忝事で御座る。殊に此舞人を如何成る人ぞと存れば。祇王祇女佛閉とて。天下て四人の白拍子と申す。中にも祇王祇女といふは兄弟なるが。姉の祇王をば則御前に召出れ。並ひなき御寵愛浅からさるに依て。片時も御前を立去事なく。朝夕御宮仕へ申さるゝと承る。又此佛御前と申ハ。本国は加賀国の人成るが。都へ登り白拍子となり。声より舞も上手成る由聞召され。則舞を御覽成さるゝと推量致ス。誠に一人舞るゝ、さへ大切な事成るに。御意なればこそ相舞には致さるれ。か様の珍しい事を。某杯ハ重て見る事ハ罷成まい程に。此度何卒見物仕り。

後には我等の孫子共や見ぬ者ともに。老ての雑談に仕ふと存れば。大慶千万是に過ぬ事じや。いや由なき獨言を申た。急度仰付られた事じやに。若見物が小人数にてはいかゝな。急き此由を相觸申さふずる。やあく皆々承り候へ。今日御前に於て。祇王と佛御前と相舞を致さるゝ間。老若男女によらず。罷出見物仕れとの御事なり。相構へ其分心得候へく

鷺流十一世

矢田文蕙（「狂言堂」角印）

【翻刻】

〔三冊目〕

一	雷電	十九	同武内	四十二	殺生石
二	車僧	二十	羅生門	四十三	天鼓
三	同替	二十一	同二人	四十四	絃上
四	大会	二十二	現在鶴		
五	是界	二十三	熊坂		
六	鞍馬天狗	二十四	鍾馗		
七	同天狗	二十五	張良		
八	葛城天狗	二十六	藤渡		
九	飛雲	二十七	三山		
十	土蜘蛛	二十八	同		
十一	鶴	二十九	求塚		
十二	鶴飼	三十	当麻		
十三	橋辨慶	三十一	須磨源氏		
十四	同二人	三十二	吉野天人		
十五	小鍛冶	三十三	第六天		
十六	同乱序	三十四	項羽		
十七	吉野天人	三十五	大瓶猩々		
十八	紅葉狩	三十六	錦戸		
		三十七	同文使		
		三十八	同二人		
		三十九	夜討曾我		
		四十	阿漕		
		四十一	野守		

## 一 雷電

〔来序ニテ出ル。シテ柱ノ先ニテシヤベリ、巻数ヲ右ニ持ツ。〕

「か様に罷出たる者ハ。比叡山延暦寺の座主。法性房の僧正に仕へ申者にて候。去程に菅丞相と申御方ハ。法性房の御弟子成るが。時平の大臣の讒奏により。思わざる外に遠流の身と成給ひ。筑紫にて空敷く成給ひたる由承る。然れば我等の頼申御方ハ。別行の子細有るにより。百座の護摩を焚せ給ひ。心肝に銘じて御入有る比。何国共なく中門の扉を叩く程に。不思議に思ひ物の透より見給へバ。正敷う菅丞相にて御座す。其時頼申人胸打さわぎ。肝を消給ふといへど。流石貴き僧正の御事なれば。少も色には見せ給わず。さらぬ体にて戸を開き。荒珍らしの丞相や。先内へ御入あれと請し申され。さながら生たる人に物を云ことく。互に様々の御雑談有りて後。其方ハ筑紫にて果給ひたると申程に。色々申を致たるが。定て届ぬ事ハ有間敷キと仰らるれば。逆様成る御弔に預り申事。誠に以難有ふ存る。殊更幼少より別して菅相公の養にて。此御寺に入りいつきかしづき給ふ。責て御禮に伺公致イた。扱又我等の存生に有し時。某に悪事を申掛し雲客を。退治致さんと存る間。雷電と成つて大内へ乱れ入べし。其時ハ僧正を召に参ふずる。譬幾度勅使立つとも。必御参内あつて下されいと申さるれば。頼申人ハ委細心得存る。勅使両度立迄ハ参るまじい。若三度に及ならハ。王土に住身の争イカガ勅をバ背べき。迷惑ながら参内申そふずると有レバ。菅丞相の気色俄に鬼面の如くになり。折節柘榴サザナミを取て噛み碎き。妻戸メノドに吐掛ケ給へば。忽火焰と成つて燃上るを。僧正少も驚き給わず。灑水

の印を結び掛ケ給へバ。難なく火焰は消る程に。其煙と共に打紛シ搔消様に失給ふ。扱禁中へ乱れ入ルに。誠に鳴神の事なれば。晴天に有つるも俄に搔曇り。黒雲空クワクワウツクに引覆ヒキマヒ大洪水を出して。大内を鳴廻り震動致すにより。公卿天上人驚き給ひ。急き僧正に御参りあれとの勅使。一度ならず二度ならず三度迄立により。是非に及はず御参内成サレれふするとの御事じや。則御用意遊すとハ云へど。流石御参りの事なれば。次第くの御供役人を召連らるゝにより。未だ御出成されぬ。去ながら此巻数をさへ持て参れば。僧正の御参り有たるも同じ事と思ひ。取物も取敢ず罷出た。少も時刻移イてハ成まい程に。急で参ふと存る、(少し先へ出上ラミ)荒不思議哉。今迄能キ天氣が。俄に雲の気色が替つた。扱もく冷まじい空哉。鳴神の事なれば何時鳴ふも知らぬに。某一人行ヨクく事ハ強物じや。爰許にて頼ふだ人を待チ。御供仕らふずる。先ならば此辺の人々を頼ミ申ぞ。(ト云テ)僧正の御出有らバ此方へ御知らせあれ。構へて其分心得候へ。(左ヨリ右へ見廻シトムル)

## 二 車僧

〔竹杖ツキ、来序ニテ出ル。〕

「爰許へ不図罷出たるを。興有た者と思召されふずる。是ハ愛宕山の谷峯に。年久しく住木の葉天狗にて候。然れば爰に車僧とて。貴キ知識の在アが。牛も見へず人も引ぬ車に乗り。四方の山々を飛行自在ウツクにあるく人の候。されバ其貴僧の心の内に思わるゝ様。我程ウツク貴者ハ三国にも有間敷きと。余りに慢心の指事を。太郎坊の憎ウツクキと思



の溝越天狗とハ申候我等の是へ出る事別の儀にても御座ない然バ爰に車僧とて貴<sup>キ</sup>智職の在すが。(是ヨリ明如シ)嬉しく存御言葉の下ヨリも。取物も取敢ず罷出た。先急て参ふ。太郎坊こそ種々の事を仰掛られたれども少ももちろく致さぬ車僧を某一人にて妨<sup>サマ</sup>事ハ強物で御座るが。先あれ参り妨てみませう。(云乍橋掛りへ行首へ出ル)とこ元に居られうぞ。(ト云迄ニテ柱ノ先へ出、ワキヲミテテキ正面へヒラキ)されバ社あれに居らるゝよ。聞及ふだよりも一段貴そふな。(是ヨリ又常ノ通リ)いやこそくくやこそくくこそくくやこそくくこそくくやこそくく車僧の心が浮ずと笑せう左の脇の下を。つゝと入ってこそくらふか。右からこそぐろふか。思案する間に。笑ふまいとたしなむ顔ばせがあらわに色に又出て。そりりくくと。鼻の穴が嘖<sup>イカ</sup>る嘖<sup>イカ</sup>り嘖<sup>イカ</sup>たる穴より。廿日鼠が。土俵鞠こゝに付て。ひよつこくと踊り出てあなたへハくわらくく比方へハちよろくくちよろくくやちよろくく狂<sup>マダシ</sup>ひか車僧笑や車僧。(是ヨリ留メ差常ノ如)

#### 四 大会

〔来序ニテ出ル。ツレ五人カ三人。ヲモ舞台真中ニ立、ツレ左右ニ別レ立並ぶ。〕

「か様に候者ハ。比良野の峯に住給ふ。次郎坊の御内成ル溝越天狗にて候。我等の是へ出る事別の義にても御座ない。ツレ「エヘンくくく」ヲモ「いやわこりよ達ハ何と思ふてお出やつたぞ。ツレ「わこりよがいそがハしそふに出るに依て。是迄付てハ来たが。子細ハな 皆々」中々 皆々不残「何共知らぬよ ヲモ「夫な

らバ子細を語って聞せう。ツレ「急で語らしませ【語】「先頼申次郎坊ハ。先度鳶に成って。洛中洛外を飛行自在に翔<sup>カケ</sup>り給へバ。都東北院隣の事成ルに。大きな蜘蛛の家の有るに行掛り。切も切られずはづすもはづされずして。中にか、つてまちくとして居給ふを。稚<sup>ワカ</sup>キ者共が是を見付。爰な蜘蛛の家に鳶こそ掛つたれとて頓て捕へ。其俣羽を貰ふと云者も有り。いや只絞殺せと云者も有る所へ。叡山の僧正の通りて御覽せられ。元より慈悲第一の御方なれば。其鳶を我に呉よと仰せられ。今の幼き者共にハ扇珠数杯を下され請。自鳶を請取蜘蛛の家をよく取って。其俣おはなしやたれば。二ツ三ツ身震して頼ふだお方ハ帰られたが。南方あふない事てハなかつたかツレ「おしやる通り是ハなあ。残る皆々」中々 不残「あぶなひ事ておりやる ヲモ「扱次郎坊ハ此恩を報じ度思われ、山伏の姿に御身を現じ。僧正の法味をなし給ふ折節。日外ハ我等の命<sup>イデ</sup>危見へし所に。御憐<sup>ナホシ</sup>により命<sup>イデ</sup>たすかり申御報志に。何にてもあれ御望有<sup>ル</sup>に於てハ。利那が間に叶へ申そふずるとあれバ、山伏の命を助たる事は。未覚ぬ由御申有るを。都東北院隣の由申さるれば。扱ハ其時の鳶は天狗にて有つるぞと。そこで思ひお当りやつた処で。【フン】何にても我此世に望ハなし。去ながら。釈尊靈鷲山にて。御説法有りたる様体を。眼前に於て見まく欲<sup>キ</sup>と宣へバ。夫こそ易間の御<sup>シ</sup>事。利那が間に。まなふで御<sup>シ</sup>目に掛<sup>ケ</sup>申そふずると。其俣飛で御<sup>シ</sup>帰り有る。彼釈迦の説法と哉覽ハ。仏菩薩五百羅漢のあまた入<sup>ル</sup>と有が。我等にも何ぞ一役請取れと有らバ。面々ハ何に成ふと思ふぞ。ツレ「某ハ不動にならふと思ふ。二ノツレ「身共ハ

二王に成らふと思ふ ヲモ 「いや／＼わごりよ達の分して。二王や不動にはなられまい。爰にならふ仏かおりやる。堂の角なる寶頭スミビツ盧ルに成らふと思ふが。是ハ何とおりやらふぞ ツレ 「是ハなあ残り皆 「中々 不残 「一段とよふおりやらふ ヲモ 「夫ならバ比様子を謡ふて帰らふ 皆々 「一段と能ふおりやらふ ヲモ 「是へ歩て謡しませ ツレ皆々 「心得ておりやる ヲモ 「おかしき副ヒラシ天狗ハ寄合て。「切」／＼。何仏にかならふやれと。談合左右ツレラミルするこそおかしけれ。 ヲモ上 「愛宕上明の地藏に得なるまじ。〔皆々〕大嶺葛城ハ。右ヨリ左へ廻ル。ツレ皆々大小ノ前へ下リ立並發喜菩薩。これまた正面ヲ向、拍子五ツ大事ユウケンの仏なり。ユウケンよく／＼物を案ずるに。大臣柱ノ方ヲ扇ニテムスビサシ堂の角なる寶頭盧スミビツに成らんと。目付柱ヘサシ行皆紙衣を拵へて。皆紙衣をカサシモドリ着連つ、こそり／＼と左右ニテトメル。左右ノ袖ヲアラルヨウニツホトシテ、片左右ニテモトメル帰りけり／＼

## 五 是界

〔来序ニテ出ル。巻数ヲ持。雷電同斷。〕  
 「か様に罷出たる者ハ。叡山の僧正に仕へ申者にて候。去程に我等の是へ出る事別の儀にても御座ない。先太唐の天狗の首領スミビツ是界坊。此年月つく／＼と思わる、様。我国震旦に於て。慢心の高僧数多有とハ云へど。皆我道に誘引せずと云事なきに。仏法東漸と聞く時は心に掛る間。何様一ト度ハ日本に渡り。仏法を妨サマシと匠ミしに。其心中を違へず此秋津洲に来る。され共太郎坊に談合せずハ成まじき

と思われ。先愛宕山に行案内と申さるれば。太郎坊は出合比方へと請じ申され。扱只今ハ何の為の御出ぞと有れば。是界答て曰。唐土に於てハ育王山青龍寺。般若台に至る迄。悉く魔道へ引なし申しが。誠や日本ハいまだ仏法盛シなる由申間。旁も御同心に於てハ。我行徳をも見せ申そふすとあれバ。太郎坊下心には同心申されねども。某の事ハ委細心得存る。又あれに見へたるハ比叡山とて。我朝の天台山にて候程に。先あれハ御出ありて。心の俣に伺ひ御申あれと宣へば。是界は悦び愛宕山を立出る。仏法の事ハ申に及バず。先王法を妨サマシとするを。僧正に御出有りて御祈祷あれとて。度々勅使立申により。則御参内なされんと思召せど。流石頼申人の御参りの事なれば。御車の牛飼の抔と有りて。遅ソトウり給ふ事も余儀なき次第にて候。然とはいへども。王土に住身の勅定を油断任りてハ空おそる敷きに。譬僧正は今少し遅く共。先此巻数をさへ御寺を出せば。早捧申たるも同じ御事なれば。拙者に早々持て参れと有るにより。取物も取敢ず罷出た。急で右ヨリ左へ廻ル参らふと存る。殊に珍らしからぬ御事なれと。先我朝は天地開闢より神国たるに。如何に魔軍の是界成と云とも。仏法を妨サマシ事申／＼思ひも寄らぬ事じや。元ノ所廻リ留リ上ラミ荒不思議や。今迄能キ天氣が。俄に雲の気色の替りたるハ。是ハ何としたる事ぞ。殊に辻風が吹イて。アトヘモドル跡へも正面へ出ル先さへも行れそふもない。実と今思ひ出イた。彼是界と哉覽ハ神通を得たれば。僧正の大内へ御参り有る事を存じ。早魔の業をなすと見へたに。某志人て行事ハ強物じや。爰許にて頼フだ人を待御。供仕らふず。夫ならハ比辺の人々を頼ミ申ぞ。是へ僧正の御

出あらば。我等に御知らせあれ。構て（左ヨリ右へ見廻ス。留ル）其分心得候へく

六 鞍馬天狗 能力

〔文ヲ右ノ手ニ持。シテ名乗り過キ太鼓座へタツロギ、能力出シテ柱ノ先キニテ名乗ル。〕

「か様に候者ハ。鞍馬の西谷の僧正に仕へ申者成るが。東谷へお使に参る。急て（右ヨリ左へ廻ル）参ふと存る。誠に毎とハ申ながら。当年程西谷の花の見事な事ハ。吉野初瀬と申ても。あれ程にハ御座有まいかと存る。定て此お文の内も。左様の事で御座らふと推量致イた（ト云迄ニシテ柱ノキワ迄退リトメ、ワキノ出ラミテ）〔ワキ子方ヲ連右ノ内ニ出ル。尤子方大勢先キへ立、ワキトワキツレ子方ノ跡ヨリ出ル。橋掛リニ立並。〕いやはや是へお出被成た。急て此由を申そふ（ト云子方ノ後口内欄カンノ方へ付キ通り、ワキノ側へ行キ下ニツクバイ。）「如何に申。西谷よりお文を持ち参じて候（ワキトリテシカく）」〔参候（ワキヒラキヨム。謡ニナルト太鼓座へ引居ス。ワキ子方舞台へ出並居ス。能力出テワキノ前ニ居ス。）【謡】いざ／＼花を詠めん（トウタヒ留ルトワキ呼出ス。）「御前に候（ワキシカく）」〔畏て候（小舞「イタヒケシタル」ヲ舞、シテ右ノ小舞済時分ニ出目付柱ノ下ニ居ル。但シシテ真中へ出ルモアリ。聞合スベシ小舞ノ留メ「マリコユミ」ト下ニ居ルトキ、シテヲミテキモヲツプシ其俣立テ。）「是ハ如何な事。はて扱興がつた者か参つた。急て此由を申そふ（ト云ワキノ前へ行下ニツクバイ。）」如何に申。あれへ見馴

ぬ客僧の参られた程に。某の引立ませう（ト云、ウツマクリシテウトスル）〔ワキシカく〕「いや苦うない事。私の追立ませふ。〔ワキシカく〕子方一人残り跡皆立。ワキモ立ヲ、シテ。〕「ア、大事な事で御座る物を（ト言作ワヲ跡ニツキ行、ワキシテ柱ヲコへ）申。くくく。〔ト云〕」喃申。はて扱（正面ヲ向シテ柱ノ先ニテ）是程しうだ座敷を妨る。某の俣ならバ。あれには是々（シテヲミテ「コレく」ト右ノ手ヲ廻シ、ニギリコフシヲ見スル）を戴せ度イ

七 同 天狗 中人間也

〔来序ニテ竹杖ツキ出、シテ柱ノ先キニテシヤベル。〕

「是へ罷出たる者ハ。鞍馬の森に住小天狗にて候。去程に珍らしからぬ云事なれど。先一天四海の諸人四季折々を待得て。様々に興を催すとハイへど。就中春にもなれば都人。花見とて。思ふ友どち打連。爰やかしこに貴賤群衆致す。取分此程は鞍馬の西谷の花。今を盛なるに依て。一山の人々ハ木の下に集り。遊舞をなすを。頼申大天狗（ワキツツキ）羨（ウツク）敷（ウツク）思（ウツク）われ。山伏の姿に身を変じ。今の花見の座敷へ御出あれば。卒忽（ウツク）成（ウツク）ル者か追立ふずると云を。其中にも古老の仁の申さる、ハ。源平両家の童形達の御座候中に。外人ないか、なれ共。人を選に似たれば花をば明日御詠あれとて。一度に座敷を立給ふ。其中にも源家の大将義朝の末子。常盤腹には三男。沙那王殿と申兒一人残り給ひ。客僧に近（ウツク）寄（ウツク）ツて花御覧あれと宣へバ。頼申御（ウツク）方ハ少人（ウツク）の御詞に懸り。誠に心（ウツク）誦（ウツク）人（ウツク）哉と奥深（ウツク）ふ思われ。さあらバ方々を御目に掛ケ申そふすと有りて。先愛宕高雄比叡山。葛城高間如意か嶽。吉野初瀬の花ハ申に及ばず。比良や横河の遅桜まで残



らす見せ給ひ。君ハ元より源氏の大將なれバ。平家を安々と亡さん為に。僧正が谷にて兵法の大事を御相伝有り。我等如キの小天狗にも。少人の打太刀致せと有程に。日頃稽古致たる奥の手を出し戦へ共。誠に君の御事なれバ御伝受被成たる。獅子奮迅虎乱入。飛鳥の翔など、やらん。我等式の聞も及ぬ名太刀を遊せバ。さながら霞稲妻の如くに見へ。忽眼くらミ。中く隣へ寄る事ハ扱置き。即座に切られそふであふない。兎角手を負ぬ先キに我等は退ふ。いやあれを見れば師匠の御出と見へて。大風吹キ谷峯までも震動致すに。少人の御稽古なくてはいか、な。急ぎ呼出し申そふする〔ト云シテ柱ノキワヨリ幕ヘムカイ〕「如く何に沙那王殿く」

## 八 葛城天狗

〔ツレ五人、或ハ三人。大会同断。来序ニテ出ル。〕

「か様に罷出たる者ハ。葛城山に住溝越天狗にて候。ツレ「エヘンくく」〔セリフ、大会同断。〕「去程に役の行者ハ峯を踏分。大峯葛城にて行ひ給ふを。我等の頼申大天狗。心につくく」と思わる、様。役の優婆塞に年月の栖を。浅間に成されてハ如何と思召。色々緊縛妨給へど。行者ハ通力を得たる人にて。あそこへハ指出し爰へはひよつとぬけ。何共妨か成りそふもない程に。責て先達なり共魔道へ引入れんと。葛城山の岩窟にて動を為処へ。魔軍を独り差遣され。御身幾の法力を得。さばかり慢心を具足せし。其妄念ハ如何ならんと有れハ。先達頓て心得て申さる、様ハ。我行力を妨シ為に。魔軍の霊鬼来ルか名乗れと云し程に。此山に住む大天狗の眷属

成が。師匠へ申さん間暫待給へと有折節。頼申御方の方の大声を上げて帰れと仰られた。此上ハ大天狗の自身御座らずは成まいが。其間に彼客僧を。少ト妨ケて見度が何と哉せうぞ。ツレ「おしやる通り鬨ッて見度事でおりにやる。ヲモ「夫ならハ皆の心に思ふ事を謡に作ッてうたふてまふ。ツレ「二段と能ふおりやらふ。ヲモ「いざ話わしませ。ツレ「心得た。ヲモ「溝越天狗の好にハ（扇ヒラフ。ツレ皆々大小前へ下り並フ。ツレ）喧嘩（ヒラキ扇ニテサシ乍右へ廻ル。）口論其外悪乗の。知識辻風。是等（ユウケン）をけばくす時こそ心も面白けれど。飛行自在にかけらん（目付柱ノ方へ走り行キ、又大臣柱ノ方へ走り行キ左へ廻ル。）とするを。梵天帝（ハ）喚り給へバ（少正間ヲミテイカル心アリ。グワツシ下二屋。左ノ袖ヲカサス。右ハ腰ヲカバメ廻ル。）力及ず迷惑さに。ひつそとしてこそ帰りける（左右ニテトメ。拍子一ツ。）

## 九 飛雲

〔来序ニテ出ル。シテ柱ノ先ニテシヤベル。〕

「か様に候者ハ。熊野の権現に仕へ申末社の神にて候。某爰許へ出ル事余の義に非らず。去程に熊野山の先達羽黒に參詣申ス。夫ニ付一年（セ）近江の国伊吹が嶽に於。飛雲走雲など、云鬼神集。往來の人を取り悩ス事限りなし。君此事を聞召及せ給ひ。急ぎ退治あれとの宣旨にて。余五の將軍平の維持に仰付らる、。維持ハ宣旨畏て承り。頓て江州伊吹ヶ嶽に罷越し。程なく彼鬼神共を安々と退治致す。則其時の御恩賞。近江の国余五の庄を給り。夫より余五の將軍平の維持とハ申ス。然るに彼山にて討洩されの。飛雲と云鬼神残り

居て。又只今此先達を妨<sup>シ</sup>と匠<sup>ム</sup>により。権現よりも急ぎ我等に彼山に参り。此由先達に告参らせ申せとの御事に付。取物も取敢ず罷出た。先あれへ参ると存る。誠に彼客僧と云ハ。其隱なき行者成に。如何に飛雲なり共妨<sup>シ</sup>事ハ中々思ひも寄らぬ事じや。兎角時刻移<sup>イ</sup>てはいかゞな。去ながらどこ元にぞ。されはこそ是におりやるよ。急で申渡ふ。如何に先達髓に聞給へ。只今其方に詞を替<sup>ハ</sup>ける老人は人間にてハなし。飛雲と云鬼神にて有間。眼を覚まし行力を以て亡し給へ。か様に申者は熊野の権現の御使。一の王子にて有ぞとよ。我等も随分力を添ふずる間。構て其分心得候へ<sup>く</sup>。●拍子一ツ

#### 十 土蜘蛛

〔竹杖ツキ早鼓ニテ出、シテ柱ノ先ニテ留ル。早鼓留り名乗りシヤベル。〕

「是へ聞敷<sup>カ</sup>そふに不図罷出たるを。如何様成者ぞと御不審を成されふずる。是ハ忝<sup>カ</sup>も源の頼光の御内。独り武者に仕へ申者にて候。某只今爰許へ出る事別の義にても御座ない。此程頼光ハ風の御心地にて。以の外に悩<sup>ム</sup>せ給ふにより。胡蝶と申女房衆の御葉を持参被申。医者数を尽し御養生被成るれ共。未御快気成されぬにより。諸人の息を詰て居申処に。唯今各の御雑談成さるゝを聞バ。昨夕<sup>ツキ</sup>夜半斗の事成るに。何国とも知らず物冷敷僧形一人。君の御枕近く参りて申様。今夜の御心地ハ如何おわしますぞと申上る。其時頼光思召<sup>ス</sup>様は。早夜も更たるに不思議なりと思ひ給ひ。扱汝ハ何者ぞと御意成さるれば。彼僧少も動転せずして。我せこがくべき宵なりさゝがに

の。蜘蛛の振舞兼てするしもある。古哥を連ぬると思召せば。長七尺斗の蜘蛛の像と顕るゝを。何が君の御事なれば。不断御前に置せられたる。膝丸と申御太刀にて切付<sup>テ</sup>給へば。其俣身をひらき退<sup>ツ</sup>とする所を。遁さじと畳掛<sup>テ</sup>て遊せども。化生の者なれば虚空に失<sup>セ</sup>て見へなんだ所に。某の頼<sup>ミ</sup>申御方ハ。常々武道を心掛<sup>キ</sup>早<sup>イ</sup>人なれば。此事を聞と否に御所へ欠付給ひ。唯今ハ御高声に聞へ候ひつる間。取物も取敢ず伺公仕たると。具に仰上られければ。誠に早くも来りたるとして御感に預り。即其時の様子を委敷<sup>ク</sup>御雑談被成。彼膝丸被申御剣を今日よりして蜘蛛切丸と。名付させ給んと御説にて有ると申す。其時頼申人給ふ様。真に珍しからぬ御手柄と申シ。御威光といひ目出度御事ハ申上難き次第なり。扱彼僧形を如何成者ぞと存れば。昔大和の国葛城山に。年久敷住馴し土蜘蛛の精成るが。五体より思ひの俣に糸を繰<sup>リ</sup>出し。自由自在に變すると聞く。又有時は鬼神となつて人を悩<sup>ム</sup>し。往來の者をやらす過ぎず取<sup>テ</sup>て服す。ケ様に徒者を只置<sup>キ</sup>も如何なり。其上彼者ハ御<sup>シ</sup>手に懸り血を曳て候へば。此血を慕ひ行彼者を退治申そふずると。御前にて急度仰上られ。其俣御帰<sup>リ</sup>有り則御用意遊すにより。御内の衆ハ何れもお供に参らるゝ筈じやに。某も伺公致そふと存て罷出た。先頼申人の私宅へ急フ。誠にケ様に目出度<sup>イ</sup>折柄ならでハ。我等如<sup>キ</sup>の者の終に差出る事の御座ない程に。責てケ様の砌なり共手に合ふと存る。いや其許に大勢人声のするハ何事ぞ。何とたのミもふす人の御出じや。是ハ如何な事。我等も随分急で罷出たに早遅も。去なからお跡から見へ隠れに成とも参ふか。いや<sup>く</sup>皆の衆ハ綺羅<sup>キ</sup>美やかな出立て御座ら

ふに。我等の此不断の体にて行事ハいか、な。是非に及はぬ是より宿へ罷帰ふずる。去ながら唯今にても我等を尋る人有らバ。心殿ココロれたると思われさる様に。某の如在なき通とほりを御申有て給われ。構かまへて其分心得候へく

## 十一 鶴

〔ワキ道行ノ内ニ片幕ニテ出、太鼓座ニ座ス。ミチユキスキ案内ヲ乞、一の松立ッ。〕

「誰にて渡り候ぞ〔ワキシカく〕」「お宿参らせ度ハ候へども。旁の様成ル修行者を留申ス事堅き法度なれば。思ひながら叶候まじ〔ワキシカく〕」「いやく私にて借事ハならず候間。唯何方へも御通り候へ〔ワキシカく〕」「荒痛敷イ事哉。何れにがな留申そふやれ。シ、申お宿参らせうずる〔ワキシカく〕」「あの洲崎の御堂へおしやつてお留りやれ。あれを借し申そふずる〔ワキシカく〕」「いやあれハ総堂にて候〔ワキシカく〕」「左様におしつても。川より夜るく化物か上ると申ぞ〔ワキシカく〕」「一段とすねひお人じやよ〔ト云捨テ太鼓座ニ居ス。シテ中人有リテ、シテ柱ノ先へ立。〕」「夜前往来の僧の宿を借せと仰られたを。洲崎の御堂えをしへやり申たるが。未あれに御座るか。但し何方へもお通り有たるか参りて見申そふずる。いや是成お僧ハ奇特に御逗留にて候よ〔ワキシカく〕」「誠に夜前はお宿参らせ度ハ存たれとも。所の大法なれハ思ひながら借不申候。扱何にても不思議なる事ハなく候か〔ワキシカく〕」「心得申候〔ト云ワキノ前行居ス。〕○「扱お尋有度キ

とハ如何様成御事にて候ぞ〔ワキシカく〕有リ。セリフ三番目同断。」「昔近衛の院の御位の時。帝の御惱以の外に御座候ひて。大法秘法の御祈祷にも叶はず。博士を召て占せらるれば。占方を考て申上る様。是ハ偏に变化の者の業にて。夜なく御殿の上迄来由申を。いかゞ有るへきとて公卿詮儀成さる、所に。其中にも有る智臣宜ふ様。先帝にも去ル例の有れば。武士に仰て射させられよと有云。此義尤然るへしとて。源平両家の内を尋給ふに。中にも頼政と云射手を選出されしかバ。其時頼政の出立にハ。魚綾イサリウの直垂を着し。滋藤シゲトウの弓に鋒矢トカリヤ二筋添て持。郎等には遠江の国の住人。猪の早人と云寸計の早者を一人連。内裏の大床に伺公し良久待るれハ。案のここと夜半過と思敷キ時分に。東三條の森の方よりも。黒雲クワク一群飛来り。御殿の上に霞たるを見て。鋒矢を取つてつがへ雲の中と思敷所を。よつ引て切て放されたれば。あたつたと手答へして。御殿のうへをころめいて。庭上へどうど落る所を。早太ハつるくくと寄て取つて押へ。鎧通しを持って九刀突れたると申ス〔元本九日ト有直シテ九刀ト有。〕〔ワキシカく〕」「実と九刀が定て御座らふずる扱火をともし御らふじられたれば。種々の物が化たと申ス「先頭は猿胴ハ狸。目ハ猫足ハ尺八。尾ハ長刀啼声ハ笛に似たるとて夫より彼者の名を笛々と申実候〔ワキシカく〕」「誠に是も鶴が本ホンで御座らふずる。扱ケ様の怖おそキ物を聊爾に捨置れてハと有り。窺うかが舟に入れて流されたれば。しばしハ此浦に流れ滞りたるとハ申せど。委しき事ハ存も致さず。先我等の聞及たるハ如斯にて候「是は奇特成事仰らる、物かな。扱ハお僧の御心中貴きにより。古の鶴の亡

魂頭れ出。詞を替したると存る間。暫是に御逗留有り。彼者の跡を懇に御弔あれかしと存る〔ワキシカく〕〔太鼓座へ引、中入。後シテ後見、出入ル也。〕

## 十二 鵜飼

〔初ワキ宿借ル。会釈、鵜ト同斷。中入後、此〇印迄同様。〕

〔扱お尋有度とハ如何様成る御事にて候ぞ。「是は思もよらぬ事お尋有る物哉。去ながら其鵜遣ひの事をば我等の委敷〴〵存候間。語て聞せ申そふずる。「去程に此石和川と申ハ。昔より川の上下三里が間ハ。堅く殺生禁斷の所成るに。是より下に岩落といふ在所の者。夜毎に忍登ッて鵜を遣ふ由風聞致を。此里の若い者の申様。石和川の殺生仕らぬと云事ハ。近か国までも其隠なきに。当所の者を有るがなしに致とて腹を立。何様彼れを一ト度見頭し。後代の例に伏漬に仕ふずるとて。深く隠て夜なく〴〵待をば夢にも知らず。有る闇の夜毎のことく。真鳥を放ちつかふ所を。日比覘し若者共は嬉敷〴〵思ひ。前後よりぱつとよりに。重科人を無手と捕へ。汝年月此辺の人々を侮り。堅キ法度の所にて漁捕を致す事。前代未聞の曲事成りとしかりけれバ。其時盗人の漁翁答て曰。我等も近郷に住者とハ申ながら。左様に殺生禁斷の川とも存せぬ故。皆人にさへ異見をも申べき老の身が。天命の尽き懸る聊爾成る事を仕り。今は一段迷惑致候。去なから此度ハ我等の命をお助けあれ。是からハ御意次第に仕ふずると程々に侘けれど。利非をも聞ぬ早り若者共ハ。矢庭に成敗せふすと云者もあり。先ハ走り掛ッて散々に打者も有るを。某の見付て

皆々に申様。如何に科人なりとも左様にな痛メそとい、て。大竹を取りにやり。弐ツツ、に割たるを三所あミて。其實の上に鵜遣を緩りと寝させ。片端に巻いて繩を以て五ッ所しかとしめ。両の端に大キな石を二ッ結付て。所をもかへずいさわ川の淵へだんぶとはめて候。扱唯今ハ何と思ひよりて。鵜遣の事をお尋有たるぞ不審に存候。〔是ハ奇特成事仰らる、物哉。扱ハお僧の御心中貴キにより。古への鵜遣の亡魂頭れ出。詞を替したると推量致す。何と利益は同じ事なれば。暫く是に御逗留あり。一石に一字御書付被成。彼者の跡を念頭に御弔ひあれかしと存る〔ワキシカく〕〕「さあらバ石を拾ふて参らせふずる

## 十三 橋弁慶

〔早鼓。竹杖ツキ出、シテ柱ノ先ニテ名乗ル。ツレ出ルトキハ、ツレ地謡座の方ニ立ツ。〕

〔か様に罷出たる者ハ。下京辺に住者にて候。我等の是へ出る事別の儀にても御座なひ。先平家は一天四海を掌の内に納め給ふといへども。入道相国の悪逆により。諸人の息を詰て而已居申処に。此程西塔の武藏坊弁慶ハ。去る宿願の子細有ッて。東山十禅寺に参籠申されしが。又今夜より五條の天神(スム)へ。丑の時詣せんと有るを。去ル人異見申されける様ハ。昨日夜更て五条の橋を通りし時。年の頃十二三計成る幼き者の。小太刀にて切ッて廻るハ。さながら蝶鳥の如く早けれバ。今夜の丑の時詣ふデハ。只思召留れかしと有るを。弁慶程の者が聞逃は致まじひ。是非共に参らふすと有るが。じや

うのこわいものにこそ寄れ。南方不思案な人にて在す。扱其橋へ出て人を切る。幼イを能く聞ケバ。源家の大将義朝の末子。沙那王殿と申少人の御座すが。幼少にて父御におくれ給ひ。鞍馬の東谷鉦の坊に御入り有る頃。天狗に兵法を御相伝有りし。稽古の手柄を見せ度思召折節。母上に向顔の為都へ帰り給ふが。其児の日暮て五条の橋へ御出有り。往來の人を遣らす過ぎず切らるゝと云。由々沙那王殿にてもあれ。又ハ化生の物にてもあれかし。今宵弁慶よりも先へ行。彼知れ物を退治して。隠なき譽を取ふと存る。誠に（右ヨリ左へ廻ル）比年月人の前にて口を聞なから。ケ様の者を唯置（右ヨリ左へ廻ル）も無念な事（元ノ奥ノ廻リ留ル）で御座る。いや／＼某は心ながらも肝の太イ事を思ふた。我等一人（元ノ奥ノ廻リ留ル）参ッて手柄をせふと云ハ無分別な事じや。入らぬ事を申さず共。足本のかかる時早ふ罷帰らふ。喃／＼おそろしやの（下云ナガラ入ル）

## 十四 同 二人間

「か様に罷出たる者ハ。下京辺に住者にて候。我等のはへ出る事別の儀にても御座ない ツレ」「エヘン／＼ ヲモ「いやわごりよハ何と思ふてお出やつたぞ ツレ」「様子ハ何共知らぬが。わごりよか聞敷そふに出るに依是迄付（元ノ奥ノ廻リ留ル）てハ出たが子細ハ何共知らぬよ ヲモ「夫ならバ子細を語て聞そふ ツレ」「急て語らしませ（語同断）」此印迄。」「不思案な人でハないか ツレ おしやる通り不思案な人ておりやる ヲモ「扱其橋へ出て（是ヨリ又同し）」△比印迄。」譽を取ふと思ふがわごりよハ何と思ふぞ 連「是ハ一段と能

ふおりやらふ ヲモ「夫ならバいざ行ふおりやれ／＼ ツレ」「心得た ヲモ「喃何と思わしますぞ。此年月人の前にて口を利（元ノ奥ノ廻リ留ル）な得た ヲモ「いや／＼腹痛者。先待／＼。是は如何な事。何とせふぞ。いや／＼某は心ながらも肝の太イ事を思ふた（是よりトメ迄前ノ通り）。」

## 十五 小鍛冶

〔早鼓也。當時ハ諸流共ニ早鼓ナシ。觀世流ハ何モナシ。竹杖ツキ只出、シテ柱ノ前ニテ名乗ル。〕

「か様に罷出たる者を。一円に御存ない御方ハ。何者ぞと思召れふずる。是ハ三条の小鍛冶宗近の弟子にて候。去程に珍らしからぬ云事なれど。先宗近の打申されたる太刀刀ハ。さわる所が欠ず。屯ぬ物切レ成に依て。老若共に小鍛冶を指ぬ人は。彼方此方の付合にても。皆初心な様に宣ふ程に。国々在々よりも。日々に討物を誂へに來れど。少も隙なくて皆請取申されぬを。種々の縁取をして御頼ミ被成るゝ。夫に付爰に目度（元ノ奥ノ廻リ留ル）事（元ノ奥ノ廻リ留ル）の有るぞ。今の帝一條の院。頃日

つく／＼と思召様ハ。劍を打せて置れんと思召され。今日本に何と云者か。太刀刀をよく打ぞと宣旨有ければ、或古老の臣下宣ふ様ハ。小鍛冶に増たるハ御座なき由風聞致すとあれば、実も彼が上手成る由一同に仰上らるゝ。殊に今夜帝に不思議の御霊夢在により、橘の道成の卿宣旨を取ケ。三条の小鍛冶宗近に、御劍を仕れと有りて勅使立を。宗近一世の面目と思ひ。謹んで申上ラるゝ様は、尤御劍キなどを仕るには。我に劣らぬ。相槌打者なくしてハ罷ならず候へ共。併論言汗の如しと申程に。即領掌申されたるが。南方大事のお請にて候。拟宗近心に思わるゝ様。ケ様の大事の打物には。神力を頼まざハ成間敷キと存せられ。先氏の神なれば稲荷へ參給ふ処に。何国共知らず見馴ぬ人の出て面々ハ三條の小鍛冶宗近にて渡り候き。雲の上より御劍を仕れと有りて勅使立共。心安く思ひお請を申上。急き檀の飾待給へ。其時節我等の行て力を添んと云も敢ず。其俣稠の内へ入給ふ。此御劍キの勅ハ唯今成に。早知りたるハ扱もく奇特成りとして。弥稲荷の明神を信心に存じ。今下向申されて候。いや其許の（ウキ正面ヲミテ）賑なハ何事ぞ。やあ／＼じやあ。扱も早イ事哉。去ながら此由を外の弟子共ハ存せまい程に。急て触れて聞そふやあ／＼皆／＼承り候へ。頼申宗近の宿所には。今度の御劍キを仕らんと悦び勇ミ。飯屋を建新敷金床を据。其上に檀の飾。稲荷の明神を勧賞申シ。七重に注連を曳。精淨潔斎にせんとして。夥敷用意じやと申間。各も早々出られて尤（左ヨリ右）候。構へて其分心得候へ

#### 十六 同 乱序

「是ハ都四條隣に住者にて候。去程に此君一條の院。此中つく／＼と思召さるゝ様。我日の本トの帝位に備りながら。何にても有れ未世の宝に成物を仰付られ。後記に止メ度ク思召に。劍と云物ハ朝敵を鎮。鬼神を順へ虎狼野干も退バ。是に上越す物ハ有まじ。惣じて劍の発を尋ぬるに。天神七代地神五代。大戸の道の命大戸辺の尊の時に当て。神劍天より降下ル。夫より人皇の御はしめ神武天皇に伝り。神器と成るを景行天皇の第三の皇子。日本武の尊の帯ル所の十束の劍是なり。然りとハ云へとも神秘を白地に云ハ恐れなり。如斯神代よりかゝる目出度キ宝物を。今打セ置んと思召所に。今夜帝に不思議の御霊夢の有りて。橘の道成の卿勅を蒙り。鍛冶多キ中にも。三條の小鍛冶宗近に御劍を打て參らせよと有バ。宗近謹て申上る様。か様の大事の御劍を仕るには。我におとらぬ相槌打物を頼ミ申そふずる。殊に氏の神ハ稲荷にてまします間。此稲荷を頼ミ奉とて。稲荷へ歩を運折節。道もなき方より童子一人来り。如何に宗近天子の御劍キを。檀を飾り心清淨にして打給ハ。其時我か姿を顕ハシ。力を添んと云も敢ず。稲荷の山に入り給ふ程二。小鍛冶はたのもしく思ひ下向申され。押付細工所を作り隣りを清め。早檀を築キて御七五三を引き。殊の外渴仰のけしき見へたると申ス。若御劍打を見物に御出あらバ。我等も參り申そふずる間。何時成共御知らせ有れ。構へて其分心得候へ

## 十七 吉野天人

〔初同ニテ出、太鼓座ニ居ス。中入過、シテ柱ノ先へ立テ、シヤヘリ。〕

〔是ハ和州吉野の郷に住者にて候。扱も当山の桜世に隠れなきに由り。毎年花の盛りにハ貴賤群集致す事。申も中々愚にて候。夫に付都人。花見とて若キ人を伴ひ来り。止事なき女性の見へし程に。いかなる人とぞ不審をなし申されければ。我ハ上界の天人なるが。今宵ハ爰に旅居して待給ふならバ。古エの五節の舞。今月の夜遊に学びて見せ申さんと。迦陵頻伽の声はかりして失給ふと承る間。ケ様の例すくなき事をバ。諸人は存すまじく候間。此由聞せばやと存ずる。やあく皆々承り候へ。当山ニ於て上界の天人。夜遊を学び申さる、間。老若共に罷出て見物申され候へ。構へて其ぶん心得候へ。〕〔ト云太鼓座へ行居ス。後シテ出、地取り入ル也。〕

## 十八 紅葉狩 悪女

〔シテ次第第二テ出ル。其跡ニツキ出、太鼓座ニ居ス。次第過キ、ツレ女トモニ座ツキ、シテ柱ノ先ニ立、フル。〕

女「やあく皆々承り候へ。此辺の上臈衆紅葉を御覽被成る、間。幕打廻し屏風を立。酒宴の用意有レとの御事なり。構へて其分心得候へや。〕〔ト云太鼓座へ引ク。ワキ一セイ過キテ、シカく有。ワキ連案内ヲ乞。〕「誰にて渡り候ぞ〔シカく〕。」「此辺の上臈衆紅葉見にて候。又あれ成ハ如何様成御方にて候ぞ〔ワキツレシカく〕。」「由々そなたは誰人にてあれ。此方ハ只去ル御方と斗御申候へ

〔ト云引ク。中入ノトキ、ツレ女ノ末ニ付入ルナリ。〕

## 十九 同 武内

〔来序ニテ出ル。太刀右ニ持。〕

「か様に罷出たる者ハ。八幡宮に仕へ申末社の神にて候。去程に珍らしからぬ御事なれど。先我朝は天地開闢より神国なれば。霊神数多御座すとはいへど。中にも八幡の御事ハ。皇后の胎内にて早三韓を順へ。後に弓矢の守護神とならせ給ふにより。此秋津洲に於。武家の誉を取り給ふ事。偏に八幡の利生に非ずと云事なければ。老若共に弓馬の道を嗜む人々。袖を連ね踵を次で。歩を運衆生数限りなれば。神前の一入賑か存す御事。又と並たる神も御座なく候。夫ニ付我等の是へ出る事余の儀に非らず。余五の將軍平の惟持。信濃の国戸隠山の御狩をせんと。此程種々様々の用意有るを。彼山には鬼神の住けるが。神通を得たる故に此事を存し。何共して取奉るとたくミしに。人間ハ如何なる貴人高人も。酒博女の道には心を悩す物成りとして。如何にも双なき美人と現し。外有山の傍に紅葉見と号して並居たるを。惟持夫をバ夢にも知らず。唯深山に女人の多く有を見付。使者を立いかなる御方ぞと尋給へば。此辺の上臈衆紅葉を見給ふと申を。由々誰人にてあれ。女房衆の酒宴の折から乗打ハ叶ふまじと。馬より下りさらぬ体にて通り給ふを。九献を一ッ御参りあれと袖をひかゆる。惟持も岩木にあらざれば立帰り申さる、を。鬼女ハ無明の酒を取く数杯つき。前後も弁へ給わぬ有様を。八幡三所は御存被成。此度惟持に少も悪事の有りてハ。神国の

甲斐有間敷と思召。拙者に早々彼山に飛移り。此由告知らせ申せとの御事により。即御劍<sup>シ</sup>を遣さる、間。是を持戸隱山へと急ぎ候。

流石智恵第一の（右ヨリ左へ廻リ、橋掛りへ行）貴人とハ申せど。方便事を存ぜられぬハ尤じや。兎角時刻を移<sup>イ</sup>てハ叶ふまい。今少し急ギ申そふずる。（是迄ニ松マテ行留リ）是ハ早戸隱山と思敷て。隣ハ（見廻へ）人倫

離れた深山<sup>シ</sup>山の。谷峯（下ヲミ、上ヲミ）遙に岩屈多く。さながら鬼神の住そふな山じやよ（ト云乍舞台へ出ル）亦此傍な紅葉は扱も見事哉。いや大方爰元にて（シテ柱ノ先へ出、ワキ正面ヨリ見廻シ、ワキヲ見付）有そふなが。されハ

こそ是に生体もない有様じやよ。急て此由を申そふ（ト云、少シワキノソバへヨリ）如何に惟持慥ニ間給へ。八幡よりの御<sup>シ</sup>使に。武内の神<sup>シ</sup>是迄参りたり。此山に住鬼神御身に毒酒をしい。酔伏給ふを取んとするを。

八幡ハ影身をはなれず添<sup>イ</sup>守り。則御劍<sup>シ</sup>を遣さる、間。（ト云乍、ワキノヒサノソバへ太刀ヲ置ク。跡へ戻リナカラ願ヌキ、右ニ持）是を持鬼神を安く順へ。早々

上洛あれとの神託なり。構へて其分心得候へく（●拍子一ツ）

### 廿 羅生門

〔一人、或二人。橋弁慶同断。尤早鼓。〕

「箇様に罷出たる者ハ。渡辺の綱の御内に仕へ申者にて候。去程に頼申綱ハ。唯今人と争論を致さる、其子細ハ。源の頼光丹州大江山の鬼神を順へ給ひしより以来。武士を数多御集メ成されし故。此程は春雨の晴間も見へ分ぬ徒然に。頼光を初として。其外保昌綱公時貞光季武独武者迄末座に伺致し。種々の御雑談の有折節。頼光の御意には。何にても珍らしき事や有るとお尋成さる、総じて貴人

の御<sup>シ</sup>前などにて。聊爾に物をバ申し事成ぞ。保昌の進ミ出て宣ふ様ハ。此程九条の羅生門に鬼神の住<sup>シ</sup>で。日暮て通る者をバやらず過さず取ル由申さる、を。頼申人の仰らる、ハ。土も木も我大君の国なれば。何くか鬼の宿と定んと聞時ハ。流石に彼羅生門ハ都の南門なれば。譬鬼神の住<sup>メ</sup>バとて住せ置るべきか。是ハ誠しからぬ由御申あれば。重て保昌の宣ひけるは。扱ハ我等の御前<sup>シ</sup>にて偽を申と思召か。其儀ならば今夜にてもあれ。彼羅生門へ行て御覽せよとあれバ。そこで頼ふた人のむかえつられか様に承るハ。某の得参る間舖<sup>キ</sup>物と思召さる、か。夫ならば今夜の内に。其證跡を見せ申そふすると喚り給へバ。御<sup>シ</sup>前の人々ハ一同に。去りとてハ御無用と御留<sup>メ</sup>有るを。いや保昌に対して遺恨はなけれ共。王城に鬼神の住とあれバ。一ツハ君の御為なれば。印を下されい立て参ふずると乞る、を。頼光も下心には御留被成度思召せども。左様に御意あらバ御心おくれ給ひたると。人に思われてハと思召。則<sup>シ</sup>印を被遣し間。綱ハ札を給りて。其保宿へ御歸り被成たると申間。某もお供に参らふと存て罷出た。急て参ふ。（右ヨリ左へ廻ル）誠に頼申御方を誉るでハ御座ないが。左様に鬼神の住と有る処へ御座ふと有様な。けなけな事ハ御座るまい。某も道々御奉公申ハケ様の時の為なれば。此度手柄を任り。お詞に預ふと存る。（是迄ニ廻リ留リ）其皆の云ハ何事ぞ。何と頼申人の早御出じや。扱も早<sup>イ</sup>事かな。某もお供に参りたけれども。お供には誰も召連られぬとあれバ。某ハ是より宿へ罷帰る間。自然頼ふだ人のお尋あらバ。こなたへ御知らせ有て給われ。構へて其分心得候へく（左ヨリ右へ見廻シ、ワキ正面ヲ向トメル）



## 二十一 二人間

〔立形、橋弁慶同断。〕

「か様に罷出たる者ハ。渡辺の綱の御内に仕へ申者にて候〔ツレ「エヘンくく」セリフ、橋弁慶同断。〕」

「〇此印迄前同断。〕宿へ帰られたか南方浮雲争ひでハなかつたか ツレ「誠にわこりよの云こくく左様に鬼神の住と云所へ御座らふと有様な。無分別な事ハ

おりやるまいぞ ヲモ「其上某の思ふは。鬼神の住所へお出成さ

れふならば。定て人をあまた召連れられふと思ふたれば。唯御一人、御座ると聞たに依て。某ハお供に参ふと思ふて出たが。わこりよハ

何と思しますぞ ツレ「其事じや。常々御奉公申ハか様の為じや程に。わこりよさへ行ならば某も行いでハ ヲモ「夫ならば先頼

ふた人のお宿へ向けて行ふ。いざおりやれ ツレ「心得た ヲモ「何と思わしますぞ。頼だ人を管でハないが。さ様に鬼

神の住と有る所へお出被成れふと有様な。けなけな事ハおりやるま

い「誠に其方の云、ます通り。某杯は人を大勢連れてさへ強物じやに。増て御一人御座る様な。けなけな事ハおりやるまいぞ ヲモ

「其通しや共（云々通り廻り留り） ツレ「扱のふ某は今迄ハお供を仕ふと思ふたか。俄に腹か痛んで成らぬ程に。得参るまいぞ ヲモ「は

て扱わこりよハむさとした事を云。其腹の痛ひ分て此度のお供をは

つそふか。いさおりやれ行ふ ツレ「辞わこりよか何といふても頻に痛（痛た程に）て成らぬ程に。先宿へ帰つてとつくりと。養生せねハ成らぬ戻ると云ハバ（ト云捨て逃入ル） ヲモ「やい（ト云年シテ柱ノキワ迄退火行）先待く。まだ用が有有わい。はて扱世間にハあの様な。

臆病な者か有るに依て致様かない。去なからあれハ参らす共。某は行ふか。いやくあれが戻つたれハ。某も何とやら行とむなふ成つた程に。先宿へ参つて分別を致そふ。是ハ帰るでハない。唯戻るぞ（ト云年入ル也）

## 二十二 現在鶴

〔二人。早鼓ニテ出ル。橋弁慶同断。〕

「か様に罷出たる者ハ。源三位頼政の御内に仕へ申者にて候〔ツレ「エヘンくく」セリフ、橋弁慶同断。〕」

「先是ハ禁中に於の事成が。丑の刻斗と思しき時分に。東三条の森の方よりも黒雲一群飛来り御殿の上に覆と思召せど。君ハ其俣御惱と成せ給ふ。夫に付或人奏し申さる、様ハ。是化生の者の業と見へ申間武士に仰て射

させられよと申さる、所に又一方より申上らる、ハ。此以前にもケ様の刻。弓の弦音を致す其験にて。程なく御快氣被成た例の有れば。

先例に任せ射させられよと申上るに付。さあらバと有つて源平両家の射手をお尋有るに只頼政に仰付られて然るへからふずると口々に

宣ふ故。頼だ人の所へ勅使立に。頼政申さる、様ハ。朝敵など社候へ左様に未目にも見えぬ。化生の物を仕れとの御事ハ。迷惑に御座

ると有つたれども。是非に及ず畏つたとお請を申され。則今夜何公仕ふずるとて。取物も取敢ず御用意有が御供にハ遠江の国の住人。

猪の早太一人斗お連りやつて。わこりよや某をバ連まいと仰らる、

が。常々御奉公申ハケ様の時の為なれば見へ隠れになりとも行ふと思ふが。其方ハ何と思わしますぞ ツレ 其方のおしやる通り。

常々御奉公申ハか様の時の為じや程に。わこりよさえ行ならバ某も行<sup>イ</sup>でハ ヲモ 夫ならバ先頼ふだ人のお宿へ向<sup>テ</sup>て行ふ。いざおりやれ ツレ 心得た ヲモ 何と思しますぞ。頼だ人を誉るでハないが左様に化生の物を射させられふと有るハ。けなけな事でハないか ツレ 誠に其方の云します通り。某などハ人を大勢連れても強物じやと思ふに。増て御一人御座らふと有る様な。けなけな事ハおりやるまいぞ ヲモ 其通じや ツレ 扱のふ。某は今迄ハお供を仕ふと思ふたか。俄に腹が痛<sup>シ</sup>て成らぬ程に得參るまいぞ ヲモ はて扱わごりよハむさとした事を云。其腹の痛分で此度のお供ははづそふと思ふか。いざおりやれ行ふ ツレ 「いやわこりよか何と云とも頼に痛<sup>シ</sup>で来た程に先宿へ帰<sup>ツ</sup>てとつくりと養生せねば成らぬ戻るといへば ヲモ やい<sup>く</sup>先待<sup>く</sup>。また用か有<sup>ル</sup>ハひやい。若<sup>イ</sup>者と云ハあれじや。兎角の談合も成らぬか何としてよからふぞ。辞<sup>イ</sup>其許に(ウキ正面ミテ)どどめくハ何事ぞ。何と頼申人の是へ御出じやといふか。漸々晩する程に尤しや。某もお供に參りたけれ共。誰も參るなど仰出された程に拙者ハ是より宿へ罷帰る間。若頼た人のお尋有らバ。必ず我等に御知らせあれ。構へて其分心得候へ<sup>く</sup>。

二十三 熊坂

〔初同ニテ出、太鼓座ニ居ス。立形、二番目ノ間断斷。〕

「是ハ此隣に住者にて候。今日ハ物淋しき折柄なれば。青野か原へ立出で心を慰ばやと存る。辞是成お僧ハ。何とて此所にハ休らひ給ひたるぞ」中々此隣の者にて候 「心得申候。扱お尋有度とハ如何

様成御事にて候ぞ 「是は思ひもよらぬ事お尋有物哉。去ながら爰に熊坂の長範と申て。悪逆を致し相果たる物の子細を。片端物語申そふずる 【語】「去程に熊坂の長範と申ハ。生<sup>レ</sup>ハ北国の者成しが。幼少の時より飯染に人を掠。夫を稚心に面白<sup>ク</sup>思ひ。爰<sup>ニ</sup>彼にてひた取に取る程に。後にハ悪徒の名を得。諸国の盗人彼に付添<sup>イ</sup>。国々をあるき有徳成者を押へて取るに。一<sup>チ</sup>度も不覚を致たる事のみなかりたると申ス。然れば源家の大将義朝の末子。沙那王殿と申少人の御座すが。平家の代の萬未断断<sup>ミダシ</sup>分野を御覽じ。何共して東國に下り。御舎允兵衛の佐殿に此事を語申。一<sup>ト</sup>度切<sup>ツ</sup>て登り。源氏一統の御代となし度思召折節。其頃三条の吉次信高と云商買人は。毎年五畿内の宝物を買集メ。奥へ下ル商人を御頼あり。忍びてお下向被成しを。熊坂先をば夢にも知らず。吉次か高荷を取らんと匠<sup>ミ</sup>。京都を出る時よりも目付を置<sup>キ</sup>。当赤坂の宿にまんまと付込<sup>ミ</sup>。究竟の盗人七八十人程。此青野か原に押寄談合致し。夜半過鶏の前と思敷時分。吉次か宿所へ夜討を掛しかバ。内にも老た若に寄らす人多しと云へど。何れも路次に草臥前後も知らず伏たりしに。沙那王殿只御一人<sup>シ</sup>渡<sup>リ</sup>合。進<sup>シ</sup>て掛る盗人を残りすくなく討給へバ。夜盜の大將長範ハ独り無念に存じ。討物追取直し少人を目掛<sup>テ</sup>。詰<sup>ツ</sup>ひらひツ請<sup>ツ</sup>流<sup>イ</sup>ツ。秘術を尽し戦へども。沙那王殿には年月の手柄も出ずして。終にハ討れたると申ス。夫迄ハあの人見の松に遠見を置<sup>キ</sup>。登り下りの旅人<sup>シ</sup>里通ひの者迄も。討取<sup>リ</sup>剥取<sup>リ</sup>任。遠国他国迄も迷惑致たるが。熊坂か相果ての以後は。上下の旅人も心易通りたるなど、承る。先我等の存たるは斯のことくにて候 「是ハ奇特成

事仰らるゝ物哉。古の長範は悪逆を而已致たれば。誰有ッて跡を弔フ者も無きにより。後世を能く問われ度ヲ思ひ。熊坂か幽霊顯れ出詞を替したるかど存る間。余りに不便成ル事なれば。暫く是に御逗留あり。彼者の跡を御弔あれかしと存る。

二十四 鍾馗

〔立形、熊坂同断。〕

「是ハ唐土終南山の麓に住者にて候。今日ハ物淋敷折柄なれば。罷出て往來の人を見て心を慰はやと存る。辞是ハ何国より何方へ御通り有る人ぞ〔セリフ二番目ノ如シ。〕」【語】「各も遍く御存の事なれば。是は詳に語申に及ねど。去ながら大方大唐の習には。其人の器量骨柄の能き悪敷に寄らず。又ハ老若の隔もなく。氏素生の氣貴分チもなくして。如何成ル田夫野人の子なりといふとも。学問の達シたる者なれば。榮耀榮花高位の望も叶イ。一類迄も夫に應じて人となり。諸人に困饒渴仰せられ。子々孫々迄も名を後代に奉ル故に。一在所の惣知りハ隣郷の司を望ミ。一郡の学匠ハ一国を心掛ケ。國中に名得た儒者ハ及弟致し。己に天上の交を為に依て。士農工商の家々の幼イ衆も。八歳小学十五大学とハ申習す。然ルに昔終南山の麓に鍾馗といへる進士の有りしが。幼少の時より書物を面白く思われ。何様一ト度ハ学文の奥儀を極んと。夜る昼るの境もなく嗜まれけるに。早一チ度聞イたる事ハ忘れず。大智なる故。万巻の書を誦ソツ給ひしかば。古へより儒者の用ひ来キル事と。学文の道には何を問掛ケたり共。つゝの事ハ有間敷キと自慢をせられ。伯父ハハツの御時

武徳年中の頃。及第に上り申されし処に。類ひすくなき才智の学匠たりといへど。誠に天命の尽ツキたる故か。及第叶ハずして其俣帰ルりし時。鍾馗心に思わるゝ様。此年月学文したる事を空敷して。古郷に帰り人に面をオシ瀑事。骨髓コヅネに染て面白ナふや思われけん。南方短慮成ル人にて渡り候ぞ。玉階タマノキに首を触して死するを。忝も帝ハ聞し召されて。彼者の心中余りに不便に思召により。頓て死骸を土中に込置れ。緑袍を贈官成されたと承る。されども其執心今に残り。終南山に住トシで年月を送り。人に付添ツ忽奇瑞をなすと申習す。先我等の存たるハ如斯にて候。「是ハ奇特成る事仰らるゝ物哉。古への鍾馗大臣ハ。禁中の悪鬼を鎮んと思わるゝ折節。旁の帝都へ趣キ給ふにより。雲の上へ此事を告知らせ申さんとて。鍾馗の亡魂顯れ出。詞を替されたと存る間。暫く是に御逗留有り。重ねて奇特を御覽あれかしと存る。

二十五 張良

〔竹杖ツク。早鼓ニテ出。シテ柱ノ先ニテ、シヤベリ。〕

「か様に罷出たる者ハ。漢の高祖の臣下。張良の御内に仕え申者にて候。去程に珍らしからぬ御事なれど。高祖の御内に我もくと思召臣下。数多おわしますとハ云へど。中にも頼奉る張良ハ。君を重シじ朝暮御伺公被成るゝ故。御前に於て御出頭並なければ。諸候の内に中の悪敷キ人もなく。朝夕門前に市をなすとハいへど。俸禄に目出て非分を捌オシき在マシます。仁義の道一ツも闕カケたる事なく。民を憐ミ慈悲心專にして。家中の法度忠チ仰付られ。御内の者には常に情ケ深キ

に依て。哀れ此主君の御用に立たす。一命をも参らせ上んと思ひ。諸人の起伏に忝かたじけなく存る心中。誠に天道迄も通じけるか。此以前にも様々の奇瑞有あつて。何事も思召俣あに御座候。夫に付比程不思議の夢を見給ふ。其夢中の様体。比山蔭ひやまかげに下くだ邪よこしまといふ所に土橋有り。そこに何となく休やす給ふ処に。馬上に老翁来りて申さる、様ハ。今日けふより五日に当あたり日はへ御み出であれ。兵法の一巻の書を授たまふと。慥たしかにいふと見て夢ハかつとは覚ぬ。扱あも是ハ稀代成る事を見て有る物哉。総じて夢といふ物ハ合ふ事も有り。大方ハ合ぬものとハ云ながら。され共兵法の書を授んと有るを。知らぬ体にて唯置ん事も残多く思われ五日して彼下邪へ御越みこえれば。案の如く夢を見せ申されたる老人の早疾はやびに來りて申さる、様は。何とて張良は遅く御出ありたるぞ。老たる者と契約有るとい、殊ことに大事の秘伝を授んと云に。其不執心にて相伝ハ成まじきとて。殊の外不興ふきよう申されし間。頼申御たのま方ハ誤たる体にて。謹つつしめて暫く御入有る故。彼翁も程なく機嫌を直し。又今より五日に当らあたり日はへ御出あれと。云も敢ず其俣暮あに失給ふ。張良ハ先まず度の夢中をさへ嬉しく思召に。是ハ正敷く日の前の約束なれバ。人も愛せぬ味を含んで御帰みかへり有る。然らば重て下邪へ御越有る時のお供ともにハ。誰々を召連らる、ぞ。少と伺ふと存じて罷出た。急で参ふとト云存少シ先キへ出ル。存る。其皆の云はワキ正面ヲミテ。何事ぞ。

何と頼申人の早御出じや。去れバこそ日外の遅おそイを無念に思ひ玉ひ。此度ハ早く御出有ると見へたに。今御供の沙汰など御意得たらバ。却て御機けんかわるからふに申まい。去ながら張良の我等を召さよバ御知らせあれ。構かまて其分心得候へ左ヨリ右へミ廻シ、ワキ正面ヲ向トメル

## 二十六 藤渡

〔脇、次第二テ出ル。跡ニ付出、太鼓座二居。当時ハ初メノフレナシ。ワキノ方ニテ済ム。ワキ連、太刀持也。太夫中人前ニ、ワキ呼出ス〕

〔御前に候「畏て候ト云、シテノ後口へ行き、下二居テ腰ニ手ヲ付。〕「旁の愁嘆ハ尤なれ共先お立ちやれト云、引立連行ナガラ。〕「皆人の親は不器用な子をもかわゆく存じ。東西を弁ぬ幼子さへ別れを悲むに。増てや成人の子を失ひ嘆かる、事余儀なけれど。今ハ頼申人も不便に思召。我等迄も痛敷う存れど。早帰らぬ道なれば。此上ハふつと思ひ切きつて。其方の後世を大事と能く願ひ。逆様なれ共なき人も弔ひ給へ。又跡をば世に立させらる、様に。某随分取合あせを申そふずる間。先宿へ帰られ候へやト云迄ニ、シテヲ幕へ送り入。シテ柱ノ先へ行、シヤベリ。〕「扱も去年此所にて源平の戦を思ひ出せば今も怖しや。平家ハ数千艘の兵船を浮へ。此小島の前に居たりし所に。源氏はあの向ひの西河尻。藤戸に旗を立てられし程に。源平海岸を隔陣を取給へば。舟なふして越すべき様もなかりし処に。最前頼申人の御物語のことく。兼て案内を問れ御存しあれバ。頼朝より遣されし芦毛なる馬に乗り。海へ颯と打入れ給ふほどに。某も誰にか劣べきと思ひ。盛綱に付て向ひの磯迄至りしが。藤戸を渡わたスと見て平家ハ船を側立て。取詰引詰散々に射立し程に。某は其俣取あつて返し。面目もない事なれど人足の仕置を致た。先あれへ罷出ふと存るト云、ワキノ前へ行、下二居テ。〕「扱も唯今の体ハ哀れな事で御座る。何れも親子の中ハ悲む物とハ申なが

ら。取分キ今の老たる母の愁嘆ハ深く有べきと存る。夫を如何にと云に。殊に当島を御拝領あれバ。此砌はいかなる御褒美にも預るへき処に。さハなくしてやミ〜と害せられし事を。親の身として嘆き申も理りなれバ。恐ケ問敷キ申事なれど。一ッハ後者の計略の爲。又は生残りたる母の思ひをもやめ。亡者の恨もはる、様に。彼の者の妻子を世に立られ。なき跡をも御弔あれかしと存る〔此間二楽器ノ詞有之候へ共、當時諸共無之候ニ付、相除キ認不申候。〕「畏て候（ト云テ、ワキ正面行。）」「やあく、皆々承り候へ。今度藤戸に於て失れし者の跡を。管絃講を以て。御弔あるべきとの御事なれバ。一七日の間は浦々の綱をも上げ。殺生禁断の由仰出されて有るぞ。構へて其分心得候へ〜〔初触有之時ハ、脇ノ供ニテ出候へ共、當時フレ無之候ニ付、初同ニテ出、中入後同音ニ成りテ入ル也。〕

## 二十七 三山

〔ワキ道行ノ内ニ出、太鼓坐ニ居ス。ワキ、道行過キ狂言呼出ス。一ノ松ニ立。〕  
 「誰にて渡り候ぞ」參シ候和州三ツ山と申ハ。先南に見へたるを耳、無山と申ス。初たる御方ならバ。心静に御覽候へ「御用の事あらバ承ふずる」「心得申候（ト云、又座シテ、中入過キ、シテ柱ノ先ニテ立テシヤベル。但シ語間ノトキハ●此印ノ処、「尤ニ候」ト云ガヨシ。）」「最前小原の良忍聖と有りて。当所の三山をお尋有りし程に。則懇に教やり申たるが。就夫あの南に見へたるを天の香久山と申子細ハ。天照太神葛城の天の岩戸に御籠り被成し時。其所か

異香四方に薰じたるに仍て。天の香久山とハ申ス。然れハ古へ香久山の麓に。柏手の公成と云人有りて。色好成ル御方にて御座スガ。此北に見へたる耳無山にハ。桂子と申遊女あり。又畝火山にハ桜子と申女の有けるに。彼公成ハ桂子に心を掛ケ。誠に妹背の契り浅からざりしに。世の中の人の心ハ移り替る習なれバ。又桜子に心を移し。桂子の方へハ通ひもなきにより。桂子此由を聞。此世に有りても何かせんと思ひ。耳無山の麓成る。池水に身を投空しく成るを。亦柏出の公成是を聞付給ひ。我を恨ミ相果たる事不便成りと思召。先より桜子をふつと思ひ切り給ふ。誠に昔語りとハ申なから。桂子の心中余りに痛しき事なれバ。彼御聖へ此由を申シ。融ユツ通念ネ仏を以御弔ひ成さる、様に。申上べきと存る間。此辺の人々ハ。皆々（見見題）其分心得候へ〜〔ト云、座ス。後同ニテ入ルナリ。〕

## 二十八 同

〔初、出所右ノ通り。ワキ道行過、教へ等、右ニ同シ。中入過キテ、シテ柱ノ先ニ立テ。〕  
 「最前小原の良忍聖と有りて。当所の三ツ山を尋給ふ程に。則レ念比に教やり申たるが。いまだあれに御座るか。但し何方へもお通り有たるか。参りて（ト云乍先へ出）見申そふずる。（ワキヲミテ。いや未是に御座候よ」「心得申候（ト云、ワキノ前へ行、座して。）」「扱お尋有度とハ如何様成御事にて候ぞ（此所セリフ常之通り。）」「先南に見へたるを天の香久山と申子細ハ（△○此印ノ間、右ニ同シ。）」夫より桜子をふつと思ひ切給ひたる由承る。是に付教多子細の有とハ申せ

ど。先我等の存たるハ如斯にて候。「是ハ奇特成事仰らる、物哉。偕ハお僧の御心中貴キにより。古への桂子の亡魂顕出。三ツ山の子細を語り申されたるを推量致ス。誠に昔語とハ申ながら。余りに桂子の心中痛敷事なれば。暫く是に御逗留被成。迎の御結縁に融通念仏を以。彼跡を念比に御申ひ被成。其後何国へもお通りあれかしと存る〔此跡常ノ通。後同ニテ入ル。〕

## 二十九 求塚

〔初同ニテ出。太鼓座二居ス。中人過、シテ柱ノ先ニテ名乗ル。〕  
 「是ハ此隣に住者にて候。今日ハ何とやらん徒然成ル折からなれば。罷出て心を慰はやとぞんする。辞是成るお僧は。爰許にてハ見馴申せぬ御方成ルか。何国より御越被成たるぞ。」「去程に此求塚の子細といつば。古へ摂州此幾田の里に。有□乙女と云女の有たると申ス。其頃和泉の国篠田の在所に。千奴の益雄建男と申男。又当所にも篠田といへる夫の有しが。或時比二人のもの有□乙女を見初しより以來。同じ如くにこゝろを移し。余り思ひに絶兼便を求め。同シ日の同シ時玉章を認參らす。女房此二ツの文を取て見れば。同シ様成ル言の葉を書送り。夫よりも我劣らじと思ひ詰メ。種々様々に手を尽せども。更に其印なかりし故。女ハ返事にしかね余りの事に。あの幾田川に浮ミたる水鳥を。互に一矢宛遊し給へ。申りたる方へ返事すべしとあれバ。力及はずとて河の辺へ立出。随分鳥を覗ひ放ッ程に。兩人の矢先キ此一ツの翅に留りたれば。其時肝を消し先宿へ御帰りあれ。重て此方より申べしとて帰し申ス。其仮跡にて一首

の哥に。思ひ侘我身を捨ん津の国の。生田の川八名のミなりけりと。頓てケ様に読置て。幾田川に身を投空しく成申ス。父母是を聞付驚駭き。死骸を取上愁嘆すれとも叶わねハ。是非に及ばず土中に込申を。彼二人の者又同し時此塚へ求来て申様。我等故か様に成り給ふ間。何れも遁れぬ所なりとて。時刻移さず塚の前にて差違へ。相果たると申伝る。左有に依此中成るは女塚。又左右に有るハ男塚にて有実候。されバ女塚を求メ来たるを以。世上に是を求塚とハ申習す。先我等の聞及たるは如斯にて候。「是ハ奇特成事仰らる、物哉。扱ハお僧の御心中貴キにより。御経を聴聞申度思ひ。此塚の幽霊顕れ出。若菜摘体に饗応。求塚を懇に教へ給ひたると存る間。今宵ハ爰に御逗留あり。彼亡者の跡を御申あれかしと存ずる〔跡常ノ通り引テ座二居。後同ニテ入ル。〕

## 三十 当麻

〔立形出入、右二同。〕  
 「是ハ当麻の門前に住者にて候。今日ハ徒然成ル折柄なれば。当寺へ参り心を慰はやと存る。いや是成お僧ハ。何国より御参り被成たるぞ〔セリフ常ノ通り。〕【語】「先当寺に於て曼荼羅を織給ひたる子細は。人皇四十七代の帝廢帝天皇の御宇に。横萩の豊成公の御息女に。中将姫と申御方。幼少の時より後生一大事と思召を。未御年にも足ざる人の。あの如く成る御心中ハ。奇特成りとの御沙汰にて候。一度ハ山深キ方に御身を隠されしが。後に此寺へ御出あり御櫛を卸され。御名をバ仁和とやらん申て。大誓願を發し給ふ様。正

眞の弥陀如来を拜ミ奉らずハ。此草庵を出間舗キとあり。明々暮々念仏を御申有る処に。或時弥陀老尼と現じ来り給ふを尋給へバ。おことの呼玉ふにより是迄来たる由御申あり。蓮の茎を数多集め給へ。極楽の容体を曼荼羅に織付。拜せ御申有べきとの御事により。百駄の蓮の茎を集め置給へバ。彼尼来り自糸を取り。あれ成る池にて濯給へば五色と成を。是成る木にて干給ひしにより。池を染殿の井と名付。是成る桜をも染桜とハ申習す。夫より此花五色に咲たる杯と申す。其後観音と弥陀来迎被成。此寺の乾の角にして。西過より寅の前方に。一丈五尺の曼荼羅を織立給ひ。極楽の様体上品上生。中品中生下品下生の九品の体を。明に顯し給ひたると承る。折節元来同じ如く成る竹が涌出して。彼曼荼羅の軸に成たると申す。然れば此竹一夜に生したるにより。一夜竹とハ申習す。又節の間唯ひとよ成るに依りて。一ト節竹とも申実候。其後彼老尼ハあの二上山を差て上り給ひし故。夫よりも尼上が嶽とハ申伝る。先我等の存たるハ如此にて候。「是ハ奇特成事仰らる、物哉。扱はお僧の御心中貴により。古への化尼化女権に見へ給ひたると存る間。暫く是に御逗留あり。重て奇特を御覧あれかしと存る」何にても御用の事あらバ承ふずる「心得申候

## 三十一 須磨源氏

〔立形出入、右二同。〕

「是ハ摂津の国須磨の浦に住者にて候。漸々春も半なれバ。浦の気色も長閑に成り。亦若木の桜も盛成る間。立越花を詠め心を慰ばや

と存る。辞是成ル御方ハ。何とて此所にハ休ひ給ひたるぞ（セリフ常ノ通り）。【語】「去程に古への光源氏と申スハ。醍醐の天皇の二の宮にて御座す。御母ハ按察の御息女にて。桐壺の更衣と申奉る。然れバ此君十二にて御元服を遊し。初冠を着し。桐壺の藏人の少将。箒木の卷に頭の中将。又紅葉の賀の卷に正三位に任せられ。誠に古今無双の御方にて。就中色深くおわしませバ。有時臘月と申ス女房と契り給ふ故。二十五の御年朱雀院の御宇に。当浦へ流罪の御身と成らせ給ひ。此須磨明石にて三年の秋を送り給ふ。然れとも去ル事の有りて程なく帝都へ還帰成され。夫より数の位の官を御請遊し。牛車の宣旨を蒙らせ給ひ。終にハ太上天皇と崇奉たると承る。夫ニ付光る源氏と申御事ハ。忽然と御身光り曜し故。高麗国の相人も光源氏とハ名付たる由申す。扱都にしてハ御遊覧を被成る、中にも庭前に池を掘せ山を築せ。古木大木を植置れ。種々の畜類を数多放ち置。麓の池にハ様々の水鳥の並居て。奥深キ山より白浪を落し。其景筆にも写し難し。又お船遊ひと申ハ。唐めいたる龍頭鷁舟の粧ひ。金銀瑠璃碑磔碼頭。珊瑚琥珀鏤たるお舟を浮べさせ給ひ。日もうら、成る折節は御舟に召され。管絃の御遊有たると申習す。去れハケ様の都物語杯を。此田舎の者の聞伝へたる事。不思議に思召されうずれども。古へ源氏の君此須磨明石に暫く御座被成。則愛も源氏の古跡と成て。又是成ル若木の桜も御寵愛ありし木なれど。御覽せらる、ことく木も老木に成たれど。毎年春を待得枝葉榮へ。年々に生する枝に花咲故に。若木の桜と申て。今に我等如キの者の詠み申御事にて候。源氏の御事に付数多子細の有と

はいへど。先我等の存たるハ如是にて候。「是ハ奇特成事仰らる、物哉。左様に何国共知らず老人来り。源氏の謂を委く語申べき者。此辺にてハ覺ず候か。點キ申事なれど拙者の存るハ。古への光ル君。当浦へ御心を残し置れ。御亡心見へ給ひたると推量致す。余りに不思議成ル御事なれハ。暫く是に御逗留あり。重て奇特を御覽あれかしと存る〔跡、常ノ通り。〕

### 三十二 吉野天人

〔出入、右二同。中人過、シテ柱ノ先ニテ、シヤベリ。〕

「是ハ和州吉野の郷に住者にて候。去程に珍らしからぬ御事なれど。先当山のあり難き事は。天竺五台山の、坤（ウツクミ）のすミ。二ツに闕下て我朝に來り。一ツは常陸の筑波山となり。今一ツハ此吉野、お山と現れ出るが。貴人の御目にハ（ウツクミ）金の峯と見ゆるに仍而。当山を金峯山とハ申習す。就夫此山の桜の名高き子細ハ。昔役の行者桜を植置き給ひしより以來。次第（ウツクミ）に木々の枝、葉も榮へ。花も色増今の代迄も。桜の名処と成り申せば。誠に春を待。毎年花見の人々多（ウツクミ）中に。取分（ウツクミ）當年ハ一入盛りなれば。都より老若男女ともなひ來り。爰彼と詠メ申さる、所に。止事なき女性のまミへし程に。如何成者ぞと不審のなし申されければ。我は上界の天人なるが。今宵は爰に旅居して待給ふならバ。古の五節の舞。今月の夜遊に学ひて見せ申さんと。迦陵頻伽の声斗して失せ給ふ。か様のためし鮮なき事ハ。某をはじめ諸人ハ存間敷候間。此由申聞せはやと存ずる。やあく皆く承り候へ。当山に於て上界の天人。夜遊を学び申さる、間。

老若共に罷出見物申され候へ。相構へて其分心得候へく〔ト云引テ座シ、後同ニテ入ル。〕

### 三十三 第六天

〔シテ中人來序。末社來序ニテ出、シテ柱ノ先ニテ、シヤベリ。〕

「箇様に罷出たる者ハ。忝も伊勢太神宮に仕へ申ス。末社の神にて御座候。我等の是へ出る事余の義に非ず。先都に解脫上人と申貴き沙門の御座（ウツクミ）が。初て大神宮へ參詣致されし所に。第六天の魔王共寄（ウツクミ）り合（ウツクミ）ヒ。此度解脫上人を魔道へ引入（ウツクミ）シ。仏法を妨申さんとて。種々様々に変更して來たるを。太神宮御存じ被成。急き沙門に告知せんと思召。權に人間と顯れ。上人に行合給ひ。御裳濯河の由来宮居を委しく御物語有り。扱彼魔王共集り仏法を妨んと匠（ウツクミ）よし。髓に御告知成さるれば。沙門ハ随喜の悦を成し申さる、殊に太神宮も別して大切ニ思召により。如何成魔王共成共障礙（ウツクミ）を成さんと致バ。神力仏力にて忽退け申さふずる事を。疑（ウツクミ）ひ有間敷（ウツクミ）事と存（ウツクミ）其故は。内宮外宮の神達は申に及ず。住吉の明神出雲の大社。惣じて日本国中の神々迄も。力を添給んと（ウツクミ）の御事なれば。仏法を妨（ウツクミ）事ハ思ひも寄らぬ事じや。併（ウツクミ）ケ様に申せ共魔王と云物ハ。唐土天竺我朝に於。虚空三界に多（ウツクミ）キ物にて。風雨流通に働く物なれば。早此内にも何事か仕ふも知らぬ程に。先我等ハ罷帰（ウツクミ）り用意致（ウツクミ）シ。急き解脫上人に力を添申さうする間。当社（ウツクミ）の神々迄も残らず御出あれ。其分心得候へく



## 三十四 項羽

〔立形、鍾馗同断。〕

「是ハ唐土烏江の渡守にて候。今日も浦へ出て舟を渡そふと存る。喃くあれ成る草刈達。向イへ行る、ならバ船に乗給へ。今ッ日ハ某の渡し番にて。余人の越す事は成らず候が。夫ハ如何様成ものが越申たるぞ。」「心得申候。扱お尋有度キとハ如何様成御事に候ぞ〔セリフ常ノ如。〕【語】「先項羽高祖の戦と申ハ。秦の天下を望ミ給ひ。始は御兄弟の契約有り。先キへ入たらん人を王と崇。遅キ人ハ臣下と成らふずると堅く仰合され。二手に分テて切ッて登り給ふ所に。高祖ハ不勢成リとハ申せ共。計略を廻らし慈悲心成ルにより。行先キの国々も靡順ひ。早ッ都に入給ふ。項羽ハ猛勢を頼ミ。手柄を而己成さる、故。路次にて隙入遅く御着有りし程に。数方騎にて跡に登りたるを無念に思ひ。後にハ項羽高祖の戦と成り。七十余度に及たる事と申ス。然れども初は度々項羽御勝候か。後に高祖一チ度の理を得給へバ。名大将成故敵も味方と成り。却て項羽を責奉り。烏江の野辺にて果給ふ。其折節望雲驪と云馬ハ。一日に千里を駈ル程の名馬なれど。主の運命つきぬれバ。膝を折黄なる涙を流し。一足も行ず候程に。項羽は呂馬童を近付給ひ。我首取ッて高祖に奉り。名を後代に揚よと御申あれど。流石主君の御事なれば。左様に立寄人もなかりし程に。手自御首を搔きり給ひたると承る。又項羽の後に虞氏と申御方の候ひしが。別れを悲しより身を投空しく成給ふを。取上野辺の土中に込置しに。其塚の上より草花一ト本、生出るを。見馴ぬ草とて不審成さる、所に。有る點キ人の申され事

に。後の廟所より生出たる花なれば。是ハ美人草と申そふずるとて。夫よりも美人草とハ申実候。項羽高祖の戦ひ美人草の謂。大方か様に聞及て候が。扱唯今ハ何と思ひよりて。お尋有たるぞ不審に存候「是ハ奇特成事仰らる、物哉。旁の草花数多持れたる中に。美人草を刈持給ふにより。後の御事を懐敷思召。項羽の亡魂顕れ出。美人草を御所望被成たるかと推量致す。余りに不思議の御事なれば。何れも弔ハ僧々ニあらず。俗々に寄らずと申せバ。項羽の御菩提を念頃に弔ひ。其後支度へ帰り給へかしと存る。「何にても用所あらバ承ふずる」「心得申候

## 三十五 大瓶狸々

「是ハ唐土潯陽の江の辺りに住居仕民にて候。爰にかうふうと申御方の候が。毎日参り酒を給へ申候間。今日も参らバやと存る。唯今参ッて候。我等も疾に参べきを。さり難き用事御座候ひて遅り申て候。扱毎とハ申ながら。今日も夥敷キ市人にて一入賑に候へバ。毎の如く酒を下され慰申そふずる。「扱夫ハ如何様成事にて候ぞ」「是ハ思ひもよらぬ事お尋有る物哉。左様の者は見申たる事ハなく候へども。人の物語を致たるを承候が。しかとしたる事にてハ御座有間敷候得共。聞及たる通り語ッて聞せ申そふずる【語】「惣して狸々と申者ハ。海中に住獣にて有由申ス。先像ハ猿に等しく毛色黄にして。耳白く面手足などハ人に似たり。髪長ッ顔声ハ兎啼に違ハず。左有ルに依て幾年経て後ハ能ッ人の詞を知り。我も自人間のことく詞を替すなど、共申ス。去れ共畜類の悲さハ国々にてと

らハレ。就中西湖にハ狸々の血を以て。万物を染申により。狸々狎とハ申実候。其上狸々ハ生を受しより此方。姪欲を犯さず無量寿を保子。聖人賢人の時に至り日月清明にして。五日の風十日の雨土塊を動かさず。豊年シの。御代にハ一ト度出現致すと申伝る。誠に古へより狸々には。三説同からすと申せば。我等如きの委ハ存せず候へども。先聞及ひたる通りハ物語致候が。扱何と思ひ寄て尋給ひたるぞ不審に存候。「是ハ近頃珍敷事御申有物哉。左様の怪敷キ物ハ。疑もなき海中の狸々。目出度御代にひかれ顕れ出。取分毎日爰に來り。酒を愛し旁に詞を替し申事も。弥富貴の身と成し給ん瑞相と存る。殊に酒に八十の徳ありと申せば。遂レ日狸々を待随分酒を与へ。立所に於て奇特を見給へかしと存る。「左様に候ハ、先某は罷歸り。重て参り酒を給へ申そふする。「心得申候。

同三十五 同乳序(ウチ)

「箇様に候者ハ。唐土横巨と云海中に住鱗の情にて候。我等のはへ出る事余の儀に非らず。爰に別て目出度事有り其子細ハ。先此唐土周の国の傍に。楊子のさと、云所有り。何の頃よりか市を建初、置けり。彼里に一人の民有り。正直憲法の者にて親に孝有り。常に酒を造りて渡世を送りけるが。或夜の夢中に。汝楊子の市に出酒を売ルに於てハ。富貴の家と成るべきとの。夢の告に任せ業を営けるに。案のこことく遂レ日菜ミ尽せぬ身と成りぬ。然る処に夜毎に若キ男一人來り酒を買ふ。姿を見るに常人に替り。像ハ紅にかしけて流石うるわしく。衣裳も人間にたぐえず。頭ハ荆棘のこことく。亦酒

を吞ム事限りなし。誠に數盃重れ共面色替る事なきに依て。余り不思議に思ひ。旁ハ何国より來り玉ふぞ。名ハ如何。名乗らずは向後酒を売ましきと有りけれバ。其時彼者畏て云様。今ハ何をか包ミ申べき。是ハ潯陽の江に年月を送る。狸々と云ル者なり。御身親に孝を尽す故。諸天納受の加護有り。目出度折柄なれば我も爰に來りて見ユ。夢中に告シ潯陽の江も此河の辺り成り。南陽嶮の菊水も是成るべし。譬へ河流を汲迎も。尽すまじきハ此泉なれば。心嬉しく売せ給へと念頃に訓へ。うバ玉の夜紛に川瀬の浪に入り失ぬ。誠にか様の例なき事の出来致も。偏に四海治り。天地人の威光明ら成る験なれば。同シ海中に住者とハ云乍。我等体の鱗迄も。自万峯の御代に引れ。齡を保つ故。海上に浮出。陸の目出度様子を見る様な。有難事ハ御座るまい。扱告を得られたる民ハ何方ニぞ。一ト目見度事じやが。されバ社是にいらる、よ。先結構な衣装哉。仕合のよいが尤で社あれ。扱もく、優な体じやハ。何と我等も相応に仕合をあやかる様に。少と詞を替そふか。いやく我等如きの。なまじい詞をかわずはいらざる事じや。去ながら掛る類無き果法人を。我等斗見申たる分にてハ如何な。然る者共を呼出し見せ申そふずる。やあく海底の鱗の老若。並に貝類迄も聞給へ。比潯陽の江に目出度事の出来致したれば。何れも残らず浮出一見申され候へ。早く出られ候へく。「右の乱序間ハ、常ノ狸々ノ間ニ候ヘ共、觀世流大瓶狸々、当時乱序有之候ニ付、右ノ間ヲ用候テモ可然。」

## 三十二六 錦戸

「御前に候「畏て候如何に此内へ案内申候「和泉の三郎殿の御座候□。錦戸の太郎是迄參られて候「心得申候。其由申て候へバ。此方へ御入あれとの御事に候

## 三十七 文使

女「喃悲しやく。如何に案内申候。大方殿よりお文を持。御使に參じて候（又、男モ云）「如何に案内申候。大方殿よりの御使にて候。錦戸の太郎御申には。三郎殿同心なきにより。則猛勢を以押寄られ候間。先何方へ成共御退あれとの御事にて候

## 三十八 問

〔羅生門ノ如二人、出ル。〕

「扱もくゝにがく、敷イ事か出来致イて途方トホクがないが。是ハ何とした物で有ふぞ。「是ハ如何な事。きやつは何として取敢ず急で出たぞ「夫ならバ子細を語て聞そふ。「先頼朝義経御中不和に御座有るにより。義経比国へ御下向被成。秀衡を頼、御申候得ば。即頼れ貴ミ渴仰申さるゝ所に。判官殿の御運の尽る所は秀衡死去致され候。此事鎌倉に聞シ召れ。錦戸の太郎次男泰衡。三男和泉三郎四郎基義。樋爪の五郎五人の兄弟の御中へ。御奉書を下し給ふ。趣ハ。判官殿を討奉り印を鎌倉へ登する物ならバ。勲功ハ望次第に致さるべきとの御文言なり。則御兄弟御談合被成。能キにも悪きにも御一統有べき處に。中にも和泉の三郎同心なき故。太郎殿腹立あり。和泉の城へ

押寄らるゝと有が。是ハ尤な事でハないか「誠に様子を聞ッバ。さふなふてハ叶ぬ事ハ有るぞ「扱何と思わしますぞ。如何に我等体の者じやと云ても。だまつて居てハ口惜しい事じや程に。人に抽で出て手柄ヲせりと思ふか。わごりよハ何と思ふぞ「其方の云通り常々口を利乍。此度だまつて居て。諸人に臆病しやといわれては。兩人なからすたる事じや程に。此度随分手柄をせひでハ「夫ならバ何と思ふぞ。三郎殿ハ義理の堅イお人じや程に。お勝に成たらバくわつと御褒美に預ふ程に。三郎殿の方へ行ふと思ふが何と有ふ「やあらわごりよハ無分別な事を云。太郎殿は猛勢なり。三郎殿の方は不勢なれハ。某ハいやじやよ「いやく。如何にそちがそふ云ても。只某は三郎殿の方へ成り度迄「わごりよハ有無に三郎殿鼠貞と見へた程に。急で三郎殿へ行しませ。某は是から直に太郎殿へ行ぞ「やい待てやい。そこな者。やいくゝ又談合もせうわいやい。はて扱云捨てて行くと云事が有物か。某に委敷う語らせて於て。まだ談合もすまぬに。我等ハ三郎殿鼠貞じや。我ハ太郎殿へ行と云て急に退たハ。総じて世間の譬に。万事油断を致せばたまさるゝと云が定じや。去ながら某一人にてハ。何とも分別にあたわぬが。是ハ何とした物で有ふぞ。いややうく合点するに。是にうかくとして居所でハない。只急で退ふ。併何とぞ様子を見合イて。一手柄致そふと存る「ト云乍急クテイニテ、キヲウテ入ルガ由。〕

## 三十九 夜討曾我

〔ツレ、弓矢ヲ持。尤矢ヲツガへ、弓ヲ張持ツ。ヲモ、鏑ヲ持。ツレ先へ立ヲモ跡ヨリ出ル。早鼓也。幕上ルト、トントント二ツ、一所二拍子。〕

ツレ「やるまいぞくく」ヲモ「退すまいぞくく」〔ト云乍舞台一へン廻ル。尤、何ベンモ云。〕ツレ「其夜討をのがすなくく」ヲモ「松明を出て打留、い討留くく」ツレ「暗に早り出て伴具足にあたるなくく」ヲモ「扱今夜のどしめきをわごりよハ知らぬかツレ」〔そちか道具を提て出たに依。如何様只事てハ有まいと思ふて是まで付てハ来たが。何共様子ハ知らぬよ」ヲモ「夫ならバ子細を語て聞そふ」ツレ「急で語らしませ」ヲモ「先曾我の十郎祐成と五郎時宗か親の。河津ノ三郎祐重を。伊豆の国赤沢山に於。工藤祐経が念なふ討し程に。其妻子ハ隣国に有着し故。河津が二人の子を曾我の十郎五郎とハ名付ク。此兩人の者親の敵を討んと思ひ。今度富士の御狩に随分心掛けれど。能きつがいがなふて空しく帰り。今夜ねらふたを工藤ハ夢にも知らず。備前の国吉備津宮の大藤内や。遊女集め酒宴をなしていたるを。去ル者の異見により寝所を替へて。前後も知らず伏たる時分。祐成と時宗二人忍び入り。祐経に詞を懸ヶ起上る所を。十郎五郎は喜び大声を上ヶて切音か。大藤内が寝耳に入り這ふて逃る処を。しやつをも兩人して四ッに切り。曾我兄弟ハ日比の敵を打ッて有り。我と思わん人あらバ。出合給へと呼わる」と云が。此東八ヶ国の諸大名の付キ合と云。殊に御前近ひ所で手柄ハせぬか ツレ「おしやる通り是ハ手柄な事でおりにやる」ヲモ

「又其声の（ワキ正面ヲミテ）高イハ何事ぞ。何と十郎五郎が出御館を差て切ッて入ル。是ハ又何として能らふぞ知らぬ事じや。夫ならばいざ兩人してあれへ切ッて掛り。兄弟の者を仕留て名を上まいか ツレ「是ハ一段とよふおりやらふ」ヲモ「いやど二元にだまるをも知らいで。闇所よりふつと出て切られてハ如何じや。是に付とも跡先を能く思案するに。只今にても若衆の出合いて。人のすゝむに控へたハ見苦しからふず。又世になし者の身を捨る所へ。先キ懸はあぶなし。兎角傍輩のこぬ内に。くらまぎれにしのけ（ト云乍入ル）」

## 四十 阿漕

〔初同ニテ出。太鼓座ニ居ス。中入過キテ、シテ柱ノ先へ立ツ。ワキ、男ニテスルトキハ、「イヤ是ナル御方ハ」ト云。〕

「是ハ伊勢の国阿漕が浦に住者にて候。今日ハ物淋しき折柄なれば罷出て心を慰バやと存る。いや是成るお僧は。何国より御越成されたるぞ（セリフ常ノ如）」【語】「先此所ハ伊勢の国阿漕が浦と申て。隠なき名所にて候。其子細は。忝も天照太神。当浦へ初て御光臨被成し以後。此辺は御膳調進の網を引ッ浦なれば。何れか神慮に洩る、事のなき故。山野郷河の鱗此磯へ集るを。世を渡る近郷の海人共漁捕を望ミけれど。皆神罰を怖敷く存せられ。未是を免し申されぬ処に。渡世を送る業の多キ中に。爰に心体の拙キ漁人の有しが。忍びて夜なくく網を引を。初ハ曾て人の知らざりけれど。度くく重るに随て有ル物思ふやう。彼レ程よく魚を取る者はなきと。心中に

余程羨數存じ。年月心を付て見れば当浦なりし間。一人知れば悪事千里と。世上にはつと風聞致を。後には所の老若聞付申様。此浦にて余人の殺生仕らぬ事。近ヶ国迄も其隠なきを。当国に有ながら。太神宮を恐れぬと云。且は此里の者あるか無シに致ス事。余りに悪キ奴なれば何ともして捕へ。後代の例に伏漬に仕ふずるとて。深隠して夜毎に待をバ夢にも知らず。有る暮に月入り夜更人しづまりし時分。沖にハ船も見へず陸には余人のなきと思ひ。当浦へ網を下し引ヶ所を。覗キ々々左右より一チ度に出で。走り掛ッて阿漕を無手と捕へ。早り若者共は矢場に成敗せうずると云者も有り。又指先の強キ者の申事には。此重科人を只殺さんも惜けれバ。竹篋を以て弾キ殺そふと云者もあり。或ハ申ざきに致そふする杯と。種々に申時分。古老の仁は辞々当国ハ神国成るに。先例の無キ事ハ後難も如何なれバ。先阿漕を高手小手に擲置き。大キな石を二ツ結付て。網を引たる此沖へ沈メし時。舟より出す迄ハわめき悲しむ声の高く聞へしが。海中へ入りてから後ハ音も致さず。底より四ッ五ッ泡か上ッた斗じやと申す。是も一度二度引迄ハ誰も知らざりけれと。度重れバ人の存る故哥に。伊勢の海阿漕が浦に引網も。度重れバ頭ぞすると。ケ様に読れたると申す。先我等の存たるハ如斯にて候。「是ハ奇特成事仰らる、物哉。古への阿漕ハ善根ハなさずして。娑婆にて悪逆をのミ致し。我と身を徒に沈メし者なれバ。誰有ッて跡を弔ふ者もなきにより。彼亡魂顕出。詞を替したるそと存る間。暫是に御逗留有り。彼者の跡を御弔あれかしと存る。

## 四十一 野守

〔出所、阿漕同断。〕

「是ハ和州南都に住者にて候。今日ハ物淋しき折柄なれば。春日野の隣へ立越へ心を慰ハやと存る。「いや是成客僧ハ。何国より御越被成たるぞ〔セリフ常ノ通り。〕【語】「先野守の鏡とハ。是成ル池を申ス其子細ハ。御覽せらる、ごとく形も鏡の様に丸ッして。さながら曇もなく影の移るに依。野守のか、みとは申実候。又去ル人の咄し申されしハ。古へ此野を守ル者の有りしが。毎も野を守に出申時ハ。是成池水にて我影を移し。姿をよく見たる故に。野守の水とも申伝る。又一説にハ昔有ル賢王の有しが。当国に於て御狩を被成し時。御秘藏の白ふの鷹を失われ。爰彼を思ひくりに尋あるき。折境是に野守の翁の居たりし間。御鷹の行衛を見て有ルかと尋給へバ。御鷹ハあれ成ル水の底に有ル由申を。知らぬ者とおかしき事を云つる哉と。目を引指をさして御笑あれバ。其時彼翁大キに腹を立て。左様に偽と思召に於てハ。御出有りて御覽ぜよと申に付狩人我先にと立寄見給へば。実と彼か云ことく水底に。翦たるはくたかの有るを不審に思召。暫ッ心をしつめて御覽有れバ。水底にハなくして。側成ル木にこいを取りて居たるを。今の者ハあどなき事をのミ申たる実候。扱大宮人ハ御鷹を居上られ。喜勇て御帰リ被成たると承る。是に依哥にも。箬鷹の野守の鏡得てし哉。思ひおもわす余所ながら見んと。読給ひたるよし聞及て候。又小賢キ人の申され事に。誠の野守の鏡と云事ハ。此塚の内に鬼神の住けるが。其鬼の秘藏致て持たる社。正真の野守の鏡にて有ると申習す。夫を如何

にと云に。彼鬼神昼ハ人と現じて此野を守り。夜ルハ鬼と成ッて是成る塚に隠れ住に。其鬼の三千世界須彌迄写す淨破璃が。誠の野守の鏡成ル由申ス。されハ野を守鬼の鏡成るに依。是か本説にて有らふずるとの御事に候。又春日野に於て烽の野守と申ニ付。あまた謂の有りといへど。先我等の存たるハ如此にて候。「是ハ奇特成ル事仰らるる事哉。左様に何国とも知らず老人の来ルべき物。爰元ハ八覚へず候が。黠コガシキ申事なれど我等の存るハ。此塚の鬼神かりに野守の翁と現じ。詞を替したると存る間。暫是に御逗留あり。重て奇特を御覽あれかしと存る〔此跡セリフ、常ノ通り。〕

#### 四十二 殺生石

〔ワキ、次第ニテ出ル。其跡ニ付出ル。尤、扨子ヲカタゲ出ル。太鼓座ニ居。ワキ次第道行過キテ、一ノ松ニ立。〕

〔誠に御急キ被成たるにより。程なく下野国那須野の原に着せられた。〔作り物ワキミテ、いやあれやくくく。又くくく。〕「あれ成ル大石の上へ鷹か食合ふて落テます。取ッて参り晩のお料理に仕ふ。』実と楚忽成る事を申て御座る〔ト云、太鼓座ニ居ス。中入過テ、シテ柱ノ先へ立ツ。〕「扨もく怖敷イ事哉。先あれへ罷出ふと存る〔ト云、ワキノ前へ行、下に居テ。〕「御見舞申上候。偕も唯今の女の物云フたこわ付。又姿迄も心を付ケて能く見る程ニ。何とやらん物冷敷キ体にてハ御座なく候か。』是ハ思も寄らぬ事お尋有物哉。か様の事ハ此方に社御存有べき所に。却て我等にお尋はお慰の為と存候間。聞及たる通り申上ふずる〔ト云、正面ヲ向、語出ス。〕【語】

「去程に殺生石の由来を尋るに。先天竺よりも発初し事成が。唐土に於ても数多御門を取奉り。野十ハ神通を得たる物なれハ。其後此豊秋津洲にも来り。鳥羽の院の御宇父母も出所も知らぬ宮女の。何の程よりか来りて上童に宮付。容顔美麗ハ宮中に並びなりしかバ。一入君の叡慮に叶ひ。片時も君辺を立去ル事ノなかりしが。智恵を斗ツ語色万物の発を尋給ふに。一事滞る事もなく明に申上ケ。詩哥管絃経論聖教和漢迄も。萬の事を太細によく極メ。心中に闇キ事のなき故。玉藻の前と名付給ひ。天子の御寵愛浅からさりし時分。其頃ハ晩秋下旬の事なれバ。月もいまだ出ざるに清涼殿に於。管絃の御遊の有し時。俄に空搔曇風吹来ッて。玉殿の燈一同に消る。其時玉藻の前が身より光を放ち。日月の出たることく禁中を照し。夫より主上ハ御惱と成らせ給ふ間。博士を召て占なわせらるれバ。占方を考て申上る様。是は皆玉藻の前が業なり。御祈祷なくてハ叶うまじと。調伏の祭事行わるれば。玉藻の前ハ正敷ウ稲荷ウと顯れ。下野の国那須野の原へ逃て行を。三浦の助上総の助に勅使立ッて。彼を平ケよとの宣旨を蒙り。両介ハ家の面目是に過じと悦び。家の子郎等引連当国に下り。爰彼を狩れ共化生の物にて射られさりしを。種々の計略を以彼者を退治し。君も寿命長遠に目出度御代とハなれど。併其野狐の執心今に残り。ケ様に大石と成ッて殺生を致かんと存る。何も利益ハ同じ御事なれハ。比年月の悪心を翻し。善心と成ッて成仏致ス様に。あの石を少ト喝してお通りあれかしと存る。さらバ扨子を参らさふずる〔ト云テ太鼓座へ行、扨子持出、ワキノ前ニ置キ、跡ヘノキ下居テ。〕「急て喝し被成て尤に候。我等も是に

て力を添へ申そふずる（ト云テ引居テ、能濟ワキノ跡ヨリ入。）

四十三 天鼓

〔出所、野守同断。中人前ニワキ呼出ス〕

〔御前候 「畏て候（ト云シテノ後口へ行下ニ居テ腰ニ手ヲ掛ケ）  
 「荒痛敷イ事哉。乍去是ハ玉殿なれば先立申されよ。（ト云引立連行  
 乍） 皆人の親ハ不器用な子をもかわゆく存じ。東西を弁ぬ幼子さ  
 へ別れを悲むに。増てや成人の子を失嘆かるゝ事余儀なけれ共。最  
 早帰らぬ事なれば此上ハふつと思ひ切ッて。其方の後世を大事と能  
 く願ひ。逆様なれ共天鼓か跡をも弔給へ。又跡式に付て訴訟あらば。  
 何事成共我等におしやれ。随分取合を申そふする間。先支度へ帰ら  
 れ候へや（ト云乍送ル。藤戸同断。）」扱も只今の老人か子の天鼓  
 とやらん申者。玉殿の鼓を仕れば能音の出たるが。余人の打テバ少  
 も鳴らぬに依。其父を召て打させらるゝと斗聞。前後の訳を能く存  
 ぜぬ故に。某などの推量致ハ。天鼓と云ハ楽人の鼓の上手成が。此  
 年月煩御役をも動ずして。近頃相果申により。其父に仕れとの仰  
 出シにて御座有ふずる。左様に有るに於てハ。子の打さへ聞事なら  
 ば。親の打バ弥面白く召へき間。拙者なども能く聞イテ。人に語ん  
 と心嬉敷ク存たれハ。さハなくして当国の住人に。王伯王母とて。  
 只何となき先婦の民の有りが。男子にても女子にても子を一人  
 欲くおもひ。明暮此事を而已仏神に祈誓し。若く盛ん成る時よりも  
 正直を第一として。慈悲心深く二親に孝有る故やらん。此以前にも  
 少の奇瑞度々有りとはいへど。其中にも有る夜の夢の中に。天津御

空より鼓一ツ降下り。正敷ク王母か胎内に宿ると見へて。誰起すと  
 ハなけれど夢ハかつはと覚ぬ。扱も是ハ不思議成る事を見て有る  
 物哉。総じて夢と云物ハ合フ事ハ稀にて。十に九も合ぬ物とハ云  
 ながら。され共是ハ妙な事と思ふ折節。程なく王母胎懐し十月の末  
 には。玉を延た如くなる男子を座び。夢の告に任せ名を天鼓と号ケ。  
 寵き愛き育し処に。後にハ天より誠の鼓降下るを。打チて見れば何  
 とも心詞に及ぬ程の。しゆんな音の出ると有るが。大内までも其隠  
 なくして。例鮮き事なれば勅定として召されけるに。真に彼れハ天  
 命の尽たる故か。鼓を持深山へ逃て行を。数方の官人を以て捜し  
 出し。天鼓をバ呂水の江へ伏漬になされ。鼓ハ雲龍閣防房殿に居へ  
 置給ひ。音楽の役人の事ハ申に及ばず。公卿天上人迄立替り遊せど  
 も。終に前の様成音の出ざりし故。若シ革に疵が付て鳴ヌか。又筒  
 に埴など入て音か止たか。但シ又中に何ぞ入ッても有るかなど、  
 思ひくゝに御不審を被成けるを。忝も帝は聞シ召して。元より鼓ハ  
 心なき物とはいへど。空より降程の神變の有る上ハ。若主の別れを  
 悲しミ。鳴らぬ事も有るべきとの御事により。父王伯を召て打させ  
 らるれば。又元の如ク感に絶たる音の出し故。人は高イも卑も親子  
 の中程の事ハないぞ。あのころなき者さへ親子の間は隔のなき  
 とて。君辺の老若迄も御袖を濡給ふにより。彼老人をバ我等の支度  
 へ帰し申た。いや何角独言を申内に遅れた。先あれへ罷出ふと存  
 〔ト云、ワキノ前へ行、居ス。〕「扱も只今の老人が体ハ哀な事て御  
 座る。御存の如く此程いかなる高名の人々も。老た若イに寄らず遊  
 て鳴ぬ鼓を。父王伯が打チて鳴様な。氣特な事ハ御座なひ。是二付

ケても人の親子の中ハ申に及ばず。親類迄も大切な物成るに。今の王伯ハ子に別れし老の身なれば。何卒お取成を以て身命をつぎ。二親の歎の止様に。仰付られて下されいかしと存候。「左様に御座らバ王伯ハ子の無き者なれば。哀某を養子ニ仕り。其数の宝を先今半分も渡す様に。恐ながら御意被成て下されいかしと存候。「畏て候。「ト云、立テ、ワキ正面へ行。」「やあ、皆く承り候へ。天鼓か事を余りに不便に思召により。我君ハ呂水の江に御幸被成。天の鼓を居置管絃講を以て。天鼓か跡を御弔有べきとの御事なれば。管絃の役者は其分心得候へく。「ト云、太鼓座へ引居ス。後シテ出地へ取りテ入。」

#### 四十四 絃上

〔来序ニテ出ル。〕

「か様に罷出たる者ハ。津の国須摩の浦の者にて候が。某爰許へ出ル事余の儀にあらず。唯今去人の御物語有たるを聞バ。都に住せ給ふ師長の卿と申御方ハ。琵琶琴の上手にて御座す故。天下に隠なき誉を取らせ給ふ。夫ニ付入唐の御志有るにより。国々在々所々をも御見物被成。殊にハ名所の月を御覧せられて。御心を慰まれたく思召夜を込て京都を出させ給ひ。則比浦に御着有り。海人のしほ屋に御宿を被成。徒然さのま、管絃を遊す処に。其折節村雨の致し、音楽の障りと成に依て。頓て御遊を止られたるを見て。主の老人夫婦は筈持テ出。其俣板屋の上を尊隠す。其時又御遊を初られければ。祖父ハ耳をすまして聴聞致し。されバこそ調子が合ふて候と申

を。師長公は聞し召れて。扱々心誥しき翁かな。初より只人ならず思召されたる間。此上ハ御所望被成る、ぞとて。彼兩人に琵琶琴を給われバ。是ハ存もよらぬ御誼にて候と云乍。違儀なく二面を受取て。琵琶を調べ、徽を立並べ。去とてハ言ひたりくと。御前の人々ハ耳目を驚かし給ふ。其時師長の卿思し召様ハ。琵琶の奥儀を御極有るに依。渡唐有らんと思召立テ給ふ事の墓なさよ。所詮只思ひとまらんと思召。塩屋を忍びて夜紛に御出有るを。祖父と祖母ハ夫をもしらで弾居たるが。君の御立テと聞頓てひき止て。夫婦ながら其俣走り出。是はいかなる御事にて御座候ぞ。何とて御帰り候ぞや。殊に未夜も深く候に。是非く御帰り有度思召さば。責て夜を明して御立あれと。深々と留申するれバ。先々京都に御登り有て。以後に又御罷成されふずる間。御名字を御名乗候へとあれバ。今ハ何をか包申べき。我は絃上の主村上天皇。祖母は梨壺の女御成るが。御身の入唐の心を止んとて。夢中には是迄見へ給ひたりと。慥に宣ふと思召セバ。搔消様に失給ひたるとやらん申ス。去ながら師長公ハ御滞留被成たると承れバ。重て又管絃を遊す時ハ。定て比辺の衆ハ残らず。聴聞に参られぬ事は有間鋪キと存れ共。自然又各御出無くハ。拙者ハ一人なり共何公致し。か様の類なき事をば承り度候間。稀人の糸竹の御遊と申ス沙汰のあらば。昼夜にかぎらず御知セ有てたまわれ。当浦の人々をたのミ申ぞ、構へて其分心得候へく



【翻刻】

〔四冊目〕

一	春日龍神	二十九	同	四十二	碓
二	同脇	二十	松虫	四十三	恋重荷
三	同乱序	二十一	忠信	四十四	綾鼓
四	鉢木	二十二	大蛇	四十五	千引
五	同供	二十三	豊干	四十六	常陸帶
六	芦刈	二十四	小塩	四十七	弱法師
七	雲林院	二十五	浮舟	四十八	護法
八	遊行柳	二十六	玉葛	四十九	満仲
九	三輪	二十七	山姥	五十	鶏籠田
十	龍田	二十八	雲雀山	五十一	鳥迎舟
十一	女郎花	二十九	同	五十二	室君
十二	船橋	三十	大仏供養	五十三	高野物狂
十三	融	三十一	盛久	五十四	加茂物狂
十四	海人	三十二	草薙	五十五	籠祇王
十五	梅ヶ枝	三十三	同語	五十六	関原與市
十六	錦木	三十四	愛宕空也	五十七	二人静
十七	葛城	三十五	三笑		
十八	龍虎	三十六	合浦		
		三十七	同鱗		
		三十八	小原御幸		
		三十九	住吉詣		
		四十	鷺		
		四十一	双紙洗		

## 一 春日龍神

〔初同ニテ出、太鼓座二居ス。中入過テ、シテ柱ノ先へ立、シヤベル。〕  
 是ハ和州南都に住者にて候。去程に珍らしからぬ御事なれど。先我  
 朝ハ天地開闢より神国なれば。靈神数多御座すとハ申せど。中にも  
 此春日大明神ハ。愚痴無智の輩を救給はん御方便に。諸の菩薩の  
 和光の姿を権に見へ。当社と現し給ふと聞くにより。現世安穩後生  
 前所の其為に。当国の者ハ我等を初て残らず。国々在々迄も老若男  
 女共に。袖を連踵を次で歩を運び。神前の賑か存御事。又と并  
 びたる神も御座なく候。夫に付此秋津洲に貴僧高僧多キ内に。楯  
 の尾の明恵上人をバ太郎と名付。笠置の解脱上人をば次郎と頼ミ。  
 此御兩人の御方をバ。当社の両眼左右の手のことくに思召。天  
 下の御祈祷をも仰せ御申成さる。其中に取りても明恵ハ。過去よ  
 り殊勝に御座す故。明神の直に御詞を替さる。など、申ス。誠ハ左  
 様にも御座有らふとぞんする。夫を如何にと云に。日外明恵御登山  
 の刻。俗在出家共に人間は申に及はず。鳥類畜類迄も奈良坂へ迎に  
 出。上人を見付畜類ハ膝を折り。鳥類ハ羽を垂し、草木の類迄も。  
 正敷ウ圍鏡渴仰の躰あれば。末の代にか程殊勝成御方ハ。大唐の  
 事ハいさ知らず。和国にハ有間敷キとの御事に候。○夫ニ付今日明  
 恵御登山の由風聞致其子細ハ。入唐渡天の御志有により。御暇乞の  
 為当社へ御参詣被成る。と申ス。誠に我等躰の存るハ。萬里の  
 滄波を凌キ入唐渡天ハ如何と存る。殊に上人の御身にてハ。經論聖  
 教の内にては大方御存じ有べし。其上人の申習スハ。天台山に望有  
 る御方ハ。比叡山に御参あれ。五臺山を拜度キ人々は。吉野筑波

を拜し給ふと聞く。又靈山を志す輩ハ。即当社を御信仰有ると申  
 べ。日本に御座有りても同じ御事かと存る所に。明神ハ秀行を以て  
 御留被成。仏跡を拜し度思召さバ。今夜の内に。三笠の山に五天竺  
 を遷し。拜し御申有べきとの御神託なれば。南都に於て志の輩ハ。  
 早々出て拜し御申あれとの御事也。構へて其分心得候へく。〔卜  
 云、引居ス。後シテ出、地取ニテ入ル。〕

## 二 同脇

〔セリフノ時、○此印迄、前之通。〕  
 夫ニ付今日明恵御登山の由風聞致候間。先あれへ参り見申そふずる  
 〔卜云作ワキヲミテ〕いや是に御座候よ。〔卜云、ワキノ前へ行、下二居  
 ス。〕此程は久敷上人の御参被成ぬとて。当所の人々ハ老若共に  
 待兼申されたるに。唯今の御登山目出度存候。併毎御参詣被成  
 る、時は我等躰迄も御迎に参候が。此度ハ御沙汰なし。不斗御参詣  
 は不審に存候。是ハ思ひも寄らぬ事仰らる、物哉萬里の滄海を凌  
 き入唐渡天ハ如何と存る殊に上人の御身にてハ經論聖教の内にては  
 大方御存じ有べし。其上人の申習スハ。天台山に望有る御方ハ。比  
 叡山へ御参あれ。五臺山を拜し度人々ハ。吉野筑波を拜し給ふと  
 聞。又靈山を志す輩ハ。即当社を御信仰有ると申せバ。日本に御  
 座有りても同じ御事かと存る。恐問敷申事なれど此度の入唐渡天  
 ハ。思召御留りあれかしと存候。言語道断奇特成事仰らる、物哉左  
 様の新成る御事ハ。昔より聞も及ず候。此辺の人々に申聞セ。拜  
 ミ申されよと相触申そふずる。心得申候。〔卜云、立テ、ワキ正面

へ行。)やあく皆々承り候へ。只今明恵上人の御參詣ハ入唐渡天被成る、御暇乞の爲なるを。明神ハ秀行ヲ以て御留被成仏跡を拝し度思召さバ。今夜の内に。三笠山に五大山を移し。拜せ御申有べきとの御神託なれば。南都に於て志の輩は。早々出て拜ミ御申あれとの御事也。構へて其分心得候へく

### 三 同 乱序

「加様に候者ハ。和州南都春日大明神に仕へ申す末社の神にて候。去程に珍らしからぬ御事なれど。先我朝ハ天地開闢より神國なれば。靈神数多御座すとハ申せど。中ニも此春日大明神ハ。武甕槌太神天津児屋根にて御座セバ。愚癡無智の輩を救給はん御方便ニ。諸の菩薩の和光の姿を権に見へ。当社と現じ給ふと聞により。現世安穩後生善所の其爲に。当国の者ハ我等を初て残らず。国々在々迄も老若男女共に。袖を連踵を次で歩をはこび。神前の賑しう在す御事。又と并たる神も御座なく候。夫ニ付此秋津洲に貴僧高僧多キ内に。梅の尾の明恵上人をバ太郎と名付。笠置の解脱上人をバ次郎とたのミ。此兩人の旁をバ当社の両眼左右の手のことくに思召。天下の御祈禱を仰せ御申被成る。其中に取りても明恵ハ。過去より殊勝に在ス故。明神の直に御詞を替さる。杯と申ス。誠ハ左様にも御座有ふと存る。夫を如何にと云に。日外明恵登山の刻。俗在出家共に人間は申に及ず。鳥類畜類迄も奈良坂へ迎に出。上人を見付畜類ハ膝を折。鳥類ハ羽を垂し草木の類迄も正敷。圍鏡渴仰の鉢あれバ。末代にか程殊勝成る人ハ。大唐の事ハいさ知らず。和国にハ有ましき

との申事候。夫に付今日明恵登山の由風聞致ス其子細ハ。入唐渡天の志有により。暇乞の爲当社へ參詣有ると申が。誠に我等鉢の存るハ。萬里の滄波を凌キ。入唐渡天ハいかゞと存る。殊に上人の身の上にてハ。経論聖教の内にも大方存せらるべし。其上人の申習ハ。天台山に望有る方々は比叡山に參るべし。五臺山を拜ミ度キ人々ハ。吉野筑波を拜し給ふと聞。又靈山を心差輩ハ。則当社を信仰有ると申せバ。日本に在ても同シ事かと存る所に。明神ハ秀行を以て御留被成。仏跡を拜し度く思ひ給ハ。今夜の内に三笠の山に五天竺を移し。拜せ御申有べきとの御神託なれば。南都に於て志の輩ハ。早々出て拜ミ申せとの御事なり。構へて其分心得候へく

### 四 鉢木

〔太夫、ワキ、早鼓ニテ入ル。竹杖ツキ、早鼓ニテ出ル。シテ柱ノ先ニテ名乗ル。〕  
「爰許へ用有そふに不斗罷出たるを。一円に御存ない御方ハ。何者ぞと御不審に思召れふするに。是ハ忝も鎌倉最明寺殿の御内。有る御方に仕へ申者にて候。去程に珍らしからぬ御事なれど。保元平治の頃より源平両家の内に。天が下を治メ給ふ人々多しといへど。中にも此君最明寺殿ハ。御先祖にも弥増し文武二道に名を得。勝負に長ぜず色にも愛す。当忠を以て猶忠と育。愁をも厭わず富にして奢給ハ。萬慈悲は上より下り。怨をバ恩にて報じ。仏閣をそだて神社を修理し。御法度忠ヲ仰付らる。故。国々在々迄も吹風枝を鳴らさず。民鎖を差ぬ御代にて候。夫に付此程忍々に取沙汰致ハ。

在鎌倉成さる、諸大名の御出仕にも。又ハ朝夕御前に御伺公の侍中迄も。此程主君のお目見仕らぬと有りて。各御参会のお座鋪にても。明暮是のミ御不審成さる、と承り。或若キ人の分別だてして申さる、様ハ。御内證の御用被仰付て表へ出させられぬか。若哥道か儒道を聞かせられて。お隙のなきゆへ御出なきかと。老若共におもひくく取沙汰申せば左ハなくして。か程に御政道忠<sup>イ</sup>上<sup>ニ</sup>も。若俸禄賄賂に愛て非分を捌か。又理を持たながら時の権に恐れて得申も上ぬか。萬倭人悪人を御聞被成て。諸人の愁をも除き給わん其為に。此中忍て御修行に御出有るを。能く御存被成た人々や御出頭の御方ハ。一年も二年も御帰有間敷<sup>ト</sup>思召。如何にも御心安く思ひ給ふ所に。此一兩日以前にふと御帰国被成。東八ヶ国の大名小名に至る迄。武具を用意し早々御参りあれとの御誕なれば。早諸国へ飛脚を遣されて有れども。其上にも上意を大事と御念を入れ。重て我等に参れと被仰付て有る故。取物も取敢ず罷出た。誠に頼申御方の御内に人多と云へど。中にも某を達者成と思召。仰付られ外聞<sup>マ</sup>旁<sup>テ</sup>忝<sup>イ</sup>に。此度由断仕てハいかゞな。早ッ参りて御感<sup>右</sup>ヨリ左へ廻ルに預ふ。先是より武蔵に掛り下総へ出申さふずる。是に付ても常に武具を嗜ぬ若イ衆ハ。俄に迷惑致されふと推量仕った。いやあれハ四五千計押出たは誰の勢ぞ。何と上洲野州の軍兵じや。夫ならバ参るに及ぬ事じや。是から戻ふ。(跡へ行フトシテ、又正面ラムク)。去ながら唯今にても我等を尋る人あらバ。早是より罷歸りたるよし御申有ッて給れ。構て其分心得候へく

## 五 同供

〔ワキ二階堂ノ跡ニ付出、笛座ノ上ニ居。二階堂呼出ス。〕  
 「御前に候。畏て候。(ト云テ正面へ出。)」  
 「扱もく綺羅美な事哉。卯の花威。小桜威。又あれに真黒によろふて扣へた武者ハ。如何様高名をせられそふな仁体じや。爰許ハ輝麗なが。仰付られた武者ハどこ元<sup>ニ</sup>に居らる、ぞ。疑ひもない是じや。如何に申候。(シテ、シカくく。)」  
 「二階堂の承りにて御前へ召され候。(中くく)の事いやしかと夫の御事に候。ちぎれたる腹巻を着。錆たる長刀を横<sup>タ</sup>へ、瘦たる馬を自身扣へたる武者を連れて参れと有るが。此諸軍勢の中に。旁の様成る不奇麗なハなひ。急て御参り候へ。参候「心得申候。(ト云、笛座ノ上ニ居ス。)」(右ハ觀世流会釈也。外流儀ニテハ、少シ違フ。聞合ベシ。)

## 六 芦刈

〔ワキ道行ノ内ニ出、太鼓座ニ居ス。道行過キテ、詞有リテ、一ノ松ニ向イ呼出ストキ、一ノ松ニ立チ。〕  
 「誰にて渡候ぞ。参候日下の左衛門殿ハ。古へハ此所に御入候が。去子細有ッて今は当所にハ御座なく候。(尤に候。(ト云、立居ル。シテヅレト、シカくく)有り。又来り、一ノ松ニ向イ。)」  
 「是に候中々此隣の事なれば。別に珍らしい事も御座ない。去ながら毎日此市に出て。芦を売面白ふ狂ふ男の候間。是を呼出しお目に掛申そふずる。(左有らバ号御通り候へ。(ト云、シテ柱ノキワへ出、幕へ向。)) 如何に毎の芦売男。今、日も出て芦を売。面白ふ狂ひ候へ

く、「ト云、太鼓座二居ス。」〔太夫物着ノトキ、シテ柱ノ先キへ立テ。〕「最前の都人ハ。未御逗留と見へたる間。先あれへ参つと存ずる。」〔ト云、ワキノ前へ行テ居リ。〕「是ハ先ほどお目に懸りた者て御座るが。当所に御逗留の由承り。御徒然に御座有べきと存じお見舞申て候。「誠に日下の左衛門殿をお尋被成けれど。殊の外世に衰へ給ひて。今ハ当所に御座なき由を折々人の取沙汰致により。先刻ハ其通りを申て御座る。扱又某は跡先の事を一円存せぬ故に。今の芦売たる人を。常の商売人と迄思ふて御座レバ。あれか左衛門殿にて有るよし承り。申く驚入申候。「左様の御方共存せずして。唯今ハ疎忽成ル事を申迷惑致し候。誠に目出度御事成ぞ。只今の様子を見るに付ても。哥道を知れば諸道を知ると申ハ此事にて候。総じて夫婦の中と有も。又は神代の御事抔も。皆和歌の道よりも発りたる事と承る。其上歌にハ鬼神迄も納受有と申が。左衛門殿の御身の上を見れば一定て御座る。夫ニ付我等の様成ル数ならぬ者も常に聞覚へし哥ハ。物の名も所によりて替りけり。難波の鱒は伊勢の蛤と。ケ様の古哥を覚へて候。「何と難波芦ハ伊勢の濱荻との。実とは本歌で御座らふずる。扱又女性上臈の御身として。是迄遙々尋下り給ふ程の。頼母敷キ御心中ハ。女人には珍らしき御事に候。左様に御座らバ先あれへ参り。左衛門殿に其通を申せふずる。」〔ト云、立テ太鼓ノ前アタリへ行、居シテ。〕如何に日下の左衛門殿。都へ御伴ひ有ふずる程に。烏帽子直垂を召され。急キ御出あれとの御事に候。〔ト云、太鼓座二居ス。地取り入ル也。〕

## 七 雲林院

〔初同二テ出、太鼓座二居。中入過テ、シテ柱ノ先ニ立ツ。〕是ハ洛中に住者にて候。漸雲林院の花も今を盛りなれば立越心を慰バヤと存るいや是に見馴申さぬ御方の御座候が。何国よりの花見にて候ぞ。〔セリフ三番目ノ間、同断。〕先在原の業平と申ハ阿保親王第五の御子。御母ハ伊藤の内親王にて御座す。幼少より学の窓に入ッて。書物に心を掛給ふ。殊に哥道の達者も余人に越させ給へバ君の叡慮浅からさりし故。早十六歳にて春日祭の勅を受天上にて冠<sup>カサシヤエ</sup>上衣を許させ給ひたると申が。天子の御前にて元服など遊すと有ル事は是末古今の初成るに仍即是を初冠とハ申習す。又古への哥人の内に伊勢と申たる女人。昔男の事を雙紙<sup>サツレ</sup>書置れたるにより。今に於て伊勢物語とハ申伝る扱又当寺の子細と申ハ。何の頃よりか此所に三院を建置れしが。淳和天皇天長九年に。辱も此所へ御幸被成。其刻初て雲林院と号<sup>ナヅケ</sup>られたると申ス総じて洛中洛外に名木数多有とハ申せど。取分<sup>キ</sup>此木に限ッて毎年春にも成れバ知も知らぬもおしなへて。老若男女共に此所に来ルに花の盛りハ申に及ばす。末開かざるにかうばしさも吹来る風に誘引。誠に見る人毎に帰ルさを忘る、程の名木なれば世に普く雲林院の桜とハ申習す。古へ良撰法師も当寺の桜に詠入給ひて哥に此代をバ雲の林に首途して。煙と成らん夕部をぞ待と遊されたと申ス。先我等の存たるハ斯の如にて候。左様の御方とも存ずして誠しからぬ事を申御恥<sup>ハ</sup>存候扱ハ傍の面白く思ひめがれせず詠め給ひ。和哥の道に執心深き事を感じ御座し。御相伝有らん為に見へ給ひたると存る間。今宵ハ此花の影に

伏給ひ伊勢物語の奥儀を残りなく御伝受被成。夢の告をも待給ひ其後何国へもお通りあれかしと存る〔此跡、常ノ如。〕

### 八 遊行柳

〔出所、前ノ如。〕

「是ハ陸奥白川辺に住者にて候。今日ハ徒然成折柄なれば。古塚の柳の辺へ立越。心を慰はよと存る。『いや是成お僧は。何とて木影にハ休らふて御座候ぞ。』去程に朽木の柳と申ハ。是成木にて候。人皇七十四代鳥羽の院の北面の侍。田原藤太秀郷よりハ八代目。左衛門の太夫秀清の御子に。佐藤兵衛藤原憲清出家し。後に西行法師と申て。諸国を修行被成奥へ御下向の時。頃ハ水無月中旬の事成るに。此河下より此辺を御覧するに。川副に朽木の柳の御座候を御覧じ。涼敷候ハんとて此処へ来り給へば。木影より涼敷き風吹申間。暫く休らい此柳に向ひ一首の哥に。道の辺の清水流る、柳かげ。しばしとてこそ立留けれと哉覧。又つれとやらんけるとやらん説給ひたると申ス。田舎とハ申ながら。哥人の言葉に読れし程の木にて候へばとて。古塚の柳とハ申習す。其後後鳥羽の院の勅有りて。建久二年三月。新古今和歌の集に入たる杯と承及て候。何れも柳には謂有実候得とも。委敷事ハ存も致さず。先我等の存たるハ如斯にて候が。扱只今ハ何と思召よりて。お尋有りたるぞ不審に存候。是ハ奇特成事仰らる、物哉。最前も申如く。是成柳は名高き古木にて候。夫を如何にと申に。前きの遊行も是へ御出有たるに。今の上人ハ新道を御通り被成る、事残り多く存じ。草木心なしとハ申せ

ど。青柳の情老人と現じ。御供申御十念を授り。其上古塚の古木の子細迄を御物語あり。御道しるべ申たるかと推量致ス。余りに不思議成御事なれば。末は急の旅なり共。今宵ハ木影に御逗留被成。迎の御結縁に。六時不断の御法を遊し。重て奇特を御覧あれかしと存る。

### 九 三輪

〔出所、右同斷。〕

「是ハ大和ノ国三輪の里に住者にて候。某此中明神へ日参致が。今日ハ遅り申間。急き参詣仕ふずる。『去程に珍しからぬ御事なれど。先我朝ハ天地開闢より神国なれば。国々在々に跡を垂給ひて。靈神数多御座すとハ申ながら。中にも此三輪の大明神ハ。御神体に何事の御座すとハ知らねども。我等如きの愚癡無智の輩。其身にも応ぜぬ事を而已祈誓申に。萬叶ぬと云事の無キにより。毎日毎夜老若男女共に。袖を連踵をツイ。歩を運ぶ衆生数限りなければ。神前の一入賑しう在す御事。又と並びたる神も御座無く候。誠に当社へは何時参詣申せ共。毎も初て参りたる心地して。難有さのま、感涙の浮む迄に候。何角独言を申内に程なふ参り着て候。〔ト云迄ニ少シ正面ニ出。作り物ニ向イ、衣ヲミテ〕荒不思議や。爰な御神木に衣の掛りて有るよ。是レハ再々見た様に覚ゆるが誰のぞ。実と今思ひ出た。玄賓僧都の衣にて候間。是より僧都へ参り此よし申そふする。有り儘に〔ト云乍右ヨリ左へ廻ル〕委敷雑談申たらバ。如何成とも不審の晴ぬ事ハ御座有まいと存る。〔ト云、ワキノ前へ行居り。〕」只今参

ンして候。「我も疾トウに伺公致し。老少不定の世の習ひなれば。有難き御法をも聴聞申。或ハ御座敷や庭前をも清め。又ハ御前にて似合イの御用承るべきを。俄に叶ぬ用所御座候ひて。今迄延引迷惑仕候。又御存のこたく此中明神へ宿願の有りて。毎日参詣申間。即唯今も参りたれば。神前の杉の一の枝に衣の掛りて有るを。何とやらん幾度も見馴たる様に思ひ。近々とよりて能ク詠むれば。正敷ウ僧都の御法の御衣かと存る。如何にお僧の衣にてもあれ。あの神木には御座有間敷キ事成るが。さりとては希代成ル御事と存じ。あれより直に伺公致たるが。何共思召合せらるゝ儀は無御座候か。「言語同断奇特成事仰らるゝ物哉。当社にハ女体の姿も御座」と承る。其上神には五衰ス三熱の御苦ミの有ると申せバ。僧都の衣を御手にふれられ。五衰の苦ミを免れ度く思召。一衣を御所望被成たると推量致す。余りに不思議成ル御事なれば。急き神前へ御出有りて。衣の様体を御覧あれかしと存る。「左有らバ某も御跡より参申そふする

十 龍田

〔立方出所、右同断。〕

「是ハ和州龍田の山下に住者にて候。今日ハ明神へ参らはやと存る。いや成お僧は。何国より御参詣被成たるぞ。「去程に珍らしからぬ御事なれど。先吾朝ハ天地開闢より神国なれば。靈神国々に地をしめ給ひ。殊更大社に諸神多御座して。山神水神石體杯に像を現じ。威光區々なりとハ申せど。中にも此竜田の明神の御本地は。龍田彦龍田姫とも申て。女体の神も一所に御座候故か。神代の初メより好

色に愛給メヒ。当社にてハ紅葉を御神木共。又ハ御神体とも崇め奉る。然れば当国三輪の明神ハ。杉をのミ御神躰と渴仰申候。併此所の紅葉の名高き子細ハ。昔伊弉諾伊弉冊の尊。天の逆鋒を此山に埋給ふにより。当山ハ御鋒の守護神にて。此お山をも鋒山と名付在すに。其御キ劍キの上より生出たる木なれば。此山の紅葉は常のと替りて。鋒の刃先の刃キのこたく八葉有ルと申ス。誠ハ左様も御座候ひけるか。御覽ぜらるゝこたくか程に古木の多く。神前の籬イの内迄生茂れ共。一葉散らさず一枝折ル事もならず。自ラにして崇御申ある。左有に依て長月の頃にも成れば。社頭へ参るか紅葉を見に来るか。国々在々所々よりモ。此川上に楓の木数多候が。(キセンクンジュナシ申サル。夫二付一年紅葉ノ節御幸有也) 初冬トの時分立田川へ紅葉の散浮たるハ。さながら錦を張りたる如成ルを。主上ノ御覧有ッて御製に。龍田川紅葉乱れて流るめり。渡らハ錦中や絶なんと。ケ様に遊されたと承る。又其後カ家リ隆ツの哥に。一姿面白く読れたると申ス。龍田川紅葉を綴る薄氷。渡らハ是も中や絶なんと。斯詠じ給ひたる実候。是に付数多子細の有とハいへど。先我等の存たるは斯の如くにて候。「是ハ奇特成事仰らるゝ物哉。左様に何国とも知らず女性の来り。当山の謂などを委しく語申べき者。爰許にて覚す候が。扱ハお僧の御心中貴キにより。当社明神権に人間と見へ給ひ。御詞を替されたと存る間。暫是に御逗留あり。重てハ龍田姫の誠の神姿を御覧じ。其後何国へもお通りあれかしと存る〔此跡、常ノ通り。〕

## 十一 女郎花

〔立形出入、右同断。〕

「是ハ八幡の山下に住者にて候。今日ハ物淋敷折柄なれば。麓の野辺へ立出。草花を見て慰ばやと存る。いや是成お僧ハ。何とて此塚の辺にハ休ひ給ひたるぞ。「去程に古へ此八幡の住人に。小野の頼風と申人の御座すが。訴訟の事ありて永々在京有りし程に。眉目能き女に酌など取らせ給ひ。有夜の睦語ムツゴトに。我か古里に帰りなバ。必ずお尋あれと契り置れ。訴訟叶ひ下り給ふ処に。三年ニに成りて彼女尋来り。頼風の館へ案内と云を。内より女房ニウチの御留守と答しを聞。扱ハ君の偽り給ふを知らずして。女のはかなさハ誠と斗心得。是迄はるく尋下りしに。空敷う再古郷へ帰らん事。余人の前面目なふや思われ候ん。放生川へ身を投底の滓と成りしに。頼風は社頭より御下向有しが。水辺に人の数多有を問れし時。隣に有つる者答へて曰。都より女性の人を尋て下りたるが。逢ぬを恨ミ身を投たると申を。不審に思われ寄りて見給へバ。疑もなき古へ人にて有りし程に。余りに心中を不便に存せられ。頼風も同く沈ミ果給ひしを。此辺の人々痛敷キ思ひ。取上二人共に塚に築込メ。則是成を男塚女塚とハ申ス。然れバ一ツの塚より草花一本生出るを。見馴ぬ花とて不審成さる。折節。有點キ人の申され事に。女郎塚より生出たる花なれば。是は女郎花と申さふずるとて。夫よりもおしなめて女郎花とハ申習す。左有に依て僧正遍照の哥に。名に愛て折れる斗りそ女郎花。我おちにきと人に語るなど。斯詠シ給ひたる実候。是ニ付数多子細の有りとは云へど。先我等の存たるハ斯のことくにて候

「是ハ奇特成事仰らるゝ物哉。左様に何国共知らず老人の来り。男塚女塚の子細。又女郎花の謂を語り申べき者。爰許にてハ覺す候が。小賢き申事なれど我等の存るハ。古への頼風の亡魂顕出。委敷教へ給ひたると推量致ス。余りに痛敷キ事なれば。暫是に御逗留あり。彼夫婦の跡を御弔ひあれかしと存る。〔是より跡、常ノ如し。〕

## 十二 船橋

〔立形出入、右同断。〕

「是ハ上野の国佐野の郡内に住者にて候。今日ハ何とやらん物淋敷折柄なれば。舟橋の隣へ立出心を慰ハやと存る。いや是成客僧ハ。何とて此所にハ休らひ給ひたるぞ。「先当国佐野の在所に。忍妻にあこがれたる若キ男の有けるが。其兩人の家の間に川を隔て住し故。毎此舟橋を渡り行キて。夜更人しづまりてひそかに相馴しを。初の程は曾て人の知らざりけれど。度重れハ顕て。世上にはつと風聞致を。後にハ二親の開付申様。内にハ然るべき縁者をも取らんと思ひつるに。掛る不思議の仕節出来致す事。人の思わく外間旁口惜きとて。我子の友達を頼キ程々に異見を申せば。はやか程に遍メく人の御存と云。殊に二世迄と契りし中なれば。思ひ切らん事努々成間敷由申間。所詮此橋が有ればこそ道として通へ。是なくバ川を渡る事は成間敷キと存し。彼兩人の子にハ深く隠して。橋の板を二三間程引放して置を。夫を二人の者ハ夢にも知らず。有ル暗の夜毎の如く。更行鐘を知るべに内を出。橋の隣に立やすらふ所に。向ひに人影の見ゆるを我待君と思ひ。行間遅しとこゝろそゝるに成りて渡るとて。



踏はづし落て空敷<sup>ク</sup>成るを。今の一人の者ハ夫をも知らで思ふ様。只今向<sup>ヒ</sup>より人の渡る姿の見へけるが。此方<sup>コナタ</sup>へハ誰も来らぬよと思ひ。下をも見ずして向ひに斗り心の有りて尋行<sup>コト</sup>とて。是も橋よりかつはと落て相果申を。夜明<sup>テ</sup>て親々ハ子の見へぬを不審に思ひ。爰彼をよべ共居ざりし程に。扱<sup>ツ</sup>ハ橋の下へも落たるかと。後悔千萬泣涕<sup>ナミダ</sup>こかれけれど。其甲斐もなく。責<sup>ツ</sup>て死骸<sup>シガハ</sup>を成とも見度と云て。河の上下を尋けれ共無<sup>キ</sup>折節。有る點<sup>キ</sup>き人の申され事に。ケ様に水に溺れて死骸の見へぬには。鶏を舟に乗せて隣を漕廻<sup>ク</sup>れバ。必死骸の上にて時を謡ふと云し程に。左様に致そふずるとて鳥を尋けれど。昔より佐野三里か間にハ。一圓鶏のなき在所なれハ。爰を以て万葉集の哥に。吾妻路の佐野々舟橋鳥はなし共。又取放しとも二流に読れし哥ハ。何れも本説有ると申ハ此子細と承る。先我等の存じたるハ斯のことくにて候。「是は奇特成事仰らる、物哉。此船橋より落ちて死したる夫婦の者。水底の苦ミをなし申処に。貴き客僧の是へ御出有るを嬉しく思ひ。彼亡魂顕出。詞を替したるかと存間。暫く是に御逗留有り。彼跡を御弔被成。其後何国へもお通りあれかすと存る〔此跡、常の通り。〕

### 十三 融

〔立形出入、右同断。〕

〔是ハ都五條隣に住者にて候。今日ハ物淋敷折柄なれば。河原の院へ立出心を慰ハやと存る。辞是成お僧ハ。何国より御越被成たるぞ去程に陸奥の千賀の塩竈を。都の内に遷されたる子細ハ。昔嵯峨

の天皇の御宇に。王子数多御座すとハ云へど。中にも源の融の大臣と申ハ。父母の御寵愛限りなかりし故。古来にも聞も及ぬと有程に種々様々の御遊覧を被成る、。春の花秋の月。千草に聚虫の音。詩歌管絃琴碁書画は申に及ず。有時ハ鷹を遣われ鹿を狩。又有時ハ池を堀山を築せ。其高山にハ枯木大木を植置れ。麓には鳥類畜類を放<sup>チ</sup>置<sup>キ</sup>。朝夕去去御覧有とハ云へど。是も一旦面白く思召て。重て甃<sup>キ</sup>給ふ事御座なく。或時大臣仰られける様ハ。何にても珍らしき事や有る。見て慰度と御意被成しを。去人御前にて咄<sup>シ</sup>申されしハ。陸奥の千賀の浦わの体。余に越<sup>ヘ</sup>て詠一人の由申されしを。則御覧有度<sup>ク</sup>思召せども。是よりハ遠路にて御下向も叶わされバ。思召出されて比六條河原の院に。千賀の海浦を少しも違<sup>ズ</sup>す移され。三千の人足を三手に分<sup>テ</sup>て。津の国御津の濱より毎日潮を汲せ。汐時を待<sup>テ</sup>て一同にあけし程に。さながら差来る潮のことくに有たると申ス。され共塩焼有様なくてハと有り。此河原の院に濱をならさせ塩屋を建。風も鎮<sup>リ</sup>り日もうらら成る折節ハ。皆海士人の出て塩を焼に。花の都なれバ宮殿楼閣の内より。塩屋の煙の細く立上る躰を。見る人毎に面白存ぜられ。往来の人の立留たると申ス。又あれ成は陸奥の籬が鳥を移され。毎も左府ハ御舟に召されて御出有り。思ふ友どち御遊び被成たると承る。其折節在原の業平も。是を面白ふ思召か御歌に。塩竈に何か来にけん朝なぎに。釣する船も爰によらなんと。ケ様に遊されたと申ス。又夫のミならずあの籬が鳥の森の梢に。鳥の宿し囀て。四門に移る月影迄も古人の讀られたると申ス。され共大臣空敷く成らせ給へバ。其後相續して甃人もなし。

今ハか様に名のミ斗にて候。其刻貫之ハ立寄て哥に。君在て煙り絶にし塩竈の。浦さびしくも見へ渡る哉と。斯詠し給ひたる実候。先我等の存たるハ斯のことくにて候「是ハ奇特成事仰らる、物哉。旁の是迄遙々御登り有たるに。誰有て陸奥の名所を。此所へ遷されたる子細を。語り申へきもの有間敷キと思召。融の大臣の御亡心権りに見へ給ひ。委しく御教被成たると推量致す。余りに不思議なる御事なれば。今宵ハ爰に御逗留あり。重て奇特を御覽あれかしと存る〔此跡、常ノ通。〕

#### 十四 海人

〔初同ニテ出ル。太鼓座ニ居ル。太夫中人過キ、ワキ、シテ柱ノキワ迄来、呼出ストキ、一ノ松ニ立。〕

〔此所の者如何様成御事にて候ぞ。「心得申候〔ワキ、元ノ座へ行居ス。直ニワキノ前へ行居り。〕」「此海人の里の者お尋ハ。如何様成る御用にて御座候ぞ〔脇能ノセリフヲ云。〕」「先あれに見へたるハ海人の野里とて。古へ海士人の住給ひし御在所にて候。又是成を新珠島と申子細ハ。昔天智天皇の御時。淡海公の御妹ハ。唐土高宗皇帝の后に立せ給ふ。然れば南都興福寺ハ彼后の御氏寺なるに依て。大唐よりも種々の宝を渡さる。華源磐四濱石。面向不背と申。其中にも面向不背といふ玉ハ。玉中に釋迦の像在すを。何方より参りて押し奉れ共。同じ如くに御面相を押し申により。面を向ふるに背ずと書て。面向不背の玉とハ申実候。此内二ツの宝ハ京着致し。名珠ハ此沖にて龍宮へ取たるを。大臣殿彼玉を惜く思召。当浦へ忍て

御下向あり。賤しき海人乙女と契りを込られ。程なく一人の男子を産び給ふ。其折前大臣殿海士人に仰られける様ハ。此沖にして童女の沈めし名珠を。かつぎ上よと御申あれバ。安き間の御事玉をは取上申べし。さあらバ今の御子を世継にと望まれしを。則御同心被成し程に。偕ハ我子故に捨ん命ハ惜からじと。一筋に思ひ定。千尋の繩を腰に付。其儘海中へわけ入給ふが。良ありて水底の繩が動けるを。すわ約束の繩こそゆるけとて。上へ待たる人ハ我先にと引て曳上。是なる島にて彼玉を始めて見初しにより。則所を新珠島とハ申習す。ケ程の銘珠を再び日本の宝となし。興福寺に納置れしも此故と申ス。されども海士人ハ龍神の見入れけるか。程なく空しく御成りあれど。御契約なれば御子ハ世継の位に備り。今都に房崎の大臣殿と申て御座るも。比子細にて有由承る。先我等の存したるハ斯の如くにて御座候。「左様の御方とも存ずして。唯今ハ疎忽成事を申迷惑仕候。さあらバ其由相触申そふずる。〔ト云、立テ、ワキ正面ニテ。〕」「やあく、皆々承り候へ。房崎の大臣殿此所への御下向も。御母海人びとの御追善の御為成れバ。一七日の間ハ浦々の網をも上。殺生禁断のよし仰出されてあり。然らバ御菩提をバ管絃講を以。御弔と有べきとの御事なれば。管絃の役者ハ其分心得候へく。〔ト云引居ル。後同ニテ入ル。〕

#### 十五 梅枝

〔立形出入、雲林院ノ通り。〕  
〔是ハ摂津の国住吉の者にて候。最前村雨の致したるが。程なく空

も晴申て候程に。罷出て。四方の気色を見て慰ばやと存ずる。いやなるお僧は。何国より御越被成たるぞ【語】「去程に当社住吉大明神は。我朝に隠なき靈神にて御座ませバ。毎年御神事数多御座有により。我劣らじと思ふ役人多といへど。中にも富士といへる大鼓の上手の有りて。是を聞ッ人感を催し。神明仏陀迄も納受垂れ給ふと申ス。然れば其比天下に名を得たる。糸竹の楽人を集メ。内裏に於て七日の管絃の有し時。此度富士を召れんと諸人の取沙汰致し。主も内々左様に存ずる處に。当国天王寺の役人浅間を召るゝと聞。彼ハ外間旁面目なふや思われ候ん。萬民に深く隠して都て登り。禁中に參り此由歎き申されければ。是に仏神も憐給ひたるか。公卿天上人百官卿相に至迄。何れも富士を御引被成し故。左右なふ御役を給りしを。悪事千里と浅間比由を聞付。若富士か太鼓が叡慮に叶ひてハ。命長へても生甲斐有間敷と存し。世にハ不得心なる者の有ぞ。忍ひ寄ッて富士を討し程に。妻ハ夫の別れを悲ミ。中々泣涕こがれたる気色の見へしが。誠に妹背の中は二世迄も契るやらん。程なく空しく成りて。跡にハ娘の一人残りたるが。幼き身にて父母に送れし間。人目をわかず起伏に人を歎キて。南方痛敷キ事成るぞ。生死の習とて姫も頓て相果たる由承る。不便やな富士存生に有し時は。大鼓を秘藏仕たるハ申せど。其後續く上手のなけれハ。今ハか様に苦むして御座候。富士が事ニ付数多子細の有とハ申せど。先我等の存たるは如斯にて候。「言語道断奇特成事仰らるゝ物哉。さなきだに女ハ五障の罪深キと申が。冥途の苦ミを免れ度思ひ。彼亡魂あらわれ出。詞を替したるかと推量致す。余りに痛敷キ事なれハ。

暫く是に御逗留あり。女人成仏の御法を遊バシ。其後何国へもお通りあれかしと存ずる  
〔跡、常ノ通り。〕

## 十六 錦木

〔立方出入、右二同。〕

「是ハ陸奥狭の里に住者にて候。今日ハ物淋敷キ折柄なれバ。錦墳の隣へ立出心を慰はやと存ずる。いや是成お僧は。何国より御越被成たるぞ〔セリフ、常ノ通り。〕」「先和国に於て。諸人の男女夫婦の語らひを為には。皆媒と云事の有りて縁を結ヒけるが。如何なれバ陸奥当所の習ひにハ。曾て左様の義ハなくして。我思ふ女の門に錦木を立し時。逢ふべき夫の錦木をバ取入レ。逢ふ間敷きをバ取入レず候印の木なれバ。色どり飜るを以錦木とハ申習す。然れハ古へ此所に田の長の有けるが。眉目能娘を一人持たるを。有若き男の心を懸ケ印の木を立申所ニ。彼姫取入ず置たるを。夫ハ心の内に存る様。此事曾て人の知らぬに於てハ。ふつと思ひ切申すべきか。早男女ともに其隠なきに。あれこそ女にうとまれたる者よなど、有りてハ。生ても甲斐有間敷と思ひ。夫より日毎に立けれど。終に難面なく置たりし程に。夫ハ思ひにあげ空敷く成つるが。誠に妹背の中は二世迄も契やらん。程なく姫も相果しにより。二人を錦木共に塚に築込メ。即是を錦塚とハ申習す。又細布と云子細ハ。昔此處に悪キ鳥のありて。幼キ者共を取惱し候程に。子を持たる者ハ是を悲ミ如何ハせんと申所に。有ル小賢き人の申され事に。ケ様に怪

鳥の有りて人を取るにハ。鳥の羽を布に拵へて着せければ。必取止ム由申間。左様に致そふずると。是を我先にと調へ着致させし時。元来鳥の羽にて織たる布なれば。機張狭くて胸拵も合申さぬを。胸合かたき恋とハ讀れたると申ス。是に付数多子細の有りといへど。先我等の存たるハ如是にて候。「是ハ奇特成事仰らるゝ物哉。左様に何国共知らず女性と若キ男の来り。錦塚細布の謂委く語り申べき者。爰元にてハ覺ず候が。扱ハお僧の御心中貴により。古への夫婦の者の亡魂顯れ出。詞を替したるかと存る間。暫く是に御逗留あり。彼跡を御弔ひあれかしと存る〔跡、常の通り。〕

### 十七 葛城

〔立方出入、右二同。〕

「是ハ葛城山の麓に住者にて候。今日ハ一段の天気なれば。山に上り薪を樵はやと存る。いや是に見馴ぬ客僧達の御座候よ、喃々〳〵旁ハ。何とて此所にハ休らふて御座候ぞ」「去程に昔彼の行者つく〳〵と思わるゝ様。一〳〵度ハ此山に分入悪魔をしづめ。国土安全になすべしと思ひ給ひ。則大峯葛城を踏わけ給ふゆへ。今に於先達衆ハ本山当山とて。二手に分て毎々年恙なく峯入を遊し。殊に嶮敷谷峯を越され。朝暮の御祈祷意満なく。誠に難行苦行浅からざらる故。弘法繁昌の目出度御代にて御座候。然るに役の行者と申ハ。生国ハ大和の国の人成が。尋常ならぬ御方にて候ぞ。四方の山々を詠りて思ひ給ふ様。葛城山芳野の御嶽大峯を見渡せば。いかにも程近きよふにハ打見へて。谷峯を廻り殊の外難所なれば。葛城より大峯

迄岩橋をかけ。客僧達の通ひ路に被成度とて。此由一〳〵言主の御神へ仰らるれば。尤とて御同心ありし程に。俄に巖を運せ積重て。種々様々の計略を廻らし給ふとハいへど。当社は女躰にて御座せば。昼ハ御姿恥敷思召問。夜な〳〵橋を掛けふずると仰られ。彼方此方と様々有る内に。早夜ハ天明と明ければ。終に岩橋成就致ぬ事を。行者は殊の外憤り給ひ。肝膽を碎き祈り給へハ。不動明王の索杖の繩にて。頓て葛城の明神を戒給ひたる。其返報をなさんと思召。帝へ此旨奏し給ふにより。色々六〳〵敷事ども有たると承る。先我等の存たるハ如斯にて候。「是ハ奇特成事仰らるゝ物かな。御覽せらるゝ如く麓は能キ天気成に。俄に雪を降らし女躰の姿にて爰に來り。旁を留申されたるハ。行力の達たるを御納受被成。五衰の苦ミを免れ度思召。当山の御神権に人間と見へ給ひ。此窟を御宿りに参らせられたると推量致す。余りに不思議の御事なれば。末は急ぎの旅なり共。今宵ハ爰に御逗留被成。終夜有難き御法を遊し。重てハ誠の神姿を再〳〵御覽じ。其後何国へもお通りあれかしと存る〔跡、常ノ通り。〕

### 十八 龍虎

「箇様に罷出たる者ハ。此国の傍に住者にて候。扱も爰に珍らしく面白き事の。出来致す其子細ハ。龍虎の戦の御座候が。竜ハ虎を吞んとすれば又虎ハ。竜を喰と致す。誠に是人間蝸牛の諍に似たり。惣して海中の鱗山野の獸。其数量り難しといへど。中にも龍ハ鱗の司と云。位の高き物成に依て。忝も天子に袞龍の御衣とて。御紋に龍を第一と織付。御眼をも龍眼と云。其上美く色取り飴りた

る。御<sup>シ</sup>躬<sup>ガ</sup>を龍<sup>リ</sup>舸<sup>カ</sup>とハ名付く。又虎ハ常に竹の林<sup>シ</sup>を柝<sup>スミカ</sup>として。人間の直なる者に戯れ。殊に仏法の明かなる事を知て。羅漢に仕へ。四睡の中に入<sup>ル</sup>と申す。金龍雲を穿て猛虎遠山に風を出す。爰を以竜吟ずれば雲起り。虎嘯バ風生ずと。斯たとへにも申習す。併此二ツの争<sup>ヒ</sup>勝劣有間敷と推量致す。誠にケ様の御代に生れ合せ。我等如きの者までも。かゝる稀成る事を見物仕るも別して大慶に存る。いや又漸龍虎の戦の始るやらん。大風吹きあれ成る高山<sup>クログモ</sup>より黒雲が出たるぞ。皆々心を定て御見物あれ。構て(左ヨリ右へ見廻ル)。其分心得候へく。

## 十九 同

〔初同ニテ出、太鼓座ニ居ス。中入ニテ、シテ柱ノ先キニ立、名乗ル。〕

「是ハ大唐に住者にて候。我等ハ唐土人の中に取りても。他国の人に通詞を致し世を渡り申が。夫<sup>ニ</sup>付遠国の人。只今は着れたるよし承り候間。いつれの国の人にぞ参りて見申そふずる。(ト云、ワキノ前へ行、座シテ。)」是ハ震旦の者成が。旁ハ日本の人にて候か(ワキ「参<sup>ッ</sup>候。是ハ日本ヨリ此處へ渡リテ候。御身ハ此處ノ人ニテ候歟。」「中々拙者ハ爰元にて。他国の人に通詞を致者なれば。何にても諸用有るに於てハ。我等に仰付られふするにて候(ワキ「左様ニ候ハ、是ヨリ渡天ノ道ヲ教へテ給り候へ。」「某ハ此漢朝の住人なれと。未<sup>ヅ</sup>四百余州を皆ハ見申さぬに。日本より遙々波濤を凌ぎ御出有ハ。扱々奇特成<sup>ル</sup>御事にて候。又渡天の道と申ハ。先

大唐の都より天竺迄の道は。遙々の難所敷多有る由申が。其中二も流砂と云て三国一の大河有り。是を通りて河原を行き。河原を過て八川を幾瀬ともなく越すに。此川の表の広き事ハ数千町。常に水上より白浪みなぎり落て。早き事飛鳥<sup>キタツ</sup>射矢も事の敷ならず。毎も強風吹立<sup>キ</sup>つて砂を飛して雨の如し。神力仏力にて此河を難なく越給ひても。又行先<sup>キ</sup>に荀嶺と云大山<sup>ヲ</sup>有り。此山の高き事ハ雲を穿<sup>チ</sup>。大成<sup>ル</sup>事ハ唐土天竺迄も懸<sup>リ</sup>。けれバ。日暮ても人里なけれバ野人村老も見へず。虎狼野干を友として夜を明し。夜明<sup>ケ</sup>ぬれば何を限りともなく山を上<sup>ル</sup>に。悪鬼毒虫あまた並居て。己先にと旅人を取<sup>ツ</sup>て餌食とし。誠に恐<sup>キ</sup>ハ渡天の道と申せバ。思召御留りあれかしと存る(ワキ「念頃に御教祝着申候。我若年ノ時ヨリ仏法修行の志有により、日本をハ不殘見廻り渡天の望候間。此所ニ来り、身命を仏力に任せ参ばやと存候。又あれなる竹林に俄に雲の掛り候間、不審ニ存し山人に尋て候へば、龍虎の戦ひ有由申候間、暫く逗留申そふずるにて候。」「言語道断奇特成<sup>ル</sup>事仰らる、物哉。日本ハ神国なれハ渡天を危く思召。氏の神山賤と現じ。御物語有りたるかと存る。恐しき事ハ天竺斗に限らず此国にも。向ひの高山<sup>シ</sup>の雲霧覆ひし内より。金龍の黒雲<sup>シ</sup>に乗りて飛來たるを。あれ成竹林の巖洞<sup>クモキリ</sup>より悪虎の出で。龍虎の戦ひ致すを御覽じ。其後渡天の事ハ御分別あれかしと存ずる(ワキ「先々龍虎の戦を見物申そふするにて候。」「何にても御用の事あらバ承ふする(ワキ「頼<sup>ミ</sup>候べし。」「心得申候(ト云、引座ス。後同ニテ入ルナリ。)

## 二十 松虫

〔立形出入、右同断。〕

「是ハ此隣に住者にて候。今日ハ阿部野の隣へ立出心を慰ばやと存る。扱々今日の様な夥敷市立ハ。近イ頃にハ希な事で御座る〔ト云、ワキノ前二座シテ。〕「唯今參ッて候。某も此一兩日ハ隙を得ず延引致候。是ハ近比面白き事をお尋成され候物哉。拙者よりハ旁の御存有べき所に。我等に御尋有事ハ不審に存候。去ながら聞及たる通り物語申そふする。去程に松虫の音に友を忍と申子細ハ。古へ此所に。如何にも中の能き男の二人御座有しが。生国ハ和州方の人成る由申キ。誠の説ハ知れず。数年此所に住ッて一段と親しう致し。四季折々ハ互に楽ミ。此阿部野の方へ出酒を愛しけるが。有暮に此原を通りし時分。虫の音いと物すごく聞へ。四方の気色も面白く見へしを。其虫も見へす声止りたるハ不思議ぞと思ひ。鳴声に付次第に行聞しが。男ハこかれ入たるか。但又有為転変の習にてもや有けん。草を枕とし露の命終しを。今一人ハ左様の事をバ夢にもしらず。暫し此方に待けれど。余り遅しとて其跡を慕ひ。爰彼を尋るに。彼者空敷死骸斗りなれハ。驚騒き嘆き悲しめ共。幼少の時より竹馬に鞭を当しより以來。少も離る、事もあらず。死なハ一所と云替しつるにと。中々泣涕こがれ伏まろひ。出入の息を絶て終に墓なく成し間。左様の儀を以松虫の音に。友を忍と申習したる実候。先我等の存たるハ如斯にて候。是ハ奇特成事仰らる、物哉。左様に何国共なく若キ男の伴ひ来り。酒を愛し御物語申べき者。此隣にてハ覚へず候か。扱ハ古への替らぬ友の幽霊顕れ来り。詞を替した

ると推量致す。余りに不思議成る御事なれハ。重て奇特を御覽あれかしと存る。何にても御用の事あらハ承ふずる。心得申候。』

## 二十一 忠信

〔早鼓ニテ鉦ヲ持出。シテ柱ノ先ニテ、シヤベル。〕

「か様に候者ハ。吉野十八郷の老中に召遣われ。彼方此方と走り廻り善悪を嫌ハず。幾千万の義を相勤る者に候。然れば我等の是へ出る事余の儀にあらず。扱も義経ハ爰彼に御身を隠され。已に此山へ落入候程に。何れも痛み忍ひて置申を。其旨頼朝聞召れ。急ぎ義経を討取ッて參らせよ。左ならハ当山を打破べきとの御事に付。驚騒き衆徒立合談合致され。ケ様に隠し置き申事も。終にハ御兄弟御中直も有べきかと存る処に。是は思ひの外なる御事にて候へハ。是非なく討て參らすべし。乍去唯尋常にてハ討事も成間敷候間。夜討を掛申そふずる。兎角時刻移ッてハ叶ふまじ。夜半過と定られ。口々つまりく々に能き兵を待せ置き。若討洩らすに於てハ後日の詮議たるべし。此度当山の老若によらず。一人も残らず出らるべし。さなき物ならバ面々を曲事に成し申そふする。いや漸時も来り候間。油断なく早く出らるべきとの御事なり。皆く其分心得候へ〔見直し留ル〕く〔ト云、入ル也。〕

## 二十二 大蛇

〔シテ、来序ニテ入ル。来序直リニテ出、シテ柱ノ先ニテ、シヤベル。〕

「か様に候者ハ素盞鳥の尊に仕へ申ス。随逐の神にて候。某唯今此処へ罷出る事余の儀に非ず。此程彼の河上に啼哭する声聞へ候間、尊不審に思召。川上にて御覽すれば、老人夫婦の中に美しき姫を置泣呼居申間。尊弥不思議ニ思召。如何成子細ぞとお尋ありければ、夫婦の者申様。我ハ手摩乳脚摩乳と申者なり。又是成るは稲田姫と申て。我等か娘にて候。此所に大蛇の御座候に、牲を備へ申が。此度姫が番に当り申に付。夫を嘆き申由語ければ、尊聞し召近頃不便の事にて有り。其姫を我に与よ。大蛇の難を遁すべしと御説有る。老人夫婦ハ大キに喜び。参らすべきよし申上るに付。其時尊は大蛇の容れをお尋被成る、に。参候胴一にて頭ハ八ッ御座候と申を。さあらバと有ッて酒を八ッの舟に盛りて。待給ふべきよし仰られ。則稲田姫を伴ひ簸の川上へ御上りあり。神通方便を以。大蛇順へ給んとこの御事なれば。何れも御近辺迄早々相詰られ候へ。構て其分〈見直し〉心得候へくく」

## 二十三 豊干

〔中人、来序ニテ三人、或ハ五人出ル。ヲモ、舞台真中ニ立。ツレ左右ニ立ツ。大会ノ如。〕

「か様に罷出たるを。興有ッた者と思召れうずる。是ハ唐土天台山の峯の梢に。年久しく住木の葉天狗にて候。ツレ エヘンくく〔此所跡大会同断〕」

〔先唐土の寒山寺より有ル貴キ沙門。当寺の御事を聞召。只今是へ御出候処に。豊干禪師顕れ出。べいしうを手に携。花落の塵に交り。

ハクガの波に裾を濡し。万民に面を瀑も恨ならず。法の為ならバ身を捨る。此へいしうを手携てといふ事ハ。箒を持何の塵に限らず。惡逆煩惱を掃拂、為なり。白河の浪に裾を濡し、面を瀑も法の為なり。一ッハを花皮を冠としもくげきはくとハ。木の皮を冠にし、木履をはき。織に任せて飛行き仕給ふ御方也。又或時豊干山に出四方の気色を見給ふに。何国ともなく幼き者の泣声を聞。如何成者ぞと問給ふに。則子なりと答へ申ス。豊干憐ミを催し。拾上、彼れを拾得と名付給ふ。又拾得の如く成る童子一人来たるを。沙門御身ハ如何成人ぞと尋給へバ。我ハ是寒山と答ふ。則是ハ普賢文殊にておわします。又豊干ハ正身の弥陀如来の化身なりと申され。則石の縫目に入給ふ。猶も沙門に奇特を見せ申さんとの御事なれば。我らも何ぞ仏の姿になれとの御事じや。面々ハ何とならふと思ふぞ〔此所ノ詞、大会ノ通り。〕ヲモ 「へ仏法の妨に天狗ハ寄合て。〔太コ打切。〕（〇「皆々」くく。魔の来迎をなさんと思へバ。文殊普賢の召さる、如く。獅子象に乗る事成り難し。不動明王も面色像の成まじけれバ。堂の角なる。寶頭盧にならんと。皆紙衣をこしらへて。皆紙衣を着連つ、こりりこそりと。帰りけりくく）〔扇シマイ入ル。ツレ皆々、ツ、キ入ルナリ。〕

## 二十四 小壇

〔初同、片幕ニテ出。礼アリテ太鼓座ニ居ス。中入過キテ、シテ柱ノ先キニ立ツ。〕

〔是ハ此隣に住者にて候。今日ハ物淋敷き折柄なれば。大原の桜を

見て慰ばやと存る。いや是成る人々ハ。何国よりの花見にて候ぞ  
 「セリフ、三番目ノ通有リテ、少シ正面へ向語」【語】「先当社と  
 申奉ハ。和州春日大明神にて御座候。夫を如何にと云に。大宮人の  
 内にも取分キ藤原氏の御方ハ。是より南都までハ路次遠くて折々  
 御参詣も叶ヒ難キにより。閑院の左大臣冬嗣の卿の。嘉祥三年に春  
 日を此御山へ御マシ移シ成レされ。則レ氏の御祖ノ神ヲと崇奉スリ。毎年ニ御  
 神事と号して。厳重に執行レれし故。其頃二条の后の。未春宮の  
 御息所と申時分。当社へ行啓成されたと申習す。故に此后の  
 御参詣遊されし折節。供奉の衆ハ歴々にて御座候ぞ。在原の業平も  
 御供被成たる由承る。其刻供奉の人々に。后より種々の引出物を下  
 されし時。在中将にハ別して御衣を参らせられたれば。其時分業平  
 の哥に。大原や小塩の山もけふこそハ。神代の事も思ひ出らめと。  
 か様に読給ひたる心ハ。小塩の山も今シ日の御社参を。嬉しくや見  
 らんと有る歌の心なる由申ス。又下心はいまだ后に立タせ給わぬと  
 き。よりく御契り被成たるにより。色々心を廻らして。斯のこと  
 くに読給ひたるも承る。左有に依て在原の業平を。此小塩の明神  
 に祝ひ籠給ふ由一説にハ申伝る。又春日ハ四所の明神にて御座ス  
 故。当社の謂様々有りとハ申せと。神秘なれバ白地には申されず。  
 先我等の存たるハ斯のことくにて候。「是ハ奇特成事仰らる、物か  
 な。旁の是迄花見に御出有る事を。当社明神御納受被成。山賤と現  
 じ御言葉を替されたと存る間。暫是に御逗留有リ。重て奇特を御  
 覧あれかしと存する」何にても御用の事あらバ承らふずる」「心得  
 申候」

## 二十五 浮船

〔立方、右同断〕

「是ハ宇治の里に住者にて候。今日ハ徒然成柄柄なれば。罷出て心  
 を慰はやと存る。いや是成るお僧ハ。何国より御越成されたるぞ」  
 「セリフ、常ノ通。」【語】「先此宇治の里に上巻の正親と申すと。  
 又中の君と申と御兄弟御座候を。此上巻の正親をバ。薰大将の心を  
 掛ケ御申あれと。終に御同心なかりたと申ス。又中の君ハ匂フ兵  
 部卿の。北の方に成らせられたると承る。其比総角の正親ハ。父宮  
 におくれ給ひし故。明暮此事をのミ嘆キ御座して。是も程なく空敷  
 成給ふにより。薰御愁傷浅からざりし間。中の君杯の劣の腹に。浮  
 舟と申て。上巻の正親に似参らせられたる御方を尋出し。薰に見せ  
 給へバ。宇治に置御申有を。或夜匂宮薰に真似びて。内に入り契を  
 込られたるに依て。夫より忍ヒくくニ御通ひ有しが。宇治ハ人目繁  
 しと思召。日暮て舟に乗せ。遠路なる家へ御出有る時。橘の小島が  
 崎へ差寄セ給ひて。浮船の御哥に。立花の小島は色も替らしを。此  
 浮舟ぞ行多知られぬと。此哥故に浮舟とハ申由承る。されとも浮舟  
 と匂宮と心の有を。薰御存あれバうき舟は物憂思ひ給ひ。宇治川へ  
 身をも投んと思召カ。暁方妻戸を明テて出給ふを。何となき男の来  
 りて懐きおろし。其隣近き木の元に置たるを。小野の尼初瀬詣での  
 かへさに。此宇治の院に泊り給ひしが。浮舟の御事を聞小野へ伴ひ  
 申され。横川の僧都の御祈にて。物の化も悉く去りたと申せども  
 其後終にハ尼に御成有りて。小野にて果給ひたと承る。先我等の  
 存たるは斯の如にて候。「是ハ奇特成事仰らる、物かな。浮舟ハ小



野ニて果給ひたるとハ申せど。若キ時は此辺に久しく住給ふにより。御心を残し置れ。お僧に詞を替されたと存る間。是より直に小野へ御出ありて。彼菩提を御弔ひあれかしと存ずる。「何にても御用の事あらバ承ふずる」「心得申候

## 二十六 玉葛

「是ハ初瀬の門前に住者にて候。今日ハ物淋敷折からなれば。一本の杉の隣へ立越。色付木々の梢を見て慰ばやと存る。辞是成お僧ハ。何国より御出被成たるぞ」「去程に玉葛の内侍と申ハ。先父君ハ頭の中將にて。夕顔の上の御息女なりしが。母上五条隣に隠て御座す頃。仮染に光源氏と御契りあり。河原の院へ倡れ行。そこにて空しく成給ひたと申ス。左有に依て夕顔の上の御乳母。此玉葛を痛り申所に。其頃乳母の男筑紫へ下りし故。力及す九州へ御供申されしが。彼乳母の男後に相果たるに依て。彼方此方と思召内に。次第く美しく成立給ひしを。筑紫人心を懸け様々に申を。御同心なれば。扱は押へて奪ひ取申さん杯と。此沙汰類に有つるを聞。田舎に有果ん事を浅ましく思ひ給ひ。乳母を連し早舟にて逃登り給ふが。遙々の海路なれば危く思召。我何事なく都へ登るに於てハ。八幡初瀬へ参らんと御祈誓有が。誠に仏神の御患により。難なく京都に着せ給ふ。御立願の事なれば初瀬詣て有るに。古へ夕顔に召遣はれし。右近と申女房の有つるが。瞿麦の御行末祈の為に。当寺へ参りて玉かつらを見付。其時右近哥に。二本の杉の立チを尋ずハ。古川野辺に君を見ましやと誂。都に帰り源氏に斯と申されけ

れば。夕顔の上を痛しく思召により。頓て玉葛を呼取給ひて。髭黒の大將の北の方に御成候。又此玉葛と申名ハ源氏の御歌に。恋わたる身は夫なれて玉葛。如何なる筋を尋來ぬらんと斯遊されし故。玉葛とハ名付給ふ。是に付数多子細の有とハいへど。先我等の存たるハ如斯にて候。「是は奇特成事仰らる、物哉。左様の女性の小き舟に棹を差来べき者。此辺にては賞ず候が。扱ハお僧の御心中貴により。古への玉葛の亡魂顯れ出。御詞を替されたと存る間。暫く是に御逗留あり。彼御菩提を御弔ひあれかしと存る」「何にても御用の事あらバ承ふずる」「心得申候

## 二十七 山姥

「ワキ次第道行ノ内ニ片幕ニテ出、太鼓座ニ居ス。道行過キ詞アリテ、ワキ案内ヲ乞間、一ノ松ニ立。」「誰にて渡り候ぞ」「参候善光寺へ御参有るにハ。上道下道中道とて。海道数多有る中に。上路越と申ハ如来の踏分給ふ道なれば。仏の御内証に御叶ひ有るに依て。己此道を一度成共お通りあれバ。仏の御内証に御叶ひ有るに依て。己身の弥陀唯心の浄土に譬へられて候。去ながら難所なれば乗物杯ハ叶ぬ路次にて候「尤に候（一ノ松ニ立居ル。ワキ連ト、シカく有テ、又狂言へカ、ル。）」是に候「我等ハ用所御座候へ共。女性上臈を連て御参りなれば。案内者申さうずる間。急ぎ御同道成されざる（ト云テ、シテ柱ノ先へ出ル。ワキ連ニ向イ、「サアラハ御立有ウズルニテ候」ト云、連立時。）」御覽せらる、ことくか程の難所なれば。中々乗物杯は叶ひ申せず候「荒不思議や。何とやらん日の

暮る、様なよ。拙者杯も自分の用所ありて行か。又人に頼まれても細々此道を通り申が。ケ様の奇特成る事にハ初て逢ひ申候「いや此山中にハ宿の無き所にて候。兎角申内に日が暮て前後を辨す候〔ワキ詞アリ。太夫呼懸ケ〕のふくくお宿まいらせふのふ」と云時。」〔マクノ方ヲミテ。〕「いやあれ御宿と申ス。急で宿を借せられ候へ〔ト云捨テ、太鼓座へ行居ス。中入過。〕〔シテ柱ノ先へ立。〕「扱もく不思議な事かな。今迄ハ闇で有ったが又夜が明けたよ。先あれへ參ふと存る〔ト云、ワキノ前へ行座ス。〕「何と唯今ハ不思議な事でハ御座なく候か「我等も此道を通ひ申せども。か様の事には今か初てにて候「いや是ハ珍敷イ事を御尋有物哉。我等も此山中にハ住者なれど。山姥杯に成る物をバ一円に不存候。去ながら聞及たる通り語て聞せ申そふする○【語】「先世上に普く人の取沙汰致すハ。山姥にハ尾花が成ると申候。其子細ハ。薄ハ後に事をなそふずると云心にて。大地の底に一邑ツ、芽ミ居て。春にもなれば陽氣を受ケ。そりりくと葉を出すが。其葉かよれやうて左右の手と成り。穂の出たるが白ふ乱山姥の髪と成て。風に吹れて動くに依て生根が出来。山姥にハ尾花か成と申候。又或人の咄し申されたるは。山姥には団栗か成と申候。夫を如何にと云に。大木の木の実か熟して落ル時。谷へころりくと転集て寄合談合致し。其中にも大キなが眼と成に依て。団栗目と申ハ此子細にて有と申候「仰らる、に付て思ひ當った。是ハ十ウいふ事の九ツも合ぬよ。又若き人の咄されたるを。古老の人の宣ふ様ハ。思ひもよらぬ事山姥杯に成物ハ。左様に仮染なものでハない。天鼠クヌネが成る。其子細ハ。先天鼠と

いふ物ハ。松脂を練りてねバふ成た時分に。天鼠皮へ移し。夫を弓の弦へ引に。苦くずが少しツ、付とハ思へども。度々の事なれば後には数多付て。其苦くずが山姥の白髪と見へ。天鼠草が口と成り。自然と形チが出来生根か入りて。誠の山姥に成ものハ。是か本説じやと申習す。「実と仰らるればそふじや。天鼠の分て山姥に成る事は御座るまい。又此山路を切々通ひ付たる者の咄を聞バ。草薺が成其謂ハ。大雨降山川の出たる時。岸杯のくへたる時分草薺か顕れ出雨露アツユに瀑て。髪カミの白シロ成たるが則山姥の髪と成て。山姥にハ是が成よし承りたるが。左様で御座らふかの「語れと仰らる、程に聞及ふだ事を申せば。夫ハ古様でハ有まい。是ハ誠しからぬと有により。我等も咄し懸て迷惑致す。山姥にハ何やらが成と申が。ア、今思ひ出た。山姥にハ山に住木戸か成と申候。「惣して山中の田地にハ垣を致す。則其垣が胴体と成。木戸が口と成に依て。山姥ハ山に住木戸じやと申ス〔シカく〕「木戸。鬼女。実と鬼女か本で御座らふず。△楮唯今ハ何と思ひ寄て。山姥の事をハお尋有たるぞ不審に存候「扱は是成るは天下に隠なき。百麻山姥と有る遊君なれば。正真の山姥ハ曲舞を承度思ひ。俄に日を暮し留申たると存る間。か様の恐しき者の思ひ入れたる事を。只御通り有りてハ。行先が御大事なれば。是にて哥の一節を御所望被成。其後如来へ御參りあれかしと存る「我等も是にて承ふずる「心得申候〔太鼓座へ引、後シテ出、初同ニテ入ル。〕△扱は成るはいか様成る御方にて候ぞ。ワキヨリ百麻山姥と云遊君成と云。セリフ有テ扱ハ是成るハ天下にかくれなきと云。云合ヨリ如此

## 二十八 雲雀山

〔シテ中入有リテ、ワキ次第第二テ出ル。右ニ付、太鼓座ニ居ス。ワキ、次第道行過キテ、呼出。〕

〔御前に候。「心得申候。〔シテ柱ノ先ニ立。〕「今日の御狩ハ一段の天気なれば。定てお物数であらふ程に。思ひの外御機嫌が能らふ。夫に付て我等の此数年心に存る様。哀れ何にても達者業のあれかし。人に拙てがんしゆを仕り。頼だ人の御詞懸り度と存る処に。山鷹ハ巖石岩尾の中共云ず。茂ミを欠廻ものなれば。不達者でハ成ぬ事じや程に。此度ハ随分念を入下狩を致。御感に預うと存る。去ながら横萩殿の御狩に參。此多<sup>イ</sup>せこの中に一人にても。如在致そうと思ふ者ハ有まいに。ちと思召事のあれバ。草木を分<sup>ケ</sup>よく下狩を致せと有りて。某に被仰付たを。我等一人念を入ても。余人の不念な事有りてハ。拙者の科に成申する間。此由を急度申渡そふと存る。やあく<sup>く</sup>皆々承り候へ。只今仰出されたるハ。思召子細の候間。谷峯迄も草木を分<sup>ケ</sup>。念を入下狩を致せとの御事なり。構へて其分心得候へく。〕

## 二十九 同

〔ワキ呼出ナキトキハ、竹杖ニテ脇道行過、腰カクルト出。シテ柱ノ先ニテ立シヤベリ。〕「か様に候者ハ。横萩の豊成公に仕へ申者にて候。我等の是へ出る事余の儀に非らず。只今仰出され候ハ。此所にて御狩を被成候<sup>ニ</sup>付。此由急度申渡そふと存ずる。やあく<sup>く</sup>皆々承り候へ。頼申御方の。此所にて鷹を御遣わせ被成候間。谷峯

迄も草木を分<sup>ケ</sup>。念<sup>ヲ</sup>入<sup>レ</sup>下<sup>リ</sup>狩を致候へ。構へて其分心得候へし〔ト云、フレテ入ル。〕

## 三十 大仏供養

〔シテ、中入早鼓ニテ入。竹杖ツキ、早鼓ニテ出、シテ柱ノ先ニテ。〕「か様に罷出たる者ハ。畠山庄司次郎に仕へ申者にて候。扱も此君頼朝公ハ平家を亡し。源氏一統の御代となし給ひ。弥天下安全の爲大仏御再興の御供養<sup>ニ</sup>付。鎌倉殿御仏參在す間。役々の外紛敷者。一人ニても人間敷よし。則畠山殿に仰付られ候間。構へて其分心得候へく。〔ト云、触テ入ル。〕

〔二 右之外に社僧之間有之候得共、文句不都合故右之方宜敷、乍然中入後、シテ物着の処ニテ間有之候ハ、社僧之方宜敷<sup>イ</sup>。〕

## 三十一 盛久

〔初同ニテ出、太鼓座ニ居ス。シテ、物着ニテ脇呼出ス。〕

〔御前に候。「畏て候。〔シテ柱ノ先ニ立。〕  
〔扱もく<sup>く</sup>奇特成事哉。去程に主馬の判官盛久は○囚人と成り。此中当所へ下<sup>リ</sup>給ふが。則土屋殿の預りにて様々痛み申さる、所に。大事の科人の事にてあれば。急ぎ誅せよと仰出さる、に付。頼<sup>ミ</sup>申人も是非に及ず。由井の汀<sup>ト</sup>へ御伴ひ有処に。程なく太刀取り<sup>後</sup>に廻り振上ると存たれば。刀<sup>カ</sup>ニ<sup>ツ</sup>に折して盛久ハ命を助り給ふ。扱も是ハ奇特成事と不審に存すれば。主馬の判官は此年月。清水<sup>キ</sup>の観世音を信じ給ひ。毎日観音経を誦誦有が。疑も無き御利生にて御座

有ふずる。誠に昔が今に至迄。ケ様の希代成る御事を。某杯ハ聞も及ず候。△此由君聞召及せ給ひ。急ぎ御前へ御参りあれとの御使なれば。先あれへ参り此通りを申そふする〔ト云、シテ柱ノキワニ下ニ居テ、シテノ方へ向イテ。〕「如何に盛久へ申す。土屋殿の承りにて烏帽子直垂を着し。急キ御前へ御参あれとの御誼にて候〔ト云ハナシテ、太鼓座ニ居ス。地トリニテ入ル。〕〔脇、呼出ナキトキハ左ノ通り。〕「扱もく、奇特成る事かな。去程に主馬の判官盛久は○△〔此印ノ間、前ノ通り。〕

「先あれへ罷出ふと存る〔ト云、脇ノ前へ行座ス。〕「何と只今ハ奇特成る事にてハ御座なく候か〔ワキ、セリフアリ。〕「畏て候〔ト云立テ、シテ柱ノキワへ行、下ニ居テ、初ノ通り、シテへ向イ、如何に盛久へ申ス〕ト云詞、前ノ如ク。〕

三十二 草薙

〔不用。〕

是ハ尾州熱田の郷に住者にて候。然れば此所へ比叡山に住給ふ。恵心の僧都御下向有り。当社に一七日御籠り成され。最勝王経を講じ給ふに付当所の者ハ我等を始めて残らず増てや近郷他郷の万民迄も。聴衆の輩貴賤群集なし申ス。併ひそかに諸人の取沙汰致すを承れば。何国知らず男と女の草花を持。僧都の会座近く来り候を。如何成る人ぞと不審をなし給へバ。其時彼男女色々詞を替し申す上に我等二人は夫婦の者なり。草薙や神ノ剣ヲ守る神成るが。御経結願の夜陰に燈の影に立添ひて。誠の姿を見へ申べしと。白鳥の嶺の薄雲

に立渡り。搔消様に失給ひたると申ス。夫ニ付当社の有難く甚深なる御事。申に斗御座なく候其子細ハ。昔日本武の尊。東夷朝家を背きしゆへ凶賊を退治有し時。太神宮より給わりし。村雲の剣にて野火を投ひ給ふに依て。夫より此剣を草薙の剣とハ申習す。此御剣ハ古へ橘姫に御渡し有り。日本武ノ尊ハ都へ上り給ひたるが。其後尊ハ白ラ鳥と成ッて飛降り。此熱田の大明神と現じ。御劍の守護神にて御座せば。誠に吹風枝を鳴さず民鎮を差す。国土安全の御代成ニ付。僧都も遙々此所へ御下向被成たれば。我等ごとくに至る迄。別面目出度き御事にて候いや我等こそ件の様子を能々存たれ。自然聞も及ぬ者共も御座有べく候間。急で相触申そふずる。やあくく当所の面々御聞あれ。御経結願の夜陰に。誠の神姿を顕わし見へ給ふへきとの御事なれば。其時節ハ普く参詣を遂げ拝し給へ構へて其分心得候へく

三十三 同語

〔宝生流ハ語間也。〕

「是ハ尾州熱田に住者にて候此所へ恵心の僧都御下り有り当社に一七日参籠被成。最勝王経を講給ふ間。今日も参り聴聞申さばやと存る〔ワキノ前へ行座ス。〕「只今参じて候「我等も疾に参り申べきを。彼方此方隙を得ず延引迷惑仕候〔セリフ、常ノ如シ。〕

【語】去程に当社と申奉ルハ昔素盞鳥の尊の出雲の国にて退治有る八勝の蛇の尾に有し剣ハ置たる処より村雲の立申故に。則村雲の剣と名付ケ。天照太神へ参らせられしを。其後人皇十二代景行天皇

第三の皇子。日本武の尊ハ東夷を征伐有べきとの宣旨にて。太神宮より彼劍ツルギを尊に給り。浮島が原にて凶徒等拾万騎。鉾を伏降參の躰に饗ウケ応し。尊を方便ハクベり枯野、草に火を懸テ四方のかこみを放て責けるを。尊劍ツルギにて隣の草を投給へバ。夷敵悉く焼失。天下一統の御代と成る事も。村雲の劍にて草を薙給ひし故なれば。夫より此劍ツルギを草薙の劍ツルギとハ申す。此劍ツルギハ橘姫に御渡し有り日本武の尊ハ都へ登り給ひたるが後にハ白鳥と成つて飛帰り。此熟田の大明神と現じ。御劍の守護神にて御座す。当社に付日出度子細数多有りトハ申せど。先我等の存たるハ如斯にて候。「是ハ奇特成る事仰らる、物かな貴き僧都是まて遙々御下向有り。毎日御経懈怠無き事。神慮も一人に思召さる、故。当社夫婦の御神飯に見へ給ひ御詞を替されたと推量いたす余りに不思議の御事なれば弥御経御誦誦被成。重て誠の神姿を再び御覽あれかしと存る。「何にても御用の事有らバ承ふずる」「心得申候

#### 三十四 愛宕空也

〔初同ニテ出 太鼓座ニ居ス。シテ中入過キ、シテ柱ノ先ニ立ツ。〕是ハ山城国愛宕山の麓に住者にて候。去程に此一山の老若。今夜不思議の夢を見給ふ。其夢中の様躰ハ。明日未明に此御山へ。正真の弥陀来迎有べし。何れも罷出て拜し申せと。慥ニ御靈夢の有るを不審に思ひ。皆々残らず寄合談合ありて。今やくと待給ふ処に。修行者の一人来りたるを見て。如何成人ぞと早詞を懸給へバ。是ハ念仏の行者空也と云ル聖なりとあれバ。扱ハ天下に其隱もなき。空

也上人にて渡らせ給ふか。先当山の守護神にて御座せば。地藏権現へ御參詣候へ。則案内者致さんとて。我先にと皆同道にて參給ひ。件の夢の様を有の儘に咄給へバ上人も是を不思議さふに宣ひ毎日此法華の八軸を首に懸テ。明暮御靈夢の有るを不審に思ひ。皆々残らず寄合談合ありて。今やくと待給ふ処に修行者の老人来りたるを見て。如何成人ぞと早詞を懸給へバ。是念仏の行者空也と云ル聖なりとあれバ。扱ハ天下に其隱もなき。空也上人にて渡らせ給ふか。先当山の守護神にて御座せば。地藏権現へ御參詣候へ。則案内者致さんとて我先にと皆同道にて參詣ひ。件の夢の様を有の儘に嘯給へバ。上人も是を不思議さふに宣ひ。毎日此法華の八軸を首に懸テ。明暮御経を讀奉り。若年より念仏にて世上を廻ると有り。則仏前にて彼御経を讀誦し給ふ刻ミ。何国共知らず老人一人出只今感得し給ふ仏舍利を望なれば我に得させ給へと申を。空也ハ舍利をいまた感得これなきに御身ハいかなる人ぞと問給へば我は龍神にて候か最前の御経の軸の中に。仏舍利一粒有りと知らせ申す。此八軸は辱も延喜の帝よりの拜領なれば。左様の物の有をバ夢にも御存なきとて。其時軸を放て見給へば。案の如くかくやくとしたる正真の仏舍利水晶の壺に入りて一粒有るを。則彼老人に与へ給へバ。喜意の思ひをなし此報恩に。何にてもあれ御所望を叶へ申べしと頻に申上るに依。更々望ハなし去なから此山上を見るに水なくして遙の谷より汲運と見へたれば哀当山に清水を出して末世の調法にも仕給へかしとあれバ。夫こそ易き間の御事なれば。今、日よりして三日に当らん日。某か誠の姿を顕わし。則小竜共を引具し洪水を出さんと

契約し立退かと存たれば搔消様に失申ス。いや由なき独言を申た。最前彼老人と見し龍神の。約束の如く奇特を顕さんに。ケ様の例なき事を。某人斗存してハ如何な。皆々へ申聞せう。やあく皆承り候へ。今フ日より三日に当らん日。当山に奇特のあれば。何れも残らず罷出拜し申せとの御事也。構て其分心得候へく

〔右之間、乱序ニテ能力ニ候へ共、喜多流乱序無之候ニ付、右之通相改、長上下ニテ、シヤベリニ致候也。〕

## 三十五 三笑

〔口明ケ。シテ柱ノ先ニ立。能力出立。扇子持。〕

「か様に候者ハ。唐土廬山の麓。虎溪の東林寺惠遠禪師に仕へ申者にて候。扱も頼ミ奉る御方ハ楚国の將軍隣附王第四の御子にて御座候が。八歳の御時前師惠学の御弟子に成給ひ勤学成就し悟を開き給ひ。池水に白蓮の多く植置。中嶋へ小庵を結び白蓮社と名付給ひ朝暮賢士を招て。西方の浄業を修し給ふ。取分キ賢士の中にも陶渊明陸修静と申御方は。日々御参会御座候が。今日も御出会あらずの間。白布の瀧の辺りを清め。其用意を致ばやと存る構て其分心得候へく

〔一 右之間、流儀にハ無之候処、宝生流口明ケ無之候而者難相成候由、則右ノ口明文句、彼方ニ而出来、矢田清右衛門座付之儀に候故、為相勤申候事。〕

## 三十六 合浦

〔釣人。釣棹肩ゲ。ワキ名乗アリテ座ニ着。釣人出テ、シテ柱ノ先ニ立ツ。〕

「是ハ此浦に住居致す釣人で御座る。今日も浜へ出て釣を垂れふと存る。扱もく今日ハ一入海上も静に御座る程に。獵も御座らふと存る。さらバ釣を垂れう。〔ト云、目付柱ノ下ノアタリ、脇正面ノ方へ向、棹ヲオロシ、釣テイアリ。〕か、れバ能イが。去れバ社曳クハく。掛ッたハく。した、かな物じやハ〔釣サホ、下ニ置。扇ヒラキ、魚ノセタルニテ。〕是ハ何で有ふぞ。やあら合点の行ぬ物で御座る。此様な珍らしいものは宿へ持て参り人々に見せませふ。〔ト云乍、シテ柱ノ方へ行フトスルトキ、ワキヨリ「ノウウく夫ハ何と申物ニテ候ゾ」ト云トキ、釣人ワキノ前、下ニ居テ。〕「我等も当浦に年久敷く住居致せども。ケ様の珍敷イ物は。終に見申たる事もござなく候。〔ワキ「唯ハナシ候へ」ト云〕いやく此様な珍らしい物ハ先宿へ持て参て見せませふ。〔ト云乍立ウトスル。ワキ又詞アリ。〕「ハアで御座る。実と仰らるればバそふじや。急で放ませう。〔ト云立テ、ワキ正面、元ノ所へ放ステイヲ、シイくト云乍手ヲタ、キナドシテ云。扱詞アリテ釣棹ヲ、カタゲ、ワキノ前へ行、下ニ居テ。〕「扱もく嬉しさふなハ。いささよい事哉。〔ワキノ前へ行。〕「唯今の魚を放し申て候。〔ワキ「夫ハ祝着申候。さらハ家居に帰うずるニテ候」ト云。釣人直ニ入ル。〕

## 三十七 同鱗

〔中入、乱序ニテ出、シテ柱ノ先ニ立ツ。〕

「か様に候者ハ。此合浦カフホの海に年久しく住鱗の精にて候。我等の是へ出る事余の儀に非らず。先此賢王ケンオウに在すにより。天も納受し地神シも感の成し給ふ故。国土豊に納り雨露の恵も一入にて。五穀成就仕り人民の楽ミ尽せず。国々在々迄も後世の道を専らに守り。殊に生るを放チ給ふ故我等如きの鱗迄も。別て有難アリガタシ存る御代にて候。夫ニ付爰ニにきけいと申御方の在すが。正直を第一にして慈悲深く。別して親に孝有る事を。天も是を哀ミ給ふ故。富貴榮花に御座候。扱ア又今日浦遊ウラユびに出られし所に。此海中に住鮫人サウジンと申魚を獵師釣上げ。已に殺さんと致すを。彼機景色々申され扶タ給へバ。鮫人危アヤシき命を退ヒれ。欲ヨクをなし皈キりて候。左有サマに依て鮫人彼恩を報ウぜん為。龍宮リウキウに隠カなき如意宝珠イニイホシユを。今宵機景キキョウに与ユとの御事なれば。此よしきけいに告知チらせんと存て罷出た。先あれへ參ふ。誠にヘ右ヨリ左リへ廻マる。真有マコトれば徳有りと申が。第一此浦八日出度ヤツヒイデ所にて。我等如ナきの者迄も寄合和合仕に依て。合する浦と書て合浦とハ申ス。併トどこえにぞヘ脇正面ワキマタニ立、ワキマテ。されバこそ是コにおりやるよ。誠に其身直ミナにして影カゲかたまらずと申が。先ハ仁ニ躰タマシ氣キ貴キ御方ミタマじやよ。急で此事を告知チらせ申さうずる。如何に機景キキョウ儘トに聞給へ。此海に住鮫人と云魚。命助イノチタマシり申報恩ウケガタシの為に。今宵如意宝珠イニイホシユを御身に与ユんとこの御事なれば。暫シバ是に御待ミタマシあれ。構カマへて其分心得候へ。くヘ拍子ハチマシ一ツ。

## 三十八 小原御幸

〔脇連大臣名乗テ、呼出。〕

「御前に候「畏オソて候（脇連、幕へ入ル。ワキ正面シテ柱ノ先ニ立。」「やあく、皆々承り候へ。小原へ法皇の御幸成さる、間。村々里々ハ申に及ず。河原表山野に於て。牛馬のさぐり迄も急イソを入其清めを仕れとの御事なり。構カマて其分心得候へくヘ〔ト触レテ、直ニ幕へ入ル。〕

## 三十九 住吉詣

〔脇ニ付出ル。名乗過テ呼出ス。〕

「御前に候「畏オソて候（立テ、シテ柱ノ先ニ立。ワキハ太鼓座へクツログ。〕「扱アもく、日出度イデ事哉。急て相触申そふずる。やあく、皆々承り候へ。今日源氏の君当社へ御参詣成さる、間。社ヤシロをも清め申べし。又御幸の道をも掃除以下迄。念を入仕るべきとの御事なり。皆く其分心得候へくヘ〔ト、フレテ幕へ入ル。〕

## 四十 鷺

〔段熨斗目、掛素袍、折糸ほし、下袴、小サ刀、扇持。〕〔口明。囃子方座ニ着其儘出、シテ柱ノ先ニ立ツ。〕

「か様に候者ハ。当公に仕へ申使廳シヤウにて候。扱アも此君賢王に御座にヘより。吹風枝を鳴らさず民鎖タシを指す。国土豊に別て日出度御代なれば。四季折々の御遊。申も中く愚なる御事にて御座候。就夫今日ハ神泉苑の池の辺ヘ。御幸被成べきとの宣旨なれば。百官卿相に

至まで。構て其分心得候へ〜

四十一 双紙流

〔初メ脇名乗過テツツロギ、シテ出謡アリテ申入。ワキ呼出ス。〕

〔御前に候「中〜承て御座る。先我等の覚へた通りを申上ふずる。まかなくに何をたねとて瓜づるの。畠の畦をまろびころびあろくらんと聞て候〔ワキ詞アリテ申入スル。シテ柱ノ先ニ立シヤベリ。〕  
「偕も今度禁中に於て。御哥合の御座候。就夫小野の小町の相手に。某の頼申大伴の黒主を御定成さるゝ。去程に黒主心に思召様。小町は世上に名高き哥の上手なれば。一定読おとらん事を無念に存せられ。忍びて小町の館へ御出有り。哥の下説を窃に立聞致されけるを。小町ハ夫を夢にも御存なく。まかなくに何を種とて浮草の波の畝々生ひ茂るらんと。高らかに吟じられたるを。黒主はとくと聞請け給ひ。悦び宿へ御帰り有り。万葉集に書乗。古歌なりと難せられんとこの御匠ミにて候。去れば是に付世間にハ聞れて悔事と。又聞れぬを悔事と。同じ悔様にて心の替りたる事が御座る其故ハ。唐士に子期伯牙とて。兩人琴の上手の有りしが。互に秘曲を弾キ。聞つ聞れつ染れけるに。有時子期空しくならし以後。泊牙琴を止められたると申ス。是は琴を聞知る者の無きを悔ミ。今の小町ハ詠吟を聞かれて悔申さんと存る事じや。いや由ない独言に時刻の移りたれば。漸々黒主参内成されうずる間。某も御供仕ふずる。然らば友輩衆を頼ミ申ぞ。只今にても黒主の御出あらば。此方へ御知らせ有て給われ。構て其分心得候へ〜

四十二 礎

〔段のしめ、長上下、少サ刀。〕〔始メ脇出、シテ連出ル。ワキ申入有り。シテ出、初同ニナリ、間出、太鼓座二居ス。シテ申入過、間シテ柱ノ先ニ立ツ。〕

〔扱も〜哀な事哉。世ハ定ないとハ申が理りて御座る。頼ミ申入永々御在京有るに付。此程都より夕霧と申女房衆を御下し被成。此秋は必ず御下り有べきと御申越し成さるゝ。処に。三年の内便りのなき事を以の外に御腹立成たるゝ故。夕霧様々申さるれば。石流御夫婦の中は隔の無きとて。程なく御機けんを直され候が。され共余り御徒然さの儘古る事を思召出され。いやしき里人の打ッ砧と申物を御手にふれさせ給ひ。夕霧と御慰ミ候しが。此年の暮にも御下り有間敷由御聞被成。とかく御恨の程晴かたく思召か。終に空しく成給ふ。此由都へ申登せ候へば。御驚にて則御下向成され。殊の外御愁歎にて候。夫に付梓を以て。彼跡を御弔ひ有べきとの御事に候。いや漸々時分も成申間。此由申上ふと存る。ト云、暮へ向。〕〔如何に申上候。早時分もよく候間。急き御出ありて御回向被成候へ。ワキ出「礎ヲバ其仮置テアルカ」ト云トキハ。〕〔中々置申て候。ト云、太鼓座へ引。右詞ナキトキハ其儘引テ座ス。何レモ云合次第タルベシ。〕

四十三 恋重荷

〔初ワキ名乗、ワキニ付キ出ル。名乗長キ故、太鼓座二居テモ宜ク、ワキ名乗過キテ呼出ス。〕



「御前に候「畏て候（ト云、立テ。）」「是ハ思ひも寄らぬお使を仰付られた。先急で（ト云乍左ヨリ右へ廻ル。）山科の庄司か支宅へ参ふと存る。か様のお使を仰付られふとハ。夢々存せなんだ。いや（マクヘ向）参る程に則是じや。いかに此内に山科の庄司の渡り候か（シテ詞アリ。）」「上より召され候間。とうく出られ候へ（シテ「畏テ候」ト云、間、ワキノ前へ行。）」「如何申。山科の庄司を召て参りて候（ト云、太鼓座へ引。シテ中入過、シテ柱ノ先ニ立ツ。）」「扱も哀な事哉。世ハ定なひとハ申が理りて御座る。誠に山科の庄司ハ過にし比より。女御の御姿を一目見しより。しづ心無き恋と罷成り。明暮此事をのミ煩ひ居申所に。忝も君此事を聞召及ばれ。余りに彼者の心中不便に思召。綾羅錦繡といふ物にて重荷を美しく拵へ。此重荷を持に於てハ。女御の御姿を見へさせ給んとの御事に。庄司も殊外有難く存し。種々様々に持たれども。何か老たる事なれば重荷を持兼而。終に空しく成たと申ス。惣じて恋といふ物は。昔より老いた若イによらず。心を迷すと有が是て御座る。庄司ハ及ぬ恋を致<sup>ス</sup>故。敢なく相果たると存れハ。拙者迄も別て痛敷存る。いや由なき独言を申た。先あれへ参様子を見申さふずる。（ト云乍先へ出、重荷ヲ置ル処ヲミテ。）是ハ扱偽りかと存たれハ誠じや。去ながら此様子を打捨て置いてハ如何な。急き此由を申上ふずる（ト云、ワキノ前へ行座シテ。）」「いかに申上候。山科の庄司ハ重荷を持兼空しく成申て候。彼者の情魂の程もおそろしく候間。そと死骸を御覽あれかしと存候（ト云、引也。）」

## 四十四 綾鼓

〔立形、恋重荷同断〕

「御前に候「畏て候（立テ幕へ向。）」「やあく／＼毎も御庭の掃除仕る下部の老人。御用の有る間とうく参れとの御事なり。急で参り候へや（シテ、幕ヲハナレルト。）」「いや是迄参りて候。其由申上ふずる（ト云、ワキノ前へ行座ス。）」「お庭掃の老人是まで参りて候（ト云、太鼓座へ引。シテ中入過、シテ柱ノ先へ立ツ。）」「最新お庭掃の下部の老人。お上より召さるる間。我等も不審に存じ。如何成者の讒言により。召出されて御叱りに逢ふか。又ハ常々御奉公を大切に仕る故。いつかどの御褒美にも預り申か拵と。某も心中に浦山敷く存じたれば。左ハなくして彼老人。何の頃にか女御を見染参らせ。しづ心なき恋路に迷ひ。夫より明暮惱ミ申事。忝も女御聞召及せ給ひ。元より恋路ハ高きも賤しきも隔なき物なれば。彼老人が心底不便に思召。綾の鼓を拵へ。桂の池の辺りに懸置せ。老人に是を討させ音の聞へなバ。今一度見給わんと御事なれば。老人は有難く存じ。夫より桂の池の辺りへ立越へ。彼鼓をうち申せ共。本より綾にて張りたる鼓なれば。何程打ても音の出申さぬを恨。桂の池へ身を投空しく成る事。南方痛敷御事に候。いや由なき独言を申て御座る。先此由申上ふと存る（ト云、ワキノ前へ行座ス。）」「如何に申上候。最前の老人鼓の鳴らぬ事を嘆き。桂の池へ身を投空しく成申て候。「参候「尤に候（ト云、太鼓座へ引。供ニテ無之。長上下ノ時ハ、ワキノ名乗ノ内ニ片幕ニテ出ル。但シ宝生流脇ハ、橋か、り二面名乗ル。）」

## 四十五 千引

〔脇ノ供、太刀持ニテ出、名乗過キテ呼出ス。〕

「御前に候「畏て候〔ト云立ツ。〕」「一段の事を仰付られた。急に相触申さうずる〔ト云、連女二向。〕」「何方から参ふぞ。先此家へ案内を乞ふ。いかに此内へ案内申候。「是ハ甲斐庄殿の御内の者に候が。何某殿の仰にハ。此所の千引の石を他国へ引出し。千々にわり捨させよとの御事なり。左有に依て此在所の者。上は六拾下ハ十五歳を限りて罷出。石を引キ申せとの御事なれば。人を御出し候へ。夫ならハ旁出て石をお引きやれ「左あらバ人を雇うて出され候へ〔シカく〕」「女とて卒忽な事を申者哉。石を引ぬに於てハ此所にハ叶ふまじいぞ。とうく何方へも行キ候へ。早ふお出やれや。又外をも相触申そふずる〔シテ柱ノ先キ脇正面ヲ向。〕やあく此所の面々承り候へ。何某殿の仰にハ。千引の石を他国へ引出シ。千々に破り捨よとの御事なれば。上ハ六十下ハ十五歳を限ッて。早々罷出石を引申せとの御事也。其分心得候へく〔ト云、太鼓座へ引。シテ出、中人過、シテ柱ノ先ニ立。〕」「是ハ如何な事。堅く申付候に一人も見へぬ。悪事て御座る。某の相触申て候に。今に於人が出イでハ。身共が不念に成事じや程に。今一度急度申付ふ。やあく皆く承候へ。旁へ相触て有るに。一人も見へぬが重て出ぬに於てハ。面々の曲事たるべしとの御事なれば。早々罷出申せとの御事なり。其分心得候へく〔ト云、笛座の上へ行居ス。〕〔石引、ヲモ一人出、シテ柱ノ先ニテ名乗ル。〕石引「是ハ此隣に住居仕る者にて候。扱も此所に千引の石とて大石の御座候が。魂有て人を

取る事数を知らず。去ル間甲斐の庄殿の仰にハ。此石を他国へ引出し。千々に破り捨よとの御事にて。上は六拾下ハ拾五歳を限て。何れも罷出石を引申せとの御事なれば。最前も申如く此石に魂あれば。恐れて出申さぬを。又重ての御触にハ。若出ぬ者有るに於てハ。面々の越度たるべしとの御事なれば。先何れも呼出し談合申さうずる。皆居さしますか。用か有程に急でおじやれおじやれ〔石引、四五人出ル。〕「何れも呼しますハ如何様成事しや。ヲモ「少と咄度事か有る。先号お通りやれ。ツレ「心得た〔ト云、皆々脇上面ニ立。ヲモハ地謡ノ方ニ立ツ。〕ヲモ「皆を呼出すは別の事でもなし。今度の石のさたハお聞きやたか「中く聞たに依。出ふと思ふたれ共。其方もお知りやる通り。あの石には魂か有て人を取に依て。夫故恐しさに出ぬよ。ヲモ「されハ其事じや。某もおそろしさに宿に居たが。重てのお触にハ。出て石を引ぬに於てハ。曲事に仰付らるゝと。急度仰出されたに依て。此度ハ出て引ずハ成まいツレ「はて扱夫ハにがくしい事じや。何れも何とした物て有ふぞ。又ツレ「某の思ふハ。是非に及ぬ程に石を引ッと思ふ。又々ツレ「身共も引イたらハ能ふと思ふ。ヲモ「夫ならハいざ行ふツレ共「一段と能からふ。ヲモ「おりやれく〔ト云乍廻ル。皆々跡ニツキ廻ル。〕ツレ共「心得たく。ヲモ「是ハ云ふても安大事じや程に。ぬからぬ様にさしませ。ツレ「其段ハ氣遣ひさしますな。随分ぬかる事でハないぞ。ヲモ「いや何角云内にはじやハ。ツレ「誠に是じやよ。ヲモ「見た所は余り大石でも無イが。千人して引イても動かぬと云が。不思議な事じや。ツレ「お

しやる通り希代な事じや ヲモ 「さあらハ是を引ずハ成まい ツレ」尤引もせうが。是を見たれハ何とやら怖<sup>オドロク</sup>う成<sup>ナ</sup>つた程に。身共ハ得引まい ヲモ 「わこりよハ億<sup>億</sup>病な事をいふ。是を引<sup>ネ</sup>ハ曲事に仰付らるゝ程に。是非に及ぬと思ふて引<sup>シ</sup>ませ 又ツレ 「誠に爰な者の云通り。是非に及ぬとおもふて急でお引きやれ ツレ」夫ならバ引ふが。何として引た物で有ふぞ ヲモ 「先是へ綱を付ふ ツレ」是ハ一段とよからふ「ト云テ太鼓座へ綱を取ニ行、持出て作物ニ付ル。」ヲモ 「さらバいつれも引<sup>シ</sup>ませ 皆々」心得た ヲモ 「身共か音頭<sup>音頭</sup>を取ふ ツレ」一段とよからふ ヲモ 「エイサラくく」ト、ツレ皆綱ニトリ付。ヲモハ扇ニテ手拍子ヲ取テ、ノリ乍「エイサラくく」と云。二三ベンモ云テ。」ヲモ「いかなくゆつすりともせぬ。随分情を出<sup>イ</sup>て引<sup>シ</sup>ませ 皆く」心得た「又始メノ如ク「エイサラくく」と二三ベンモ引ト、ツレ女立テ「ワラハ一人ニテ石ヲ引ウスルニテ候」ト云。皆ヤメテ。」ヲモ「是ハ狂しい事を申もの哉。去ながら先此由を申上ふ ツレ」一段とよからふ申上さしませ ヲモ 「先面々ハ少シの間休ましませ 皆」心得た「ト云皆下二居。ヲモハ太刀持ノ方へ向云フ。」ヲモ 「如何に申上候「太刀持立テ」「何事にて候ぞ」「お触に任せ何れも罷出引申せ共。如何なゆつすり共致さぬ所に。女の一人出<sup>シ</sup>て石を引<sup>ツ</sup>と申候 太「是ハ不思議成る事を申物哉。其よし申上ふする間。面々ハ休ミ候へ ヲモ 「心得申候。さあく何れもおりやれく 皆々」心得たくく」ト云乍皆々入。太刀持ワキニ向イ云。」太「如何に申上候。千引の石を何れも罷出。随分情を

出<sup>シ</sup>引申せども動き申さぬを。女の罷出意人して引申べき由申候太「尤に候「立テ、シテ柱ノ先ニテ。」「やあく頼<sup>頼</sup>申人の御出成さるゝ間。石の隣を退き候へく」ト云、太コ座へ引。」

#### 四十六 常陸帯

「脇ノ供、太刀持ニテ出ル。ワキ名乗過キ呼出ス。」

「御前に候「心得申候皆々へ申ス間給へ。毎のことく常陸帯の御神事を。今日御行ひ候間。皆役く<sup>く</sup>の輩は其分心得候へく」ト云、太鼓座へ引居ス。シテ出、中人来序。」間社人、来序ニテ出、シテ柱ノ先ニ立。」社人「か様に候者は。常陸鹿嶋大明神に仕へ申者にて候。我等の是へ出る事余の儀にあらず。去程に珍らしからぬ御事なれど。先我朝ハ天地開闢より神国なれば。諸神国々在々に跡を垂給ひて。靈神数多御座とハいへど。中にも当社と申奉<sup>ル</sup>ハ。忝も出雲の国に宮居を成し給ふ。素盞鳥の尊の第三の王子にて。稲佐速<sup>稲佐速</sup>靈の神」と祝れ給ふが。其後常陸の国に宮居を成して。鹿嶋大明神と威光を顕し給ふ故。国々在々所々よりも。老若男女共に渴仰致し。毎日毎夜袖を連踵を次て。歩を運ぶ衆生数かぎりなれば。神前の賑か<sup>賑</sup>在<sup>在</sup>御事。又と並たる神も御座なく候。其上むかし我朝の神々。悉く異國へ御立成されんと有る所に。当社の御神一番に魁<sup>魁</sup>を被成。戎<sup>戎</sup>を残らず打亡し。天下安全に守らせ給ひ。殊にハ妹背の中達にて。一段目出度御神なれば。今に至る迄我人の鹿島立と申ハ此子細と承る。扱今日ハ一番にやぶさめ。八町馬場を築き八所に的を立。獅子田楽<sup>獅子田楽</sup>の輩。又上の郷<sup>郷</sup>ハ烏帽子素袍を着。中の郷ハ具足を着し。

下の郷ハ齊の林園踊りの支度にて。何れも早々御参りあれ。其分心得候へや。是ハ早時分そうな。何れも呼出し申そう〔ト云、幕へ向イ。〕皆居さしますか〔社人、ツレ三四人出ル。〕ツレ「何事でおやりやるぞ。ヲモ「最早御輿を立ませう。ツレ「一段と能うおやりやらふ。ヲモ「さあくこちへおやりやれ。皆々「心得た〔皆舞台へ出、作物ノ方へ向イ。〕ヲモ「更ハ立う。皆々「能ふおやりやらふ。〔ト云、皆々作物ヲ輿ノ心に、皆ソバへヨリ、上クルテイヲスル。〕ヲモ「エイヤく。ツレ皆く。〔エイヤく。〕〔ト云ナガラ、アケルテイヲスル。〕ヲモ「エイトウく。皆「エイトウく。ヲモ「荒不思議や。ちつとも立せられぬは。ツレ「されハ不思議な事じや。ヲモ「更ハ今度ハいづれも勇ふで渡いて見う。ツレ「能うおやりやらふ。ヲモ「エイヤく。ツレ「エイヤくく。ヲモ「エイトウく。皆々「エイトウく。ヲモ「エイヤレく。皆々「エイヤレく。ヲモ「此エイヤく。皆々「エイヤく。〔ト始メノ通り、上ルテイヲ勇ニテスル。〕ヲモ「如何なゆつすりとも被成ぬ。いささらバ此由を申上ずハ成まい。わごりよいて云ふて呉さしませ。ツレ「いやわごりよいて云しませ。ヲモ「夫ならバ言ふ程に。わごりよ達はいて休しませ。ツレ「心得た。さあくおやりやれく。ツレ皆々「心得たく。〔ト云乍ツレ皆々、入ル。ヲモ、ワキへ向イ。〕ヲモ「如何に申。御輿を渡しませうと致せども。上らせられぬが何と仕ふするぞ。ヲモ「最前何国共知らず男女の参詣致し。何事やらんいじくじく。と在に申合。扱神前に懸りたる花田の帯を。其儘取りて帰りたる」と

申が。是ハ不思議成る御事にて候。〔急て御覧候へ。〕〔ト云テ直に幕へ入ル。〕

#### 四十七 弱法師

〔始メ脇にツキ出、太鼓座ニ居ス。ワキ名乗過、呼出ス。〕  
〔御前に候。〕畏て候。〔ト云立テ。〕皆々承り候へ。左衛門の尉通俊殿の施行。今日満願にて候間急キ罷出施行を請申せとの御事なり。其分心得候へく。〔ト云フレテ、太鼓座へ引クナリ。切ニ、サソヒ有之候故、長上下ニテモ。本幕ニテ出ル。切ノ謡「あけぬさきにといさなひて〕テト云時、脇宝生流ハ、扇ニテ間ノ方ヲサストキ間出テ、シテヲ連入也。福王流ハシテヲ連、シテ柱ノアタリ迄来ルトキ、間立テシテヲ連入ルナリ。何レトクト云合可然。〕

#### 四十八 護法

〔脇名乗有り。道行の内ニ片幕ニテ出、太鼓座ニ居ス。道行過キテ呼出ストキ一ノ松ニ立。〕  
〔名取の在所の者お尋ハ。誰にて渡り候ぞ。〕中く此所に御座候が。如何様成事にてお尋ね成され候ぞ。〔其名取の老女は。此所に三熊野を勧請有り。毎日社参申され候が。定而今日も今に参られ申べく候間。是に御待有りて御逢ひ候へ。〕尤に候。

#### 四十九 満仲

〔初、満仲ノ供ニテ出ル。太刀持ツ。謡「我子を夢に成しにけり

くくト云トキ。」

「御歎御尤に候。先御死骸を納メ申さふずる。「シテ」更ハ死ガイヲ納メ候へ。」「畏て候。「幸寿丸ヲ小袖トモニ切戸ニ入ル。シテ呼出ス。」「御前に候。「シテ」汝ハ美丈御前ノ御供申叡山ノ阿者梨ニ参リ、美丈御前ノ御事ヲ頼申由申候へ。」「畏て候。先御立有ふずる。かう寿丸の事。嘸不便に思召れふずるか。ケ様の御事も。御手習学文御解怠成さる、故なれば。是より以後ハ御心を引替られ。学文に御情人られ候ハ、。自御勘当をバ御免成されうずる間。先此方へ御入候へや

五十 鶏籠田

〔ワキツレ男。平岡何某供ニテ出ル〕

「如何に申。あの鶏を御らうじらしい。扱もくくうつくしい鳥でハ御座なく候か。「更ハ取ッて帰り。童衆に土産に致そふ。「トツくく」ト云乍鳥ヲトラヘルテイアリ。」「扱もくく見事な鳥かな〔シテ中人有リテ、ワキ「先々支度ニ帰うズルニテ候。】」「如何に申候。あこやの前の物の化。以の外成る由申候。「私の推量にハ。最前の鶏の執心か付きたるかと存候。「畏て候。急て信貴山へ参ふ。則是じや。如何に此庵室の内へ案内申候。「平岡より御使に参ッじて候。あこやの前の物化。以の外に御座候間。只今御出被成。加持有て給われとの御事に候。「左あらバ某ハお先へ参り申さふずる。阿婆梨の御出にて候。号々御通り候へ。「是に候。「畏て候

五十一 鳥追船

〔シテ中人有リテ、ワキツレ日暮ノ何某次第二ニテ出ル。間、右ノ供ニテ出ル。名乗過キ呼出ス。〕

「御前に候。「畏て候。「ト云立テ、ワキ正面へ向ク。「やあく其灘に当ッて。笛太鼓の音の聞ゆるハ何事ぞ。やあくじやあ。是ハ能い見物で有ふ。其由を申上ふ。「ト云、ワキニ向。」「如何に申上候。其由を尋て候へば。此国の習にて。舟にて数多の鳥を追ひ候が。当年ハ鳥追舟を結構に飾り。拍子に掛ッて鳥を追ひ候由申候間。御見物有ふするにて候。「尤に候。「ト云、太鼓座へ引居ス。」

五十二 室君

〔初ワキニ付出、太鼓座ニ居ス。ワキ名乗過キ、呼出ス。〕

女「御前に候。「心得申候。「立テ、ワキ正面ニテ。」「誠に万目出度折柄なれば。毎ものごとくに御神事を。御勤成されうすると御事なれば。何れもの衆へ其由申渡そふずる。やあく皆く御聞あれ。毎年の如く御祭礼を。御勤有べきとの御事なれば。遊女達も不残舟に乗り。囃子物にて御出あれとの御事なれば。皆々其分心得候へくく「ト云、太鼓座へ引居ス。」「古本ニハ此跡少々詞、会釈有之候へ共、当時フレ斗ニテ相済候故、略之。且又初メノワキノ呼出シモ無之事有り。其時ハ立テ、フレル斗ナリ。」

五十三 高野物狂

〔初、シテ次第アリ。名乗濟テ正面ニ下ニ居テ謡アリ。右謡濟キワ

二、間文ヲ持、暮ヨリ出。謡濟ト、シテ柱ノ先キニテ。」

「是ハ高師の四郎に仕へ申者にて候。頼申人ハ觀音寺へ參詣申されたるが。俄に急なお使に參る。急いで參ふ。(先へ出、シテヲミテ。)いや是に御座候よ(シテ、右ノ方ニ下ニ居テ。)」如何に申上候。今夜春滿殿の何国共なく、失せ給ひて候。「參候。「是ハ唯今御内にて拾ひて候が。如何様よう有リ氣成ル文と存候間。急て御覽候へ(ト云、文ヲ渡ス。)」左あらハ我等も御跡より參り申さうする。「心得申候。(ト云テ直ニ入ル。)」

#### 五十四 加茂物狂

〔脇脇出、シテ出テ問答アリ。初同ニ成間出、太鼓座ニ居ス。シテ中入有リテ、男二人次第ニテ出ル。次第名乗濟テ、ツレ男カ、ル。〕  
 「此隣の者お尋ハ。如何様成る御事にて候ぞ。「參候夫ハ過にし春の頃。物詣ふてとやらんとするとして出られて候が。夫より今日迄歸り申されず候間。いか、存ぜず候。「御用の事あらば承ふする。「心得申候。(ト云、太鼓座へ引居ス。)」

#### 五十五 籠祇王

〔脇粉河ノ何某。狂言供ニテ出ル。名乗過テ呼出ス。〕  
 「御前に候。「畏て候。(ト云、座ニツク。祇王安内乞。)」誰にて渡り候ぞ。「申給ふハ去事なれとも。囚人に對面ハ堅キ法度なれば。中々思ひも寄らず候。「常の女人に替りたるとハ。如何成人にて渡り候ぞ。「何と祇王と云人にて有る。父に逢せて呉ひ面白ふ舞をま

ふて見せう。夫ならば暫く御待あれ。御機嫌を以て伺ひ申そふする。「如何に申上候。都に隠もなき。祇王御前と申遊女是へ下り。牢舎の父に逢度由申され候を。中く成間敷とあらけなく申て候へば。父に御逢せあらハ。面白ふ舞をまふて見せうと申され候か何と仕ふず。「畏て候。「一段の御機嫌に申合た。「最前の由申上候へば。面白ふ舞を舞われふならば。逢せ申せとの御意にて候間。号く御通り有ッて父御に御逢ひ候へ(脇牢舎の父ヲ誅致候へと云時、狂言作物ノ戸明ケ父ノ手ヲ取出シ、正面へ置也。)」旁の嘆きの程ハ推量致たれ共。早歸らぬ事なれば。此上ハ万事を思ひ切り。最期にミれんを出さすに。とかく後世を助る様にさしますが専でおりやぞ(ト云捨てテ入ルナリ。)」

#### 五十六 関原與市

〔初二、シテ供侍。次第サシ謡、道行、美濃国山中に付。シテト侍少シ詞アリ。シテノ詞ニ「サラハ深ク忍バウスルニテ有ゾ、此方へ来り候へ」ト云トキ間立。〕

「やあく／＼皆く承り候へ。頼ミ申候関原与市。当国中川の庄を領地に給り。只今御入部成さる、間。皆々其分心得候へく

#### 五十七 二人静

「御前に候。「畏て候。「やあく／＼皆く承り候へ。毎の如く女共に菜摘川へ出よとの御事なり。其分心得候へく

鷺流  
十一世

矢田文蕙  
狂言堂（印）

## 【翻刻】

## 〔五冊目〕

一	鶴龜	十九	善知鳥	四十一	大江山
二	皇帝	二十	籠太鼓	四十二	撰待
三	感陽宮	二十一	藍染川	四十三	木賊
四	邯鄲	廿一	小督	四十四	行家
五	班女	廿二	放下僧	四十五	鐘引
六	吉野靜	廿三	烏帽子折	四十六	水無瀬
七	船弁慶	廿四	春榮	四十七	橋立龍神
八	安宅	廿五	鉄輪	四十八	接待
九	西行桜	廿六	唐船	四十九	同
十	三井寺	廿七	正尊	五十	滿仲
十一	舍利	廿八	葵上	五十一	切兼曾我
十二	黒塚	廿九	蟬丸	五十二	元服曾我
十三	藤榮	三十	七騎落	五十三	現在七面
十四	花月	三十一	俊寛		
十五	百万	三十二	卷絹		
十六	自然居士	三十三	調伏曾我		
十七	東岸居士	三十四	小袖曾我		
十八	富士太鼓	三十五	元服曾我		
		三十六	禪師曾我		
		三十七	土車		
		三十八	竹雪		
		三十九	国栖		
		四十	檀風		



## 一 鶴龜

〔口明ケ。囃子方座着、作物出ルト其儘出、シテ柱ノ先キニ立ツ。〕  
 「抑是ハ唐ノ玄宗皇帝に仕へ奉る官人にて候。扱も此君賢王に在ス  
 により。吹風枝を鳴らさず民戸をさ、ず。誠に御影有難キ御代にて  
 御座候。然れば毎年四季の節会の初には。御門不老門に御幸成さ  
 れ。舞樂を奏し給へバ。一千年の齡を保丹頂の鶴。万歳緑毛の龜參  
 内申シ。毎も舞遊び候が。当年も早其時節に成たれば。老若共に残  
 らず出<sup>イデ</sup>て押し給へ。構て其分心得候へく

## 二 皇帝

〔口明。右同断。〕  
 「抑是ハ唐土玄宗皇帝に仕へ申官人にて候。扱も我君に三千人の后<sup>キサキ</sup>  
 在す。其中にも楊貴妃と申て。帝に並ひなき御寵愛の御方。此程以  
 の外の御心地にて候間。医者数をつくし御養生あれど。さらに御驗  
 もなく候。今日ハ此殿に御幸成され。楊貴妃の御容体を観覽有べき  
 との御事なれば。百官卿相に至迄。其分心得候へく

## 三 感陽宮

〔口明。右同断。〕  
 「抑是ハ秦の始皇帝に仕へ奉官人にて候。扱も我君賢王に御座によ  
 り。吹風枝をならさず。民戸さしを差ぬ御代にて候。然れば君の宣  
 旨にハ。燕の国の差図の箱と。並ひに焚<sup>ヤク</sup>於<sup>ヤク</sup>期<sup>ヤク</sup>がかうべを持參内仕候  
 ハ。何にても望を叶へ給んととの御高札なり。其分心得候へく

〔太鼓座へ引居。シテ、連女出、謡アリテ、一セイニテワキ二人出、  
 道行、名乗過テカ、ル。官人立テ、シテ柱ノキワニ立ツ。〕「奏聞  
 とハ如何成者ぞ」「さ有らバ其由申上ふずる間。夫に暫く御待候へ。  
 〔ト云、大臣ニ向居シテ云。〕如何に奏聞申候。燕の国の傍<sup>カウ</sup>に住む。  
 荆軻秦舞陽と申二人の民。御高札に任せ燕の国の指図の箱と。並に  
 焚<sup>ヤク</sup>於<sup>ヤク</sup>期<sup>ヤク</sup>がかうべを持參内仕候。「參候」「畏て候。〔ト云、跡ニ寄、  
 下ニ居待ツ。〕ワキ呼出「御前に候」「畏て候。〔立テ、ワキヘ向  
 イ。〕「最前の人の渡候か」「其由申上て候へバ。則參内申せとの御  
 事に候。乍去御太法なれハ。劍<sup>ケン</sup>をバ某預り申そふずる〔ワキ、ク  
 ツロキ、ツレワキト詞有り。劍ヲトル。右ノ内官人モ下ニ居ルガヨ  
 シ。〕〔ワキツレ、ワキ、劍ヲ一所ニシテ、官人ニワタス。〕「某預り  
 申そふずる〔ト云、ケンヲトル。ワキ詞アリ。〕「是ヨリ三里登<sup>ツ</sup>  
 て三里下<sup>ツ</sup>テ。又三里上<sup>ツ</sup>てつ、との上じや程に。そろく御登り  
 候へ〔ワキ答へナシ。官人、劍ヲ後見座に置キ座ス。〕

## 四 邯鄲

〔口明。右同断。但し枕、左ノ手ニカ、へ持テ出。台ノ上ニ置テ、  
 シテ柱ノ先キへ戻、立ツテ名乗ル。〕  
 「是は唐土邯鄲の里に住者にてさむらう。童邯鄲の枕とて。奇特の  
 有<sup>ル</sup>を持參らせて候。是は一年<sup>セ</sup>仙の法を行ひ給ふ旅人に。お宿  
 を參せて候へバ。其恩賞に給りたるが。是に一睡<sup>ヒ</sup>まどろめば。腰方  
 行末の事を見る枕にて候間。若御所望の方あらば。此方へ御入<sup>リ</sup>候  
 へや〔ト云、太鼓へ引座ス。シテ次第道行過テ、名乗アリテカ、ル。

但、橋掛リニテ次第道行、一ノ松ヨリカ、ル事モアリ。」「誰にて渡り候ぞ。いやお旅人にて候よ。」「お宿參せふする間。まづ内へ御入り有りてお腰を召され候へ〔シテ舞台へ出ルアイダニ、後見ヨリ受取持出し、腰カケサセ、シテノ右ノ方へ行、下ニ居テ。〕「扱アは何国よりいづ方へ御通り被成候ぞ。夫は何の爲の御出にて候ぞ。」「さ有らハ童コシカガ邯鄲の枕とて。奇特の有持參らせて候間。是に一睡まどろめバ越方コシカガ行末の事を見る枕にて候間。少御日睡有マドロミッて御覽候へ。」「あれ成大床に御座候〔ト云乍枕ヲミテ、シテ詞云乍腰ヲハナル。〕。」「其間に粟の供御を拵へ申さうずる〔ト云乍セウギヲトリ、後見へ渡、座ス。シテ夢ノ舞樂過キテ、後諷「ねむりの夢ハ覺にけり」ト謡ふ内、女立テ台ノワキ迄行、扇ニテ台ヲタ、キ、詞云。〕「如何に旅人御昼ユなり候へ〔ト云、直ニ立テ幕へ入ル。〕

#### 五 班女

〔口明。囃子方座ニ着ト、其儘出。シテ柱ノ先キニ立。〕  
 「童ハ美濃の国野上の宿の長者にてさむらう。童上臆あまた持ちたる中に。花子と申は幼コき時よりも。朝夕扇に数寄申されたる故に。此花子を皆人班女とハ名付給ふ。又此春都より。吉田の少将殿と申ス御方。東へ御下り有るとて。是に御宿り有り。彼班女に御酌杯取らせ給ひし時。少将殿の扇を取替カして下シ給ひたるが。班女此扇に而已詠メ入り。今ハ御酌とて人の召にも出されば。長がわるきとて各御しかり成る、間。花子を呼出し此由急度申渡そふと存る〔ト云、幕へ向。〕「如何に花子の有るか。申子細の有る間。急で出ら

れ候へや〔シテ出ルヲミテ。〕「扱もく、あのなりわいの。早アふ歩フミしませ〔シテ舞台へ出ルマデ相応の詞。〕〔右ニ准シ云ウ。シテ下ニ居ル。女脇正面ノ方、シテノ右に立。シテノ持タル扇ヲ取り乍。〕「エ、まだ此扇をはなさぬか。のふわごりよ能ふ聞しませ。細々童か異見をいへども。終に聞入る、体がない。長が中違ふからハ。此屋の内にハ叶フまひ程に。此扇に添ふて。急て何国方へも出られ候へく。構て早ふ行しませ。のふ腹立や。面憎や。腹立やのく〔ト云乍入ル。但シワキ高安流ナラハ跡に云釈イ有ル故、太鼓座へ引居。シテ中入過キテ、ワキ次第名乗有リテ、脇連に花子尋ネテ来り候へと云付ル。〕〔ワキツレカ、ル。女、一ノ松ニ立。〕「誰にて渡り候ぞ參マ候元ハ此家ヤに住申されたるが。長と不和成る事有りて。今ハ当所にハ御座なく候。」「尤に候〔ト云、太鼓座ニ引居。能濟テ入ル。〕

#### 六 吉野靜

〔初メ囃子方座着、脇出、各乗テ、クツログト、能力二人、扇を貝ノ心に吹く体ヲシテ、「ツウワイく」ト云乍出ル。但シ下掛リハ初メ有。シテ中入後、間出ル也。〕  
 ヲモ 「ツウワイく」 ツレ 「ブウく」 ヲモ 「ツウワイく」 ツレ 「ブウく」〔ト云乍舞台へ一ヘン廻リ、左右ニ立止リテ詞。〕  
 ヲモ 「喃々皆の者は遅シひが隙が入か知らぬ ツレ 「されバ不思議な事でありやる ヲモ 「先爰所に待合そふ ツレ 「能ふおりやらふ〔ト云、兩人下ニ居ル。ワキ、間ノ中へ出、下ニ居ル。〕 ヲモ

「何と思わしますぞ。常々ハ人より先へ進ミ出て。か様の事に遅ハ。心中の程が大方知れたよ ツレ 「おしやる通り。ぬかつた者ともでおりやる〔爰ニテ脇出る。二人驚たる体ニ而。〕」ヲモ 「いや是は如何成人なれバ。此吉野十八郷の。おとなの集會の座敷へ。濡わらんづでハいかゞておりやる〔是ハ都道者にて候。集會の御座敷共存せず候、御めんあらうふするにて候。〕」ヲモ 「都は都爰ハ爰じやに。いや去ながら。此人ハよふお知りやらふ程にお問やれツレ 「其方お問やれ ヲモ 「都にて頼朝義経の御中をバ。何と風聞申ぞ 「ワキ 「かみは御一たいなれハ、つみには御中なをらせ給ふべきよし申候。』」ヲモ 「偕ハ旁ハ判官殿びいきじやよ。又義経は此山を。人数如何程にて披れたると申ぞ 「ワキ 「十二きとこそ承りて候へ。』」ヲモ 「十二騎とハ十二人の事か。夫ならば皆を待迄モも有まい。いざ兩人して追欠申さふ（ト云ナガラ、ウテマクリシテ、行フトスル。尤ツレモ問）」ヲモ 「暫く、十二騎と申とも、余の勢百騎二百騎にもむかふべし。か様に申ハ都のもの、たうざんをしんし參る上ハ、いかにも御寺も宿坊もなんなくおわしませかしと思へば、かやうに申也。此上ハともからも」。是より謡に成り、地取「御暇申候わんく」と云時、ワキ真中ヲ通り、大臣柱ノ方へ行」ヲモ 「夫ならば何角と申そふよりも引て戻ふ ツレ 「能うおりやらふ ヲモ 「いざこちへおりやれく（ト云乍ら人ル）」 ツレ 「心得た ヲモ 「何れもへ其通りを知らせふ ツレ 「如何にも知らせふ共 ヲモ 「こちへおりやれく ツレ 「心得たく

## 七 船弁慶

「脇、次第二テ出ル。跡ニ付出。太鼓座ニ居ス。道行、詞アリテカ、ル。一ノ松へ立ツ。』  
 「誰にて渡り候ぞ。いや武藏殿の御下向にて候よ 「さあらバ御座船の儀を申付ふする間。先奥の間へ御供なひ成され候へ（ト云、太鼓座へ引居ス。シテ中入過、一ノ松ニ立ツ。』」誠哉、覽唯今承れバ。静御前の立わかれ給ふ時。我君へ御名残を惜ミ給ひたると申せバ。御前ノ様子御心元なく候間。先あれハ罷出。御機嫌を伺ひ申そふずる（ト云、ワキノ前へ行座ス。』」亭主御身舞申上候。我等ハ用所御座候ひて。委くハ存せず候が。只今人の雑談仕るを聞バ。君へ静の御心を残し置れたると承り。拙者迄も落涙仕りて候が。武藏殿にハ何と思召れ候ぞ 「參候 「実々か様に御忍ひのお下向も。一旦御咎なきよしを仰わけれん為成るに。女性上臈の御供にてハ。世間の人口然るべからず思召。君の御留メあれバ又静は。此時節こそ遠国波濤迄も。女人の身にて見届られんと有ハ。去りとてハ義理の届た事で御座ると。皆々感じ申事に候 「其お事で御座る。最前御座船の儀を仰付られた程に。随分申付てハ御座れ共。先あれハ參り。弥念を入させ申さふずる 「心得申候（ト云、太鼓座へ引居ル。』」ワキ立テ、ツレワキト詞アリ。諷に成る。「ゑひやくといふ塩に」と諷ふ時、ワキ、「船頭舟を出し候へ」と云フトキ。』「畏テ候（ト云テ幕へ入り、舟ヲ持出シ、地謡ノ前ニ直シ、トモニノリカイ棹ヲ持テ。』」皆々お船に召され候へ（ト云、判官、ワキツレ乗ル。ヲモワキモ乗ル。但シ云合次第二テ、「武藏殿ニモ召サレ候

へ」ト云、弁慶乗ルモアリ。何レトクトイ、合可然」「さ有バ船を出し申候〔ト云テ立テ、「エイ／＼／＼」ト、コゴ。〕「早目出度御吉相が見へて御座る。今日の様な能き日和ハ。近頃には希な事で御座るが。武蔵殿にハ何と思召され候ぞ。」「又御座船の事にて候へば。究竟の水主ともを撰ミ乗せて候が。武蔵殿にハ何と御覽被成候ぞ」「エイ／＼／＼。扱武蔵殿へちと願が御座る」「某の様に一命を捨御供仕る上ハ。御本望を遂られた時。是より四国西国の海上をバ。某一人に仰付られて下されいかしと存候」「夫ハ忝ふ御座る。去ながら其時分ハ。お事多くも御座らふ程に。必違<sup>イ</sup>隔<sup>キ</sup>仕らぬ様に願ひ申候」「夫ハ別而忝ふ御座る。エイ／＼／＼。荒不思議や。あれ見馴ぬ雲が出たよ。あの様な雲が出れば。必風に成たがる物じやが。何レも御座船に愚<sup>オロ</sup>ハないと申ながら。是ハ木取の時より念を入レ。針かすがいを十分に仕り。船子ニは数多の手垂を乗せ。楫取をば某の仕る程に。御心易く召され候へ。エイ／＼／＼。去れハ社風か替<sup>カ</sup>た。皆々情を出し候へ〔ト云乍下二居テ、右ノ肩ヲヌギテ、「エイ／＼／＼」、ト是ヨリ格別ニ情ヲ入。〕大キク エイ／＼。去レバこそ波か打<sup>ツ</sup>て来<sup>ル</sup>ハ。アリや波よ。アリや。／＼／＼。浪よ／＼／＼／＼。越せ／＼／＼／＼。シイ。〔ト替ニテ波ヲカケテイスル〕エイ／＼／＼。是ハ如何な事。又浪が見ゆる。おひた、しい浪かな。アリや／＼／＼／＼。浪よ。／＼／＼／＼。越せ。／＼／＼／＼。シイ。エイ／＼／＼。〔爰ニテ脇立テ、詞アリ。ツレワキモ詞アリ。〕「ア、暫、船中にて左様の事は申さぬ事にて候。何事も武さしと、船頭に御まかせ候へ」、トいふ時」「やあら爰な人ハ。最前から指

出たさふな人じやと思ふた。いらぬ事をおしやらず共。舟底へは入<sup>ツ</sup>ておりやれ「ワキ」「船中ふ案内の事にて候間、何事もむさしにめんじて給り候へ」と云トキ。」「夫ならば苦う御座らぬ。エイ／＼／＼。是は如何な事。又あれへ女浪か男波かハ知らぬか。さながら屏風を立<sup>テ</sup>た様な波が打<sup>ツ</sup>て来るは。アリや。／＼／＼／＼。波よ。／＼／＼／＼。越せ／＼／＼／＼。シイ。エイ／＼／＼。〔ト云、是ヨリ只コギイル。ワキ、判官諷アリテ、「浪に浮んで見へたるぞや」と諷。早笛にナルトキ。〕「荒不思議や。海の面か鳴るよ〔ト云、下二居ル。切ノ謡、「弁慶舟子に力を合セ、お舟をこぎのけ」ト、ウタフトキ。ワキ「船頭舟をのけ候へ」ト云。〕「畏テ候。エイ／＼／＼。〔ト少しコギテ、下二居ル。能濟デ、判官、弁慶、ワキ連ト段々ニ入ル。其跡ニ付テ舟を持入ルナリ。〕

#### 八、安宅

〔太刀持、脇ノ供ニテ出。名乗濟、呼出ス。〕  
 太刀持「御前二候〔ワキ云付アリ。〕「畏テ候〔ト云、地謡ノ前へ行居ス。〕〔シテ、次第ニテ出ル。能力笈ヲ背負、金剛杖ニ笠ヲ付。右ニツキ。ツレ山伏ノアトニツキ出ル。舞台へ出、立並ブ時もツレノ跡ニ立チ。〕〔シテ連皆々、次第謡。地取、能力ウタフナリ。シテ 次第、「旅の衣ハ鈴かけの、／＼、露けき袖やしほらん」ト云謡時、引ツッキ。〕 強力「へおれが衣も鈴掛の破れてことやかきぬらん」〔シテ道行過、詞アリテ、皆々座に付キ、強力太鼓座ニ行キ、笈杖笠後見へ渡シ居ス。シテ、判官、詞有テ、シテ呼出

ス。」「御前に候〔シテ〕「笈ヲ持テ来り候。」「畏て候〔ト云、太鼓へ引、笈ヲ持チ出、シテヘワタス。〕」「さ有バ笈を上申候〔シテ笈ヲ取テ、判官へ渡シ、本ノ座へ戻リ、云渡ス。是ハ觀世流也。余流ハ笈を請取、其儘言渡ス。〕〔シテ〕「汝か笈を御肩におかる、事は南方冥加もなき事にてハなきか。」「強力「実にと」「是ハ冥加もなき事にて候〔先汝ハ先へ行、関の様体を見て、誠に山伏を撰か、又さ様にもなきか念頃に見て来り候へ。〕」「強力「畏て候〔ト云、シテ柱ノ先へ立テ。〕」「実と是は御下向を存て立たる関で御座らふに。某一人参るハこわものじや。去ながら仰付られた程に急て参ふ。先兜巾を隠イテ参ふ〔ト云、トキシヲ取テ、タモトへ入ル、但し強子帽子ノトキハ此詞ナシ。扱橋懸り一ノ松へ行。〕」「是ハ早関返屋と見へて。扱もく夥敷イ要害哉。又あれなる木の空に。黒イ物が四ツ五ツ見ゆるハ何シじやぞ。やあく山伏の爰じや。〔頭ヲ手ニテサス。〕ハアこわもの。〔ト云、下へ飛戻テ、袖をサス。〕急て申上ふ。〔ト云、立テ行ふトスル。〕去ながら唯戻れバ如何な。一首つらねて罷歸らふ。山伏ハ貝吹て社逃にけれ。誰おひかけてあびらうんけん。〔ト云、手にてツマツキラスル。〕あびらうんけん。急で申上ふ〔ト云、シテノ前へ行、下二居テ。〕」「如何に申上候。関の様体を見て候へバ。乱杭逆茂木ヲ結び。殊の外きびしい体にて。中々鳥の通ひも成そふも御座ない。又木の空に黒イ物が四ツ五ツ見へます程に。何ぞと申て問ふて御座れバ。山伏の爰じやと申程に。一首つらねて候。シテ「何とつらねて有るぞ」「山伏は貝吹てこそ逃にけれ。誰おひかけてあびらうんけん」と説申て候〔シテ〕「近頃小賢しきものにてある、汝も御跡より参

り候へ。〕」「心得申候〔ト云、太鼓座へ引□□。但、シテ詞アリ。皆立て、諷に成り、「よろ／＼として歩ミ給ふ御有様も痛しき」と、諷済て、皆々橋掛りへ行ヲミテ、太刀持ヲキニ向イ。〕太刀持「如何に申候山伏達の大勢御通りにて候〔ワキ「心得て有る」扱シテ、ワキ、詞ありて。シテ「よも誠の山伏を留メよとハ仰せられ候まじ。〕太刀「さ様におしつとも昨日も三人迄切つて掛ておりやる〔是より折ありて、勸進帳過て、皆々橋懸りへ行ク。判官、太鼓座ヨリ立ヲミテ、ワキへ向イ。〕太「如何に申候。判官殿の御通りにて候〔ト云、太刀ヲ脇へ渡ス。扱シテ、ワキ、詞アリて〕〔シテ〕「金剛杖を追取てさん／＼に打擲す、通れとこそ」ト云時。〕太「打ツ共通すまじいぞ〔此詞、觀世流斗。外ハナシ。押合済テ、ワキ「はやく御通り候へ」ト云時〕太「急でお通りやれ〔ト云、ワキト一所ニ大小ノ後口へ引座ス。扱、サシ、クセ済テ、ワキ橋懸りへ立、呼出ス。〕太「御前に候〔ワキ「山伏達は何程御出候べし。〕太「早抜群に御出有らふずるにて候〔汝ハ急き追付申、最早ハ余りに聊尔を申、面目なふ候程に酒を為レ持是迄参たるよし申候へ。〕」「畏て候〔ト云、立テ。〕最早抜群に程隔らふ急て追付申そふ。則是じや。如何に案内申候〔強力、シテ柱ノキワへ立。〕強「案内とハ誰にて渡り候ぞ。太「関守の先にハ聊尔を申。余りに面目なふ候とて。酒を持せ参られて候。其由御申有ッて給り候へ。強「其由申さふずる間。夫に暫ク御待候へ。太「心得申候〔強力、シテノ方へ行。シテへ向ヒ、下二居テ。〕強「如何に申上候。関守先にハ聊尔を申。余りに面目なふ候とて。

酒を持せ參られて候 シテ 「此方へと申候へ 強「心得申候（ト云立テ、太刀持へ向イ。）」「此方へ御通り候へとの御事に候 太「心得申候（ト云テ、ワキへ向イ。）」此方へ御通り候へとの御事に候（ト云、ワキノ跡ニ付一所ニ地諷座ノ方へ行居。強力ハ太鼓座へ引居ス。能濟、強力ハ山伏ノ跡ニツキ入。太刀持ハ脇ノ供ニテ入ルナリ。）」

## 九 西行桜

〔囃子方座ニ着、作物出、脇出ル。其跡ニ付テ、能力出。太鼓座ニ居ス。脇床凡ニカ、リ、呼出ス。能力立テ、脇ノ前へ出ル。〕  
能力「御前に候 ワキ「花見禁制と相触候へ 能力「畏て候（立ツテ、シテ柱ノ先へ下り、脇正面ニ向。）」「やあく／＼皆々承り候へ。当年ハ花見禁制と仰出され候間。其分心得候へ／＼（ト云、太鼓座へ引居ル。次第ニテ脇連、花見立衆出、次第、名乗、道行濟テ、一ノ松ヨリ案内乞ウ。能力、立向。）」能力「誰にて渡り候ぞ ワキツレ「さん候是ハ都方の者にて候がこの御庵室ノ花さかりなるよし承及はる／＼是まで參りて候ぞと御見せ候へ 能力「御出尤には候得共。当年ハ何と思召候やらん。花見禁制と仰出され候間。思ひなから叶ひ候まじ（ツレ「仰尤にてハ候へ共、平に御見せ有て給り候へ。）」能力「さ有らハ御機嫌を以て申て見うする間。夫に暫く御待候へ ツレ「心得申候（ト云、太鼓座ノ先ニ下二居ル。ワキサシ。）」（ワキ「夫春の花とハ」、ト謡出シ、「見仏開法の結縁たり」ト謡。詞、「去ながら四ツの時にも勝れたるハ花見の折なる

べし。荒面白や候。』と云時、能力立テ、ワキノ前へ行、下二居テ。』能力「如何申上候。花を見物申度キとて。若イ衆の是迄御出にて候（ワキ「何とて禁制のよしハ申さぬぞ 能力「禁制のよし申て候へ共。能き様に申て呉よとの御事にて候間扱申上候（をよそ洛陽の花盛りいつくともいひながら西行か庵室の花、花も一本我も独りと見る物を、花ゆへありかをしられん事、いか、なれとも是迄はる／＼来れる心さしを見さてはいか、かへすべき、あの柴垣の戸をひらきうちへ入れ候へ。）」能力「畏て候（立て、花見ニ向。）」「一段の御機嫌に申合た。此由を申さふ。最前の人の渡候かツレ「是に候 能力「其由申上候へば。号々御通りあれとの御事に候（ト云、扇ヒラキ、ザラ／＼ト、戸ヲアクル心ヲスル。尤早ク太鼓座へ居スカヨシ。能濟、ワキノ供ニテ入ル。）」（初メ ワキ呼出、云付ケ斗ニテ、触無之事も有り。又、呼出しモナキコト有り。何れニても能々云合可然。）」

## 十 三井寺

〔初、囃子方着座濟、シテ出、正面ニ居、サシ謡有り。此内ニ夢合出テ、太鼓座ニ居ス。〕  
〔シテサシ諷濟テ、詞「荒有難や候、すこし睡眠のうちにあらたなる霊夢を蒙りて候はいかに、わらはをいつもとひ慰むる人の候、哀来り候へかし語らばやと思ひ候」ト云。此内ニ夢合一ノ松に立、名乗ル。名乗詞過テ、シテ柱ノ先へ出、シテト行合う様に見合出べし。〕

「是ハ清水の門前に住者にて候。当寺へ参給ふ女性に。お宿を参らせたるが。漸お下向有べし。御迎に参り申せふずる。(爰ニテ、シテに行合。)亭主御迎に参して候。先是にお腰を召され候へ(ト云、後見ヨリ腰桶受取、持出。シテ腰カケサセ、シテノ右ノ方へ行、座シ。)'亭主御見舞申上候。某ハ夢を合する者なれば。御参籠の内靈夢のあらバ合せて参らせふずる(シテ「唯今の睡眠のうちにあらたなる靈夢を蒙りて候。我子に逢んと思ハ、三井寺へ参れとあらたに御靈夢を蒙りて候。)'是ハ一段の御夢相なれば。頓て合せて参らせふずる。恋しき人に近江の国。尋ぬる子を三井寺。近江の三井寺へ御参りあらば。何事も思召儘に御座有ふずる間。其御心得候へ(シテ「荒うれしと御あわせ候物哉。扱其三井寺とやらんへハいつくへまい候ぞ。)'参候今道峠と申す御掛り有り。夫より右へ付て御越あれバ。則三井寺へ御着候間。急て御参詣成され候へ(シテ「さあらハ告にまかせて三井寺とやらんへ参候へし。)'(シテ立ツト腰桶ヲトリ、後見ニ渡シ、太鼓座ニ居ル。中入後、地取りニテ入ル。シテ中入後、脇次第二ニテ出ル。能力、ワキノ供ニテ出、太鼓座ニ居ル。次第、道行過キテ、ワキ、座ニ着、呼出ス。能力「御前に候(ワキ「少人を伴ふて有る間、何にても一曲かなて候へ。)'畏て候(小舞、「イタイケシ。)'(舞済、シテ柱ノ先へ立、幕ノ方ヲ見テ。)'やあく、其皆のいふハ何事ぞ。やあく、じやあ。急て此由を申さふ(ト云、ワキツレへ向イ。)'如何に三位殿。く(キツレ立テ)「何事にて候ぞ、あれに幼イ者共がわめきまする程に。何事ぞと申て問ふて御座れば。女物狂が参ると申ス。此

お庭へも呼ませうか、ワキツレ「いや無用に致候へ「いや面白狂うと申程に。大事御座るまいがの、ツレ「いや無用に致候へ「ア、苦敷有まい物を。申々はハ如何な事。惣じて三位殿の曲で。何にてもよからふといふ事を。さふせいとおしやつた事がない。是ハ又見てもハこらへられてこそ。去ながら仰付られた程に此由を申さふ。やあく、其女物狂ひハ。(マクノ方ヲ見テ)此方へハ無用に有ぞとよ。去ながら面白狂わバ。如何にも道を広々と明けて。(扇ヒラキ、下ヲ左ヨリ右サシ)そちへ追戻すやうにして。(向ヲサシ)此方へ通し候へ(扇ニテ上へ下タへ、アヲカヤウ三度スル)く(●拍子ツ)「ト云、扇シマイサシ、笛座ノ上ニ居ル。シテ、一セイニテ出様々謡アリテ、「舟もこかれて出らん、舟人もこかれ出らん」ト謡。シテ、橋懸りへ行ト、能力、笛座ノ先へ立テ。)'惣じて我朝に撞鐘多しといへど。せい東大寺なり平等院こへ園城寺とて。天下に三ツの鐘に誉られた。いや急で鐘をつかふ(ト云、作物に向。)'ジヤアンモウくく(ト、カネヲツクテイ、三度程シテ、笛座ノ上ニ居ス。尤是ハ觀世流ナリ。余流ハ鐘ツク内ニ、シテ来リ、肩ヲ笹ニテ打ト飛ノキ。)'一蜂がさいた(シテ「童も鐘をつかふずるにて候。)'「いや是ハ人のつかぬ鐘にて候よ(シテ「人のつかぬかねを何とておことハつくぞ。)'「某のつく社道理なれ。此寺の鐘つくく、法師じや。構へておつきやるなや(ト云、元ノ座ニ居ス。)'(シテ詞有りて、謡「龍女が成仏の縁に任せて、わらはもかねをつくへきなり。)'次第「影はさなから霜夜にて、く、月にや鐘ハさえぬらん」ト謡。又返し地取ウタフ内ニ能力、ワキニ向イ。)'如何に申。狂女が鐘をつかふと申

候 ワキ「心得である(ト云て、笛座ノ上に居ス。能濟、脇の供ニテ入ル。)(一 脇、次第、道行濟、座ニ着、呼出無之。能力ヨリカ、ル時ハ左ノ通り。」「扱もく見事な月かな。か様にさへた事ハ。近頃ハ希な事で御座る。先あれへ参ふ。如何に申候。今宵の月の様にさへた事ハ。近頃ハ希な事で御座るが。旁にハ何と思召され候ぞ(ワキ「実々汝が申ことく今宵の月程おもしろき事ハ有ましく候。又少人の伴ひて有間何にても一曲かなて候へ。」「畏て候(小舞、是より末同斷。)

### 十一 舍利

〔初、名乗ワキ也。脇ノ跡ニ付、太鼓座ニ居ス。ワキ名乗、道行過、カ、ル。「門前の人の渡り候か。〕

〔誰にて渡り候ぞ(ワキ「是ハ出雲国三保の関より出たる僧にて候。当寺の御事承り及び参りて候。大唐より渡されたる十六羅漢又仏舍利ヲモ拜ませてたまわり候へ。」「尤拜せ度ハ候へとも。此泉涌寺の仏舍利と申ハ。聊尔に取出す事ハ成す候間。思ひながら叶ひ候まし(ワキ「仰ハ去事にて候得とも、はるく参りて候。そと拜せて給り候へ。」「遙々と御登りなれば拜ませ申さふずる。幸当月ハ某の御戸を明る番にて。折節鑑を持合ると云ひ。殊に今日は御舍利を取出す日なれば。先御戸を開き牙舍利を拜せ申。其後山門に上り。太唐より渡されたる。十六羅漢を御拜候へ(ワキ「祝着申候。」「さ有らハ号御通り候へ(ワキ「心得申候」ト云、大小ノ前ニ立。能力、舞台へ出、台の前ニ居テ、扇ヲヌキ、鑑ノ心

ニ持テ、「ゴトくく」ト云、扇サシ、立テ、左リへ「ギイ」引右へ「ギリくく」ト、戸ヲ明ルテイアリテ、ワキヘ向イ。」「御戸をひらき申て候間。心静に御拜ミ候へ(ト云、太鼓座へ引居ル。能力、一ノ松ニテコケ乍。)(シテ中入ノ時。」「のふ悲しやの。桑原くく。かなしやのくく。」「ト何ベンモ云テ、コケル。ヨキ見合立テ。」「漸と気が付いた。扱もく。今のめりくどうど鳴たハ何事で有ふぞ。鳴神かと存たれば夫でハなかつた。何で有ふぞ。是に付ても後生が大事じや。愚僧ハ菩提の道をバ随分心懸るとハ存れ共。今の鳴る時。仏とも法共弁へのなかつたハ。兼ての心掛が肝腰じや。先舍利殿へ参ふ。是ハいかな事。やあくく此お舍利をバ何者がとちへ取っていたぞ。今思ひ当った。最前出雲の国三保の関より。登られたる彼僧が取つて逃た物で有ふ。扱もく腹の立事哉。急て追欠申さふ。(ウテマクリナドシテ、先へ出、ワキヲミテ、いや是にたまつておりやるよ。急て仏舍利をお返しやれ(ワキ「愚僧ハ存せず候。」「知らぬとちんちたりとも。知らせひでハ置まいぞ(ワキ「夫ニ付不思議成る事の候間先近ふ御入り候へ。」「心得申候(ト云、ワキノ前へ行、下ニ居テ。」「実と御出家の身にて偽りハおしやるまい。扱お尋有度キトハ如何様成る御事にて候ぞ(ワキ「仏舍利の事当寺の御謂委しく御物語候へ。」「中々子細の候間。我等の覚へたる通り物語り申ふずる【語】「去程に此泉涌寺の仏舍利と申ハ。釈尊御入滅の御時。八万の大衆ハ申に及ばず。五十二類迄も啼きけぶ折節。足疾鬼といふ足早キ鬼ハ。成仏の素懐を遂んと思ひ。仏の御齒を引もぎ。行方知らず虚空に失せけるを。



韋駄天と云本尊ハ。仏ニ供を備ふる時。毎朝定ッて三部の鐘を三ッ打ッに。一ッ打ッ内にハ三千世界へ行渡り。二ッ目にハ諸仏へ悉く相触レ。三ッ目にハ本地へ御歸り有る程の。早キ韋駄天の追欠給へバ。疾鬼ハ須弥を七返迄逋巡るを。韋駄天は逆に廻りて追付。其儘取返して持給ふを。去子細有て我朝に渡り。釈尊肉付の牙舍利なれハ。常ハ御戸をさへ開き申さぬを。今日ハ御出有る日なれバ。取出し旁に拝ませ申て置たるを。いづく共なくとられ迷惑仕りたるが。扱お僧の是に御座候内には。如何様成者が参りて候ぞ。「ワキ」「愚僧御舍利を拝し申候処に何く共なく童子の如く成る人來られ、御舍利を取り、天井を蹴破り虚空に上ると見て姿を見失ひて候よ。」「何と童の如く成ル者の來りお舍利を取り。虚空に失たると仰せ候が。每より内か晴やかなと存たれば道理じや。此天井の破れたる体は。中々人間業とハ見へ不申候。某の推量申候ハ。古の足疾鬼が執心今に残り。此度ハ人間と現じ來り給ひ。取て行たるものにて有ふずると存候が。扱是ハ何と致候べき。「ワキ」「昔も今も仏力神力に替る事ハなく候間、此度韋駄天に祈誓あれかしと存候。」「仰の如く人力の分にては成間敷候間。幸韋駄天ハ守り本尊なれバ。彼仏に祈誓を懸ケ。式度取返ふと存る間。旁も力を添へて給り候へ。ワキ「心得申候。」「卜云、台ノ前へ行、懐口ヨリ珠教ヲ出し、合掌シニ」イロ「一心頂礼滿徳円滿釈迦如来信心舍利。此度足疾鬼か取りて行ッ仏舍利を取返し。再度当寺の御宝と成ッて度給へ。南無韋駄天」

（卜云、太鼓座へ行居ス。能濟入。）

又（宝生流ワキノ時ハ左ノ通り。）

「ワキ」「所の人の渡り候か。」「誰にて渡り候ぞ。」「ワキ」「是ハ出雲の国三保の関より出たる僧にて候。当寺におゐて承及びたる仏舍利を拝ませたまはり候へ。」「尤拝ませ度ハ候得とも。此泉涌寺の仏舍利と申ハ。聊尔に取出す事ハ成らず候間。思ひながら叶ひ候まじ。御大法は去る事にて候へ共、はるく参りて候間、平に御心得を以て拝せて給り候へ。」「遙々と御登りなれば。某心得をもつて拝せ申さふずる間。先号御通り候へ。」「ワキ」「祝着申て候。是より中入過、ワキヘカ、ル迄ハ右同断。」「急で仏舍利をお返しやれ。」「ワキ」「愚僧は存せず候。」「知らぬとちんじたり共。知らせひでハ置まい。扱ハ旁ハ忘語を仰らる、か。」「ワキ」「いやく忘語ハ申さず候。夫ニ付思ひ合する事の候。先近ふ御入り候へ。」「心得申候。下ニ立テ。」「実と御出家の身にて偽りハ仰られまい。扱如何やうなる御事にて候ぞ。」「其事にて候。最前仏舍利を拝し心をすます所にいつく共なく、童子のこたく成もの老人來り、仏舍利の御事懇に語り、何とやらん気色かわりて見へ候程に、不審をなして候へば、古への足疾鬼か執心と云もあへず、舍利殿に望ミ仏舍利を取、天井を蹴破ると見て姿を見失ふて候。南方不審成る事にてハ候ハぬか。」「何と足疾鬼が來りお舍利を取。天井を蹴破り虚空に失たると仰らる、か。実と每より内か晴やかなと存たれば道理じや。此天井の破れたる躰は。中々人間業とハ見へ申さず候。最前ハ卒忽成る事を申迷惑仕候。」「ワキ」「いやく苦しからず候。夫に付仏舍利の御事当寺の御謂委しく御物語候へ。」「中々子細の候間。

我等の覺たる通り物語申そふずる。「語り前ノ通。」釈尊肉付の牙舍利なれば。常ハ御戸をさへひらき申さぬを。旁の御出により。取出し拝せ申たる御事にて候。「懇に御物語り候もの哉。我等の存候ハ昔も今も仏力神力に替る事ハ有ましく候間、急き韋駄天へ祈誓を御懸ヶ候へ。」「仰のことく昔も今も仏力神力に替る事ハなく候。夫ならバ人力の分にてハ成間敷候間。幸韋駄天が守り本尊なれハ。彼仏に祈誓を懸ヶ。二度ひ取返ふと存る間。旁も力を添へて給り候へ「ワキ「心得申候」。此跡、前之通也。」

## 十二 黒塚

「脇、次第。能力、ワキノ供ニテ出、太鼓座ニ居ス。シテ中入過キテ、一ノ松ニ立ツ。」

「誠にむかしより人の申伝ゆることく。旅ハ心世ハ情と申が是で御座る。音に聞く安達原に行着て。何国に宿りの有をも知らず。前後を亡<sup>ボウ</sup>じ迷惑致す所に。ほのかに燈火の見ゆるを知るべに立寄り。宿を借ふと仰られたれバ。安き事借申さふずると有<sup>ア</sup>った時の嬉しさハ。某の一世の中にハ覚ぬかと存る。先あれへ參ふ。「ト云、ワキノ前へ行、下ニ居テ。」「何と先達には御草臥には御座らぬか。我等も何程の旅をも致<sup>イ</sup>て御座るが。今夜の主の様な。情の深<sup>コ</sup>ひ人には初て逢申て候。如何に通ひ馴たる道じやと有<sup>ア</sup>ても。夜陰と申殊に女人の独り。山に上り薪を取り。火に焚てあて申そふずると有<sup>ア</sup>様な。志の深<sup>コ</sup>ひ人は外にハ御座るまいと存るが。先達には何と思召され候ぞ。「ワキ「実々汝が申ことく今宵の主程情深<sup>コ</sup>きは有まじく候。

女の身として夜陰に及び、山に上り薪を取り火に焚てあはふするとの志、南方奇特成る事にて候。」「去ながら爰に一ッ不審な事が御座るハ。あれ程奥底もない慈悲な人ならバ。うたがひの心は持れぬ筈で御座るに。最前山へ上り様に。童が寢屋の内ばし御らふじられな。此方の客僧もお見やるな。構て見させられなど。押返し申されたが不審に御座る程に。私ハ行て見て參ふ（ト云行フトスル）。「ワキ「いやく、主と堅く契約して有る間、左様の事ハ無用に致し候へ。」「いや此方こそ御契約成されたれ。私ハ苦う御座るまい程に。ちよつと見て參ふ。「いや無用にて候。夜も更たり、某もまどろまふする間汝も夫にて休ミ候へ。」「ハア夫ならバ休ませう「ト云、扇ヲヌキ、ヒタヒニアテ、ロクニ居ル。扱ネルテイヲシテ、ワキノ方ヲトクトミテ、扇サシ、ソツト立テ、ヌキアシニテ行フトスルキ。」「ワキ「何方へ參るぞ。」「ト云時、其儘下ニトウド居ル。」「いや何方へも參りハ致ませぬ。山坂をお使に參るく。夢を見て御座る「ワキ「心閑に休候へ。」「畏て候「又初メノ通りネルテイヲシテ、ワキノ方ヲ得ト見て、扇ニテ舞台をタ、キ、シツくく「ト云テ、鼠を追ふテイヲシテ、ソツト立フトスル。」「ワキ「何事を仕るぞ。」「いや何事も致さぬが。鼠か戸障子へさわいたやう。こそくと致<sup>イ</sup>たに依て驚て御座る「ワキ「近頃さわかしき者にて有るそとよ。」「ハアやあら今夜の様に寝られぬ事はないが。合点の行ぬ事じや。寝られぬこそ尤なれ。火がともひて有るに依てまぼしうて寝られぬ。扇を顔にあて、によふ「ト扇ヲヒラキ、顔ニアテ、ネルテイヲシテ、脇ノ方ヲトクト見て、扇ヲ左右

ノ手ニトリカへく持て、コケモツテ段々トシテ柱ノ方ヘコケ行。  
ヌキ足シテ、一ノ松へ行。」「漸々とぬけて参た。先達ハ常々よい  
お人なれ共。何成りともこう致ふと云事を。そふせいとおしやつた  
事がない。又某もわるい癖で。人の能らふと有る事はいやなり。な  
しそとあれば無理にも致たしたい。是も見てこいと仰られたらバ参  
るまいが。な見そくと仰らるゝに依つて見いでハこらへられぬ。  
ちよつと見て参らふ〔作り物へ手ヲ懸、ノゾイテ見テ、一ノ松へ行  
ながら。〕「のふくおそろしやのく急で此由を申さふ。去なが  
ら常々臆病者じや。卒忽ものじやと仰らるゝに。むかつな事を申上  
てハ如何な。今一度とつくりと見定てから申上ふ。こわ物で御座る  
が〔ト云乍フルイく行、作り物へ両手をカケ、トツクリと見テ、  
「のふおそろしやのく」と云乍ワキノ前ヘコケテ。〕「見て御座る  
〔ワキ「見たるとハ。〕」「最前の女の寢屋の内を見て候へば。人の  
死骸ハ軒とひとしく積重ね。其外死骨白骨ハ数をしらず候間。片時  
も此所に。御逗留ハ御無用に候〔ワキ「最前堅く申付て有るに曲  
事にて有ぞ。去ながら立越見ふするににて候。〕」「急き御覽成さ  
れ候へ。我等ハお先へ参りお宿を取り申さふずる〔ワキ「尤にて  
候。〕」「のふく、媿しやのく〔ト云乍入ル。〕」

## 十三 藤永

〔囃子方座着キ済テ、子方一人、連脇一人、囃子モ何モナク只出テ、  
子方ハ地謡ノ前ニ居ル。連脇男ハ笛座ノ上に居ル。扱次第二テ僧ワ  
キ出。次第、道行諷済テ詞アリ。宿を借り、ツレ脇ノ男立合テ、

様々永キ詞アリ。僧と子方ハ囃子方の後口ヘクツロク。ツレワキ男  
ハ切戸ヨリ入ル。扱シテ藤永出ル。右ノ供ニテ太刀持出ル。〔シテ  
「是ハ菅屋の藤永にて候。今日ハ日もうら、かに候間浦遊ひに罷出  
候。いかに誰かある」ト、名乗過キテ呼出ス。〕

〔御前に候〔シテ「浦遊ひに出候へし。舟の事申付候へ。〕」「畏  
て候〔シテ「又あれに当て笛鼓の音の間へ候ハいかなる事にて有  
るぞ。〕」「いやあれハ松風か波の音で御座らふずる〔シテ「急て  
尋て来り候へ。〕」「畏て候〔立て幕へ向イ。〕「やあく夫に笛太  
鼓の音の聞るハ何事ぞ。やあくじやあ〔シテニ向イ。〕「只今の  
由を尋て候へば。藤永殿のお船遊ひの事其隠れなくして。鳴尾殿の  
お酒迎ひに御座ると申候〔シテ「さらハ此所にて待ふするにて  
候。〕」「尤に候〔ト云、太鼓座ニ居ス。〕〔扱鳴尾下り端ニテ出ル。  
ツレ皆々笹ヲカタゲ出ル。能力モ笹ヲカタゲ、ツレノ跡ニ付出ル。  
下り葉、諷済テ座ニ着、呼出ス。能力立ツテ、ツレノ前へ出ル。  
「いかに能力。〕」能力「御前に候〔何にても一さしかなで候  
へ。〕」能力「畏て候〔イタイケシタルノ小舞アリ。舞ス  
ンデ。〕「此扇子を藤永殿へさし申候〔ト云乍扇を渡ステイ斗。〕〔シ  
テ「給酔て候程にまはふするにて候。〕」「ト云、能力座ニツク。扱  
サシ、曲アリ。曲留ノ頃能力立ツテ謡。〕」「へ又君のお傘を。龍頭  
鶴舟にさ、せて。此のお供をや申さん〔扇ニテ目付柱ヘサシ行、カザシモト  
リテ左右ニテ留ル。〕〔ト云時、脇、大臣柱ニ立、ウナツク。〕「能力  
〔こちの事か何事ぞ〔ワキ「只今舞まふたる者ハいかなるもの  
ぞ。〕」「あれこそ菅屋の藤永殿といふて。隠れもなひお人よ〔ワ

キ「其藤栄に今の舞こそ面白けれ。今一指まへめうといへ。」能力「夫ハ誰ガ〔ワキ「愚僧か。〕」「扱もく大へいな者か有る事や。去なから此由を申てみる〔ト云、シテへ向。〕」「如何に申候。あれに見馴ぬ修行者の御座るが。唯今の舞まふたハ誰そといふてとひまする程に。芦屋の藤永殿と申て。隠もないお人じやと申たれば。先キの舞か面白かつた程に。今一指まへめうと申間。夫ハとこからぞと申たれば愚僧かと申。参て打擲仕ふ〔シテ「左様に申ハあれ成修行者の事にて有か。〕」「さん候〔安き間の事、舞をハ已前にまふて有間、今度ハ八撥を打て聞さうすると申候へ。〕」能力「いや御無用で御座る〔「いやく苦しからぬ事にて候。左様ニ申候へ。〕」能力「畏て候。是ハ案に相違致た事を仰らるゝ。去なから此由を申て悦せう。〔ワキノ方へ行。〕」喃く「其方は果法マツな人しや。只今の由を申たれば。最前ハ舞を舞マツられた程に。今度ハ八撥を打つて聞せうと仰らるゝぞ。ワキ「急て打てといへ。能力「エ、きやつハまだじやうごわを申。御政道マツ忠しければ社なれ。某の儘ならバ。あれには是々を戴せう物を〔ニギリコソヲ、フリ上ル。〕〔ト云、シテへ向ヒ。〕」「急て羯鼓を遊され候へ〔ト云、太鼓座へ行居ス。能濟テ太刀持、能力跡ヨリ入ルナリ。〕」

#### 十四 花月

〔初、ワキ次第二テ出ル。名乗ノ内二間、片幕ニテ出。太鼓座二居。ワキ道行濟、詞アリテ、カ、ル。〕  
ワキ「門前の人の渡り候か〔誰にて渡り候ぞ〔是ハ都はしめて

一見ミの事にて候。何にても面白き事の候ハ、見せて給り候へ。〕  
「参候都の事なれば。面白き事の打続き有る時も候が。折節今ハ御座ないが。何を哉見せ申さふやれ。いやお目に懸ふ物がござる。爰に花月と申喝食の。小唄をうたひ色々面白ツ御狂ひ候間。是を呼出し御目に掛申さふざる〔ワキ「さあらハ其花月とやらんを見せ給り候へ。〕」「先号く御通り候へ〔ワキ「心得申候。ト云、ワキ座ニ着ク。入替り、間、シテ柱ノキワへ出、暮へ向。〕」「如何に花月へ申す。とうく御出有りて。花の下にて御遊ひ候へや〔ト云、太鼓座二居。シテ出テ、名乗、諷、詞アリ。謡地ニ取。〕「扱ハ末世のかうぞ成とて、天下にかくれもなき花月と我を申なり」ト諷切ト、間、立テ、脇正面ノ方へ出、花月ニムカイ。〕」「何とて今ツ日ハ遅く御出候ぞ〔シテ「さん候今まで雲居寺に候ひしか、花に心を引弓の春の遊ひの友達と中たかハしとて参たり。〕」「さあらバ毎の小哥を御謡ひ候へ〔ト云テ、ソバへヨリ、コシヲカメメル。間ノ肩ニ手ヲカクル。シテ「こしかたより」ト謡出。間、扇ヒラキ、カザス。右ノ謡スンデ、間ヲツキコカス。間、下ニコケ居テ、目付柱ノ方見テ。〕」「いや爰な花に目が有るに。漸見れば小鳥じや。急て此由を申さふ〔ト云、立テシテ二向。〕」「いかに申。鶯が花踏散らします。其御ツ弓にて遊され候へ〔シテ「実々鶯か花を散し候ぞや。某射て落し候はん。〕」。急てあそはし候へ〔ト云、太鼓座へ引居。シテ詞アリ。諷ニ成りテ、「仏の禁め給ふ殺生戒をバ破ルまし」ト、弓矢ヲ捨ル。間、右ノウタイスミ頓ニ出テ、弓矢ヲトツテ。〕」「尤て御座る。左有バ毎の地主の曲舞を謡せられいや〔ト云、



御上候か」ト云ニツ、イテ、問、詞。但シ是ハ觀世也。其外ハ「諷誦を御上候か」の詞ナシ。「般若心經」ニツ、イテ問、詞也。」「如何に申候。是成<sup>ル</sup>童<sup>ノ</sup>の諷誦を上られ候が。可愛小袖にて候間。先此諷誦文を御覽候へ」ト云テ、文ヲ渡ス。直ニ太鼓座へ引居ス。」〔下掛リノトキハ、「般若心經」と諷切<sup>ル</sup>ト右ニツ、イテ。〕「いかに申。是成幼<sup>イ</sup>の諷誦を上られ候。先諷誦文を御覽候へ」ト云、文ヲワタシ、引ナリ。〔扱、シテ詞アリ。初同「身の代衣恨めしき、トトタウ。此内ニ脇二人出ルナリ。諷濟ト、ワキ名乗アリ。尤是ハ上懸り也。扱、ワキツレト詞アリテ、ワキツレ、子方ヲ引立ルトキ、間立ナガラ。〕「やるまいぞ、ワキ「用が有る」「用が有共やるまいぞ」〔ウデマクリシテ、キメル。〕ワキ「用か有る」ト云乍フリ返リ、キメル。直ニ、ワキ座ノ方へ行。〕「用かあらバ連て行ふ迄。扱是ハ何とせうぞ。去ながら申上ふ。ト云、シテノ方へ行、下ニ居テ。〕「いかに居士へ申候。唯今の童<sup>キ</sup>者を荒氣なき男の来り。引立連て参る程に。やるまいと申たれバ。用か有と申て連て参りて候。某ハ何共分別に及ず候が。扱居士には何と思召され候ぞ」〔シテ「荒曲もなや候。始より彼女は用有けに見へて候。其上諷誦をあけ候にも唯小袖共か、す、身代衣とかいて候より、ちと不審に候ひしが、居の推量申候ハ、彼者は親の追善の為に我身を此小袖にかへて諷誦にあけたと思ひ候。さあらハ只今の者ハ人商人にて候べし。かれハ道理こなたはひかことにて候程に。御身のと、めたる分にてハ成候まじ。〕「参候人商人にて候ハ」。定て大津松本へならでハ参まい。某追欠連て参ふずる」〔ト云乍フリテスル。〕

〔暫御出候分にて

ハ成まし。居士此袖を以て行彼ものに替て連れてかへらふずるにて候。〕「尤にてハ候得ども。七日の説法今<sup>ナスカ</sup>日結願成に。夫かむに成り申そふハ。如何にと御座らふずる。〔いや、説法ハ百日千日聞召れても善惡の二ツを弁へん為ぞかし。今の女は善人、商人ハ悪人善惡の二道爰に極つて候ハいかに。諷「けふの説法是迄なり。願以此功德普及一切我等与衆生皆共成仏道」トウタフ。右ノ内小袖引寄タ、ム。尤モナガク三ツ折ニタ、ミテ、シテノ後へ廻リ、エリニ掛ケヤウトクト云合スベシ。扱シテ立ッ迄、後ロニ待居テ、シテ立ト、セウギヲ取りテ、太鼓座へ引居ル。能濟、本幕ニテ入ル。〕

#### 十七 東岸居士

〔脇、名乗也。問、ワキ、シテ柱ヲハナレルト、其儘出テ、尤片幕ニテ出。太コ座ニ居ス。ワキ、名乗過テ、カ、ル。〕  
 「ワキ「清水寺門前の人の渡り候か」。問一ノ松ニ立。〕「誰にて渡り候ぞ。〔是ハ都始て一見の事にて候。此所にて何にてても面白き事の候ハ、見せて給り候へ。〕「仰のことく都の事なれば。面白き事の數多御座候。中にも清水へ御参り有る路次。五条の橋にて自然居士の御弟子に。東岸居士と申喝食の。橋の勸を御沙汰成さる、が。禪法仰られ。色々面白ふ御狂ひ候間。是を御目に掛申ずる。〔ワキ「左有ハ其東岸居士とやらんを見せて給り候へ。〕「左有バ号御通候へ。〔ワキ「心得申候」ト云、ワキ座へ行。間、マクヘムカイ。〕「いかに東岸居士へ申候。とう、御出候へや」ト云、太鼓座ニ居ス。地取ニテ入ル。〕〔此間、初メ此方ヨリカ、ル。詞有之候得共、

當時何方ニテモ不用。如此ニテ相濟候也。」

十八 富士太鼓

〔ワキ名乗ノ内ニ、間出テ、太鼓座二居。名乗過テ、呼出ス。又供ニテ出ル事モアリ。聞合可然。〕

〔ワキ「いかに誰か有る。」〕「御前に候〔ワキ「富士がゆかりと申さハ此方へ申候へ。〕」「畏て候〔ト云テ、太鼓座二居ル。シテ、子方、次第、道行過テ、案内乞間、一ノ松ニテ立。但、シテ、橋懸リニテ次第有ル事モアリ。〕」〔シテ「如何に案内申候。〕」「誰にて渡り候ぞ。」「さあらバ其由申さふする間。夫に暫く御待候へ〔ト云、ワキノ方へ行、下ニイテ。〕」「如何に申上候富士が所縁とて。幼き者を連て参りて候。ワキ「此方へト申候へ。」「畏て候〔シテノ方へ向。〕」「最前の人の渡り候か。」「さあらバ号く御通候へ〔ト云、太鼓座へ引居。地取ニテ入ル。〕」

十九 善知鳥

〔脇、名乗、道行過テ、カ、ル。間、名乗ノ内ニ片マクニテ出。太鼓座二居ル。〕

〔ワキ「外の浜在所の人の渡り候か。〕」「誰にて渡り候ぞ。〔ワキ「此所に於て去年の秋の頃身まかりたる漁師の家をおしへてたまはり候へ。〕」「参候其漁師ハ。去年の秋の頃身まかりたるが。夫に付此外ノ浜に。善知鳥と申鳥の候が。今の獵師ハ其鳥の子迄も殺生致せば。一入罪も深く有へきと存る間。あれに見へたる獵師の家へ

御出有りて。其由御申あれかしと存る〔ワキ「懇に御教祝着申て候。さあらハあれへ立越心静に尋ふするにて候。〕」「何にても御用の事あらハ承ふする。ワキ「頼候へし。心得申候〔ト云、太鼓座へ引居。地取ニテ入ル。〕」〔上掛リハ「去年の秋」、下掛リハ「去年の春」也。〕

二十 籠太鼓

〔太刀持、脇ノ供ニテ出ル。脇、名乗濟テ、呼出ス。〕

〔ワキ「いかに誰か有るか。〕」「御前に候〔清次ハ大剛の者にて有間番をよく仕候へ。〕」「畏て候〔ワキ座ニ着ク。太刀持立テ。〕」「更ハ籠屋を見廻申ずる。清次おりやるか。〔作り物のキワ、下ニ居テ。〕はて扱今度ハ不慮な事に逢て。無窮屈に有ふ。去ながら頓て訴訟で濟ふ程に。其段な心易う思しませ。又何にても用の事があらバ。心置いで何時にても某迄おしやれよ。清次。のふ清次〔ト云、籠ノ内ヲミテ。〕是ハ如何な事。清次かおらぬが何とせうぞ。是ハお耳へ立ずハ成まい。急で申さふ。〔ト云、フルイく、ワキノ前へ行、下ニ居テ。〕「いかに申。ぬけ申て候〔ワキ「ぬけたるとハ。〕」「清次が籠を破てぬケ申て候〔ワキ「最前堅く申付て有るに何とて由断仕りて有るぞ。〕」「随分念を入れて番を仕りて候が。何の間にやらぬけ申て候〔ワキ「扱彼者に親ハなきか。〕」「いや親ハ御座なく候〔ワキ「子ハなきか。〕」「いや御座なく候〔ワキ「妻はなきか。〕」「妻ハ御座候〔ワキ「さあらハ急て其女をつれて来り候へ。〕」「畏て候〔ト云立テ。〕」「咄々嬉やのく。何と仰付られふかと存し候て。

身の毛を詰たに助かた。左有ハ清次か妻を呼ふで参ふ。いや則是じや。〔シテ柱ノキワヨリ、幕へムカイ。〕「如何に此内に清次か妻の有か。松浦殿より召れ候間。急で出られ候へ〔シテ幕ヲ出。〕」〔科人を召こめられ候上は、女迄の御罪科ハ余りに御情なうこそ候へ。〕「いや／＼左様の事でハ御座ない。物をお尋成されうと仰られ候程に。心易<sup>レ</sup>思ふて御参り候へや〔ト、シテノ出ルヲミテ、ワキノ方へ行、下ニ居テ。〕」如何に申。清次か妻を連れて参りて候〔ト云、太鼓座へ引、居ル。〕〔シテ舞台へ出、ワキト詞アリ。初同ニナルト、ワキ呼出ス。〕ワキ「いかに誰かある。御前に候〔ワキ「此者を牢舎させ候へ。〕」畏て候〔ト云、シテノ側へヨリ。〕「立しませ。〔ト云、シテヲ引立、牢ノ中へ入ル。尤直ニ牢ノ脇ニ居テ、諷濟シテ。〕」清次社ぬかいたり共。汝をハ一寸ものかす事てバ、無イぞ〔ト云乍氣色ヲシテ、太刀ニ手ヲカケキメル。〕〔ワキ「やあいかには汝は女にむかい何事を致ぞ、其のさげなるによつて清次をも籠より遁ひてあるぞ、所詮今よりハ鼓を懸<sup>テ</sup>て一時宛時をうつして番を仕候へ。〕」畏て候。実々女に向ひ太刀刀ハいらざる事じや。さらハ急て太鼓を釣ふ。〔ト云、後見ヨリ羯鼓ヲ受取、持出ツル。但し釣様、能く／＼太夫へ聞合べし。尤撥ハナシ。〕「始から〔ト云乍羯鼓ヲ作り物へ結付ル。〕太鼓を釣て番を致いたらバ。中々清次をバのかすまい物を。遅く仰出されたに依。其杯も少しハ油断致いた故じや。いやも漸一ト時にならふ程に。時を打ツ番を渡ふ。ドン。／＼。ドン／＼／＼／＼。ドン。〔高ク云。〕一ツ。ドン。二ツ。ドン五ツ。ドン八ツ。ドン。九十ツ。〔キモヲツツシタル顔ニテ、口ニ手ヲア

テ。〕「ハア打過いた。しからせられうが。何とせうぞ〔ト云、太鼓座へ引居ル。〕〔シテサシ謡「実や思ひうちにあれば色ハ外にぞ見えつらん、つ、め共袖にたまらぬしら玉ハ人を見ぬ目のなミだかな。〕〔右諷濟ギワニ太刀持立ツテ、シテ柱ノ先<sup>キ</sup>ニ立。〕「荒いたハしい事哉。〔ワキへ向。〕「いかに申。籠の女が狂気致候。〔ワキ「何々籠の女が狂気したると申か。〕」参候。〔ワキ「あら不便や立越見うするにて候。〕」尤に候〔ト云立テ、シテ柱ノ先ニテワキ正面ヲ向。〕「やあく／＼頼ミ申人の御出成る、間。籠のあたりをのき候へ退候へ〔ト云、太鼓座へ引居。濟シテ、ワキノ供ニテ入ル。〕

### 二十一 藍染川

〔初メ、シテ、子方、次第ニテ出。サシ、小諷、道行過テ、詞アリ。左近尉ト問答アリ。サコノセウ、カ、ル。女幕ヨリ出ル。〕  
 女「誰物申さうといふは。いや左近の尉にて有か〔サコノセウ「さん候、神主殿へ申上へき子細有て参て候。〕」神主殿ハ持仏堂に看経を成さる、が。其持たるハ何方よりの文にて有ぞ。童か持て参らふする。サコ「それハ恐かましいて候。『いや／＼苦しからぬ事。如何やうなる人の方より越されたるぞ。〔サコ「都より女性旅人の一人家屋に御留り候か、此の文を神主殿へ参らせよと申され候。〕」女「頓て御目にかけてやうするぞ。夫に暫く待候へ。〔ト云テ文ヲトリテ、シテ柱ノ先<sup>キ</sup>へイツル。〕」荒不思議な事や。都より下りたる女房の文を参らするハ。何とやらん心許ない程に。わらハはそと披ひて見うと存る。〔ト云、文ヲ披キミテ。〕「されハ社申さ



ぬ事か。いかやうなる文ぞと不審に思ふたれば。是ハ一とせ神主殿在京の時。都にて去人と馴参らせられたるよし聞て有が。扱は其人の只今当所へ下りて。此文を参らする物であらふ。殊に梅千代とやらん申子迄連て候。のう腹立やのくく。〔ト云、文ヲ引サキ、拍子フミテ腹ヲ立テイアリテ。〕 いやくく此文を御目にかけてハ如何な。わらハ返事を書いてやらばやと存る〔ト云、太鼓座へ行、文ヲ持出、シテ柱ノ先ニテ、ヒラキ、扇ニテ書テイアリテ。〕「いかに左近の尉。只今文を御目に掛たれば。聴て返事の有るぞ。慥ニ届候へ〔ト云、文ヲワタス。〕 サコ「畏て候 女「扱其女房ハ子を連れて来りたるか〔サコ「さん候、おさなき人をつれ申されて候。〕」 女「其親子の者ハいづくに居ぞ〔サコ「いまた某の屋に御座候。〕」 女「神主殿ハ殊の外御腹立にて有程に。其女も子も。急で此在所を追失ひ候へ〔言語道断、左様の御方をハ何をも存せず旅人屋の事にて候程に、留置て候。さあらハ頓て追出し申さふするにて候。〕」 「一時も早ふ追出し候へ〔ト云捨テ入ル。〕

## 二十卷 小督

〔シテ中入後、柴垣ノ作物出。連女二人出ル。其跡ニ間女ツキ出。太鼓座ニ居ル。連女座ニ着ト、間女、シテ柱ノ先ニ立、名乗ル。〕 女「是ハ此屋の主にて候。此程都方の上臈にお宿参らせて候が。琴とやらん申物を遊さる、由承れば。先あれへ参り所望仕ふずる。〔ト云テ、連女ノ前へ行、下ニ居テ。〕 いかに申上候。今夜ハ八月十五夜にて。月も面白く御座候。又承り候へば。琴とやらん申もの

を遊さる、と申せハ。爰元の者ハ左様の事聞申さず候間。ちとあそバされ候へ。わらハも承り度候〔ツレ答ナシ。云捨テ引居ル。能済テ、ツレ女ニ付入ル也。〕

## 二十二 放下僧

〔シテ中入過テ、太刀持、ワキノ供ニテ出。脇次第ノ間、下二片ヒサ立居ル。名乗済テ呼出ス。但シ次第ノ内ハ立居テ、名乗ニナリテ、下二居ル方可然。〕 〔ワキ「いかに誰か有る。〕」 「御前に候〔ワキ「瀬戸の三嶋へ参ふする間汝老人供仕候へ。〕」 「畏て候〔又存る子細の有る間、路次にて某の名字はし申候な。〕」 「心得申候〔ワキ、座に着。太刀持立テ、シテ柱ノサキニテ。〕」 「扱もく嬉敷事哉。頼申御方の御内に入多しといへど。某を千騎万騎と思召。お供に召連らる、様な。大慶な事ハ御座て社。随分御奉公申上と存る。〔ト云、マクノ方ヲミテ。〕 やあく其賑なハ何事ぞ。何と放下が来ル。是ハ面白う。急て其由を申上ふ〔ト云、ワキノ前へ行、下ニ居テ。〕」 「如何に申上候。あれに幼き者共がわめきます程に。何事ぞと申て聞ふて御座れば。放下が参ると申が。是へも呼ませうか〔ワキ「何と放下と申すか。左様の者ハ無用に仕候へ。〕」 「いや面白物じやと申程に。苦う御座るまいがの〔ワキ「いや無用にて候。〕」 「ア、大事ない事で御座る物を。〔ト云、シテ柱ノ先へ行テ。〕」 是ハ如何な事。惣じて頼だ人の癖て。是をかやうに致ふと申事を。そうせいとおしやつた事がなひ。是ハ見いでハこらへられて社。去ながら仰付られ

た程に申渡さふ。「幕ノ方ニ向。」やあく其放下ハ此方へハ無用にて有ぞとよ。去ながら面白物ならバ。如何にも道を広くと明けて。(ト云テ刀ヲ左ノ持カヘ、扇ヒラキ、サシマシ)そちへ追戻す様にして。(向ヘサシ)

此方へ通し候へ(扇ニテマネク)●担子ニツト云、笛座ノ上へ行居ル。一セイニテ、シテト連ト二人出ル。諷ノ留。「人をあだにや思ふらん、く」ト云時、太刀持立テ、シテ柱ノキワヨリ、シテへ向イ。「如何に旁へ申候。是ハ興有たる出立にて候が。何にて候ぞ(シテ)「是は放下にて候。」「扱旁の名ハ何と申候ぞシテ「ふうんりうすい」「扱其方の名ハ何と申候ぞツレ「ふうんりうすい」「扱は一人の名を二人して御附候か(シテ)「いやく一人ハふうん、今一人ハりうすいと申候。」「夫でこそ合点かいたれ(シテ)「さてあれなるはいかやう成御方にて候ぞ。」「あれこそ隠もないお人よ。相模ノ国の住人戸根の信俊。(ト云、口ニ手ヲアテル。)とハな云イそと仰られた物を「いやく苦しからす候。何とぞ御はからいを以、御前へ罷出候様に御取成を頼申候。」「心得申候(ト云、ワキノ前へ行。)「如何に申候。最前の放下が参りて候程に。名を尋て候へバ。一人ハ浮雲。今一人ハ流水と申候。何とは八面白き名にてハ御座なく候か(ワキ)「近頃面白名にて候間頓て見うするにて候此方へ通し候へ。」「畏て候(シテ)ノ方へ行、向イ。「最前の人を渡り候か。此方へ御通り候へ(ト云、笛座ノ上へ行居ル。)但シ、ワキ立テ居ル時ハ、太刀持モ立テ居ル。下ニイル時ハ下ニ居ル。扱、シテモツレモ舞台へ出、色々詞アリ。団ノ一句済、弓ノ事尋テ、「されハ我等も是を持て、引ぬ弓はなさぬ

矢にてゐる時ハ、あたらずしかも、はずさ、りけりと、か様に読歌も有、しらすな物なの給ひぞ、く」ト云時、太刀持ツイテ。「そちが知らずハこちも知まい」「扱、放下僧ハいつれの祖師せんほうを御つたへ候ぞ、面々の宗体か承度候」ト、シテ、ワキ、シカく有りて。ワキ「扱かうしやうの「露ハいかに」ツレ「切てさんたんとす」ト云トキ、ワキキメル。太刀持ア、ト留ル。シテ「きつてさんたんとすとハ、禪法の詞なるを、おさわき有るこそ愚かなれ、何と只申く、いはねの山のいわつ、じ、色にハ出し南無三ほう、おかしの人の心や。」ト云トキ、太刀持ツイテ。「そちがおかしければこちもおかしいよ「いやく禪法の詞にて有間苦しからす候。近頃面白物にて有、路次を伴ふするよし申候へ。」「畏て候(ト云、シテへ向。)「いかに旁へ申候。路次を御伴なひ成れふずると仰候間。号御入り候へ(シテ)「やかて参ふするにて候」ト云、本ノ座へ行居ス。切ニワキ、切戸ヨリ入。ツ、イテ入ルナリ。曲済、「とてももの事にかつこを打て御見せ候へ。」

### 二十三 烏帽子折

「初ワキ二人出ル。子方出テ、ワキト掛合、詞アリ。道行留、「鏡の宿に着にけりく」ト云時、子方、太鼓座へタツログ。爰にて早打、杖ツキ出、シテ柱ノ先ニテ名乗ル。」

(ノ松ノ先キヨリ云出ス)早打「扱もく難儀なお使を仰付られた事かな。か様に候者ハ。六條殿に仕へ申者にて候。偕も源の義朝の御子。三

男牛若殿と申ハ。鞍馬の寺に御座候しが。此度三条の吉次信高を御頼有り。奥へ御下り候由を六條殿聞召され。急き路次に討取り申せとて。某に討ツ手を仰付られ候に付イテ罷出た。急で参らふ。「ト云テ、ワキ正面ヲミル。」やあく其方へ牛若殿は見へぬか。何といふぞ。吉次ハ人を数多連て下る。夫ならば某一人にて打とむる事ハ成まい。則頼ふた人へ申上ケ。打手を数多遣さふ。やあく皆御聞あれ。某は引でハないぞ。先戻るぞく「ト云乍入ル。子方立テ、詞有り。シテヘカ、ル。シテ出テ、詞アリ。謡にナリ、シテ、女、中人スル。子方トワキト道行アリ。「赤坂の宿に着にけり、く」。爰ニテ吉六案内ヲコウ。宿かし。一ノ松へ立、橋懸リヨリ案内コハ、シテ柱ノキワニ立ツ。「いかに此内へ案内申し候。宿賃」誰にて渡り候ぞ「ワキツレ「只今下向申候、いつものことく宿をかして給り候へ」。宿「中々お宿参せふずる間。号々御通り成され候へ」ツレワキ「心得申候ト云ワキ座ニツクト、宿賃一ノ松ニ立。」宿「やあく夫ハ誠か。じやあ。急で申上ふト云、ワキノ前へ出、下ニ居て吉六ニ向ヒ。」「いかに申上候「ツレワキ「何事にて有ぞ。」「今晚此宿に御着有たる事を。此辺の狼盗ども聞付。今宵夜討を掛申由風聞仕り候間。御用心成され候へト云、切戸ヨリ入ル。子方、脇ノ前へ行キ、詞アリ。諷にナリ。」「あらわしきぬの妻戸をひらきて、おきつ白浪打入るを遅しと待居たり、く」ト、早鼓ニナル。強盗三人、松明腰にさし出ル。」強盗ヲモ「つゞけくツレ二人「心得たく」ヲモ「続けくツレ「心得たく」ト云乍舞台一ベン廻リ、ヲモ真中ニ立ツ。ツ

レ左右ニ立ツ。」ヲモ「か様に候者ハ。人の物を奪取り世を渡る者にて候ツレ「エヘン又ツレ「エヘン」ヲモ「いやわごりよ達ハ何と思ふてお出やつたぞツレ「何かハ知らず。わこりよが勇だ体で出るに依て。二人 兩人も続て出たよ」ヲモ「夫ならば様子を語て聞さふツレ「急て語らしませ」ヲモ「先下におりやれ」ツレ二人「心得た」三人共、下ニロクニ居ル。」ヲモ「先都に三条の吉次信高とて。金を商ふ者の有が。年々五畿内の宝物を買集め。高荷を作り奥へ下るを。熊坂の長範是を取」と思ひ。京都を出る時よりも目付を付。今夜此赤坂の宿に着たるを。夜討を掛取ふずると有て。某にハ槍見を仰付られた程に。行ふと思ふが。其方衆もおりやるまいかツレ「行いで何とせうぞ。去ながら先祝ふて。酒を呑ふで行まいか」ヲモ「呑ふだらハ能ふおりやらふが。乍去槍見を仰付られたに依。ぬかつてハ如何な。首尾よふ濟て呑ふツレ「一段と能うおりやらふ」ヲモ「夜半過酉の前時分もよい急ふ。おりやれく」ト云、立テ廻ル。」二人「心得た」ヲモ「何と思わしますぞ。此度手柄をして。いつかどの御褒美に預ふツレ「おしやる通り 御褒美を戴ふとも」ト云乍橋懸り、一ノ松三人共立留リ。」ヲモ「程のふ是じや」ツレ「いやのおふ。先塀を越ふか破つては入らうか」ヲモ「されハむかつに破てもはいられまいに依て。先槍見をせうと思ふが何とおりやらふぞ二人「二段と能うおりやらふ」ヲモ「夫ならハ見てこふ程に待ておりやれ」二人「急で見ておりやれ」爰にてヲモ、シテ柱のキワへ行キ、両手ニてサグリく妻戸ヲノゾク体ヲシテ。」ヲモ「喃

く。様子を見るに人音もせず。火も消し。殊に妻戸が明けて有る。不思議な事でありやる。ツレ「先松明に火をとほそふ。ヲモ「能ふおりやらふ(ト云、三人共二後口へ向、松明ヲヌキ立テ、正面へ向。尤松明ヲフル。」「扱モく、あかう成ておりやる。ツレ二人「其通じや。ヲモ「先兩人に独。様子を見ておりやるまいか。ツレ「見に行ふがそなた行かしませ。又ツレ「いやく、其方ゆかしませ。ツレ「夫ならば某が見て参らふ。ヲモ「急で見ておりやれ(ツレ松明ヲフツテ、サグリく出、妻戸ヲ入ル体ヲシテ、松明ヲ左持カへ、右ノ手ヲ懸ケ、方々ヲ松明ニテサガシ見。牛若ヲ見付、ヲトロキヲソル、所作アリ。右ノ内残ル二人詞。ヲモ「独やるハ心えな事でありやる。又ツレ「おしやる通り心えなふおりやる(ツレ、ヲソレナガラ、ヲモノ方ヘキテ。ツレ「のふく、様子を見たが。十二三斗の幼イ者が。角にひとり立て居るが。合点の行ぬ事でありやる。ヲモ「実とは不思議な事でありやる。又ツレ「夫ならば今度ハ。身共か行て見て参らう。ヲモ「随分見届ておりやれ。又ツレ「心得た(ト云テ、初メノ通り、松明左に持、フツテ方々ヲ見合。シヨサ色々アリテ、牛若ヲ見付、フルイヲトロキ、松明ヲナゲヤルトキ、牛若切テヲトス。コケマロビナガラ、一ノ松ヘニケケル。右シヨサノウチ二人詞。ヲモ「仕損じねばよふおりやるか。ツレ「心えなふおりやる(右ノ外、相応の詞云居ルカヨシ。又ツレ「のふ悲しやのくくくく。ヲモ「やいく、先氣を付、何としたぞく。ツレ「心をはつたと持しませ。何としたぞく(兩人、左右の手杯、持引致しながら云。又ツレ「ハア何かハシ

らず。今の松明を切つて落した。ヲモ「やあく、松明を切て落した。又ツレ「中く。ツレ「そちか分でハ成まいと思ふた。それかしが見てこふ。二人「急て見ておりやれ。ツレ「心得た。又ツレ「ぬかるまいぞ。ツレ「ぬかる事でハない(ト云、見二行。初メノ通り色々所作有。牛若ヲミツケ、ヲドロキ、フルイ、松明ヲ牛若ノ是元ヘナゲヤル。其俣フミケシ、右ノ内、残二人詞アリ。ヲモ「見届ければよふおりやるが。ツレ「心えなふおりやる(右之外相応の詞。ツレ「のふく、おそろしやのく。二人「何としたぞく。二ノツレ「今の松明を踏消おつた。ヲモ「やあく、踏消た。ツレ「中く、踏消ておりやる。兩人の分でハ成まい。わごりよ見たりやれ。ヲモ「わごりよ達か見届ぬものを。某の何と見届、られうぞ。外の者を呼ふでこう待て居さしませ(ト云乍ニケルヲ兩人シテトラへ。ツレ二人「ア、是々先お待ちやれ。はて扱臆病な人じや。兩人も爰に居る程に見ておりやれ。ヲモ「いやく、某ハ何共こわものじや。余の者を呼ふてこふ(ト云、初メノ通り。二人「これく、はて扱臆病な人じや。是非とも見ておりやれといへば(ト云乍二人シテ、ヲモヲツキコカス。ヲモ起上リテ。ヲモ「夫ならば是非に及ぬ。見てこう程に。必ず夫に待て居て呉さしませ。ツレ「中く、待て居る程に。急て見ておりやれ。ヲモ「ア、是ハこわものじやか(ト云乍、初メノ通見に行。目付柱の方ヨリ見廻し、コロビナドシテ中返り、シヨサアリ。牛若ヲミ付、フルイく、松明をナゲホフル。牛若中にて松明ヲ左ノ手ニ取り直ニナゲルヲトセフトスルトキ、牛若太刀ニテ切ル。ドウダヲレ伏ス。尤フ

タイ真中ニウツムキニタラル、。右ノ内、兩人詞。」ツレ「手柄をすれバよふおりやるが 又ツレ「心えなふおりやる ツレ「殊の外遅ひが。仕損しハせぬかの 又ツレ「おしやる通り不思議な事ておりやる「右ノ外、相応の詞。ヲモ切ラレ、タラレテ。」ヲモ「のふ悲しやのくくくく」ツレ「是ハいかな事。されハこそ打擲に逢ふたそふな「ト云乍兩手ニテ、サガシく、兩人共ニ尋行。ヲモノタラレイルニツマツキ、向フハ飛越、引ヲコス。又ツレモ手足ニテサグリアテ、兩人シテ引立ル。」ヲモ「のふかなしやのくく 二人「何としたぞく」ヲモ「切りおつたハく」ツレ「はて扱ひきやうな。気をはつたと持しませ ヲモ「深手でハないか見てたもれ「兩人、背中ヲ手ニテナデナガラ。」ツレ「いやのふく。疵ハ少しもおりない ツレ「実と疵ハおりやらぬ気をはつたとお持やれ ヲモ「ハア夫なればよふおりやる「ト云テ、ツレ、ヲモノセ中ヲ一ツ、ツヨクタ、キナガラ。」ツレ二人「南無さんした、かな疵が有ルハ「ヲモ、ウツムキニ、ドウドタラレ乍。」ヲモ「のふ悲しやのくくく」ツレ「はて扱ひきやうなものじや。いやのふく。夫ならば其方肩へ掛て連て行しませ。身共ハ跡で触て退ふぞ 又ツレ「心得た「ト云、引立、肩ニカケテ連テ入ナガラ。」のふく。其様に深手でハない。天の命を拾ふた。追付疵も直らふ程に。氣遣ひさしますな ヲモ「のふく悲しやのくく連ていて養生してたもれ。かなしやのくく 二ノツレ「さあくくおりやれくく「ト云乍入ル。ツレハシテ柱ノ先へ立テ、ワキ正面ヲ向。」ツレ「やあく皆々承り候へ。先手の者は殿を取。

て有ル間。後詰の衆ハ皆々出られ候へく「ト云フレテ入ル。」

#### 二十四 春采

「初、子方春采出テ、ワキ座ニ居ス。太刀持、ワキノ供ニテ出ル。ワキ、名乗濟テ呼出ス。」  
 「ワキ「いかに誰か有ル。」「御前に候「ワキ「囚人のゆかりに對面ハ禁制ニテ有るぞ其分心得候へ。」「畏て候「ト云、笛座ノ上ニ居ス。シテ種直、ツレ小次郎、次第ニテ出。道行過て、ツレ一ノ松ヨリ案内乞フ。」「いかに此内へ案内申候 太刀持立向。」「誰にて渡り候ぞ「囚人の奉行高橋殿の御館ハ何国にて候ぞ。」「則此屋の内にて候「是ハ春永殿のゆかりの者にて候が、高橋殿へそと御目に懸り度事の候ひて是迄参りて候。其由御申有て給り候へ。」「御出尤にハ候へども。囚人の所縁杯に。對面は堅き法度にて候。去ながら御機嫌を以て申て見うずる間。夫に暫く御待候へ「ツレ「心得候」太刀持、ワキノ前へ行居リテ。」「いかに申上候。春采殿の御所縁とて。高橋殿に御對面有度由仰られ候「ワキ「何とて禁制の由ハ申さぬぞ。」「禁制のよし申て候へ共。春采殿の御事ハ。常に御痛り被成候間扱申上候「実々汝の申ことく春永殿の事ハ別て痛り申候間、對面せうするにて有ぞ。乍去大法の如く太刀刀を汝預り候へ。」「畏て候「ト云、ツレノ方へ行。」「最前の人渡り候か「ツレ「是に候。」「一段の御機嫌に申合。御對面有ふずるとの御事に候。去乍御大法の事なれハ。太刀刀を某預り申さふずる「ツレ「心得申候」ト云、シテトツレト詞アリテ、太刀ト

刀ヲ持出、ワタス。」〔さあらハ太刀刀を參らせ候。〕「旁のをも預り申そふずる〔連モ刀ヲトリテワタス。皆後見座ニ置テ立テ。〕「号々御通り候へ〔ト云笛座ノ上ニ行居ル。但シ持タル太刀ヲ地謡座ノ前ニ置ク。〕〔シテトワキト永々モンタイアリ。クリ、サシ、曲アリテ早打出ル。右濟テ、ワキ、太刀ヲステルト、狂言立テ太刀ヲトル。〕〔ワキ免状ヲヨミテ春榮タスカリ、又少シ謡アリテ、ワキ詞ニナル。〕「いかに種直に申候。以前に申如く春永殿の御事。天晴の命も助り給り候へかし。申請ハ某が一跡をつかせ申度との念願叶ひて候。此上ハ給り候へ。』シテ「実此上ハ參らせ候へし如何に誰か有。』」「御前に候〔ワキ「種直に太刀刀を參らせ候へ。』」「畏て候〔刀ヲトリニ行。後見ヨリ取テ、持出テ、シテ二向。〕」「一段目出度御事にて候。さ有バ太刀刀を參らせ候〔ト云テ種直ノ前ニ刀ヲ置。太鼓座へ引居ル。能濟テ、ワキノ供ニテ入ルナリ。〕

二十五 鉄輪

〔口明。囃子方座ニ着ト、其俣出テ、シテ柱ノ先ニ立ツ。〕「か様に候ふ者ハ。貴船の明神に仕へ申者にて候。去程に此間都より。当社へ牛の時詣成さる、女性の候が。夫ニ付新成御霊夢の御座せば。社頭に相待。今夜御参りならば申聞せうと存る〔ト云、笛座ノ上ニ居ス。シテ出ル。次第、道行濟、腰カクル事モアリ。下ニ居ルコトモアリ。右道行濟比に立テ。〕「されバ社はへ御参詣成された。急て申渡さふ。〔ト云シテ二向イ、下ニ居テ。尤片膝立テ。いかに申。御参りに付我等に慥に届よと。正敷御告の候其子細。明

神は旁の望を叶へて參らせうずる。然らバ鉄輪の三ツの足に火をともして戴き。顔にハ丹を塗給ひ。身にハ赤き衣を着す。いかる心を持給ハ。何事も思ひの俣に有べきとの御事に候〔シテ「是ハ思ひも寄らぬ仰にて候。わらハが事にてハ有ましく候。定而人たかいニて候べし。〕」「いやしかと夫の御事にて候。か様に申うちにて。早おそろしく見へ給ふぞ。其御心得候へ〔ト云捨テ、直に入ルナリ。尤シテノ後口、大小ノ前ヲ通ル。〕〔是ハふしきの御告哉、先々我家にかへりつ、夢想のごとく成へし〕と云詞、少し有テ中入也。』

二十六 唐船

〔太刀持ワキノ供ニテ出ル。ワキ、名乗濟テ呼出ス。〕「ワキ「いかに誰か有る」〔御前に候〔祖慶官人に牛引野飼に出よと申候へ。〕」「畏て候〔ワキ座ニ着、太刀持、シテ柱ノ先ニ立。〕」「やあくいかに祖慶官人。今日も牛馬を引出し。野飼に參られよとの御事なり。構て其分心得候へく〔ト触テ、笛座ノ上ニ行居ス。〕〔唐人、船持出、一ノ松ノアタリへ直ス。柱ヲ立テ、トモニ乘リ居リ、子方二人、一セイニテ出。舟ニノル。詞アリテ子方呼出ス。〕「いかに誰か有る 唐人「御前に候〔子方「此所にて箱崎殿の御館を尋て祖慶官人いまた存生に候は、数の宝にかへ帰国せうするよし申、箱崎殿に対面したきよし申し候へ。〕」唐人「畏て候〔ト云、舟より上リ、シテ柱ノ先ニ出テ唐音云テ。〕」「如何に案内申候〔太刀持、立向フ。〕太「誰にて渡り候ぞ 唐人「此所にて箱崎殿の御館ハ。いつれにて候ぞ教て給り候へ 太「則其家の内

にて候。唐人「祖慶官人はいまだ存生にて候か。太「中々一段息才に御入候。偕は八何国よりの御出にて候ぞ。唐人「其祖慶官人か子に。そんしそゆうと申兄弟。父いまだ存生に候ハ。数の宝に替へ帰国せうずる為に。唐土明州の津より此浦に着て箱崎殿に対面有度よし（△御申し有ッて給り候へ）△申候。太「其由申そふする間夫へしはらく御渡候へ（唐音云へし）太刀持其通り申。ワキ「何と祖慶か子にそんしそんゆうと申者某に対面したきよしを申すか。太「參候。〔ワキ「更ハ対面せうするにて有ぞ其よし申し候へ。〕太「畏て候唐人に立向ひ。太「最前の人の渡り候か。唐人「是に候。太「其由申上て候へば御対面有ふずるとの御事にて候間。此方へと御申候へ。唐人「心得申候（太刀持、笛座ノ上へ行居ル。）〔唐人、子方ニムカイテ。〕「さ有バ号御通り候へ（子方二人、舟より上り、舞台へ入ル也。唐人、舟をシマイ、柱モヌキ、内ランカンへ立カケヲキ、太鼓座へ居ス。扱ワキト子方、詞アリテ、子方「さらハ是に待申そふするにて候」ト云、太鼓座へクツロギ、ワキ呼出。ワキ「いかに誰か有る。〕太「御前に候。〔ワキ「祖慶官人、野飼より帰り候ハ、裏道より帰れと申候へ。〕太「畏て候（ト云、シテ柱ノ先ニ立チ。〕「いかに祖慶官人に申候。野飼より帰られ候ハ。裏の門より御入あれとの御事なり。其分心得候へや（ト云、笛座ノ上ニ居ス。扱、シテト日本ノ子二人出。サシ、小調、ロンギ有リ。ブタイへ入りテ、ワキトシカくアリ。調ニナリ。「たうとや箱崎の神も納受し給ふか」ト、謡フ時、唐人立テ、シテノ前へ行下ニ居テ、尤子方そんしニ云。〕唐人「如何に申。追風オイデがおりて

候間。急き御船に召され候へ（ト云捨テ、太鼓座へ引居ル。扱シテトワキ、詞アリテ、調ニナリ、曲アリ。曲留メノ濟頃迄ニ、舟ヲワキ正面へ持出、直シ帆柱ヲ立、艫こまニ乗リ居ル。尤両手ヲ組テ、ロクニ居ルナリ。扱ミナく舟ニ乗リテ、樂スミ、切ノ謡、「帆を引つれて舟どもくは。」ト云トキ、帆ヲ上ル。能濟、シテ皆々舟ヨリ上ルト、帆ヲ引ヲロシ、柱ヲヌキシマイ、舟持入ルナリ。太刀持ハ、ワキノ供ニテ入ル。）（一宝生流ニテハ、シテ出、サシ、小謡、ロンギスンデ、シテブタイへ出ルト、太刀持シテニ向ヒ、「いかに祖慶官人野飼より御帰候ハ、うらの門より御入あれとの御事に候間、其御心得候へ」ト云也。〕

## 二十七 正尊

〔離子方座ニ着、義経、静、連男出、ワキ座ニ並居ル。ワキ弁慶出ル。女ツヰイテ、ワキノ跡ヨリ出、太鼓座ニ居。〕〔脇名乗濟テ、シテ正尊呼来リ、義経トシカく有リ。起證文濟テ、静舞有リテ、調ニナリ、シテ申入。ワキ女呼出ス。〕ワキ「いかにはしたものの、有か。女「御前に候。〔ワキ「汝ハ土佐が旅宿を見て来り候へ。〕女「心得てさむらふ（ト云、シテ柱ノ先ニ立。〕「扱もく迷惑なお使を仰付られた。是ハ童にハ似合ぬ事なれども。定て御計略オイカの爲にて御座有ふ程に。たとへ女ニ社生る共。心は男子に劣るまい程に。随分方便オウベンて様子を見届。後々迄も名を残ふと存る。（ト云乍一ノ松ノアタリへ行、幕ノ方ヲ見テ。〕參る程に是そふな。扱もく夥敷オホシこしらへかな。又あの門外に伏たるハ何ぞ人

か。やあく／＼何と最前見せに遣はされた二人の者を。土佐の者共が切った。扱も／＼恐ろしい事かなやれ。急で此由を申さう。「ト云、ワキノ前へ行、下二居テ。」いかに申。土佐が宿所を参て見て御座れば。最前の幼きものともハ。門外に切ふせて御座り。又つなき馬も数多有り。幕の内にハ矢を負ひ弓を張り。太刀の長刀のと申て。唯今はへ参さふな程に。急て御支度遊され候へ。「ワキ」汝は女なれ共ゆ、しきものにて有ぞ。先汝は夫にてやすみ候へ。」女「畏てさむらふ(ト云直ニ幕へ入ルナリ。)

二十八 葵上

〔連脇大臣出、名乗過テ、神子謡有テ、一セイニテシテ出ル。初同ニテ、間、片幕ニテ出。太鼓座ニ居ス。シテ物着ニテ、ツレ、ワキ呼出す。〕

ツレ「いかに誰か有る」「御前に候」「ツレ」汝ハ横川に登り小聖へ参り葵の上の御物化以外の外に御座候間、急御出有りて加持あれと申候へ。」「畏て候(ト云、立テ、シテ柱ノ先ニテ。」「急き横川<sup>ヨカワ</sup>へ参り申さふず。此間<sup>今ハ廻ル</sup>各の寄合られて。何事やらん御談合成さる、と存れハ是で御座る。今少し急き申さふ。」「シテ柱ノキワヨリ、マクヘ向イ。」「いや参る程に是ハ早横川にて候。いかに此庵室の内へ案内申候。」「ワキ出テ謡アリ。」「案内申さんといふハいか成ものぞ。」「イロニテ<sup>イロニテ</sup>「大臣<sup>オト</sup>よりの御使に参<sup>マシ</sup>じて候」「ワキ」「夫は何の爲の御使にてあるぞ。」「葵の上の御物の化以外の外に御座候間。急御出有りて。加持あれとの御事に候(「此間ハ別行の子細<sup>テ</sup>有て何方

へも罷出す候が大臣よりと承り候間参らふするにて候。先汝ハ先へ行候へ。」「さ有らばお先<sup>キ</sup>へ参り申さふずる(ト云、大臣ノ前へ行、下二居テ。」「小聖の御参りにて候(ツレ「心得て有る」ト云、太鼓座ニ<sup>マ</sup>行居ル。)

二十九 蟬丸

〔初、ツレ蟬丸、ワキ清貫、次第、道行過テ、詞、諷、モンダイ、長々有りテ、初同ニナリ、「琴琵琶ヲ懐キテ杖ヲ持、伏まろひてそ泣給ふ、／＼」爰にてワキ中入スル。間、ツゞイテ出、シテ柱ノ先<sup>キ立</sup>キ。〕

〔是は薄雅<sup>ハツカ</sup>の三位と申者にて候。爰に延喜第四の御子。蟬丸の宮と申御方。逢坂山に捨置給ひて候。余りに御痛ハしく存候間。先あれへ参。御容体を伺ひ申さふずる(ト云、蟬丸ノ前へ行、下二片膝付居テ云。觀世ニテハ作物、大臣柱ノキワへ出ル。」「如何に申上候。是は薄雅の三位と申者にて御座候。御姿を見奉れハ。余りに御痛敷う存。藁屋<sup>ワラヤ</sup>をしつらへ申て候。先是へ御入候へ(ト云、蟬丸ノ手ヲ取り、作物ノ戸ヲ明ケ、内へ入レ、杖ヲ望ミニ任せ作物ノ所ニ居テ云。尤片ヒザ立テ、差図ノ通りに直し置、戸ヲタテ、手ヲツキテ云。」「是にて雨露を御凌<sup>マ</sup>キ候へ。又頓て御見舞申上ふずる(ト云、直ニ入ルナリ。)

三十 七騎落

〔狂言ヨリ後見出シ、舟持出ル也。〕



〔初メシテ実平、其外ツレ皆々、次第二テ出ル。名乗過テ、皆々座二着、詞アリテ謡ニナリ、遠平太鼓座へ行。右謡濟頃ニ、狂言後見舟持出、一ノ松ノ隣ニ直ス。但シ、一セイイアラバ、一セイノ内ニ舟出ス。何レトクト云合、舟直シ様ワキヘ聞合ベシ。脇ノ供ニテ間出ル。ワキ舟ニノル。間モトモニ乘リテ、カイ棹ヲ持。ワキ一セイ謡「弓張月の西の空、行急定めぬ舟路かな」右ニツ、イテ、二ノ句謡フ。〕 供「立波風の音迄も鯨波キナの声かとおそろしや」〔ワキ「あれに見へたるか御座舟にて有けに候急て船を漕候へ。〕 供「畏て候〔扱シテ、脇、詞モンダイ有りて。〕〔ワキ「此上ハ命有ても何かせん、いてく、自害に及はんと腰の刀に手をかくる。〕 供「ア、勿体ない。先思召留れかし」〔ト云乍ワキヲトメル。又シテトワキ詞。シカく有リテ、ワキ舟ヨリ上ル。供モツ、イテ上リ、太鼓座ニ居。狂言後見舟持入ル。ワキ弓捨置バ、舟ト一所ニ持テハ入ル。尤弓矢トリ入ル事、頼ミナクハ捨置ベシ。能濟テ、間、ワキノ供ニテ入ル也。〕

## 三十一 俊寛

〔間、脇ノ供ニテ出ル。ワキ、名乗濟テ呼出ス。〕  
 ワキ「いかに誰か有る。〔御前に候〔ワキ「鬼界が嶋へ渡ふするにて有るぞ舟の用意仕候へ。〕」畏て候〔ワキ申入スル。ツ、イテ入ル也。次第二テ、ツレ二人成経康頼出ル。次第、道行過テ座に着シテ一セイニテ出。ツレトモンダイ有りテ、同音ニナリ、右謡濟頃ニ、間、船持出、一ノ松ノアタリニ直ス。供ニノリテ、カイザヲ持、

下二居ル。ワキ出舟ニノリ、一セイ謡フ。ワキ一セイ「はや舟の心に叶ふ追手にて、ふな子やいとゞいさむらん」ト諷フトキ、ツゞイテ間詞。〕「御急候程に。是ハはや鬼界が嶋に御着にて候。急で御上り候へ。ワキ「心得て有る。〔ト云、舟ヨリ上リ、ブタイへ入ル。間、舟ヲ内ランカンへ立カケ置。太鼓座ニ居ル。扱ワキトシテ詞有り。曲過テ曲留ノ前ニ舟ヲシテ柱ノワキへ出ス。但シ舟トリ直シ、トモノ方、綱ノ付キタル方ヲブタイノ方へ出ス。尤綱ヲトキシテ柱ノ先迄ノバシ置也。舟置様、ツナトモニトクト太夫へ聞合スベシ。扱、舟置シマイ太鼓座ニ居ル。ワキ舟ニノリ、棹、狂言ヨリモタスル。又引居ル也。切り、ツレ二人、ワキ、舟ヨリヨリ、諷ノ内ニ入ル。ツゞイテ舟持入ルナリ。〕

## 三十二 巻絹

〔太刀持、ワキノ供ニテ出ル。名乗濟テ呼出ス。〕  
 ワキ「いかに誰か有る。〔御前に候〔ワキ「都より巻絹を持って来り候ハ、此方へ申候へ。〕」畏て候〔ト云、笛ノ上ニ居ル。シテ連、次第、道行過キテ詞謡少シアリテ、一ノ松へ行テ、案内乞フ。ツレ「いかに案内申候」太刀持テ、シテ柱ノワキニ立向フ。〕「誰にて渡り候ぞ。〔ツレ「都より巻絹を持って参りて候。此由御申有て給り候へ。〕」さ有バ其由申上ふざる間。夫に暫御待候へ〔ト云、ワキノ前へ行、下二居テ。〕「如何に申上候。都より巻絹を持って参りたる由申候。〔ワキ「此方へ通し候へ。〕」畏て候〔ト云、ツレニ向。〕「最前の人の渡り候か。其由申て候へバ。号々御通り候へと

の御事に候〔ト云、本ノ座へ行き居ル。ツレ、ワキノ前へ出、詞アリテ、初同。「其身の科ハ通れじと、く」爰ニテ呼出ス。〕ワキ「いかに誰か有ル」「御前に候〔ワキ「彼者をいましめ候へ。〕」  
 「畏て候〔ト云、ツレノ後口へ行。太刀ヲ下ニ置テ、タモトヨリ繩ヲ出シ。〕」  
 「がつきめ通すまいぞ〔ト云乍繩ヲカケル。尤一ツムスビラク。太刀ヲ持テ、元ノ座へ行居ス。〕〔能濟テ、ワキノ供ニテ入ル。〕

一、宝生流ハ初ノワキ、云付斗ニテ、ツレ案内ヲ乞フ事ナシ。

### 三十三 調伏曾我

「ア、勿体ない。先思召留れかし」「是に候」「畏て候。いかに童といふとも。武士の魂は格別な物でござる。あの箱王殿の常には美しい様なれども。今の訖左右の恐ろしかつた事ハ。夫に付今一人の者を呼出し申ふずる。そこに新発意居るかの。御用の事が有に急で出さしませ。アト「某を呼ハ何事ぞ」「わこりよハ是程な事に。今まで見へなんだハ。知てだまつたか但し知らぬか。アト「いや知てたまる事でハない。如何様な事じやぞ」「夫ならバ様子を語て聞せふ。只今箱王殿の師匠へ宣ふやうは。鎌倉殿の御登山ハ適近の事なれば。御前の衆の名を御存ない程に。何れもの名苗字か承り度いと仰られたを。頼申ス箱根の別当ハ何心もなく。易イ事教申そふずると有に依。先一番に風折を召年数けだかく御座スハ。鎌倉殿にて御座るかと申さるゝを。中々あれこそ兵衛佐殿よと有れバ。扱左リの座上ハ誰と問れし時。鎌倉殿の御舅。北條の四郎時政。左リ巴ハ宇津の宮

の弥三郎。右巴ハ小山の判官。松皮ハ小笠原。彼の是のと委く教へ給へば。又其次に突出ひたる扇づかいハ。名をバ何と申ぞとお問やる程に。あれ社工藤市郎と迄仰せられ。跡をちつとお控やつたれ共。何かさとひ少人の。扱ハ祐経かと咎め給ひて。気色の替りたるを師匠は御覽じ。其俣連ておのきやつた程に。頼朝も頼て御下向成さるゝを見て。箱王殿ハ同宿の打物を盗出し。敵工藤祐経を追欠給ふ所を。某の頼て懐き留メたるを。皆のお見やつて。各寄合い連て御婦り有る路次すから。愚僧にお任しやれ。調伏とおさ、やきやつて程なく護摩の檀を銚れと仰出されたハ。如何様不審な事でハ有るぞアト「実と不審な事でおりにやる。ヲモ「然れとも仰付られた事を油断してハ如何な。急で檀を銚らふ。護摩の檀を銚り申て候間。急で御出成され候へ」「中々檀を銚り申て候

〔二、右ノ間ニテハ供ト能力二人ニテ候。調伏曾我ノ能、荒増左之通りニ候へバ、中入之節、シヤベリ間ニ而可然哉。さ候へバ長上下ニテ宜カルベク。尤長上下ニ而ハ、右之通りニテハ文句悪敷可有。猶トクト承合相改可申事。〕

頼朝 北條 宇津宮 小山判官 小笠原 和田 梶原 景時 景季 叔父工藤 但工藤ハシテ也

〔皆々座に着、謡ノ内ニ兄箱王、箱根別当二人出。橋懸リニテ、イツレモ名苗字ヲ尋ル。〕  
 「工藤市郎」ト云ヲ聞テ、カタキ打ベキ気色アリ。箱根別当留ル。シテ工藤、箱王を連に来て、舞台へ出。河津殿ハ某討不申由を云。箱根別当ハ太鼓座の後口ヘクツロギ、此時ニ、間、出て、座ニ着ガヨシ。頼朝、北条其外皆々中入アリ。兄箱王カ

タキヲネラフテイアリ。別当トムル。又二人共に中人アリ。間立テシヤベリ云。間濟ンテ後、台二ツ出ル。ワキ座二一ツ、大小ノ前二一ツ出ル也。ワキ座ノ台ノ上ニ、セウギノ上ニ黒頭ヲ乗セテ置。後、僧ワキ三人。シテハ不動ナリ。」

三十四 小袖曾我

〔初、連女出ル。狂言女、右ツレ女ニ付出。笛座ノ上ニ居ス。シテ祐成、ツレ時宗、次第、道行過テ、案内乞。女、立向フ。〕シテ「いかに案内申候。誰にて渡り候ぞ。いや祐成の御参にて候。又あれ成ルハ時宗にてハなく候か。シテ「参候某か参たるよし申候へ。大方殿よりの仰にハ。祐成の御出ならバ此方へ申せ。時宗の御出ならバナ申そと仰候が。是は何と致べきぞ。〔シテ「唯某か参りたると申候へ。〕」女「更は其由申そふずる。〔ト云テ、連女ノ前へ行下ニイテ。〕「いかに申。祐成の御参りにて候。母。此方へと申候へ。女「畏て候〔シテ方へ行向イ。〕」其由申て候へバ。此方へ御入あれと仰られ候間。号御通り候へ。〔ト云、元ノ座へ行居ス。〕〔扱シテト母ト、シカく有。諷ニナリ、時宗母前へ行フトスルヲ追出サレ、又橋懸リへ行。シテ「扱御機嫌は何と御座候ぞ。時宗「以ての外の御機けんにて猶重ての御勘当と仰出されて候。母「いかに誰か有ル」ト呼出、狂言女。〕」女「御前候。〔母「時宗か事を申さハ祐成共に勘当と申候へ。〕」畏て候。〔シテニ向。〕「いかに祐成へ申ス。時宗の事御申候ハ。祐成共に御勘当のよし仰られ候。シテ「先畏たると申候へ。〔心得申候。〔ト云、元ノ

座二居ル。〕〔能濟、母にツキ入ルナリ。〕〔宝生流ニテハ、間ノ女無之。男ツレニテ相濟候。〕

三十五 元服曾我

〔能力、脇ノ供ニテ出、太鼓座三居。シテ十郎、団三郎ツレ也。次第、道行過テ、団三郎案内乞フ。〕〔団三郎「いかに此御坊へ案内申候。〕」能力「誰にて渡り候ぞ。〔ダン三郎「唯今祐成の御登山にて候。其由御申候へ。〕」能力「さ有バ其由申ッする間。夫に暫御待候へ〔ワキへ向イ。〕「いかに申上候唯今祐成の御登山にて候。〔何と祐成の御登山にて有と申か。〕」能力「さん候。〔ワキ「頓て御目に懸らふするにて有そ此方へと申候へ。〕」能力「畏て候〔シテへ向イ。〕」如何に申候。こなたへ御入あれと申され候。〔ト云、元ノ座へ行居ル。〕〔扱シテ、脇シカく有。謡にナリ、又詞にナリテ、「箱王を此方へ召され候へワキ「心得申候。いかにのうりき。〕」能力「御前に候。〔ワキ「箱王殿に此方へ御出あれと申候へ。〕」能力「畏て候〔幕へ向、箱王に向。〕」如何に箱王殿。祐成の御登山にて候間。急て御出候へ。〔ト云、元ノ座二居ル。扱ワキ、箱王ト詞アリ。諷ニナリ、ロンギ濟テ、又詞アリ。サシ、曲過テ、ワキ橋懸リへ立、呼出ス。ワキ「いかにのうりき。〕」能力「御前に候。〔太刀ヲ持テ。〕」〔ワキ「祐成ハ何程行給ふべきぞ。〕」能力「さん候最早拔群に御座有ふすると存候。〔ワキ「祐成申べき事の候ひしをはたと失念して有間追付申さふするにて有ぞ、汝ハ先キへ行て何方迄御出候ぞ留候へ。〕」

能力「畏て候。急て追付申さふする」ト云、シテ柱ノワキニ立トマリ。「いや未是に御座候よ。いかに案内申候。ダン三郎「立テ。」誰にて渡候ぞ。「別当の是まで参られて候間。此由御申有ッて給り候へ」ダン三郎「いかに申候別当の是迄御出にて候」シテ「何別当の是迄御出と申か此方へ御入あれと申候へ」ダン三郎「畏て候急て此方へ御座候へ」扱シテ、ワキ立合詞アリテ、「いてくゝ元服祝ハんとて別当に伝る重代の太刀と」ト云トキ、太刀をワキへ渡ス。能濟てワキニツキ入ルナリ。」

三十六 禪師曾我

「御前に候「畏て候」「誰にて渡候ぞ」「心得申候。如何に申祐宗の御出にて候」「畏て候

三十七 土車

「能力」「善光寺に着にけりくゝ。」  
 「是へ物狂が参た。急で狂ひ候へ」「狂ずハ内陣へハ叶ふまいぞ」「されバこそ物に狂ふ。見物致そふ」「如何に是成狂女。面白ふ狂ひ候へ」「御身ハすねた事を申ス。物狂ひなれば社くるへとハイへ。急て狂うて見せ候へ」「扱ハ狂ふ間鋪か。近頃憎事申者哉。狂ずハ此如来堂の事ハ申に及ばす。天か下には叶ふまじいぞ。急で出候へ

又云替

「是ハ谷光寺の門前に住者にて候。今日ハ御堂へ参らバヤと存る。

いや是に居る者ハ。常の人の姿とハ替たが。物狂じや。如何に狂人。此御堂の内へハ何とて来たぞ。急で出候へ「中々の事。出よといふに出ずハ。天か下には置まいぞ」「されハこそ物に狂ふ。是にて見物致そふ」「如何に是成狂女。面白狂ひ候へ」  
 「此跡前の通り。」  
 右土車勤方相分兼候。得と相糺可申事。

三十八 竹雪

「囃子方座二着ト、狂言女二人出。ヲモハ笛座ノ上ニ居、次キ女ハ太鼓座ニ居ス。ワキ出テ、名乗スミ、カ、ル。」  
 「ワキ「いかに渡り候か」。女、立向フ。」ヲモ「何事にて候ぞ」「ワキ「さん候、唯今呼出し申事余の義にあらず、某ハ去宿願の子細候て二三日の間物詣仕候。其留守の月中若を能々痛ハりて給り候へ。又此国は雪深き所にて候。降積候へば四壁の竹の損候。殊ニ此程ハ何とやらん雪氣に成て候間自然雪降候ハ、召遣ひ候者共に仰付られ候ひて。あたりの竹の雪を払せられ候へ。」ヲモ女「何と物詣遊か。目度度ふ聽て御下向候へ。又竹の雪の事ハ心得申候。月若が事よく痛り候へと承り候が。何の御留守の時も痛り申さぬ事の候か。心易く思召され候へ」「ワキ「いや幼き者の事にて候程に、か様に申候。さらハ聽て下向申さふするにて候。」ト云、ワキ中入スル。女、シテ柱ノ先ニ立。」  
 「のふ腹立やの。わらハか事をあしいやうにいふたと見へた」ト云、幕へ向。」  
 「いかに月若の候か」  
 「子方月若出ルト、女ヲ添、ブタイへ出ル。」  
 「父御ハ物詣成さ

る、か。留守の間そなたを能々痛り申せと仰せられた。何そなたに  
 童がつれのう当りたる事の有るぞ。のお腹立や〜〔ト云、月若ヲ  
 打ツテイヲシテ、拍子ナドフミ、腹ヲ立ツルテイアツテ、笛座ノ上  
 ニ居ル。子方、謡アリ。シテ、サシ謡テ、子方、シテ女ノ前へ行、  
 詞アリテ諷ニナリ、「親子ならてハかくあらし、〜」トウタフト  
 キ、ヲモノ女立テ。〕ヲモ女「荒ふしき。月若か見へ申さぬよ。い  
 かに誰か有〔次ノ女、太鼓座ヨリ立テ出ル。〕次女「御前に候。ヲ  
 モ女「月若ハいつくへ行て有ぞ。次女「されバ一円に存ぜず候。ヲ  
 モ女「いや推量して候。先にちといひし事のあれは心にかけて。長  
 松の母の方へいた物で有ふ。只今父御の御帰り有て。召と申て来り  
 候へ。次女「畏て候〔ト云テ、太鼓座ニ子方居ルニ向イテ。〕「い  
 かに申候。殿の御帰有て御召にて候。急で御参り候へ〔ト云、月若  
 ヲツレテ、ヲモ女ノ前へ行。〕「如何に申。月若殿御参りにて候  
 〔ト云、太鼓座ニ居ル。〕ヲモ女「いかに月若。今の内に長松へ行  
 て。例の告口をさしましたの。父御の仰にハ。雪降らバ庭の竹の雪  
 を。そなたに払せよと仰られた。急で払ひ候へ。構へて小袖一ツに  
 てはらひ候へ。腹立や〜〔ト云、強クシカリテ、直ニマクへ入ル  
 也。〕〔子方謡アリ。〕「思ふ甲斐なき月若ハ終に空敷成にけり  
 〜」ト云、ウタイ過テ、タヲル、トキ、次ノ女一ノ松ニ立テ。〕  
 次女「やあ〜夫は誠か。月若殿竹の雪を御はらひ有が。空しく成  
 給ひたと申か。急で長松の方へ知らせ申さふずる〔ト云テ、幕へ  
 ムカイ。〕「いかに母御の渡り候か。月若殿ハ竹の雪を御払ひ有が。  
 雪におほれて空しく成給ひて候。急で御参り候へ〔ト云、太鼓座ニ

居。能濟テ入ルナリ。〕

三十九 國栖

〔ヲモ、鎗ヲ持。ツレ、弓矢ヲ持。〕

〔初、ワキ、一セイニテ出。道行過テ、座ニ着。シテ出、舟ニノリ、  
 詞謡アリテ、舟ヨリ上リ、脇ト詞アリテ、天皇へ魚ヲアタへ、供御  
 ノ残りヲ尉ニタマワレト云テ、吉野川へ放チ、謡アリテ、早鼓ニナ  
 リ、シテトウバト舟ヲ持出、子方ヲ隠シ、舟ノソバニ兩人ツキ居。  
 爰ニテ、間、早鼓ニテイヅル。〕「やるまいぞ〜 ツレ」遁すまい  
 ぞ〜 ツモ「やるまいぞ〜 ツレ」のかすまいぞ〜〔ト云乍  
 ブタイ一ヘン廻リテ、兩人ワキ正面ニ立ツ。〕ヲモ「いや、のふ〜  
 今のハどちへいたぞ ツレ」されバ爰迄ハ見へたがどちへいたぞ知  
 らぬよ。ヲモ「扱も〜。手の下に有たものを。是非に及ぬ事じや  
 去なから爰に翁が居る程にあれに尋ふ ツレ」能うおりやらふ。ヲ  
 モ「やい翁。清見原はどちへいたぞ知らぬか。シテ」何清見原い。  
 きよみはらひならバあの川下へ行け ツレ「いや耳が聞ぬと見へた。  
 今一度とふてみさしませ。ヲモ「心得た。やい翁清見原の天皇ハど  
 ちへいたぞ知らぬかいやひ。〔シテ「何清見原の天皇とや、天皇に  
 てもた、人ニてもあれ何にしに是迄清見原、あら聞なれすの人の名  
 や惣して此山は。都卒の内院にもたとへ」 ツレ「又ハ五台山しや  
 うりやうせんともろこし迄も」シテ「遠くつ、ける吉野山。か  
 くれか多き所成をいつ迄か尋給ふべき、はや是迄ぞとふ帰らし  
 め。〕ヲモ「扱ハ知らぬと見へた戻ふ ツレ」能ふおりやらう

ヲモ「去なからあれに舟がうつむけて有るが合点が行ぬ。あれをさがさふ ツレ「能ふおりやらふ ヲモ「やい翁。其船のうつむけて有ハ何としたる事ぞ」〔シテ「是は千舟そとよ。」〕 ヲモ「干ス船なりとも 二人 さかいてみる」〔「何此舟をさかそうとや、漁師の身にてハ船をさかされたるも、家をさかされたるも同じ事ぞかし、身こそいやしう思ふとも此所にてハ憎くき者ぞとよ、誠狼藉をいたさハ。孫も有彦も有。あの谷々峰々より出合て、あのらうせき人を打つめ候へし。〕 ヲモ「ア、静まれ。いやの方。誠に大勢押寄て来ると見へて声高な。足本の明うちアチに戻ふ ツレ「能うおりやらふ ヲモ「こちへおりやれ。ツレ「心得た。ト云ナガラ入ル。」

#### 四十 檀風

〔太刀持、ツレワキ本間ノ供ニテ出ル。本間、名乗濟テ呼出ス。〕  
 本間「いかに誰か有る」御前に候 〔「昨日都より飛脚立て資朝卿を急ぎ誅し申せとの御事にて候間、明日濱のうハ野にて誅し申へし。今夜斗の事なれいかにも番のかたく申付候へ。又囚人のゆかりに対面ハ禁制にて有ぞ。其分心得候へ。〕 太「畏て候」ト云、太鼓座ニ居ル。〔シテ資朝、本間ヨリ先へ何モナシニ出。笛座ノ上ニ牀机ニ掛居ル。ワキ客僧、子方梅若、次第ニテ出ル。道行、詞濟テ、一ノ松ヨリ案内乞フ。〕「いかに案内申候 太「誰にて渡候ぞ」〔ワキ「囚人の奉行本間殿とハ此御館にて候か。〕 太「參候本間の館にて候」〔是ハ都今熊野なき木の坊に帥の阿闍梨と申山伏にて候。

又是に渡り候おさなき人ハ、壬生の大納言資朝卿の御子息、御名をば梅若子と申候。父御に今一度御対面有度とて遙々是迄御下向候。此よし本間殿へ御申有つて資朝卿へ対面させ申されて給り候へ。〕 太「御尤には候へ共。囚人のゆかりに対面ハ堅禁制にて候間。思ひなから叶ひ候まじ」〔「仰は去事にて候へとも、はるくくと下向申て候間、御心得を以て御申有りて給り候へ。〕「左右ハ御機けんを以申てみうざる間。夫に暫御待候へ」〔ワキ「心得申候。」太刀持、本間ニ向。〕太「如何に申上候。都今熊野椰木の坊に。帥の阿闍梨と申客僧。資朝の御子にて候とて。幼き人を同道申され。本間殿に對面有度由仰候」〔ワキホンマ「何とて禁制の由ハ申さぬぞ。〕 太「禁制のよし申て候へ共。資朝卿の御事ハ。常に御痛り成され候間。扱申上候」〔「実々汝が申ことく囚人のゆかりに對面ハかたく禁制にて候へとも、資朝の御事ハ常に痛り申候間、そと對面申さふするにて候。此方へと申候へ。〕 太「畏て候」ト云、ワキノ方へ行ムカイ。太「最前の人の渡り候か」ワキ「是に候 太「一段の御機けんアセに申合。御對面有ふするとの御事なれハ。号々御通り候へ」ワキ「心得申候」ト云、太刀持、笛座ノ上へ行居ル。〕〔扱ワキト本間ト詞アリ。シテ、サシ謡アリ。本間トシテ、懸合詞アリ。地トリ、ロンギ過きて、又詞ニナリ、本間資朝ヲ打ウタヒ、「西にむかひて手ヲ合せ南無阿弥陀仏とたからかに唱へ給へハ、あへなく御頭ハ前におちにけり、く。爰にてシテ中人スル。扱ワキ、本間ト詞アリテ、ワキ死骸を孝養シタキヨシヲ云。ホンマ「中く御心静に御孝養候へ。我等ハ私宅に帰り候へし。聽て御出あらふするにて候。承り

候やかて御館へ参り候へし。ホンマ「いかに誰か有。」太「御前に候〔ホンマ「此程の番に嘸草隊候らん。皆く私宅に帰り休ミ候へ。某も臥戸ニ入テ心靜に夜をあかささうずるにて有ルぞ。其分心得候へ。〕太「畏て候〔ト云、本間ノ供シテ、入ル也。〕〔扱ワキト子方詞にナリ、謡にナル。右ウタイノトメ。「縁を飛をり逃ければ追手ハ声くくに留よくと追懸る」早鼓にナリ、ワキト子方太鼓座ヘクツロキ。間、早打二人、鎗弓矢持出ル。国栖の間、同断。〕ヲモ「やるまいぞく。ツレ「遁すまいぞく。ヲモ「やるまいぞく。ツレ「何者成とも遁すまいぞ。ヲモ「一寸もやる事ではないぞ。〔一ヘン廻り、左右ニ立。尤ヲモ脇正面、ツレ地謡ノ方。〕ツレ「して是ハ何事じやぞ。ヲモ「わこりよは此子細を知らぬか。ツレ「いや何共知らぬよ。ヲモ「夫ならハ語て聞ふ今度都より生捕られて下り給ふ。壬生の大納言資朝の卿ハ。佐渡嶋此所へ流され給ひ。則頼だ人の預られて。日夜朝暮油断なく寝ずの番を仕れと。家中の者に仰付られし故。夜昼の境もなく氣遣ひをした所に。都より俄に飛脚立ッて。昨日資朝の卿は誅せられたれハ。本間殿より御意にハ。今日よりして番の上々。休むやうに仕れと仰出され。頼ふた人ハ御寝所（キヨシノヨ）に入らせ給ふにより。下々迄も嬉しく思ひ。我も人も帯紐を脱て此間の草臥を直さふずると。如何にも心易ふ思ふて居たれば。都今熊野椰の木（クマノヤシ）の坊に。帥の阿闍梨といふ客僧が。資朝の子にて候とて幼き者を一人連て来り。今夜忍び入て本間殿を指殺し。其儘兩人の者ハ退くと聞く。何かハ知らず彼知れ者を。某ハ討留ふと思ふて是迄出たが。和御侶（ワゴリヨ）は夫を知らぬか。ツレ「面

目もない事なれど。此中の草臥で前後も知らず寝て居た処に。皆のわめく音が寝耳に入。ふつと起て出ふとしたれハ。此道具が足元にさわつたに依。何かハ知らず是を持ては出たれ共。其子細をハ知らなんだが。扱々夫はにがつた事をしたの。ヲモ「何と思ハしますぞ。兩人の者が是まで来た程に。迎の事に追欠て見度（ミタ）と思へども。去なから此闇の夜に足本も見へぬに。いつくをさして行ふ共弁ぬが。扱是は何としてよからふぞ。ツレ「されバ某の分別には何とも及ぬか。わこりよハ何と思わしますぞ。ヲモ「いや我等の思ふハ。兎角時刻うついては叶ふまひ程に。浦々の船を留めてみうと思ふハ。ツレ「是は一段とよからふ程に。急で触さしませ。ヲモ「更ハ某ハ南浦を触ふ程に。わこりよハ北浦をふれさしませ。ツレ「委細心得た。さらハ某は触に行ぞ。ヲモ「中く早ふ行しませ〔ト云、ツレハ幕へ入ル。ヲモハ、シテ柱ノ先ニ立、ワキ正面へ向。〕ヲモ「いかに南浦の船頭ども承れ。都今熊野椰の木（クマノヤシ）の坊に。帥の阿闍梨が此所に來。今夜本間殿をあやまつて有る間。左右のふ舟に人を乗せ。一人も聊尔に押出などの御事なり。かまへて其分心得候へく。〔ト云フレテ、入ル。〕

四十一 大江山

〔脇、一セイニテ出ル。能力供ニテ出。太鼓座ニ居ル。道行過テ、呼出ス。〕

ワキ「いかに誰か有。強力「御前に候〔ワキ「汝は先へ行道にふミ迷ふたる体にて鬼が城を見て宿をかり候へ。〕強「畏て候〔ト

云、太鼓座二居。ワキ皆々、橋懸りに行内ランカンノ方ニ片付、下二居ル。強力、シテ柱ノ先キニ立、名ノル。」強力「是ハ仮染ながら一大事を仰付られた。人間の住家さへ有るに。鬼か城を見る事ハ強物で御座れとも。去ながらそりりと参てみようとする（ト云乍一ノ松へ行、詞△）「女、箔を手に持出テ、シテ柱ノ先ニテ、名乗ル。強力行違ひに成ルナリ。」女「毎ものことくす、ぎに参りませう（ト云テ、地謡座ノ方へ行。箔をス、グテイアリ。尤下二居テ○）△「誠に鬼の住む山と覚しくて。峨々たる谷咀へたる岩尾の奥に。毎も雲霧の掛りたるがそと晴たよ。荒不思議や。此谷（下ヲミル）川の水にハ血が交て流る、様なか。合点の行ぬ事じや。是ハいかんな事あれに居る女ハ都での知人じやが。何として爰にハ居るぞ不審な事じや。先詞を懸ふ。女○「さらハ此流れてす、きませふ。（ト云ナカラ、ス、グテイアリ。」女と申ものハ不甲斐なひもので御座る。此山へ取られて参り。か様にいつもく血の付いた小袖をす、ぎに参ると申ハ。おそましい事て御座る。何卒都へ帰り度とハ存れども。何を申も女子の事なれば。力及はず是非もない事て御座る（強力、女ニ向イ。）」のふく／＼喃そこな人。女「いや其方様ハ。何にしに爰へハ御座りましたぞ。強「わこりよは又何をして此山にハおりやる。女「大江山の酒呑童子といふ鬼に遣われて居ますが。朝夕人を服せらる、に依て。其血の付た物をす、ぎに出て御座るよ。強「其人を喰ふ鬼の側におりやるハ。けなけな人じやな。女「わらハもおそろしうハ御座れども。是非に及ばいで居まするよ。強「扱其童子の居らる、ハいか様な所でおりにやる。女「巖石を積重ね。其

上に枯木大木を折かけ。鉄の門を三重に致。其奥に居られます。強「夫に付て。其方に頼み度事が有が。頼まれてたもるまいか。女「中々如何様の事なりとも承りませふ。強「別の事でもない。某は山伏達のお供をして。道に踏迷ふて是迄参つた程に。一夜の宿をお借しやるやうに云てたもれ。女「夫ハお心易ふ思召せ。門戸の鑑迄わらハが預て居まする程に。いかやうにも頼まれませう。強「夫ハ嬉うおりやる其儀ならば童子へ其通をいふてたもれ。女「心得ました。夫に暫く待せられい。強「心得ておりやる（ト云、笛座ノ上ニ居ル。女ハ太鼓座へ行、箔ヲ後見座ニ置キ、幕へ向イ。）」女「如何に童子へ申へき事の御入候。とふく御出候へや（シテ「童子と呼ハいか成ものぞ。」）女「山伏達の御入候が。一夜のお宿と仰られ候（シテ「何と山伏達の一夜の宿と候や。うらめしや桓武天皇に御請申、我比叡山を出しより出家には手をさ、じとかたく契約申せしなり。中門の脇の廊に留め申候へ。」）女「心得申候（ト、シテ柱ノ先へ行テ。」）女「最前の人の御座るか（強力ニ立向。」）強「是におるよ。女「其由申て御座れば。中門の脇の廊に留よと仰られ候間。其由御申候へ。強「心得申候（女、笛座ノ上へ行居ル。強力太鼓座二居テ、ワキニ向云フ。）」如何申。其由申て候へば。中門の脇の廊に御通りあれとの御事に候（ト云、太鼓座二居ル。ワキ皆々ブタイへ出、座ス。シテモ舞台へ出。ワキト詞アリ。謡ニナリシテ、作物ノ内へ中入スル。ワキ、強力呼出ス。ワキ「いかに誰か有る。」強「御前に候（「汝はこさかしきものにて有る間、たばかつて童子か寝屋の鑑を預り候へ。」）「畏て候（ト云立テ。」



「扱もく六ヶ敷事を仰付られた。何と致ふぞ。いや思ひ出た。最前の女を誑ウラカひて鑑を預う。今の女ハどちにいらる、ぞ」(女立テ)。「今のお衆ハどちへ御座たぞ。逢ひ度イ事で御座る」(正面ニテ兩人行合)。「強「いやのふくわごりよに逢たかつた」女「童も此方を尋て御座るよ」強「先下におりやれ」女「心得ました」(二人共二下二居)。「強「最前は忘れていわなんだが。其方の子の金法師カガが。初の程は母を尋て泣かかれて居たを。某の持て遊びをとらせてすかひたれバ。次第におとなしう成つて。今は子供とよふ遊ぶ程に。心易ふ思ハしませ」女「わらハも暮暮仮名法師か事を思ふて居まするに。便りを聞て嬉う御座る」強「そなたの暮に見へぬ時分は。連合か殊の外悲しう思ふて尋られたれ共。今ハ思ひ切て。若イ妻を向へて中能うして。今は其方の事を思ひ出すも恨めしいと云ふは」女「やあく妻を持て御座るか。のふ腹立やのく。つかみさいて退ふ物を。腹立やのく」強「是々先お待ちやれ。く。尤ておりやる。先下におりやれ」女「腹立やのく」(ト云下二居ル)。「強「尤ておりやる。扱は今でも都へ帰りとおふりやるか」女「左様の事を聞ても。一刻も早ふ都へ帰たふござる」強「夫ならハ何を隠そふぞ。今の山伏達は。源の頼光保昌綱公時。貞光末武独り武者とて。天下に隠もないけなく人々じや程に。何事成共あのお衆をお頼みやれ」女「心得ました。随分御馳走申ませふ」強「其方ハ美しい童子の側に居て。元の事をバ皆忘さしまそふぞの」女「仰の如く童子の時はずつくしい様なれども。酒か過ますれバ。後はけんまくおそろしうて。二目と見られませぬに依て。ヶ様の所には居りたふ

も御座らぬ」強「扱ハ都へ帰り度イの」女「是ハ情ない事を仰らる、。今も都の事を思ひ出せば飛立やうに思ひますれども。其気色か少し成共見ゆれバ。鬼神は神通を得たる故に。はや取つて服せられさふに御座るに依て。女の悲しさハ色にも出さず。何方へも行いで居まする」強「夫程に思やらふならバ。連て帰ふ物を」女「夫は忝御座る。一刻も早ふ連て御座つて下されい」強「某も一命を捨。鬼か城を連てのく事じや程に。帰たならバ某のいふ事を聞しまさるか」女「中く何事成とも聞ませいでハ」強「夫ならバ今度京都へ帰てから。身共と夫婦にならませ」女「はて扱むさとした事を仰らる、。仮名法師がて、の居て暇も呉ぬに。御恩か忝と云て。此方と添れませうぞ。外聞旁はハゆるいて下されい」強「扱は某といやでハないが。世上のほうへんがいかが、じやとおしやる事の」女「何にしに此方を嫌ひませうぞ。主ある身なれバ。童が了簡ツツにも及ませぬに仍。是をば免て下されい」強「今聞分た。夫の有上ツツに又妻メツツを重ねまいとおしやるハ頼母敷イ心底じや。扱は夫ツツかなくハ靡ふとおしやる事か」女「中く古へ人さへなくバ何事成共聞ませう」強「夫ならバ何を隠さふぞ。仮名法師がて、ハ此二三日以前に。不慮に過られたわいの」女「夫ハ誠で御座るか」強「何しに偽をいわふぞ」(女泣テ)。「扱もく不便な事哉。此上ハちから及ぬ事。童か身をば此方へ任せまするぞ」強「夫ハ心実か」女「真実で御さる強「迎の事に誓言で聞ませう」女「独りある仮名法師を見ぬ法もある添ませう」強「夫ハうれしうこそおりやれ。扱其方ハ。童子の寢屋の鑑を預つたとハおしやらぬか」女「中く童か預て居まする

強「夫ならハ其鑑を身共に預<sub>け</sub>させませ。女「何か扱預ませうとも強「喃いといしい人。一刻も早ふ連て行ふ。こちへおりやれ〜女「心得ました。のふ嬉しやの〜強「こちへおりやれ〜女「心得ました〜」ト云々強力先へ立、女跡ヨリ入ルナリ。」

四十二 撰待

〔初、次第。連山伏、狂言兼房山伏、ワキ弁慶。次第、道行過テ。〕  
 「ワキ「いかに申候。先此所に御休ミあらふするにて候。」「荒不思議や。是に新き高札の候御覽候へ。」「ワキ「承候。何々佐藤の館にをひて山伏撰待と候。やかて御着候へ。」「いや〜佐藤の館ハ憚にて候程に。直に御通りあれかしと存候。」「是ハ仰にて候へ共、只知らぬ様にて御着有ふするにて候」ト云テ、ワキ座ヨリ地謡ノ方へ居ナラフ。外二次信ノ家来一人、狂言ヨリ出ル。道行の内ニ出。太鼓座三居ル。皆々居ナラフ見テ立、名乗ル。〕 従「是ハ佐藤次信の内の者にて候。いや山伏達の大勢御着にて候。此由申上ふずる。如何に鶴若殿へ申候。山臥達の御着にて候間。とう〜御出候へや〔子方鶴若出テ。〕 子方「いかに誰か有 供「御前に候。〔子方「山伏達ハいくたり御着有るぞ。〕 供「参候十二人御着にて候。〔子方「先〜出て対面申さふするにて候。〕」 尤に候「ト云、太鼓座へ引居ル。〕〔扱子方トワキ、詞アリテ、シテ尼公出。サシ、小謡アリテ詞にナリ。シテ「仰のことく我子ハ御内に有し者なれハ大方ハ推量申ともさのミよもちかひ候まし。〕 兼「か様に物申す山伏をバ。どこ山伏と御覽じて候ぞ。〔シテ「先唯今物仰られつる客僧ハ

此御供の中にてハ一の老体にて御入候な。いて此御供の中に年寄たる人ハ誰そや。今思ひ出したり、判官殿の御乳母ましおの十郎権頭兼房山伏にてましまする。〕 兼「年寄たるが兼房ならバ。尼公も兼房山伏にて御入候か〔兼房詞是ギリ也。能濟テ、ツレノ跡ヨリ入。〕

四十三 木賊

「是に候「心得申候。先あれへ出申さふする。如何に申。我等は此屋の内の者にて候が。惣して旅宿は不自由なる物にて御座候間。何にても御用有に於てハ仰付られ候へ。」「尤に候。又唯今の老人ハ此屋の主にて候が。ちと心中に思ひ事の有ゆへ。折々ハうつ、なひ事を申され候間。心得て御会<sub>ひ</sub>積候へ

四十四 行家

〔シテ「和泉ノ国石津ノ里ニ着ニケリ」ト云、宿カル。〕  
 「誰にて渡候ぞ」「安き事お宿参らせうずる間。奥の間へ御通り候へ」「是は此隣の者にて候。我等行<sub>き</sub>も知らぬ旅人に。お宿を参らせて候へバ。朝敵木曾の藏人。行家とやらんにて候。此人を告知らす輩にハ。如何様の御褒美をも成さるべきとの御事なれば。忍て参り帰り忠を仕ふずる〔後ニワキノ供シテ出。一セイ、名乗スギテ。〕  
 「是か我等の宿にて候が。此内に御座候

## 四十五 鐘引

〔ワキ名乗過テ、能力出ル。〕

能力「か様に候者ハ。田原藤太秀郷の御内に仕へ申ス者成が。園城寺へお使を仰付られた。急て参ふと存る。いや則是じや。いかに案内申候。田原藤太秀郷より。当寺への書状を持チて参りて候。〔ワキ「何と秀郷の方より御状の有りと申か。』」「さん候先御覽候へ〔ワキ、狂言呼出シ、「鐘楼立候へ」ト云事モ有也。狂言大工を呼出シ、鐘楼堂を立ル仕舞アリ。〕」「如何申候鐘楼堂を立申て候。〔中人。間鱗、来序ニテ出ル。〕」「箇様に候者は。江州の湖水に年久しく住鱗の精にて候。我等の是へ出る事余の儀にあらず。扱も此度田原藤太秀郷。園城寺へ撞鐘を寄進申さる、其子細ハ。龍神に敵なす。鉄テの百足を退治し給ふに依。龍王喜悅の思ひをなし。十種の引出物を秀郷へ参らせらる、。其中にも別而妙成るハ。天竺祇園精舎の鐘なり。此鐘を園城寺へ寄進有べきとて。龍神に寺中まで引付申せとの御約束にて。急き鐘楼堂をこしらへ。待べきとの御事なれば。此湖に注程の鱗ハ。悉く出て鐘を引申せとの仰なり。構へて其心得候へく

## 四十六 水無瀬

「誰にて渡候ぞ」「参候為世の卿と申御方ハ。古へハ此水無瀬の里の住人成が。浮世を厭ひ。妻子を振捨遁世遊バシ。今ハ高野に住せ給ふ。其妻女ハ此程空しく成給ふ。今日一七日に当り申せば。二人の子達は打連。毎日御墓へ御参り有る。定て今日も御出候ハ人間。夫

に暫く御待有て御覽候へ。「何にても御用の事あらば承ふずる。」「心得申候

## 四十七 橋立龍神

〔間、ワキノ供ニテ出テ、太鼓座ニ居ル。脇、名乗過テ呼出ス。〕  
「御前に候。」「畏て候。やあく皆く承候へ。今日ハ天灯龍燈の御祭りにて有間。弥里人迄も其清メ致され候へとの御事なれば。其分心得候へく。〔ト云テ直ニ入ルナリ。但シ此アイシライ、自然入りナリ。大方ハ入ラス。〕〔中人、間鱗ナリ。尤来序。但シ是モ九世戸ノ間ニテ済。〕

## 四十七(八) 撰待

口明「か様に候者ハ。佐藤殿の御内に仕へ申者にて候。扱も頼ミ申人の何と思召候やらん。山伏撰待を御企あり。高札を上られて候間。今日も山伏達の御通り候ハ、罷出留申さハやと存候〔脇正面ヲ向。〕「扱もく夥敷貝の闇かな。いか様山伏立の御着にて御座あらふずる。急て留申さふ〔太鼓座ニ居ス。〕〔次第、連山伏、ワキ弁慶、道行過て舞台ヨリ案内。間、一ノ松ニ立。〕」問「誰にて渡り候ぞ。ワキシカく。問「先皆々御通候へ〔ト云、ワキ太鼓座ヘクツログ。間、正面ヲ向。〕」「急ぎ此由を申上うずる。〔幕へ向ヒ。〕」如何に鶴若殿。山伏達の大勢御着にて候間。とうく御出候へや〔子方出ルト下ニ居ス。〕「御前に候。」「参候拾二人御着にて候。」「尤に候。〔子方ト入替リ、幕へ入ル。〕

右者明治七年九月十一日、金剛月並能之節、春藤六右衛門申合相勸申候。

又口明無之可様二茂。ワキ案内濟テ様々詞有り。判官腰掛ヨリ下り、連山伏ト並居スト、ワキ地謡座前二居スト、子方幕ヨリ出。「いかに誰か有と云時、間太鼓座ヨリ出。「御前に候 子方シカく、「參候拾二人御着にて候 跡右同断。右者四月十七日於上杉候催ノ節、進藤權之助ト申合相勸申候。 下野岩苔

四十九 満仲

〔初二満仲ノ供ニテ出ル。太鼓座二居ス。謡。〕

〔謡「我子を夢に成りにけりく」ト云、シテ呼出シ、美丈丸送込。詞畢、シテ柱先ニテ。〕

「扱もく哀な事かな。此度の御不審と申し。仲光が計ひと云。

武士の道の苦しさハ。君の御心に任せなば。同じ主君の不忠也。又諫申せば御意を背く。仲光心に思ふ様。いかで三世の主君を手に

掛申べき事。南方迷惑に存る所に。幸寿ハけなけ成る者なれバ。我首討て。主君の御目に掛られよと申されけれハ。尤とて太刀追取て。幸寿を手に掛られし事。扱々彼者の心中察し申セバ。我等迄もそゝろに落涙仕る。いや由なひ独言を申さず共。仰付られた幸寿の死骸を。人目に掛らぬうち急て取除申そふする。あら痛ハしの姿や。不便な事哉〔子方ノ死骸ライダキ、切戸ヨリ入ル。〕

右者明治九年六月四日、金剛月並能之節、唯一ト申合相勸申候。岩苔

四十九(五十) 切兼曾我

〔シテ、子方、母、供出。地謡ノ前二居ス。狂言、後見座居ス。脇幕ヨリ出、橋掛ニテ名乗。狂言トモニテ出。〕

〔御前に候「畏て候。如何に此内へ案内申候「誰にて渡り候ぞ「梶原源太景季の参られて候。其由御申有て給り候へ「心得申候〔シテニ向ヒ。〕「如何に申上候。梶原殿の御出にて候。「心得申候。此方へ御出あれとの御事にて候〔ト云、太鼓座へ居ス。〕「畏て候。其由申て候へば。こなたへ御出あれとの御事にて候〔切戸へ入ル。〕

〔泣て留る哀さよく。〕中人〔シテ柱ノ先ニ立。〕「扱もくしより止成事哉。去程に伊豆の国の住人。伊藤入道祐近が子に。河津ノ三郎祐重を。伊豆国赤沢山におめて。奥野の狩りの帰るさに。如何成る遺恨の有けるや。工藤祐経が空しく討し程に。其後家は二人の御子を連。当国曾我家へ御縁組被成。朝夕ともに二人の御子を

いたわり給ふ所。鎌倉殿の御申にハ。曾我太郎祐信ハ。君の御心安者に思召候処に。伊藤の孫一万箱王を。養ひ置たるよし聞召れ。成人の後頼朝か敵ともなるべき者と。希代の事を思召。梶原源太景季に。召連て参れとの御説にて。唯今一萬箱王を。梶原殿の召連て参られて候事。誠に母御の御心中さつし申候。いや由無事を申て御供に遅なハれた。いそげく。後謡〔太刀取も切兼て只さめくと泣あたり〕ト、此謡切ぬ内ニ狂言、幕より出、文を持。〕早打

「やあく暫く御鎮り候へ。御許状を給り。畠山殿の御使に参りたり。〔シテ柱ノ先迄出、ワキニ渡ス。〕是く御覽候へ〔ト云、切戸ニ入ル。〕

## 五十一 元服曾我

〔能力、ワキノ供ニテ出、笛座ノ上ニ居ス。シテ十郎、ツレ団三郎、橋掛リニテ次第、道行過テ、ツレ案内乞フ。〕

〔能力立、舞台ヨリ答済、又元ノ座へ行居ス。扱サシ、曲過テ、ワキ切戸へ入ル。間、続キテ供シテ入也。又ワキ大口ノ時八十郎、箱王、暇乞語済、ワキ、囃子座後ロヘクツログ。間モ同シク。ワキ橋懸リへ立、呼出シ、間供シテ出。〕

〔御前に候〔ワキ切戸へ入ル時ハ後脇幕ヨリ出呼出ス。間、太刀持供シテ出ル。〕〔ワキ「祐成は何程行給ふへきぞ。」「さん候最早抜群〔ワキシカク〕」畏て候。急て追付申さふずる。いや未是に御座候よ〔ト云、脇正面ヨリ、シテニ向下一居テ。〕「いかに申候。別当の是迄参られて候。〔シテ「此方へ御入あれと申候へ。〕」畏て候。〔橋懸へ行、ワキへ向、下二居テ。〕「号く御通りあれとの御事に候〔ト云、ワキト入変リ、供シテ、ワキ座へ行。太刀ヲワキノ右ノ方へ置キ、直二切戸へ入テモヨシ。〕

右者明治九年八月廿七日、於金剛宅元服曾我、氏善七左衛門、相手組ニテ勤候控。 岩苔

## 五十三 現在七面

「か様に候者ハ。甲州萩の井に住者にて候。去程に此身延山に尊キ上人の山居有りて。毎日懈らず法花経を御読誦成され候間。我らも日々に参詣いたし。高座近く御経を聴聞仕る。夫に付爰に不思議成事ハ。何国共知らずなまめいたる女性の。怠らず来り御経を聴聞申

候が。参詣の輩ハ皆々座を立候共。彼ノ女性ハ跡に残り。上人へ近寄御示しを受申。此女性の粧ひ人間とハ見へず。只天人の天下れるか。扱は天魔の人間と化。仏法に障礙をなさんと来れるか。如何様不思議成る女にて有間。上人ハ不審を成し申さはやと存る。荒不思議や。俄に雲の気色か替たるハ。山上より雷りの鳴下るとミへたよ。怖恐ろしや。南無妙法蓮華経。く。く。ハア。扱もくおひた。しい雷で有った。乍去大かた空も晴。いかづちも止み晴天に成たハ。思わず知らず御題目を唱へたれば。天も納受ましくてやら。たちまち御利やくの有事じや。誠に愚成の申事なれ共。法花は是第一。三世諸仏出世の本懐。衆生成仏の直道成程に。法華の行者をば諸天神。専ラ擁護を加へ給ふと承る。左右に依ていか成悪鬼魔王も。障礙を成し申事ハ成難し信心私無時は諸天感応有と申。近頃有難き事にて候。先急き山上江参らふと存る。いや独言を申内に山上江参り着た。いかに上人江申候。早々参り申ふずるを。不叶用事候て只今参詣仕りて候。扱お上人へ少と不審申度事候。〔ワキシカク〕「其事にて候。毎日御経御読誦の折柄。何国共なく女性志人高座近来り御経を聴聞仕候が。此女の体を見申に。此国の人とハ見へず。雲の上人か扱は天魔の人間と化。上人に近付仏法に障礙をなし申ん為来れるか。上人ハ定而知し召れん間。此事を不審申せと聴衆之面々申候が。いか成人にて渡り候ぞ。」「言語同断奇特成事承る物哉。七面の池に大蛇住由承り候へども。終に見申たる物なく候が。扱は最前の雷ハ七面の池の。大蛇の業にて有実候へバ。末世なれどもかゝる奇特成事も。尊き上人此所に山居有りて。妙成る御

経を御誦誦成され候間。誠に仏在世の時。文殊の教化にてハ八歳の龍女に法を得て。生をも替へず即身成仏致たる例を以。上人の教を受成仏致し度存じ。七面の大蛇女と化顕れ出。御しめしを受たると存候。さ様に候て重而誠の姿ヲ顕し。申そふする間。我らをはじめ里人の面々も暫く逗留申。彼大蛇の誠の姿を見申さふするにて候「左有らバかたわらに忍び。姿を拜ミ申さふするにて候

鸞流

矢田文蕙（印）

## 【解題】

法政大学能楽研究所鷺流狂言水野文庫蔵「鷺流問の本」(十七)五冊

写本。袋綴。四つ目綴。茶色唐草模様布表紙(十三・〇×一八・八糎)。左肩墨流し模様題簽(九・一×二・四糎)に「脇能問 壹」「二番目 三番目間 弐」「雜間 參」「雜間 四」安志羅以間「五」と墨書。楮紙。紙数は第一冊一〇八丁、第二冊九八丁、第三冊一一五丁、第四冊墨付一一四丁・遊紙二丁、第五冊墨付一〇八丁・遊紙四丁。各冊第二丁に二段書きの目録あり。片面十一行。奥書は、第二冊と第四冊に「鷺流十一世 矢田文蕙(「狂言堂」角印)」。第五冊に「鷺流 矢田文蕙(「狂言堂」角印)」。矢田文蕙は宝生座付矢田清右衛門の甥で明治二十六年に没した鷺流狂言役者の矢田蕙齊か(「鷺流狂言型附遺形書」の解題参照)。漢字交じり平仮名書き。五冊とも本文は同筆。内題上の曲名番号・庵点・句点および振り仮名や訂正の一部は朱墨。内題下や本文中に演出注記が漢字片仮名混じりの割り注で記され、本文の右に型付けを傍記する箇所もある。シテの台詞を引用する場合は、漢字平仮名交じりの割り注で記す。

鷺流の間狂言本。明治期写。第一冊に「此語間は宝曆年中從田安右衛門督殿被仰付相始ル」(難波)、「宝生流問也。宝曆中二改」(右近)の注記があることから、宝曆以後の内容と思われる。また第五

冊に「右者明治七年九月十一日、金剛月並能之節、春藤六右衛門申合相勤申候(中略)右者四月十七日於上杉侯催ノ節、進藤権之助ト申合相勤申候 下野岩苔」(撰待)、「右者明治九年六月四日金剛月次能之節唯一ト申合相勤申候 岩苔」(満仲)、「右者明治九年八月二十七日、於金剛宅元服曾我氏善七左衛門相手組にて勤候控 岩苔」(元服曾我)と明治の年記が三例見え、明治九年以後の書写と分かる。三例に名前の見える下野岩苔は、明治十三年六月十四日に觀世清孝が記した「四流狂言名寄」(觀世文庫蔵)によれば、「鷺流当時預り」だった。記録はいずれも金剛流に関わるもので、江戸時代に金剛流を採用した米沢上杉家での催しも含まれる。鷺流と米沢金剛との結びつきについては鴻山文庫蔵「鷺流問狂言附」の解題で触れられている通りであるが、近世の庇護関係が明治期にも受け継がれたことを伝える記録として貴重である。

なお山本和加子氏「常磐松文庫蔵『鷺流狂言伝書(問之記)』十四冊・解題」(実践女子大学文芸資料研究所「年報」第十七号、平成十年三月)で報告されている問狂言本の異同一覧によれば、水野文庫蔵「鷺流問の本」は、実践女子大学常磐松文庫蔵「問之記」と九州大学蔵「問葉」に本文が一致または近似する曲が多く、能楽研究所蔵「鷺流狂言型附遺形書」にもやや近いという。一方で、鴻山文庫蔵「鷺流問狂言附」は一部が一致し、能楽研究所蔵「鷺流問狂言伝書」・同「鷺流能問」・檜書店蔵「鷺流狂言伝書・羅葛部」とは異なる本文を有しているようである。

曲目は左の通りで、上演機会の少ない稀曲や番外曲を含む点に注

目される。所収曲数は、第一冊四十九曲、第二冊三十九曲、第三冊四十四曲、第四冊五十七曲、第五冊五十四曲、計二百四十三曲である（重複を含む）。

【脇能間 壹】高砂・老松・弓八幡・志賀・呉服・放生川・同鱗・養老・玉井・氷室・加茂・白髭・嵐山・江嶋・大社・和布刈・白楽天・竹生島・難波・西王母・寢覚・源大夫・道明寺・九世戸・絵馬・東方朔・輪藏・右近・同語・岩船・雨月・金札・淡路・松尾・同語・逆鋒・御裳濯川・伏見・鶉祭・橘・浦島・代主・鼓滝・富士山・御裳濯語・同大藏流・佐保山・難波田安殿好・右近宝生流。

【二番目 三番目間 弐】田村・八島・忠度・兼平・通盛・敦盛・頼政・知章・簾・実盛・朝長・巴・碓被・俊成忠度・軒端梅・芭蕉・采女・井筒・江口・定家・夕顔・半蔀・空蟬・野々宮・檜垣・伯母捨・仏原・藤・誓願寺・六浦・陀羅尼落葉・胡蝶・朝顔・松風・同短キ方・楊貴妃・祇王・二人祇王。

【雑間 参】雷電・車僧・同替・大会・是界・鞍馬天狗・同天狗・葛城天狗・飛雲・土蜘蛛・鶴・鶉飼・橋弁慶・同二人・現在鶴・熊坂・鍾馗・張良・藤渡・三山・同・求塚・当麻・須磨源氏・吉野天人・第六天・項羽・大瓶狸々・錦戸・同文使・同二人・夜討曾我・阿漕・野守・殺生石・天鼓・絃上。

【雑間 四】春日龍神・同脇・同乱序・鉢木・同供・芦刈・雲林院・遊行柳・三輪・龍田・女郎花・船橋・融・海人・梅枝・錦

木・葛城・龍虎・同・松虫・忠信・大蛇・豊干・小塩・浮舟・玉葛・山姥・雲雀山・同・大仏供養・盛久・草薙・同語・愛宕空也・三笑・合浦・同鱗・小原御幸・住吉詣・鷲・双紙洗・砧・恋重荷・綾鼓・千引・常陸帶・弱法師・護法・鷄籠田・鳥追舟・室君・高野物狂・加茂物狂・籠祇王・関原与市・二人静。

【安志羅以間 五】鶴龜・皇帝・感陽宮・邯鄲・班女・吉野静・船弁慶・安宅・西行桜・三井寺・舍利・黒塚・藤栄・花月・百万・自然居士・東岸居士・富士太鼓・善知鳥・籠太鼓・藍染川・小督・放下僧・烏帽子折・春榮・鉄輪・唐船・正尊・葵上・蟬丸・七騎落・俊寛・巻絹・調伏曾我・小袖曾我・元服曾我・禪師曾我・土車・竹雪・国栖・檀風・大江山・撰待・木賊・行家・鐘引・水無瀬・橋立龍神・撰待・同・満中・切兼曾我・元服曾我・現在七面。

（小室有利子）